

リリカルなのはvivid クローンの生き様

アテナ(紀野感無)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*この作品は「リリカルなのはvivid もう一人のクローンの人生」のリメイク版となります

ミッドチルダで暮らすst. ヒルデ魔法学院中等科1年の八神ユタ。

八神はやての養子縁組ですくすくと育っている。

好きなものはアニメ及び魔法戦技

インターミドルの最高戦績 都市本戦2位 出場回数1回

だが、初出場で都市本戦決勝まで勝ち進むという快挙を成し遂げた後

決勝戦である悲劇が彼女が襲う…

目次

プロローグ	復活！	1
1話	復帰練習1日目	9
2話	通り魔	19
3話	復帰練習2日目 私はロリコンじゃない	26
4話	復帰練習2日目 lon2	36
5話	復帰練習3日目 霸王サマ	45
6話	復帰練習3日目 リベンジ	51
7話	合宿に誘われました	59
8話	いざ合宿	68
9話	悪夢	77
10話	いざ陸戦試合	85
11話	陸戦試合 決着	96
12話	vsたぬき(一方的)	105
13話	VSアインハルト	115
14話	合宿の終わり	130
15話	師弟の関係	139
16話	過去の精算	147
17話	VSジークリンデの映像を見よう	155
18話	視察	169
19話	VSリンネ・ベルリネッタ	179
20話	同門対決 コロナVSアインハルト	192
21話	決着	204
22話	過去の記憶	216
23話	ユタのお姉ちゃん 前編	226

24話	くユタのお姉ちゃん	中編	く	235
25話	くユタのお姉ちゃん	後編	く	249
26話	く親子喧嘩		く	257
27話	く本音		く	271
28話	く死闘の幕開け		く	282
29話	く本音と本音		く	290
30話	く親と子の関係		く	298
31話	くまたもう一度、みんなと		く	305
32話	高町VS八神		く	316
33話	持ち味		く	325

プロローグ 　　く復活！く

「……ねえ、いまどういった状況でしょうか？」

いま目の前に、墨のつけられた筆を持ちいまにも顔に落書きをしてきそうな姿勢のー自分と養子縁組で母親のー八神はやてがいた。「いやー、ユタが随分と気持ちよさそうに寝てたから悪戯しよう思てな？」

「私これでも女且つあなた様の娘なんだけど!?!？」

寝ていた少女の名前は八神ユタ。金髪の髪を肩まで伸ばしており、右目は緑、左目は赤という虹彩異色が特徴な少女。あとは平たい胸。中等部1年、年齢は12歳。

八神はやてと血の繋がりがああるわけではないがひよんなことから八神家に引き取られた。

ユタの過去についてはユタ自身もよく知らなかった。が、割と本人もどうでも良いと思っっている節がある。

「まあまあ、そんなことより今日からまた練習するんよね？」

「うん。病院で正式に診断してもらってからだけどね。にしても本当にするの?..」

「そら、我が子の復帰戦までの道のりをサポートするって決めてるからな！」

と、明るい笑顔で言ってくる。今まで何度この笑顔に助けられたのか分からない。

振り回されたことも数多とあるけど。

いやむしろ振り回されたことの方が多いかもしれない。

「それはありがたいけど、母さん仕事があるでしょ?..」

「大丈夫大丈夫！シグナムやザフィーラにも手伝ってもらおうから！」

「ザフィーラはともかくシグナム姉さんは軽く命の危機を感じるんだ

けど……」

母さんがサラツと余命宣告をしてくる。

実際、ザフィーラはこちらに合わせて特訓をしてくれるけれどシグナム姉さんは容赦無い。気がする。普段の道場の子にはとても優しいはずなのに。何でだろうね。

「あ、やば」

時計を見るともうそろそろ準備を始めないと始業式に遅れそうになっっていた。

「とりあえず、学校の準備するからどいてよ。あ、私の愛機^{デバイス}は？」

「あ、それはいま調整中やて。あと、なのはちゃんが話がある言うてたから放課後に病院行った後によって上げてーな。デバイスも終わるころになのはちゃんの方に届けとくな」

「わかった。病院行って許可もらえなかったらバックれてやる……。それじゃあ行ってくるね」

「行ってらっしゃーい」

そのあと、朝食を食べ歯も磨いた後は普通に学校——St. ヒルデ魔法学院の中等部まで来た。時間はSHRが始まるジャスト15分前。

まだちらほら登校している生徒もいる。

眺めてるとあることを思い出して鞆の中を漁る。

「包帯忘れてた。ちゃんにつけないと」

包帯を取り出し左目にガーゼを当てながら綺麗に隠れるように巻く。別にもう見えるようにはなっているのだが、左右の瞳の色が違うのを隠すのと、あとは単純にこの姿の私かっこいい！みたいになっ
ていたりもする。

もちろん誰にも言っていないです。

あとはもう少し休ませておくべきだと先日かかりつけの病院で言われたから。

家ではもちろんそんなことしない。理由はもちろん狸こと母さん

にいじられるからです。

さて、それはいいとして

「今回こそ学年主席の座を奪ってやる……」

初等部からずっと2位止まり。今回こそ学年主席を取ってやる。

1位の名前だけは知っている。

アインハルト・ストラトス。

同じクラスにはなったことないし見たことないけど噂は聞いたことがある。

なんでも高嶺の花らしくぼつちなんだとか。

ぼつちに関しては人のこと言えないけど。

「まあ、気にしてもしょうがない。頑張りますか」

↳放課後↳

試験が終わり、その後のクラス振り分けをされた。

それと同時に試験の結果発表も。

「クラスは……1組ね。にしてもまた主席と取れなかった…。アインハルトって人、どんな頭してんの……」

「私がかしましたか?」

「ひやいつ!?」

急に横の席の人に話しかけられた。……ん?私がかしました? ってことは隣の人が……。

「失礼しました。アインハルト・ストラトスです。あなたが私について何か言っていたように聞こえましたので」

「あ、あーごめんなさい。いや学年主席を取りたかったのにまた取れなかったから悔しがってただけ。私は八神ユタ。よろしく、アインハルトさん」

と、形式上の挨拶を済ませるとチャイムが鳴った。

「(にしても、きれいな虹彩異色だったなあ。少しうらやましい)」

つと忘れてた。病院の時間がもうすぐだから早く行かなきゃ。

（病院）

「え？それは本当ですか……？」

「はい、本当です」

今は診断をしてもらっていた。最後の診断になるかもしれない。

結果がどうなるのか、心臓がバクバクと鳴っている。

「本当ですか？後で嘘でしたとかかっていう母さんみたいなオチだったら許しませんよ？」

「ええ。私は嘘をつきません」

「……………」

「やったああああ！やつと復帰ができる!!!」

「はい、おめでとうございます！まだ完全とは言えませんが右腕も、左目もほとんど治っています。本当におめでとうございます！」

「いえ、こちらこそ！ほぼ諦めてたのに先生が辛抱強く治療を続けてくださったおかげです！」

「いえいえ、それじゃあまだ無理はしないよう気をつけてくださいね？」

「はい、わかりました！今までお世話になりました！」

「はい、お大事に〜」

「母さん、シグナム姉さん、ヴィータさん、ザフィーラ！やつと完治できたよー！」

『おおーおめでとうー！』『よかったなあ！』『よかったな』『じゃあ、これからまたお前とやりあえるんだな！楽しみにしてるぞー！』

と、病院から出てすぐに完治報告を母さんたちに行くと、シグナム姉さん、母さん、ザフィーラ、ヴィータさんの順で祝福してくれた。

「あ、そのことをなのはさんにも伝えてくるからまた後でね」

『うん、また後でなー』

「はあー、ようやく体を動かせる！」

嬉しさのあまり飛び跳ねながら高町家に向かう。周りからおかしい子のように見られているがこの際関係ない。

このために一年耐えたと言っても過言ではないのだから。

「ととつ、ついたついた」

いつの間にか家の前についていた。そして、呼び鈴を押すと『はい』と緩やかな声が聞こえてきた。

「あ、ユタちゃん。ちゃんと来てくれたんだ！」

出迎えてくれたのは高町なのはさん。管理局航空戦技教導隊……まあ簡単に言うとうと管理局っていうところのお偉いさんで母さんの親友。

「はい。ご無沙汰していますなのはさん。あとは報告もしに来ました！」

「そう。その様子だと……」

「はい！今回の無事！」

「それはよかった！あ、フェイトちゃんも今いるから、一緒に教えてあげて。それとね、会わせたい子がいるの。入って入って」

「お邪魔します」

中に入ると同じく母さんの親友フェイトさん。そして一人、子供がいた。

「あれ？ユタちゃん？」

「あ、フェイトさん。お邪魔します」

「いえいえ、ゆっくりしてねー」

「あれ？フェイトママ、なのはママ。その人は？」

フェイトさんに挨拶をしていると子供が挨拶をしてきた。そして、その様子を見て私は驚いた。だって……

「え……虹彩異色……私と同じ……」

ていうかなのはママとフェイトママって！

お二人共どうやって子供作ったんですか!?!?

そんなに人類史の医学進んでるの!?!?

自分と同じ目の色＋女2人なのに子供ができていたことに一瞬耳が壊れたのかと疑った。

いやあ、同性愛を否定はしませんが……うん、お幸せになってください。

「あれ？ユタちゃんにはヴィヴィオを紹介したことなかったかな？ヴィヴィオ、挨拶しなきゃ」

「あ、ごめんなさい。初めまして！高町ヴィヴィオです。s.t. ヒルデ魔法学院の初等科4年生です！」

「わざわざありがとう。元気なのは良いことだね。私は八神ユタ。s.t. ヒルデ魔法学院の中等科1年。よろしくね」

と、自己紹介を終えると高町ヴィヴィオさんはそわそわと落ち着かない雰囲気私を気にしていた。

「ん？どうかした？」

「あの一、違ってたら申し訳ないのですが……。ユタさんって一昨年のインターミドル都市本戦2位のユタ選手ですか？」

一昨年、都市本戦2位なら多分私ですねはい。

「あ、あー。うんそうだよ。出てた出てた。にしてもよく知ってるね」「やっぱりですか！名前を聞いたときからそうなんじゃないかって思ってたんですよ！」

ヴィヴィオちゃんは超が付くほどの純粋な眼差しでこちらを見てくる。すっごい照れる。

「あれ？でもなんでユタさんがウチに？」

「確かにそうね」

「ああ、そういえば。忘れてた。なのはさん、大丈夫ですかね」

「うん、いいよー。その後にはヴィヴィオにもサプライズあるよー」

なのはさんにも許可をいただいたので改めて高らかに言う。

「約一年ほどの治療の結果、右腕と左目はほぼほぼ完治いたしました！これで体も思いっきり動かせますし大会なんかにも顔を出せるよ

うになりまっす！」

「やっとよかったね」

「よかったねー。ユタちゃん」

と完治の報告をするとなのはさんもフェイトさんも喜んでくれた。
ヴィヴィオさんは1人だけわかっていない様子だった。

「実はさっき言ってた一昨年のインターミドルの都市本戦決勝で左目と右腕が潰れちゃってね。それで去年はほぼ丸一年治療に専念してたんだ」

「え?! そうだったんですか?!? でも確かに去年のインターミドルとかの大会ですら……。あれ? でもその目の包帯は……」

「あーうん。もう暫く休ませておくことって言われたのと……ほら、カッコいいと思つて?」

と、真面目に答えると3人にポカーンとされた

「と、とにかく! 話は別にそんな大した意味ないのでなのはさんたちの方もどうぞ」

「うん、そうだね。ヴィヴィオ。ヴィヴィオはもう四年生だよね?」

「そーですが?」

「魔法の基礎も大分できてきた。だからそろそろ自分用の愛機デバイスを持ってもいいんじゃないかなって」

「ほ…ホントツツ?!」

おお、まさかの初の愛機手渡し。にしても、こんな場面にお邪魔させてもらつていいのだろうか。

「実は今日私がマリーさんから受け取ってきました」

と言いながらフェイトさんが箱を持ってくる。

マリーさんは……わかりません。

「ユタちゃんのデバイスも預かつてるよー。これだよね?」

フェイトさんに手渡されたのはウロボロスの紋章の形をした私の愛機プライドだった。そういえば高町家のほうに送っておくつて言われてたっけ。

「ありがとうございます! いやー、久しぶりだねえプライド!」『お久

しぶりです。マスター。……少し会わないうちに老けました？
『老けてないです』

第一声失礼なもの言い。うん、愛機の傲慢プライドの罪だと確信した。
これならインターミドルにもちやんと出れそうだね。

頑張っていきますか！

1話 復帰練習1日目

ヴィヴィオちゃん達の愛機デバイスのセットアップを眺めていると大人のような姿に変身をしていた。

「……どこかで見たとあるような……」

こう、何か母さんの事件の主要人物ファイルを覗き見た時に見た気がする。

ボーツと考えているとフェイトさんが口を開けて戸惑い、その場へナツと座り込んでいた。

「あ、思い出した……。JS事件の時の……私と同じ……」

小声で思わず言ってしまう。がそれがなのはさんにも聞こえてたらしく隣に座って話しかけてきた。

「どう？ユタちゃん。自分以外のクローンを見た感想は」

「へ？いや別に何も無いです無いです。クローンだろうがなんだろうが人間なんですから」

「うんっその答えが来ると思った。これからも仲良くしてね」

「はい、もちろん」

『マスターがお宅のお嬢様に手を出さぬよう私が随時見張っておりますのでご安心ください』

「おいコラ、どういうことよ」

すぐそばではフェイトさんがやけに慌ててヴィヴィオとなのはさんの間を行ったり来たりしている。

なんで聖王モードに……?とか色々と言っている。よほど混乱しているのだろう。

「フェイトちゃん、落ち着いて。これはね？」

「ちよ……なのはママ！なんでフェイトママに説明してないのー！」

「いやその……っいうっかり」

「うっかりってー！」

「賑やかな家庭だなあ」

『我が家も劣らず負けずだと思えますが？』

「確かに」

しばらく見てると家族会議みたいな雰囲気になっていた。

正直に言おう。

蚊帳の外である。

「親子になって時はゆっくりと流れてるって、思ってたんだけど。なんでまたこんなことに」

「こんなことって言うのは多分ヴィヴィオちゃんの大人モードだろうね。」

「あー、えーと」

「いや、あのね フェイトママ？大人変化自体は別に聖王化とかじゃないんだよ。魔法や武術の練習はこっちの姿の方が便利だから、きちんと変身できるよう練習もしてたの。なのはママにも見てもらって、もう大丈夫だね、って」

「ハッ、そうなのー！」

「ハッて、なのはさん。そのこと忘れてたの？」

「でも…」

「だけど、フェイトさんはまだ渋っている。」

「んー…。モード・リリースクリス変身解除！」

と、その合図とともにヴィヴィオちゃんが元の姿に戻った。

「何より変身したってヴィヴィオはちゃんとヴィヴィオのまんま！ゆりかごもレリックももう無いんだし。だから大丈夫。クリスもちゃんとサポートしてくれるって」

「うん……」

「心配してくれてありがとう。フェイトママ。でもヴィヴィオは大丈夫です」

「うわー、なにこの超理想的な家族の団欒。本当に邪魔者になつてきた気がするよ。」

「ゆりかごにレリック……」

『何か知っているの？』

「いや全く。母さんの資料を盗み見た時に載ってたのを知ってる程

度」

プライドと話しているとヴィヴィオちゃんがわざとらしくクルツと一回転し悪戯な笑みでなのはさんとフェイトさんに言う。

「それにそもそもですね？ママたちだって、今のヴィヴィオくらいの頃にはかなりやんちゃしてたって聞いているよ？」

と、その一言でママ2人が一気に顔を赤らめる。むう、この子意外とやり手だな。

「そうだねー。母さんから聞いた話しかないけど。一般人じゃやらないようなこととかやってましたしね。あ、なんならヴィヴィオちゃん聞きたい？」

「え？いいんですかっ！」

「いや、ちよつと待ってユタちゃん！はやてちゃんからの情報は信憑性ありすぎていろいろと困るから！」

と、ただ情報を横流ししようとしたらフェイトママに慌てながら口を塞がれた。なのはさんからはなんとも言えない威圧感が出てて怖い。

「ま、そんなわけで。ヴィヴィオはさっそく魔法の練習に行ってきたいと思います」

「あ、私も！」

と、そんな会話をしながらヴィヴィオちゃんとなのはさんが外に出る。

「あ、ユタさんもご迷惑じゃなければ練習してくださいませんか？ユタさんの技を是非とも見てみたいです！」

「全然いいよ。2年前のカンも取り戻したいしね」

「やったー！ありがとうございます！」

「それにプライドも感覚鈍ってるかもだしね？」

『はっはっは。貴方が好きな作品のセリフを忘れるくらいあり得ないですよバカマスター』

「言うねえ」

にしてもわかる。

やばい、この子天使だ。私の周囲の人間たちの中では間違いなくダ

ントツで天使だ。ものすつごいピュアな天使だ。
穢せないですわね。

「やっぱりいいなー♪大人モード♪ねークリスマスー♪」

『ピッ!』

「だよねー♪」

今は練習もできる公園に向かっているのだがヴィヴィオちゃんは
ものすつごい上機嫌だ。よほど大人モードができたのと愛セイクリッド・ハート機
(通称クリス)ができたのが嬉しいんだろうね。うさぎの人形にしか
見えないんだけどね。

懐かしいなあ…。

まあ私のは後々クソ生意気な性格になったけどさ。

「ユタちゃん、ごめんねー。わざわざヴィヴィオの練習に付き合っ
てくれて」

「全然いいですよ。他ならぬなのはさんとその娘さんからの頼みです
し。それにどーせ帰ったらシグナム姉さんにしごかれますから。後、
まだ付き合うって決めただけでやってはないのでそのセリフは早い
ですよ」

「うん、そうだよね。でも、ありがとうね」

「あ、そういえば私の生まれについてはヴィヴィオちゃんには?」

「あ……」

……そろそろ呆れてもいいよね?この天然な方には。いや呆れ
てもいいはずだ。

「まあ、聞かれたら答える、位でお願いします。別に隠してるわけじゃ
ないんですがあまり言いふらしたくないんで」

「うん、わかった!」

その後もしばらく歩いているとなのはさんとヴィヴィオちゃん
幾つかの約束事を取り決めていた。

これに無下に入るほど空気読めない人じゃ無いので動画を
こっそり撮っておくことに留めておく。

ウチの狸もとい母さんに見せたら少しは私への態度が変わるかもしれない。

『あの人に限ってそれはあり得ないかと』

『起きてたんかい。てか口に出てた?』

『いえ。ですが考えてる事くらいお見通しです』

『何処でその読心術習ったのか知りたいよ』

『トツプシークレットなので無理ですね』

『知ってた』

そんなことを話しているとまた2人でじゃれ合っている。2人はここに他人がいることをお忘れじゃありませんかね?』

まあ心が癒える動画が撮れたからよしとしよう。

〜市民公園内 公共魔法練習場〜

『じゃ、基本の身体強化からね。それから放出制御!』

『ピシッ!』

『クリスの慣らしもあるんだからいきなり全開にはしないんだよ』

『だーいいじょーぶ!』

ふむ、私はどうしようか。慣らしの部分は他人が入るのはやめたほうがいいだろうし。それなら

『なら、約1年ぶりのセットアップでもしてみます?』

『お、いいねー。プライド。乗った』

軽い準備運動をしてプライドを手を持つ。

『準備OK?』

『いつでもどうぞ』

『はいよ。プライド。セットアップ』

その掛け声とともにヴィヴィオちゃんがやってたような光に包まれる。すると私にとっては見慣れた、外装になった私が姿を現した。

肩から先はほぼ全て露出していて髪も少し伸びており後ろで束ねている状態に。服は黒一点のみのシャツっぽいものと同じくほぼ黒一点のスボンだけだ。というか、外装というより夏場の少年?みたい

な服だ

所謂、ハガレンのグリードを真似た姿。よくなんでこんな姿に言われてるんだけど。

んなもん好きだからに決まってるだろう。

プライドもそうだ。10歳程度の子供がウロボロスの印の傲慢の罪とかいう名前のものを好き以外の理由で取るわけがないでしょう。「にしても、1年くらい離れてたとはいえまだちゃんどできるもんだねえ。これもプライドの性能のおかげなのかな?」

『当然です』

「否定しないのね」

『半分くらいしか思ってますよ。こればかりはマスターのイメージで左右されるのでマスターの力と見ていいかと。私はただその補助をしているだけなので。というか、マスター』

「ん?何」

『その眼の包帯はいつ頃取るんです?』

……忘れてた。まあいつか。別にかっこいいし。

その後、軽く体を慣らした後ヴィヴィオちゃんの元に戻るとそちらも慣らしが終わったらしく少し休憩を取っていた。

「あっ!ユタさん……ですよね?」

「うん、そだよー。いまはセットアップしてるからこんなだけ解除すれば元に戻るよ」

「なるほど。後ユタさん、えーとですね…」

と、またヴィヴィオちゃんがモジモジしながら言っているのか迷っている。みたいな感じになっている。

「どうしたの?別に私の生理的に無理なこと以外だったら何も嫌がったりしないから言ってみなよ」

『マスター、最初の一言が非常に余計な気が』

「えーとですね。練習に付き合っただけです!手合わせ、お願いできませんか!」

「うん。okだあよく。あんまり無理はできないけどね」
「やったあ！ありがとうございますー！」

ヴィヴィオちゃんは飛び跳ねんばかりに喜んだ。

この子純粹すぎて穢れた私ではみてられないかもしれない。

あと豊富なバストが揺れに揺れてちよつと私には目に毒です。

邪な考えは置いて練習を始める。

「プライド、視覚補助お願い」

『了解しました』

内容は主にストライクアーツの型の練習だった。

その受けをする役目に抜擢されたというわけだ。

「へえ、なかなか筋がいいんだね。それに師匠にも恵まれているように何より何より」

「はいっ！それに最近は友達とも一緒に練習するようになってますます楽しくなってますっ！」

「私の師匠もヴィヴィオちゃんみたく優しかったらいいのに」

それに、この子の型……ああそれで私か。

「もしかしてヴィヴィオちゃんが師匠に教えてもらってる型ってカウンターヒッター？」

「えっ？なんでわかつたんですか?!」

「いやー、なんでというか。私と同じだから？いや違うな。君は生粋のカウンターヒッターとしてだから私みたいなのとは違うと思うし……。……そうだ、ヴィヴィオちゃん。一試合やってみない？インターミドルみたくガツチガチのじゃなくて、軽く拳を交える程度の」

「いいんですか?!？是非是非！」

「けど、なのはさんが許してくれるならなんだけど……ってなんでなのはさん涙目？」

ベンチにいたなのはさんを見ると何故か涙目になっていた。

「うう、だって2人とも私のこと忘れてる気がして……。あ、怪我しない程度ならどんどんやっちゃいなよ」

と、なのはさんからの許可も出たので私とヴィヴィオちゃんが構える。

「あー、そうだ。ただ手合わせするのもつまらないね。んー、ヴィヴィオちゃん」

「はい？」

「この試合中に私に一発でもどこかに攻撃を当てられたら何か一つ、なんでもお願い聞いてあげるよ」

それを言った瞬間、明らかにヴィヴィオちゃんのやる気が上がったのがわかる。こういう相手のやる気をあげるのが得意なのは母さんからの遺伝なのかね。血は繋がってないけど。

「それ、本当です？」

「本当本当。学校の友達とならまだしも君みたいな子やなのはさんのいる前では嘘はつかないよ。さあ、どこからでもどうぞ♪」

と、その言葉と共になのはさんのデバイスレイジング・ハートがゴングを鳴らしてくれる。

すると、開始早々ヴィヴィオちゃんが突っ込んでくる。しかも思いつきり利き手の右で顎を狙ってアッパーをかましてきた。

それを避けると今度はそれを読んでいたとばかりに左で打ち込んでくる。

今度はその打撃を避けずに受け流す。すると今度は上段蹴りをしとくる。

「間違っても直撃しようものならヤバそう」

せっかく治ったのにまた治療する日々は流石に嫌ですし。死ぬ気で避けます。

そこからはひたすらあえてヴィヴィオちゃんの得意スタイルで攻めさせる。いや正確にはカウンターヒッター型なので得意スタイルとは言えないか。それでもひたすら近距離でのジャブや蹴り、それらを混ぜたコンビネーション技みたいなのもやってきてくれた。だけど、それをひたすら避けた。それが受け流していった。

「(まっずい、調子に乗って飛ばしすぎた……)」

『アホですか、マスター。まだ体力も戻ってないというのに』

と、あれからひたすら避けてはいるが体力に限界が来ていた。

避けるというのは体力とかはいらな思われがちだが相手の攻撃を見切るために見ることに集中しないとイケないし今みたいに連続で攻撃される立場になった時の体力の消耗は半端じゃない。

まあ、今回は私から煽ってやらせたわけなんだけど……。

『マスター前々から思ってたんですが……バカですね』

ひどいなあプライド。それでも私の愛機ですか？

『はい、愛機です』

そしてサラツと心を読んでくる。数年も一緒だともう驚かない。

「いつ?!」

やばい、避けすぎて足フラフラになった所を狙われた。しかもその足を。可愛い顔して案外えげつない…。

「やああっ！」

「うわ、ちょいまち……」

と、好機とばかりにヴィヴィオちゃんが今までにないようなラツシユをかましてくる。

途中足捌きを間違え、よろけてしまった。

そこを見逃してくれるはずもなくヴィヴィオちゃんの拳が眼前まで迫ってきて、一瞬走馬灯が見えそうだった。

「あー、うん。参りました」

けど優しいことに当たる直前で止めてくれた。

なんともありがたい。たぶんあの勢いで入ったら気絶してた。

「ありがとうございます！とても有意義な時間でした！」

「いえいえ、こんな程度でいいならいくらでも。あ、最後の一撃止めてくれてありがとうね。でも一発入れたらって話だったのになんで？」

「えつとですね。ユタさん。練習がほぼ一年空いてるっておっしゃってたじゃないですか？」

「うん言ってたよ」

「だから、もし当てちゃったらまたユタさんの復帰を延ばしてしまうんじゃないかと思ひまして……」

女神だ。女神がここにいたよ。世界のみんな。

「私の体を心配してくれたんだ。ありがとうね。あ、約束のなんでも一つお願い。何か決めてる?」

「あ、はい!それはもう!えーと、明日から私たちと一緒に練習してもらえないかなーって思いました」

遠慮しがちに言ってくる。提案したのは私なのになんで遠慮してるんだろうね。

「私から言ったんだから遠慮なんて必要ないよ。それに、練習なら日程被りさえしなければいくらでもオツケーだよ」

「本当ですかっ!ありがとうございます!!」

めちやくちや喜んでいるから、まあ私程度が役に立つなら良いでしょう。こんな天使な子を見れるなら満足です。

「あ、そうだ。このことリオやコロナにも教えないと!」

また忙しそうにメールを打っている。

「なのはさん…お宅の娘さんは女神ですね…」

「ふふーん、でしょ?」

と、なのはさんがドヤ顔を決めてくる。

なんか面白かったのでコッソリ写真を撮っておいた。後で母さんにも見せてみよ。

「ユタさん、友達に写真を送りたいので一緒に撮ってもらえないですか?」

「いいよ、全然オツケー」

と、了承するとクリスが写真を撮ってくれる。この子飛べるわ自分の意思を持つてるわ、写真も撮れるわでいろいろと便利だね。

そんなこんなで復帰戦へ向けての練習一日目が終わった。

2話 通り魔

「なのはさん、ヴィヴィオちゃん。今日はいろいろとありがとうございます
いました」

「いえいえー」「私こそありがとうございました!」

「また明日から練習するときになったらメールしてね。できる限り行くようにはするから」

「はい!よろしくお願いします!」

と、そのまま分かれて帰路に就いた。

「ふう、楽しかったねー。プライド」

『私も久しぶりにあんな楽しそうなマスターを見ましたよ。それはそうとマスター』

「ん?どうしたの?」

『なぜ、フードをそんなにかぶっているんですか?周りが見えづらくないですか』

「なぜかって、夜道に片目だと危ないし。両目の視界にも慣れないといけないし。けどあまり目については見られたくないし。あとサングラスとかよりはフードのほうがかっこいいからかな?」

『いつも思ってるんですが、マスターの感覚ってなんかずれてますよね』

「否定はしない」

さすがは初等科のころからの愛機。私の性格をよくわかってらっしゃる。

「さて、今日そのまま家に帰るかな」

『というか、そろそろ部屋の片付けをしませんか?主にグッズ』

やだよ、全力で却下する。あそこは私にとっての楽園パラダイスなんだ。

「やっと、やっと見つけました。聖王オリヴィエ」

「んー?プライド何か言った?」「いえ、私ではありません』

んじや誰だと思ひ声のした方を見上げると少し大人びた人がいた。髪は薄い緑でバイザーをしているから顔は正確にはわからない。

うん？ていうかどこかで見たことあるような？

絶対つい最近な気がするんだけどな。

そんなことを考えていると目の前に降りてきた。

「あなたにいくつか伺いたいことと確かめたいことが」

うーわ、これ絶対めんどくさい奴。聖王とか言つてた気がするし。「せめてバイザーとつてから名を名乗りなよ。でないところちとしても答える気が失せるんでね」

「失礼しました。カイザーアーツ正統ハイデイ・E・S・イングヴァルト。『霸王』を名乗らせていただいています」

バイザーを取った顔を見て確信する。うん。アインハルト・ストラトス、だったつけ。

にしても、霸王ねえ。つてうん？てことはなに？聖王のクローンである私と勝負したいとかそういうことなのかな？それだったらいやだよ。

なにはともあれ、めんどくさくなりそうなのでフードを深くかぶる。

もう瞳は見られてるから意味は薄いだろうけど。

それでも顔バレは避けたいし。

「伺いたいというのはあなたを含めた『王』達についてです。聖王オリヴィエと冥府の炎王イクスヴェリア」

そうだろうとは思ったけど。正直何も知らないとしか言いようがない。

けどなんか正直に言うのはさ、うんほら、嫌です。

「なんで言えばいいのやら。正直私は聖王の血とやらはあるかもしれないけど、そういうのはどうでもいい。いやむしろその生まれについてネチネチ言ってくる奴は大嫌いだね。特に君のような過去に囚われてるような奴は、ね」

「それは失礼しました。では確かめたいことというのは、あなたの拳と私の拳、いったいどちらが強いのかです」

はい予想的中。

「やだ。やる意味がないし」

「あなたに意味がなくても私にはあるんです」

うんこれ人の話聞かない奴ですね。

「それに……」

「？」

「列強の王達をすべて斃し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべきことです」

ああ、死ぬほど嫌いなタイプだこれ。

「……あーもういいよ。わかった。やってあげるよ」

『マスター？何を考えていらっしやるので？』

プライドが何か言ってくるがどうでもいい。とりあえずこいつは一発ぶつ飛ばすことに決めた。世間の広さを教えてやる。

ぶつ飛ばせるかは知らないけど。

「ありがとうございます。では防護服と武装をお願いします」

「ん、そりやどうも。わざわざつけさせてくれるんだ」

と、自称霸王サマに言われさつきまでしていたセットアップ状態になる。

「……？それがあなたの武装ですか？」

「そうだよ。さっさとかかってきなよ霸王サマ。プライド、視覚補助に全魔力回して」

『はあ、承知しました』

「では、参ります」

そこそこ距離があるのに構えた？エアリアルミドルレンジ空戦か射砲撃主体？

「へ？おわっ？？」

あつぶな！あの距離を一瞬で詰めてきた。

しかも思いつき顔面狙ってきたし！両目じゃなかったら絶対よ
ければ一発KOだったし顔に傷付いたらどーすんだよ！

『反応鈍ってんじゃないです？』

「いやいや、いきなり突撃は**チャージ**はビビるって」

無難にすぐに距離を取る。が、すぐさま追いついてきてラッシュを
叩き込んでくる。けどさっきまで手合わせをしてたから眼も慣れて
いて、まだよけやすく感じる

が、まあ問題点は練習と同じで…

「プライド、もうやばいかも…」『早くないですか!?？さっきまで
の威勢の良さどこ行きました!??』「しよーがないじゃん！ただで
さえさっきのヴィヴィオちゃんとの練習で疲れてるんだから！」

「ひたすら逃げの一手とは馬鹿にしているのですか？貴方から手を出
す価値はないと?」

おっとまずい。私のスタイルは霸王サマにはお気に召さなかった
らしい。

「別に馬鹿にはしてないよ。する気もないしこんな事に技術を使う君
を馬鹿にする価値もない」

「(ピクツ)」

表情が僅かに動いたのが見えた。そりゃ己の技術にアレコレ言わ
れると怒るわな。

「まあけどそう感じたなら謝っとくよ。でも反撃の一撃を叩き込めそ
うな未来は見えたかな?」

「そうですか。ではみせてもらいます」

また中距離からいきなり詰めてラッシュを叩き込んでくる。

が、ぎりぎりの体力を残すように避けて避けて、ジツとタイミング
を待つ。

正直一発食らえば終わりだからヴィヴィオちゃんの時より神経使
う。

けど、少しずつ強烈なのを打ち込んでこれるようあえてスキを見せ
ていく

「(頼む…早く…)」

「……っ！断空拳！」

『(キタツ!!)』

霸王サマがおそらく必殺クラスの打撃を腹に打ち込んでくる。

これをよけずに右手で直に受け威力を後ろに受け流す。

そして、その威力を利用しながら回転しその勢いで霸王サマの右側頭部に裏拳を叩き込む。

「ッ！」

「どう？(っ)自慢の拳の威力が使われた感想は？」

久しぶりな割にはうまくいったね。

霸王サマは何が起こったのかよくわからない、といった感じで戸惑いながら膝をついている。

そりやそうだね。なんせ必殺の拳を打ち込んだと思っただらやられたんだから。

「ふー疲れた疲れた。かえってゆつくり休みたい。グッズに囲まれてさ」ガチャ

『ガチャ？』

不思議な音がして振り返ろうとして見ると動けず、両手足と腹にバインドがされていた。

「えーと？プライドさん。これっていわゆる？」

『絶体絶命』

「デスヨネー」

「わたしは…負けるわけにはいかないんです……！もう誰にも……！聖王にも……!!」

「なーんでそんな過去の王だとかに固執するかねえ。そういうもう終わってる過去に固執するやつ、大っ嫌いなんだよ。ベルカの戦乱も聖王戦争も、ベルカの国も、もう終わってるものなのにな」

「終わってないからです。私にとってはまだ何も……」

あっそう。

「プライド、後は任せた」

『まかされました』

さてはて無駄だとは思いますがバインドを引き千切ってみますか。

「断空拳！」

努力虚しく、今度は横から思い切り叩き込まれた。

そのまま近くのコンクリの壁に激突し、威力相殺しきれず気を失った。

くナカジマ家く

「へー、ついにヴィヴィオもデバイス持ちっスか」

「よかったね。今度見せてもらおう」

「高町嬢ちゃんちの一人娘か。今いくつだっけ？」

「10歳ですね。4年生ですよ」

「もうそんなか。前に見た時は幼稚園児くらいだったと思っただけなあ」

「それ、六課時代じゃない」「もうだいたい前ツスよ」

今現在はナカジマ家六人で鍋を囲っていた。チンクやウエンディ、ノーヴェエ、ギンガ、ディエチ、そしてその父親がそろっていた。

「ヴィヴィオの武術師範としてはやはりうれしいか。ノーヴェエ」

「え。別に師匠とかじゃないよ。一緒に修行してるだけ。まだまだ修行中同士練習ペースが合うからさ」

そう言っているが恥ずかしさからかノーヴェエの顔が赤い。

傍ではギンガがお代わりのほしい人はいないかと尋ねると全員元氣よく、はい、と答えていた。

「あ、ヴィヴィオに新しく増える練習仲間って聞いたんだけど知ってる？」

「んーどれどれ？」

ノーヴェエはチンクたちに送られてきた写真を見せる。

「ああ！ユタちゃんじゃない！」

「ユタ？」「誰っスか？それ」

「八神さんとの養子縁組の子だね。確かヴィヴィオちゃんたちも目

指してるインターミドルの都市本戦に10歳で出てたかな」

「ふーん。って都市本戦?!」

「そうそう、ヴィータさんやシグナムさんにバリバリ鍛えてもらってたらしいからね。けど、決勝で怪我して早くも引退か?みたいなことで騒がれてたと思うけど」

全然知らねーとノーヴェエやウエンデイはポカーンとしながら思っていた。

「ま、明日会えるならその時に聞いてみたら?」

「そうするよ。あ、ギンガ、おとーさん。明日教会の方に行ってくるから」

「そう」「いつものお見舞いか?」

「うん、そんなとこ」

「じゃアタシもいくっす!セイン姉と双子をからかいに!」

「姉も久しぶりに行きたいな」

「えー!?」「駄目よー。あんまり大勢で押しかけちゃ」

ピピッ

「あ、ごめん。あたしだ」

と、メールがノーヴェエのもとに来た。

「どうしたっすか?」

「悪い、なんか近くで人倒れてるらしいからちよい行ってくるわ。なんかほかの救助隊全員出払っててあたしが一番近いらしい」

「手伝うっす」

「悪い、頼む」

と、ノーヴェエとウエンデイは外に出た。

3話 　　く復帰練習2日目　　私はロリコンじゃないく

く???
く

「昨日の勝ち方は……もつと特訓を……」

昨日の夜、いつもの通りストリートファイターまがいのことをしようとしていたアインハルトは途中で聖王のクローンを見つけ条件反射で勝負を挑んだ。

しかし勝ったとはいえ内容はとても己が納得できるようなものはなかった。

格闘戦で後れを取ったにも関わらず、最終的に後ろから奇襲バインドを仕掛け、動けない相手に必殺の拳を打ち込んで勝ったのだ。

霸王の名を継いでいる身としては余りにも、情けない勝ち方だと感じている。

「次出会ったら必ず……!」

くナカジマ家く

うーん、体中が痛い。なんで痛いんだっけ？

確か学校行つて病院行つて、『:ター』完治できて

なのはさんたちに『マ:ター』報告に行つて

そのあとヴィヴィオちゃんと練習して『マスター』

そのあとは…

『バカマスター。今すぐ起きないなら外部アクセスをして録画ファイル全部消しますよ』

「それはダメっ!」

うるさいなあ、いま目覚めかけの意識で情報整理してたんだから!

あとプライドそれしたら本当にゴミ箱ボツシュートするからね?

……てか今私何してた?

がばっ

「うわっ、急に起き上がるなよ。体に響くぞ」

「……？プライド、どうなってるの？」『この方たちが保護してくれたようです』

目の前には赤い短髪で男っぽい顔立ちが特徴の人と青髪の人が出た。ほかにもオレンジの髪の結構美人な人や赤髪の人の髪の色だけ青、みたいな人がいた

「あ、どうも。片目怪我してるので閉じたまんまで申し訳ないです」
「いいっすよ、気にしなくて。私はウィンディ・ナカジマ。こっちが私の姉さんで」

「ノーヴェ・ナカジマだ。んで、そっちにいるオレンジの髪の方が」
「ティアナ・ランスターです。本局執務官をやっています。でラストの一人が」

「スバル・ナカジマだよ。ノーヴェたちのお姉さん。そしてティアナの親友です。ここは私の家」

なんか二人くらいかなりの有名人の名前が聞こえた気がするんだけど気のせいかな？

『気のせいじゃないですよ。マスター』

「プライドはさらっと私の心を読まない」

「起きたばかりでごめんね。君のデバイスには話を聞いたんだけど。八神ユタさん。あなたからお話ししてもらってもいいかな？」

まだいろいろと混乱してるところにティアナさんに聞かれる。

プライドにはもう事情聴取済みとのこと。

ゆーて言えることほとんどないような気がするんだけど。

「んーそう言われなくても、プライドはなんて？」

「プライド君からは勝った後不意打ちでやられたって聞いているよ。だから被害届を出すべきだって」

「あーうん。間違つてはないですが。正確には喧嘩ふっかけられて、しばらくは私が渋ってたけどその後ちよつとだけイラつきまして、喧嘩買ったら油断して負けた、って感じですかね。被害届も私も悪いし特に出す気ないです」

『いいんですかマスター。せつかく治った直後のこれだというのに』

「いいよ。別に二年^{あの時}前みたいに後遺症にならなさそうだし。プライドの防御のおかげだよ。通報&防御に魔力使ってくれたからこの程度で済んだらろうし?」

『ですね。私に感謝してください。まあ?今回はマスターが油断した結果ですし?誰でしょうねえ、疲れてるのにファイトを受け入れた阿呆は』

「ちよつと何言ってるかわからない」

「えーと、続きいいかな?」

「あ、はい。すいません。どうぞ」

「相手の姿とか顔は覚えてるかな?プライド君は映像記録出来てなかったらしくて」

……どうしようかな。あの時は半分くらい逆切れ気味だったからやるのに同意した私がアインハルトだけを貶めるわけにもいかないし。まあいいか。できる限り正直に言いますか。

「いえ、翡翠色?かな、わかったのはその髪色だけで誰か見当もつきません」

ほぼ正直に言ったよ?

私は同年代のアインハルトは知ってるけどアインハルトのお姉さんっぽい人は知らない。

顔もフード深くかぶってたからよく見てないしね?

「そう、ありがとうね。にしても、ダメだよー喧嘩なんてしたら」

「あ、はい。すいませんでした。以後気をつけます」

「うん、よろしい。礼儀正しいねー。本当に気をつけないとシグナムさんやはやてさんから怒られちゃうよ?」

テイアナさんが褒めてくれる。

そりやそうですよ。シグナム姉さんなんかに作法を叩き込まれてみなさい

サルでも1時間でプロレベルに変身できる。

あとあの2人に怒られたらリアルで死ねるね。

「……?空明るい……?」

『ああ、今は朝の9時半ですよ。昨日襲撃されたのが夜の10時頃ですから、だいぶお休みでしたよ』

は？今なんて言った？この愛機。え？朝の9時半？てことは……

「今季のアニメの1話分何個か逃しタアアアアアア！」

「「は？」」

「えーうっそでしょ!?新シーズンの1話目は全部生で見ると決めて一度も破ったことなかったのに！やらかした!!プライド！録画は!?」

『してあります。ですから落ち着いてく……』

「アイツ次会ったら絶対ぶちのめす……」

『すいません、マスターはネジが5本くらい飛んでるので無視してください。ここからは少し私がお話しします。マスターが忘れてる話もありますし』

今はユタを部屋に残し、その他の全員が別の部屋に来ていた。

その理由としてははやてから連絡が来ていたからである。

ユタは「あつわり、私死んだわ」とだけ言っていた。

「いや、いいけどよ。お前の主人はいいのか？」

『いいんです。あの方は会った時からあんな感じでした』

「大変だな、お前も」

とノーヴェが呆れながら言う。

「それで？話してないことって？」

『えーと、マスターの瞳の色についてはみなさん見られました？それならお話が早いのですが』

と、4人は顔を見合わせ

「「見たよ」」

『そうですか』

「もしかして、喧嘩売られたのってそれが原因なの？」

『はい。なにやら聖王と冥府の炎王イクスヴェリアに用があったみたいです』

「なんでまたそんな」

『私にもわかりかねます。で、伝えたいというのは冥府の炎王イクスヴェリアも狙われる可能性が高いということですよ』

と言うとスバルとノーヴェは苦い顔をする。

「まあ、大丈夫でしょう。あの子はいま教会の人たちが全力で守ってるし」

「そうっすねー」

『あと、これはお願いなのですが…』

「許容範囲でなら受け入れるから。なんでも言っつて」

『マスターを念のため病院で検査させたいのですが…』

「ああ、それは私がしといたよ。特に異常はないっつてさ」

『ありがとうございます。ノーヴェさん』

「それで、なんで私まで教会に行かなきゃいけないんですか…。昼間は太陽が出てるから外に行きたくないんですよ…」

『石仮面でも被ったんで?』

「まあまあ、そう言うなよ。いいところだよ」

「本当ですか?ノーヴェさん。嘘だったら私怒りますよ?」

「ああ。そういうや、ヴィヴィオに聞いたんだけど一緒に練習するんだって?」

「あ、はい。そうです…ってなんで知ってるんですか」

「いや、なんでって。あいつらが師匠とか言ってる人。私のことだし」

「へ?」

え?なに最近やたらと偶然が多いな。

ハッ!もしかしてこれは私が滅ぶ前兆…

『んなバカなことがあると思いで?』

手厳しい言葉をどうもありがとう。心を読む天才。

「あ、これは失礼しました。改めまして八神ユタです。宜しくお願

します。師匠」

「師匠はやめろって…。まだ教えてもないし…。というかユタ？」
「どうしました？」

「その眼帯はなんでつけてんだ？もう治ってんだろ？」

「カッコいいからに決まってるじゃないですか？」

あ、でた。呆れ顔

「んじや、私はこつちに見舞いがあるから。後でまた庭にいるウエン
デイ達のところに集合な。ユタは騎士カリムのところに行ってくれ」
「オツケーです」

とノーヴェと教会の中で別れ、ノーヴェは見舞いに。

ユタは……

「来たことないのにわかるかあ！」

『そんな威張っていうことですか…』

はい、絶賛迷子です。そりや知らないところに1人になったらこう
なるでしょ。

「無駄に広いのが悪い」『マスター、今全世界の広い教会を敵に回しま
したよ？』

しっかし、本当に広いな。あ、誰か来たから聞いてみようかな。

「どうされました？」

「あ、いえ。ただの迷子です！」『マスター、威張らない』

「よかつたら案内しましょうか？」

「いいんですか？では是非ともお願いします」

「はい。私はシスターシャツハと申します」

「私はユタです。えーと、ノーヴェさんには騎士カリムのところに行
けって言われてるんですけど」

「それでしたらすぐそこですよ」

「あ、有難うございます」

「いーえ。ではごゆっくり」

って、部屋の中まで入れてくれないのかい！1人でお偉方の部屋に

入るのって無駄に緊張するんですが。

まあうだうだ言っても始まらないし入りますか。

「失礼します。ノーヴェさんにいわれてきました」

「どうぞー。お話には聞いてますよ。ユタさん」

と、待っていたのはかなり落ち着いた感じのシスターだ。この人が騎士？まあいいか。

「騎士カリムには襲撃者について一つ言いたいことがあってきました」

「ああ、あなたもですか」

「私も？」

「先ほど、別の方にもそのことを忠告しに来てくださったんですよ」

「なるほど。では、それとは別でカリムさん」

「どうしました？」

「あなたの後ろの窓のそばで1人シスターがサボっているのはどうすればいいでしょうか？」

「：放っておいてあげてください。特訓で疲れていると思うので」

「わかりました。では私はこれで」

「はい、ありがとうございます」

はい、取り越し苦労。まあ念には念をつていうし。別にいいか。

さて、庭に向かいますか。ルート？知りません。

さつき聞いておけばよかったと思ったり思わなかったり。

まあ割とすぐに辿り着けたので良しとしよう。

そこにはウエンデイ、ノーヴェ、ヴィヴィオ、ノーヴェたちの兄妹であるデイエチ、オットー、デイード、セインが勢ぞろいしていた。

正直みんな仲良すぎて間に入る気にならない。

「うーん、最近家族の団欒にお邪魔しまくってる気がするけどいいのかな？」

『いいんじゃないですか?』

ま、それもそうか

ふーん、ヴィヴィオちゃんここだと陛下なんて呼ばれてるんだ。

話も終わったのかノーヴェさんとヴィヴィオちゃん、ウエンデイさんとセインさんが歩き出す。

「おーい、ユタ。行くぞ」

「了解ですー」

と、ノーヴェさんに呼ばれるのでそちらに向かう。そのついでにデイエチさんやオットーさんたちに軽く挨拶をする。

「んじやあたしは四人をおくつてくるなー」

とセインさんが付き添ってくる。

「しかしいいのか?ヴィヴィオ。双子からの陛下呼ばわりは「え?」

「前は陛下って言うの禁止ーって言ってなかったか?」

「あー。まあもう慣れちゃったし。あれもふたりなりの敬意と好意の表現だと思うし」

「あいつらなんかずれてるからなあ」

あーマズイ。いろいろとおいて行かれてる。

『マスター、オットーさんとデイードさんのことですよ』

「あーって、あの二人双子なんだ!?全然似てないなー」

「そういえば、ユタさんでしたっけ?その眼帯はなんでしてるんです?」

とセインさんが効いてくる。よし、未来予知を使用。答えた後あきれると

「かっこいいからです」

「あー、確かに。なんとなくわかるよ。そういう気持ち」

あれ?10人弱に言って全員あきれたのにこの人呆れなかった。

「と、いうのは本音の内7割くらいの理由でして」

「7割って半分以上じゃん!」

はい、そうですよ。こんな格好をやる理由なんて格好良さ以外に基

本ないでしょ。

「まあ、残り三割はこれが理由です」

と、眼帯をとり聖王由来の虹彩異色を見せる。

「…うそ。陛下以外にもいたんだ」

「私はヴィヴィオちゃんの前に造られたらしいです。ゆりかごへの適正が低かったらしく捨てられたらしいですけど」

「なんかゴメン…」

『セインさん、マスターに謝る必要は基本ないですよ。このひと、まったく言っていないほど気にしてないですから』

「まあ、プライドのいう通りです。私は過去についてネチネチ言っただけならば大丈夫ですよ。ただ、あんまり聖王の血を引いていることは知られたくないんで」

「そりやまたなんで?」

「ヴィヴィオちゃんみたいになんの気兼ねもなくみんなと接せるわけじゃないです。物珍しきで集まってくるのが嫌なんです」

これに関しては本当だ。実際、よくわからないときにテレビ関係の人が急に話しかけてきたり写真を撮られたりしてるから嫌なんだ。

「ふーん。わかった。まあこれからも陛下やノーヴェと仲良くしてやってくれよ」

「わかりました」

「そーいや、この後はいつものアレか。ん? ウエンデイもやるんだっけ?」

「ま、二人におつきあいっす」

「アレ…?」

ウエンデイさんはピースしながら答えている。

にしてもアレとはいいたい…

ハッ、もしかしてヴィヴィオちゃんを愛でる会とかそんな感じかな!?? ヴィヴィオちゃん天使だしやるのはわかる!

『…………』

「え? ちよあのプライドさん? どちらに電話をおかけになっているんですか?」

『警察です。ここにロリコンの変態がいるって報告しないと』

「バカ！まじめにやめて！母さんやシグナム姉さんに殺される！」

『ロリコンは否定しないんですか？』

「ちがうわい！」

4話 〱復帰練習2日目 1 on 2〱

〱ミッドチルダ中央市街地〱

「あ！来た！」

「リオ！コロナ！おまたせー！」

と、活発そうで八重歯が特徴の子と、長めのツインテールでおとなしそうな子がいた。

「リオは三人とも初対面でコロナはユタさんと初対面だよね
「うん」

「はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりました。リオ・ウエズリーです！」

「同じく二人のお友達でコロナ・ティミルです。ヴィヴィオからユタさんが練習してくださいさるって聞いて楽しんでました！」

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」「その妹のウエンディっス♪」

「こちらこそよろしく。八神ユタです。色々とあって練習に参加することになりました」

「ウエンディさんは私の友達でノーヴェは私たちの先生！」

「よー！お師匠様！」

私とウエンディさんの声がきれいにハモる。

意外とウエンディさんと気が合うかも

「ヴィヴィオ！先生じゃないって！」

「先生だよねー？」「教えてもらってるもん」「先生ってうかがってます！」

あ、ノーヴェさん赤くなってる。ついでだから写真撮ってみました。

「ちよ、ユタ！写真撮るな！」

「かわいいですよー♪お師匠様♪」

「あ！あとであたしにもくださいっスー！」

「やめろー！」

「でもやつぱり意外く。ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなあ。初めて会ったのも無限書庫だし」「文系だけどこっちも好きなの」「私は全然初心者レベルだしね」「ほんとー?」

「プライド、この二次元にしかないような光景の写真を撮ったら私つてどう見える?」

『変態、ロリコン、人間の屑などでしょうか』

ぐ、自分から聞いたとはいえないかなかダメージ大きい。

迷惑をかけるわけにもいかないので着替える。がなぜかコロナとリオって子からの視線が痛い。

「えーと、どしたの?なんかついてる?」

「あ、いえ。何でもありません」

『皆さん、この人滅多なことでは傷つかないの思い切つてどうぞ』

「そーそー、練習する仲になるんだから遠慮なく」

「あ、いや。ユタさん私達より年上なのに胸が……」

「ちよつ、リオ!」

・
・
・

あれどうしてだろう。目から水が。

『マスターまな板レベルですもんね』

致命傷に追い討ちかけないでくれませんか?

「あー、ユタさんごめんなさい!謝ります!謝りますから元気出してください!」

「そ、そーですよ。きつと大人になれば大きくなれますよ!…たぶん」
「今多分て言ったよね?!てことは希望はあんまりないってことだよね?!」

「あ!いやそういうわけじゃなくて!」

「お前らさつきと準備しろよ…」

と、ノーヴェの一言で(無理やり)立ち直ったユタだった。

「へー、なかなかやりますね。この子達」「すごいっす！」「だろ？」

リオちゃんやコロナちゃんを見ながらノーヴェさんに率直な感想を言う。

同じころの純粋なストライクアーツだったら多分この子達のほうが上だったよ。

今でも純粋な打ち合いとかだったら負けるんじゃないかな？

そんなことを考えていると三人が笑いながら話している。

うん、エネルギーはチャージできました。一週間は保つね。

「さて、ヴィヴィオ。ぼちぼちやつか？」

「うん。さー出番だよ。クリス！」

と、ヴィヴィオちゃんがセットアップをする。

そして、二人が中央のスパーリング練習用のリングに向かう。すると人混みができてきた。

「やけに注目されてるね」「すごい注目浴びてる！」

「二人の組手すごいからねー。リオやユタさんもびつくりしますよ！」

ノーヴェさんの左足での蹴りから始まったスパーは確かに小学生と救助隊の人がするとは思えないスパーが繰り広げられていた。

『マスター、体動かしたくなってすよね？』

「お、よくお分かりで。そうだねー、コロナちゃん、リオちゃん。こっちで私と簡単なゲームしようよ」

「二ゲーム？」

「そ、ヴィヴィオちゃんともやったんだけどね。私に一発どこにでも入れることができたなら可能な範囲でいうことを一つ聞いてあげよう。1人ずつ順番に。できなければ2人がかりでもオーケー」

お、目が輝いた。やっぱりなんでも一つ好きなお願いができるってというのは魅力的なんだね。

「やるかい？」

「やりますっ！」

「オーケイ、プライド。セットアップ」

と、光に包まれると例のハ○レンのグリードみたいな外装になる

「…ユタさんってホントに女なんですか?」「リオっ!」

「あー、もういいよ。コロナちゃん。これでリオちゃんには手加減する必要がなくなったね」

たまに言われることもあつて気にしてはいるんだから。

「あれ? リオとコロナ、ユタとやってたんだ」

「ユタさん、すごい…二人がかりなのに全部避けるか受け流してる」

「うーん、だいぶカン戻ってきたかな。スタミナ消費も昨日とかと比べたらだいぶ落ち着いたし。つて、二人とも大丈夫?」

「大丈夫です!」「まだまだやれます!」

ああー、いいこや。妹あたりにどっちかほしい。

「ほらほら、ヴィヴィオちゃんは一人であててくれたよ♪」

「ぐっ、がんばります!」「私も!」

『お二人とも、あくまで治療終わった直後のカンも戻っていない。しかもペース配分めちやくちやな状態のマスターに、です。そんな悔しがつたりする必要あんまりないですよ』

「こら、なにばらしてるの」

プライドと話していた時も遠慮なく打ち込んでくる。

コロナちゃんは申し訳ないが非常に避けやすくそんなに張り詰めた神経を使うこともない。まあ集中しないとすぐあてられそうなのは確かだが。

一方リオちゃんは独特な拳法からか非常にやりづらい。もうそろそろ片目だと厳しいかな?

けど、なぜこんなにも避けれるかというと。

攻撃が単調すぎるんだよね。練習すれば強くなるとは思うんだけど。

言い方を考えないならもつと狡賢くなってもいいかも、と思った

「うーん……おいユタ」

「なんですか？いませっかく楽しくなってきたのに」

「ちよつとだけこいつらにアドバイスいいか？」

「……いいですよ。どうぞどうぞ」

ノーヴェさんがリオとコロナを呼び何かを言っている。

お、戻ってきた。

二人ともやってやる！って顔してるね。思わず写真撮っちゃいそう。

「さて、準備はOK？」

「はい！」

コロナちゃんが突撃してくる。

「いつーあぶなー」

顔を狙うフリで足払いをしてくる。これをバックステップで避けるといつの間にか後ろに回り込んでいたリオちゃんが背中目がけて蹴りを入れてくる。

これを少し蹴りの軌道をずらして避ける。するとコロナちゃんが懐に潜り込んできており、ヴィヴィオちゃんほどではないが正確なラッシュをしてくる。

よけつつ、半分以上は受け流す。

「(てことはだ、リオちゃんはきつと……)」

さりげなくまわりを見るも視界にはリオちゃんが入ってこない。

ここで、一度コロナちゃんを突き放し距離をとる。

すると、背中に気配を感じた。

思わず振り向くと既にリオちゃんが振りかぶった後だ。

けどこの間合いで大きく振りかぶっているなら受け流せる。

そう、この時の私は思っていた。

そうだよこれ2 on 1だよ。コロナちゃんがいるよ。

「いつ」

はい、くりましたよ。調子に乗ってましたよ。

注意力が散漫になっちゃった私はリオちゃんに腹に叩き込まれて
コロナちゃんに背中を蹴られる形で中央に止まった。

「ノーヴェ、二人になんていったの？」

「ん、ああ。フェイントをガンガン混ぜて、味方、この場合はリオはコロナに、コロナはリオに打たせてやれるように考えながらやってみ
なつて。もちろん自分で打ち取る気でいきながらね。あとは相手に
合わせず自分たちのペースに巻き込んでやれつて」

「ほえー」

と、感心していると、すっごい悔しそうなユタさんが戻ってきた。

「だああーやられた！」

「うちのチビども、なかなかやるだろ？」

「はい。まさかアドバイス一つでこんなにも変わってくるとは」

「ユタさんー！」

「あーはいはい。覚えてるよ。二人とも何をご希望ですか？」

「私はユタさんの魔法を見てみたいです！コロナから珍しい魔力変換
をするって聞いてー！」

「わ、わたしは、その……恥ずかしいのでまた後でこっそり……」

私の魔力変換？確かに珍しいっちゃや珍しいかも。そいや周りにい
る人みんな知ってるから気にしたことなかった。

「わかった。リオちゃんには後で見せるとして、コロナちゃんはプラ
イドと連絡先交換しておいてもらえる？」

「はーい！」

「は、はいっ！ありがとうございますー！」

「今日も楽しかったねー」「てゆうか、ビックリの連続だよ！」

「ウェンデイ、悪イ、チビ達送って行ってもらっていいか？」

「あ、了解っス。何か用事？」

「いや、救助隊。装備調整だつて。じゃ、またな」

「『お疲れ様でしたー』」

そんなこんなでヴィヴィオちゃん達と分かれて帰路に着く。

『マスター。コロナさんからです』

「はいよ。メール展開して。……ほうほう。まあ、いいんじゃないかな。そうだねー。雷帝サマのと番長あたりの動画残ってる?」

『はい。決勝戦のジーク選手とののは?一応ありますが』

「それはダメ。雷帝サマと番長の二つを送ってあげて。もう一つの方は……一旦保留で、って伝えておいて」

『了解しました』

この後にまさかノーヴェさんが例の霸王サマに襲われているとはだれが思うだろうか。

～翌日 学校～

「……アインハルトさん休みじゃん。こないだのことで一発顔面ぶち込んでやろうと思ったのに」

『逆にやり返されて保健室送りにされる未来しか見えませんのでやめておきましょう?マスターDMですからご褒美かもしれないませんが場所を考えましょう?』

「誰がDMか」

そう、アインハルトが休みなのだ。授業初日なのに珍しい。

「どうとうバレて補導された?」

『あの人の強さにそれはほとんどあり得ないと思いますけどね。それこそたまたま申し込んだ相手がノーヴェさんクラスとかでない限り』

いやそんな偶然あるかっての。

「新しい練習相手?」

『そうらしいです。ノーヴェから聞いただけなんですわが』

「よかったじゃん。また仲間が増えそうで」

2限が終わった後ヴィヴィオちゃんから連絡が来て、練習相手がまた増える事を伝えられた。

またどんなピュアな子がくるんだろう。いろいろと楽しみになってきた。

『マスター、流石にドン引きです』

「うん私はプライドの読心性能にドン引きしてる」

『ノーヴェは放課後に来てくれて言ってました』

「オーケー、じゃ校門の前について。終わったら行くから」

『わかりました』

「あ、それとヴィヴィオちゃん」

『はい?』

「コロナちゃんに伝言お願いしたいんだ。時間のあるときならいつでもいいよ、って」

『わかりました!伝えておきます!』

ヴィヴィオちゃんとの通話が終わり数分経った頃に隣の席にインハルトが来た。

おくれてきたってことは病院でも言ってたのかな?

「や、インハルトさん」

「おはようございます。ユタさん」

ん?なんか違和感があるぞ。なんでこの方は驚かないんだ?

眼帯あるとはいえ、襲った相手が私ってわからないものかな?

『マスター、眼帯を取ってみればわかるんじゃないんですか?』

「いや、そうかもしれないけど…なんかヤダ」

「ねえねえインハルトさん」

「はい?」

「一昨日の夜さ、何やってた?」

と、この一言でわずかだがインハルトが警戒するのが分かった。

「その日は家でトレーニングと勉強です」

「そう?夜に喧嘩とかしてなかった?」

「していません」

「ふーん」

『アインハルトさん、すいません。マスター頭のねじがどこか数本外れているので気にしないでください』

「おいこら、どこか数本じゃない、一本くらいしか外れてないよ」

「一本でもまずいのでは…」

5話 復帰練習3日目 霸王サマ

『そうか。んじゃ昨日のジムに集合で』

「あいあいさーです」

ちよつと家に戻らなきやいけない用事ができた事でノーヴェさんに連絡を入れる。数時間後に昨日スパパーリングをしたジムに合流とのことなので気持ち早めに家に向かう。

「なんなんだろーね。とりあえず帰ってこいって」

『さあ?』

「たーだーいーま あつ!?」

玄関を開けた瞬間飛んできたのは斬撃。

あつぶないでしょうが!やる人1人しかいないだろうけど!

「ふむ、練習は真面目にしているようだな」

「あつたりまえでしょ、でなけりやシグナム姉さん本気で殺しにくるじゃん……」

「ちゃんと死ぬ限界を見極めてるから死ぬまではやらんさ」

「せめて肉体的な限界にしてくれませんかね!?」

出迎えてくれたのはシグナム姉さん。

ピンクの髪の毛のポニーテール、大人びた雰囲気の特徴の、他だと武士道精神が自我を持ったバトルマニアもとい戦闘狂。

黙って歩いてる姿は美人でモテると思うのに。

「今何か思ったか?」

「いえ何も。そいやシグナム姉さんがもう家にいるって珍しいね」

「元々今日は午前中で終わる予定でな。それで、主はやてからお前への復帰祝いを送ってはどうかと提案されたんだ。確かに、と思つてな。お前に聞こうと思つてたんだ。ユタ、どんなものが欲しい?」

「復帰祝い?そんなの気にしなくていいのに。むしろこれからバリバリ鍛えてもらう予定だったからそれが復帰祝いとかじゃダメ?」

「私もそう言ったのだが、主はやてには形が大事でユタも女の子だか

「何か買ってあげてくれ、と」
なるほど、それで急遽家に来てくれと。
うーん。とは言っても本当に思いつかない……。

にしても相変わらず綺麗な髪してるよねえシグナム姉さん。羨ましい。

「……あ」

「思い付いたか？」

「まあ思い付いたというよりは……シグナム姉さんが髪をポニテにしてる髪留め、あんなの欲しいなあ、とは思ったり」

「これか？これが欲しいならあげるぞ」

「いやいや、それじゃなくていいよ。そうだね……黄色の髪留めかな。柄とかはシグナム姉さんに任せるよ」

「わかった。買っておくよ」

身内の私からみてもシグナム姉さんは完全無欠の美人って感じだから憧れてるってのもあるし、何より家族からもらったものを身につけると気持ち強くなれそうな気がする。

「んで、帰ってこいって言ってた張本人がいないってことは多分、用事はシグナム姉さんの事だろうから今からジム行ってくる」

「なら送るぞ」

「ほんと？助かる」

「練習相手はなのはの娘か？」

「そうそう。それとその友達2人。今日また1人増える、らしい。ノーヴェさんが師匠をやってて、今日は改めて私の実力を確かめたいんだって」

「ほう。ならば思う存分やってやれ」

「言われずとも。シグナム姉さん達の顔に泥は塗らないよ」

ミッドチルダ中央市街地 ジム

「んーっ、ありがとうシグナム姉さん」

「気にするな。夜気をつけて帰るんだぞ?」

「わかってまーす」

先日コツテリ絞られてるので流石に、ね?

「プライド、どの辺だつて?」

『そこまっすぐ行つて三つ目の部屋です』

「りよ〜」

駆け足でプライドに言われた場所に入るとヴィヴィオちゃんがスパーリングを始めるところだった。しかも相手はアインハルト・ストラトス。

「お、来たか」

「どうも。新しい練習メンバーつてアインハルトのことだったんですね」

「知ってるのか?」

「んにや、同じクラスになってるつてだけです」

「ほーん。じゃあ見ときな。度肝抜かれるぜ?旧ベルカ式の古代武術だし、実力も申し分ない」

いやまあ、うん。申し分ないのは知ってるんですけどね。なんせ一回やられてるし。

「あ、一応ビデオだけ回しといて」

『承知しました。』

純粹にノーヴェさんのいう古代武術は普通に興味あるけどね!

「(本当に?この子やユタさんが霸王の拳を、霸王の悲願を受け止めてくれる——?)」

アインハルトの足元に魔方陣が展開される。

「んじや、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃とバインドはなしの格闘オンリーな。レディーー ゴー!」

「改めてみると二人ともすごいねえ」

『そうですねー。マスターはあんな打ち合いできませんもんね』

「私が殴り合いしようものなら物の数分で片付けるさ。主に私が片付けられる」

『んなこた分かりきってますから』

「ひどっ!?!?」

二人とも変身してないのにだいぶ強い。

ヴィヴィオちゃんなんか私とやった時よりうまくなってる。飲み込みが早いのかな？

「ヴィ……ヴィヴィオって変身前でも結構強い?」

「練習がんばってるからねー」

と、その場にいたスバルさんとティアナさんがおんなじような感想を言っている

あ、ヴィヴィオちゃんぶっ飛ばされた。そして双子さん（名前忘れました）ナイスキャッチ。

「お手合わせ、ありがとうございます」

しかしここから空気が変わった。

なんせアインハルトはあろうことか勝手に試合を終わりにした。

ヴィヴィオちゃんは焦ってアインハルトに近づいていた。

そりやそうだ。この態度だと怒らせたんじゃないかって誰でも思う。

「あの……あのっ……!!すみません、私にか失礼を……?」

「いいえ」

「じゃ、じゃあ、あの。私……弱すぎました?」

「いえ、趣味と遊びの範囲内でしたら十分すぎるほどに。申し訳ありません、私の身勝手です」

よし、アインハルトは徹底的にぶちのめそう。今決めた。一発顔面にぶち込むくらいにしようと思ってたけどやめた。

「あのっ!すみません……今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります!今度はもつと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえま

せんか？今日じゃなくてもいいです！明日でも…来週でも！」

「あー、じゃあまた来週やつか？今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ」

「そりやいいツスねえ」「二人の試合楽しみだ」「はいっ！」

「——わかりました。時間と場所はお任せします」

「ありがとうございます！」

「はろはろーアインハルト。学校ぶり〜」

「貴女は…ユタさん？どうしてここに」

「どうしても何も、私も練習に来てるからね。ねえアインハルト。私と一戦交えようよ。ねえ？霸王サマ？」

煽るように言いつつ、眼帯を少し上に上げてオッドアイをアインハルトにチラツツと見せる。

「え、貴女も…？」

「ほほーん。覚えてないかあ。しょうがないなあ、プライド、セットアップ」

『イエツサー』

「なんで毎回返事変わるかね」

プライドに伝え、セットアップをするとようやく思い出したのかアインハルトが敵意剥き出しになった。

「思い出した？そう！貴女に一撃を！入れさせてもらったものデス！」

『なおその後油断してやられてますけどね』

「カツコイイシーン壊さないでもらえます？」

セットアップを解き改めてアインハルトに向かい合う。

やる気は十分すぎる、と言ったところかな。

「ノーヴェさん、ヴィヴィオちゃんの時と同じルールで審判お願いします」

「あ、ああ。4分1ラウンド。射砲撃とバインドはなしな」

「はーい」

「はい」

悪いけど、今回は圧勝する気持ちでいこう。気持ちで試合した相手を侮辱するやつは大大嫌いなんです。

あのチャンピオンみたいなやつは特に。

「そんじゃ、レディー　ゴー！」

6話 復帰練習3日目 リベンジ

スパークが始まると同時に私はアインハルトから距離を取る。眼も慣れてないのにいきなりインファイトに持ち込まれるとアインハルトの早いステップに対応しづらいから。

「……眼帯は取らないのですか？以前は取っていましたよね？」

「別に舐めプじゃないよ。ちゃんと理由はある」

実際のところ、とある仕掛けをしてるので視界は両目あるのと大差ない。

「ノーヴェさん、身体能力の補助等なら、いいんですよ？」

「ああ。問題ない」

「了解です。んじゃプライド、例のやつやろう」

『了解しました』

けど実際問題、私の体質的に真正面からアインハルトと殴り合うのは分が悪すぎる。

スピードや技術なんかは努力で積み上げれた。

けれど体の頑丈さなんかはどうにもならなかったのが私だった。筋力もつきにくかったし。

だから私は真正面から打ち合うことをやめた。

そりや徒手格闘技ストライクアーツで勝ち登ることに夢みなかったのかと言われると嘘になる。

しっかし、鍛えてくれた人たちから「向いてない」って真正面から言われると流石に諦めざるを得なかったよね。

けれど、だ。

だからといって近距離格闘戦を捨てたわけじゃない。

あくまでも正面が打ち合うのを、私から攻撃を仕掛けるのをやめただけ。

「ん……オーケー。精度もよし」

魔力が私の左目を覆って視界が一気に開ける。

アインハルトは二日前の時のように独特の歩法で一瞬で距離を詰めてくる。

そして、同じように顔、腹、肩など様々な部位を狙ってラッシュをしてくる。

それをひたすら避ける。二回目だからかだいぶ動きはわかる。

あとは目のリハビリのおかげか、二年前くらいまでの視力に戻ってきたと思う。

プライドが治癒促進をしつかりと寝てる間にかけてくれたのもあつたりして。

今回も一撃も受けないよう注意はしているが二日前にやりあつた時とは一っだけ違う避け方をしていく。

それは

「がつー！」

「はい、一本。まだ終わりじゃないでしょ？」

前みたく避けることに全力を注ぐのではなく、あえて打ち込んでもらえるように雑な避け方に、隙が出来やすい避け方した。

もちろん攻撃を受けやすい避け方なのは自覚してる。

けど、逆に言えばそれだけ相手の攻撃を利用しやすいってことでもある。

今は腹めがけて強打をしてきたからそれを前によけながら膝蹴りをアインハルトの腹にかました。

自分の筋力は正直言つて中の下くらいだが、相手がこっちに向かってくる力と自分が相手に向かう力の両方を使えばかなり大きい力として使える。

それもアインハルトのような強打者ならなおさら、ね。

これが私がシグナム姉さん達と血反吐を吐きながら編み出した近距離戦法。

超超超カウンターヒッター型。

ヴィヴィオちゃんのように狙える場面すら自分から打ち込みに行かない。

決して自分からは仕掛けず、延々と避けて避けて避けて受け流して、相手の必殺の攻撃の威力を利用したカウンター。それが私の型。もちろん、一歩間違えれば致命傷になるけど、それでも私はこの型を気に入ってる。

「よつと」

「っ！」

今度は蹴りをご丁寧顔に顔を狙ってくれたので顔をそらして避けつつその足を持って床にたたきつける。

「二本目。霸王サマ、もう終わり？」

「っ、まだです！」

始まった時より荒く強いラッシュが来る、がそれは愚策でしかない。いや、本人は自覚してないんだろうけど。焦ったのかな？

「はあっ！」

「どうしたのかな？さっきより精度が落ちてるよ？」

挑発を試してみるのとさらに怒ったようで大ぶりの右ストレートを顔めがけて打ち込んでくる。

まあ、そんな隙だらけの威力を利用しないわけもなく

「ぐっ！」

「はい、三本目。そしてちょうど試合終了かな？」

一本目と同じように前によけながら顔にカウンターをかました。

「そこまで！」

はい、ジャスト四分。いい時間配分だったね。

アインハルトは……信じられないといった顔で倒れている。そこに近づき耳元で周りに聞こえないくらいの声で告げる。

「別にショックを受ける必要はないよ。趣味と遊びの範囲内ならアインハルトは十分すぎるほど強い」

ヴィヴィオちゃんに言い放っていた言葉をそのまま言ってやった。

自分がどんなことをしたかをしるなんて実際に身をもって体験するのが一番いい。

実際、いい具合にショックを受けている顔になっているしね。

「君が言った言葉がどういったものかをしっかりと身に刻むんだね。キミがどういった思いを持っているかは知らないけど真面目な相手を侮辱するようなヒトすら受け入れられる程、私の心の器は大きくないからね。」

……あ、そうそう。私の戦闘スタイルは魔法がメインだよ。格闘技術は弱点を補うために身に着けたに過ぎない」

『マスター、そこで更に追い打ちをかけますか…』

「うん、だってアニメの恨みと侮辱したことによる制裁も兼ねてるし」

『最初の一つがなければ立派だったんですがねえ』

はっはっは。何を言っているんだねプライドさん。私が今までに立派じゃなかったことがありだろうか。いやな『腐るほどありますから』ご心配なく』

コイツ後でシバク。

「ユタ、お前何言ったんだ？」

「いや別に大それたことは。ただ人に言われて嫌なことは言うなって伝えただけです」

『嘘ですよ。思いつきり心決りにいってました。それにですねマスター。貴女、執拗にアインハルトさんの顔狙ってましたよね？』

「あ、バレた？」

『女性の顔を傷つけに行くとはゴミですね』

「いやアインハルトも遠慮なく私の顔狙ってたが？」

『マスターはいいんです』

「ドユコトだよオイ」

マジでこの愛機は私に対して辛辣すぎる。

その後の練習が終わり、初等科組と中等科組で分かれることとなった。私達中等科組にはスバルさん、ノーヴェさん、ティアナさんが送迎者として来てくれることに。ご飯を食べに行こうと誘われたので

遠慮なく行かせてもらったのだけど、席がアインハルトの横。つまりめっちゃ気まずい。

「いやー、すごかったねえ。ユタちゃんもアインハルトもヴィヴィオちゃんも」

「そうだね。ユタになんかびつくりしたよ。ほんとに一年も現役退いてたの?」

「現役を退いても染み付いた技術はそう簡単にはおちねえだろ」

と、大人三人組は感想を述べている。

母さんやシグナム姉さんと鍛え込んだあのスタイルが褒められるのはなかなか悪い気はしない。

「ところでさ。ユタのデバイスってなんでそんな独特なの?」

「え?これですか?」

ティアナさんがデバイスの形について聞いてくる。

プライドを胸元から取り出しみんなの前に見せると、やっぱり物珍しいのか皆がまじまじと見つめている。

『え、もしかして私人気者ですかやったー』

「だまらっしゃい。えーと、まあ、アニメの敵キャラクターをモチーフにしているんですよね。」

傲慢の罪と書いてプライド。紋章の意味は確か……永遠や不老不死、再生と死、だったかな?」

「へー、ってことはプライド君は治癒特化、もしくは身体補助特化の性能かな?」

「ご名答です。ティアナさん。私はクラッシュしてしまったら動きが鈍ります。さつき見てもらったのでわかると思いますが、私のスタイル上致命的になるのでクラッシュは即時回復するようにしていますね。その代わり消費魔力に結構持つてかれますけど。クラッシュの程度によってはしないこともあります。それはプライドの采配次第です」

実際のところ、クラッシュを治すかどうかの判断まで頭を使えなかったからプライド任せにしたみたいなおもあある。

にしても美味しいなここのお店。
今度この味付け試してみよう

「今日はありがとうございます」

「ありがとうございます」

「ご飯を奢ってくださいった三人にお礼をする。」

「また明日連絡すつから」「アインハルト、何か困ったことがあればいつでもあたしたちにね」

「じゃあ、車で送ってくるから」

「うん」

その後はティアナさんがアインハルトを送っていった。

「ユタはどうするんだ？」

「このまま帰りますかねー。この後もシグナム姉さん達と特訓するの
で。……死なないように頑張ります」

「程々にな。体を壊したら元も子もないからな」

「わかってます。それではこの辺で。ありがとうございます。また
よろしくお願いします」

「おう」

「ねーノーヴェ。アインハルトのことも心配だけどき。ヴィヴィオ今
日のことショック受けたりしてないかな？」

「そりやまあ多少はしてんだろうけど。さっきメールが来てたよ。
やっぱり私の修行仲間はそんなにヤワじゃねー。今からもう来週の
練習試合を目指して特訓してらってよ」

く八神家く

「ただまー」

「おかえりー」

家に到着。リビングの方から母さんの気の抜けた声がある。

「……ん？誰の靴だろ」

玄関に知らない靴があった。

誰か来てるのかな？

「母さん？誰か来てるの？」

リビングに入ると母さん、シグナム姉さん、ヴィータさん、ザフィーラ、リインさんと珍しく全員大集合してる。あ、いや。シャマル先生だけいないか。

その中で1人見知らぬ人が。

「……？母さん、とうとうこんな幼い男の子にまで手を出したの？結婚願望強いのはいいことだけど程々にしとこ？流石に犯罪だよ？」

「よしユタ、お前覚悟せえ」

「あ、あの一、止めなくていいんですか？」

「二「いつものことだ（ですー）」三」

「ええ……」

「いったい……娘の可愛い冗談じゃんか母さん」

「それ以上言うようならお前の秘密暴露するで？」

「ほほう？一体どんな秘密でらっしやるのか。こっちには秘蔵のだからしない母さんコレクションあるからね？」

「ユタ、お前が過去に書いてたラブレターなるものがうちの手にある」

「大変申し訳ございませんでした」

「……いや待て！なんで持ってたの！？」

「どっから拾ったの！？てかちゃんと隠してたはずなんだけど！？」

「どこに隠すかくらいお見通しや」

「ぐぬぬ……」

相変わらず勝てる気がしない。

だから狸って言われるんじゃないの？

「それで、この子どうしたの？確か……八神道場によくいる子だよね」

ピンクの髪で短髪。中性的な顔立ちでおどおどしている。

見た目的に初等科5年くらいかな？

「あつ、はい！ミウラ・リナルデイです！一年位前からここに八神道場にお世話になってます」

「あ、どうも。八神ユタです。このため…じゃなくて八神はやての一人娘です。養子縁組だけどね」

「お聞きしてます！シグナムさんや師匠が鍛えてたって。インターミドルも都市本戦2位まで上り詰めれたって」

「……」

「?どうしました?」

「ミウラってさ、今、何歳?」

「12歳です」

「……マジ?」

「はい」

どうしよう、成長が乏しいと思われるミウラにですら（胸が）負け
た。

「世の中不平等だ……」

『初対面の人に失礼極まりないですよ?』

大変申し訳ございませんでした。

7話 く合宿に誘われましたく

く八神家く

「死ぬかと思った……」

『マスター、ノーヴェさんからメッセージです』

「読み上げて……今動けない」

『来週、ヴィヴィオさんとアインハルトさんと改めて練習試合を執り行うので見に来ないか、だそうです』

「来週？多分大丈夫だとは思うけど、特訓の予定次第になるって返していて」

『わかりました』

「んで母さん！抱き枕にするなっての！酔い覚ましいる!!?」

「ええやんええやん。ほほーん、にしてもユタ」

「……何」

「あいつかわらず胸ないなあ」

「やっかましいわ!」

「なんやあウチのこれそんなに羨ましいんかあ?」

「だまらっしやい！羨ましいに決まってるでしょうが！じゃあ言うけどね母さん結婚相手まだなの？ねえそろそろ婚期逃すう!」

ヤな予感がして顔を逸らした瞬間に魔力弾が飛んできた。しかも結構な高密度だから鉄みたいに硬いやつ。

「あつぶないな！先ケンカ売ったの母さんでしょうが!」

「だまらっしやい！有望な相手いるくせにい!」

「あのー、これもいつも通りなんですか?」

「だな。おーいプライド。今後のユタのスケジュール見せてくれよ」

『承知しましたヴィータさん。あとミウラさん。きつとすぐ慣れますよ。多分』

「ええ……」

―それから1週間後―

くヴィヴィオとアインハルトの約束の日 アラル港湾埠頭 廃棄倉庫区画 13:20く

試合時間十分前に着くともう既に一週間前と同じメンバーが揃っていた。

「お待ちせしました。アインハルト・ストラトス。参りました」

「来ていただいてありがとうございます。アインハルトさん」

「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可も取ってあるから安心して全力を出していいぞ」

「うん、最初から全力でいきます。セイクリッド・ハート。セット・アップ！」

掛け声と共にヴィヴィオちゃんが大人モードとやらになる。

「――武装形態」

お、アインハルトも大人モードになった。

「今回も魔法は無しの格闘オンリー。一本勝負。それじゃあ試合――開始！」

と、その声で二人がぶつかる。

「プライドく。一応、念のため録画ヨロシク」

『分かりましたが、何故？』

「将来的なライバルになりそうな予感だからく」

しばらくは睨み合って動いていなかったがとうとう動き出した。

「(きれいな構え。油断も甘さも無い。いい師匠や仲間に囲まれて、この子はきつと格闘技を楽しんでいる。私とはきつと何もかもが違うし、わたし覇王の拳を向けていい相手じゃない)」

「すごい威圧感。いったいどれくらいどんな風に鍛えてきたんだろう。勝てるなんて思わない。だからこそ一撃ずつ伝えなきゃ。『この間はごめんなさい』と——）」

今回はアインハルトから仕掛けた。それをヴィヴィオちゃんは受け止める。がさらにアインハルトは追撃していく。

そんな猛攻を避けヴィヴィオちゃんは腹にカウンターをヒットさせた。

うん、いいカウンターヒットだね。私とは大違い。

ヴィヴィオちゃんはそのまま追撃をしていき、そこからは打ち合いだった。が

「おお、いいカウンター」

ヴィヴィオちゃんが顔にきれいなカウンターをヒットさせた。

「（この子はどうして、こんなに一生懸命に——？ 師匠が組んだ試合だから？ 友達が見てるから？）」

「（大好きで大切に、守りたい人がいる。小さな私に強さと勇気を教えてくれた。世界中の誰より幸せにしてくれた。強くなるって約束した。強くなるんだ。どこまでも！）」

ヴィヴィオちゃん渾身の一撃がアインハルトのガードの上から入った。

が

「霸王 断空拳！」

それを受け止めたアインハルトがカウンターを入れそのまま吹っ飛ばされていた。

「——一本！そこまで！」

「陛下！」「ヴィヴィオっ！」

「はー、2人ともすごい気迫だったねえ。何考えてたんだろ」

『自分の過去とか先週のこととかじゃないですかね？』

「プライドの口からまともな発言が聞けるとは」

『喧嘩売ってます？』

ヴィヴィオちゃんは吹っ飛ばされた衝撃で気絶していて双子のうちのデイドさんに膝枕されている。

ヴィヴィオちゃんの傍ではいろんな人が心配している。

と、突然アインハルトがふらついた。

そしてティアナさんの胸、スバルさんの胸と順番に寄り掛かった。うらやま……じゃなくてけしからん。

『ヘンタイマスター通報しますよ』

「ごめんなさいやめてください。」

「ラストに」発カウンターがかすってたろ。時間差で効いてきたか」

ああ見間違いかと思っただけどちやんと当たってたんだ。ヴィヴィオちゃんやるう。

「——で、ヴィヴィオはどうだった？」

ノーヴェさんがアインハルトに問う。

一拍おきアインハルトが答える。

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼なことをいってしまいました。訂正しますと」

「そうしてやってくれ。きつと喜ぶ」

「ユタさんも、次は正式にリベンジさせていただきます」

「どうぞ」勝手に。いつでも受けて立つよ。……あ、できれば魔法戦含めた総合格闘技の方で」

『そこで弱気になるから……』

こんな怪物と真正面から打ち合えるかっての。

（彼女たちは霸王わたしが会いたかった聖王女じゃない。だけどわたしはこの人たちとまた戦えたらと思っっている）

「初めまして、ヴィヴィオさん。そしてユタさん。アインハルト・ストラストです」

「それ、起きてるときにいつてやれよ（あげなよ）」

「……恥ずかしいので嫌です。どこかゆつくり休める場所に運んであげましょう。私が背負います」

「はい！」

↳2人の練習試合から2週間後↳

あれ？ここはどこだ。

私は何をしているんだろう？

……あ、人がいる。

あれは……私？それと、ジークさん？なんで……

(じゃあジークさんにとっては私は本気を出す価値すらない相手だったんですか！)

(違う！ウチはそんなこと……)

(ならなんで本気でやるなんて言っておいてあんな……)

(ユター！よしなさい！傷口が……)

酷く覚えのある光景。

忘れたくても忘れられない2年前の光景。

またこれか。

ていうことは、これは……

「……………夢か」

『マスター？酷くうなされてましたが大丈夫ですか？』

気づくと私はいつもの部屋のベットにいた。

それを見てとてつもなく安堵した。

「あーうん。ちよつと嫌な夢を見ただけ。……ゆりかご……戦火から……」

『はい?』

「ん?どしたの」

『いやいや、いまマスターが何か口走ったでしょう』

「私が?何も言っていないんだけど」

『……まあ良いです。それよりもマスター、物思いにふけているところ悪いのですが。今日も試験では?』

「あ!そうだった!」

時計を見ると学校まで30分しかない。

しくじった。復習とかする時間が無い。

『あ、そういえばノーヴェさんと高町なのはさんからメールが来ておりますので試験後にでもご確認を』

「りよーかい。よし準備完了!あとはご飯食べてからダツシユするだけ!」

『怪我しないようお気をつけて』

く試験終了後く

「……………終わった。」

今日のテストは惨敗だ……。なんか夢のせいで体調悪いわ色々と忘れてるわで散々だった。

「こんなんだと学年主席とか取れるわけない……」

『ドンマイです、マスター。気を落とさず』

「あの……」

ん?誰だろ。声的に……

「ああ、クラス。どうしたの?」

「え?」

『は?』

「ん？」

え、ちよ、なんでアインハルトの名前呼んだだけで2人(?)ともそんな凍りついてるの？

「ユタさん、今何と？」

『マスター？』

「え？いや、あのアインハルトって呼んだだけじゃない？」

「いえ、私のことをクラウドと」

『私もそう聞こえましたが？』

「え？私アインハルトって呼んだつもりなんだけど。え？」

……え？

「ちよ、あの、いったんこの話無し……にして欲しい。で、アインハルト。用事って？」

「え、あ、はい。実はお願いがありまして……」

「お願い？」

「私と……本気で戦ってくれませんか？」

え、はやっ。こないだのスパーで圧倒できたからしばらく来ないもんだと思ってたけど。

負けず嫌いにも程がない？

「あーまあ、断る理由がないけど、何処でやるの？」

「合宿先で、です」

「合宿？」

はて？合宿とは？

『マスター、メールみました？』

「あ……ちよつとアインハルト待ってて」

「はい」

そーいやプライドから朝に言われてたような、気がする。

慌ててメールを確認すると両方とも試験後の休みをフルに使って合宿をするから参加しないか、というものだった。

「うーん、試験休みかあ。行きたいのは山々だけど、シグナム姉さんた

ちとフルで入れてなかったっけ？」

『確か先週はそうでしたね』

シグナム姉さんたちが許可してくれるならいいけど。

「えーと、誰が来るんだろ。……うっそ何この超豪華メンバー」

参加予定メンバーを見るとなのはさんから始まりフェイトさん
ティアナさんスバルさんなどなど。

……あの人も来るのか。どうしようめっちゃくちや行きたい。

「いや、でもなー。シグナム姉さんたちがみっちり特訓してくれるの
も滅多にないしなあ……」

『あ、噂をすればシグナムさんからです。なのはさん達から合宿につ
いて聞いた。遠慮せずに行つてこい。そしてシバかれてこい。だそ
うです』

「最後の一言余計だなあ」

シグナム姉さんからも行つてこいと言われたので行かない理由は
ない。むしろ母さんから聞いていた六課の人たちと手合わせできる
かもしれない。

そう考えるだけでワクワクが止まらなかった。

プライドに返信しておくように頼み、改めてアインハルトに向き直
る。

「と、ごめんねアインハルト。で、試合だっけ？」

「はい。魔法を含めた全力のあなたに、どれだけ私の力を通用させれ
るかを知りたいんです」

「うーん、普通に練習試合をしたい、でいいじゃないの。練習とは言え
手を抜くようには調教……じゃなくて教育はされてないから。……
まあいいよ。やる時間帯とかはそっちで決めて」

「わかりました」

「あ、あともう一つ」

「はい？」

「スパーした日、私の言ったことを謝ってなかったよね。ごめん。ア
インハルトも真剣に努力してたのに」

「そのことでしたらもう気にしてませんので。こちらこそすみません

でした」

あー、よかった。そのことを謝る機会がなかったから心残りだったんだ。

ヴィヴィオちゃんとの再戦した日？忘れておりましたはい。

↳数日後 試験報告&出発日↳

「で？どうやった？試験は」

「最終日にやった教科以外は満点に近かったよ。赤点もなし」

「おお、よかったなあ。これで思い切って合宿に行けるなあ」

今は母さんの家の方で試験の報告会をやってる。このあとすぐ合宿の準備もするのだが。

「学年主席と都市本戦優勝とかしてくれたら私も心配せんでいいんやけどな〜」

「次こそは取るよ。次こそは……。あ、そろそろ出る準備しないと」

「りよーかいや。怪我せえへんようになー」

「わかった。行ってきます。母さん」

8話 くいざ合宿く

なのはさん達と合流をし、合宿先へと向かう。

場所は無人世界カルナージというところで首都のクラナガンから臨行次元船で約4時間かかり、標準時差は7時間らしい。

要は結構遠い。

私はその4時間の間は……………

「あー、肩凝った」

『4時間もアニメ見てたらそうなりますよ』

「試験があつたから溜まつてたのを消化しないといけなかったんだからしょうがない」

『何をとは言いませんが卒業するというのは?』

「んなことありえるとも?」

『デスヨネ』

辿り着いた場所は自然の光景が目一杯に広がってきた。

とても凄いい、なんというか落ち着けそうな場所だった。

「みんないらっしやうい♪」

「こんにちはー」「お世話になりまーすっ」

と、紫髪の親子が出迎えてくれた。

大人の方はメガーヌ・アルピーノ、子供の方がルーテシア・アルピーノというらしい。

今回の合宿メンバーをおさらいしておくど、

まず大人の方々は

なのはさん、フェイトさん、スバルさん、ティアナさん、ノーヴェエさん。

私たち子供は

ヴィヴィオちゃん、リオちゃん、コロナちゃん、アインハルト、私。メッツチャ豪華。特に大人陣の方々。

それプラスフェイトさんの家族という方々が2人ほど来る、らしい。

……

『逃げたらはやてさん直伝の黒歴史をばら撒きます』

「はいっ」

嫌な予感しかしないから逃げるのはやめておこう。

「でね、ルールー。こちらがユタさん」

自己紹介が私のターンになったらしい。改めて紫髪の人、ルーテシアさんに向き直る。

「初めまして、ルーテシア・アルピーノさん。八神ユタです。今回はお世話になります」

「こちらこそ初めまして。とは言っても八神司令からは親バカ自慢をされてるので一方的に知ってるけどね。私はルーテシア・アルピーノ。ここの住人で14歳です。ユタのことは魔法戦が強いつて聞いてたから私もワクワクしてるわ」

「それはどうも」

こう自分のことを褒められるのは慣れてないから、なんかむず痒い。

「それと敬語じゃなくていいのよ？私のことはルーって呼んでちょうだいな」

「あー、うん。はい。善処しま……するよ」

そうはいつても、なぜか勝手に敬語になりかける。頑張つて慣れるとしましょう。

「あれ？エリオとキャロはまだでしたか？」

「ああ、2人は今ねえ」

……ツスー。よし。

多分呼吸は落ち着けた。

「「お疲れ様ですっ！」」

それと同時に後ろから大きな声が響いてくるから体がビクウってなってしまった。

振り返るとよく知る顔が2人いた。

「エリオ♪キャロ♪」

「わーお！エリオまた背伸びてる！」「そ、そうですか？」

「私もちよつと伸びましたよ!?? 1. 5センチ!」
スバルさんがフェイトさんの家族のことを聞くと同時にその2人が帰ってきた。

1人は少し背の高めの赤髪の男の子。もう1人は小さいピンク髪の女の子。

男の子の方はエリオ・モンディアル、女の子の方はキャロ・ル・ルシエ。

フェイトさんの家族だ。

とりあえず挨拶を、と思い落ち着いたタイミングで行く。

だだだいじょうぶぶ。平穩平穩。人の字を書いて飲み込もう。

「久しぶり、キャロ、エリオ」

「ユタ!久しぶり。怪我はもう大丈夫?」

「ユタちゃん!久しぶりだね!去年はごめんね。仕事が忙しくて全然お見舞い行けなくて」

「全然大丈夫。母さんからその辺の事情は聞いてたから。あと怪我はもう完全に治ってるからまた手合わせできたらお願いね」

「オツケー!」

よし普通に会話できたうん私えらい。

『……』

なおこの時ユタの愛機プライドだけはユタの頬が紅潮しているのをわかっていた。

『(なぜこれで隠し通せると思ってんでしょかね)』

「プライドどうかした?」

『いえ何も』

「ちなみに、1人ちびっこいるけど3人とも同い年」

「なんですと!?? 1. 5センチも伸びたのに!」

と、ルーさんにキャロさんが反論してる。

キャロさん。1. 5つてそんな伸びてないですよ。

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ。子供達はどこに遊びに行く？」

「やっぱりまずは川遊びかなと。お嬢も来るだろ？」

「うん！」

「アインハルトとユタもこっち来いな」

「はい」

と、ノーヴェさんに川遊びに誘われる。

……胸がアレだからあんまり行きたくないんだよなあ。

「あー、気持ちイイー」

やっぱり、この時期の川なめてた。すっごい気持ちいい。

泳ぐのは苦手だからラッコみたいに浮いてるだけなんだけど。

プライドはなのはさんに渡しておいてトレーニングの様子を撮ってもらってる。

後で参考にできそうなところを探したいからね。

この光景を撮れないのは痛いけど。

ヴィヴィオちゃんたちは競争したり鬼ごっこしたりと遊んでいる。

うん？ていうかみんなヤケに動きなめらかじゃない？

元気というか、元気すぎるというか。

あのアインハルトが泳ぎとは言え追いつけてない。

「水中で瞬発力を出すのは陸上とは違った力の運用があるんだよ。あいつら、なんだかんだで週2くらいでプールで遊びながらトレーニングしてつから、柔らかくて持久力のある筋肉が自然に出来てるんだ」「ほえー」

と、ノーヴェさんが解説してくれる。

確かに水中みたいな不安定な場所でも瞬発力出せるようになれば陸上でも使えそう。また後で聞いてみようかな。

「んじや、せっかくだから面白いもんを見せてやろう。ヴィヴィオ、リオ、コロナ！ちよつと『水斬り』やってみせてくれよ！」

「はあーいッ！」

「水斬り…?」

と、私とアインハルトが目を合わせる。

「ちよつとしたお遊びさ。おまけで打撃のチェックもできるんだけどな」

「えいつー!」

「やつー!」

「いきますつー!」

と、コロナ、リオ、ヴィヴィオの順で水斬りをやってくれた。

……なるほど、打撃の威力を前に打ち出して水を割ることね。

「アインハルトも格闘技強いんでしょ? 試しにやってみる?」

「?……はい」

「ユタは?」

「遠慮しとく。私はこういつたタイプの打撃はできないから」

アインハルトが構え、そして拳を打ち出す。

ズドオン! という音も共に水が打ち上がる。

「あはは……! すごい天然シャワー!」

「水柱5メートルくらい上がりましたよ!」

と、ヴィヴィオちゃん達とは少し違うがなかなか凄いことになった。

どうやったら若干12歳であんな打撃出せるの。

「……あれ?」

だが、霸王サマは納得できなかつたらしい。

「お前のはちよいと初速が速すぎるんだな」

「お、師匠のお手本だー」

「ユタ、茶化すなよ」

あ、はい。ごめんなさいです。

つい言っちゃいました。

「初めはゆるつと脱力して途中はゆっくり、インパクトに向けて鋭く加速。これを素早くパワーを入れてやると——こうなる」

……は? この人の蹴りでいま川の底見えましたよ? 何この人。

それを聞いたアインハルトも再度水斬りを試している。

お、少し進んだね。
まだ練習するらしい。熱心だねえ……

「アインハルトちゃんやユタちゃん楽しんでくれてるかな？」

「ヴィヴィオ達が一緒ですしきつと大丈夫です」

「ノーヴェ師匠もついててくれてるしね」

「ありがとうございます」

練習場では大人チームの基礎トレが行われていた。

なのはさんとスバルさんはなんともない感じで話しているが……

「ところでみんなは大丈夫ー？ 休憩時間伸ばそうかー？」

「だ……だいじょぶでーす!!」「バ……バテてなんか……いな
いよ……？」

あのティアナさんやフェイトさんなんかですら肩で息をしている。

後日それを聞いたユタは震え上がったとか。

『なのはさん、ありがとうございます。マスターの無理なお願いを聞き入れてくださって』

『いいよいいよー。全然大丈夫。ちゃんと撮れてる？』

『はい、しつかりと』

『それはよかった♪しつかり参考にしてね』

時は過ぎ昼食の時間になる。ログハウスに帰ると準備が既にされていた。

「さー、お昼ですよー！みんな集合ー♪」

「「「はーいーいー」」」

バーベキューで、豪華ですなー。

「体冷やささないようにあったかいものいっぱい用意したからねー」

「ありがとうございますー！」

メガーヌさん、すっごい気遣ってる。

そこらの並のホテルの従業員より気がきくんじやない？

てかこの量を1人で仕込んだの？バケモノかな？あ、もちろんいい意味です。

「アインハルトにヴィヴィオちゃん……大丈夫？」

「いえ……あの」「だ、大丈夫……です」

ヴィヴィオちゃんとアインハルトは筋肉痛なのか痛みで震えている。

その理由としては2人してずーっと水斬り練習やってたから。

休憩なしでひたすら水斬りやってたからそりゃ筋肉痛にもなる。

「じゃあ今日の良き日に感謝を込めて」

「」「いただきます！」「」

「いやー美味しかった美味しかった。私もあれくらい仕込んだ料理得意になりたいよ」

『全世界の料理を頑張っている方へ今すぐ土下座をしやがれください』

ひびっ。

『下手な人が分単位で出汁を取ったり火加減を目測でほぼ完璧に測れたりすると思います？』

ぶもつとも。

……と、さて。着いたかな？

「んーと、ここら辺だよね？」

『そのようですね』

なかなか切り倒しがいのある木が並んでいるねえ。

メガーヌさんに教えてもらったこの場所、なかなかいいね。ちゃんと許可取ったので大丈夫です。

薪を補充したいらしいのでついでに魔法の練習に使わせてもらえらることになった。

「んじゃ、始めようか」

『はい、いつでもどうぞ』

その声を合図に足元に、正確にはその少し後ろに魔力を込める。黒いナニカがゆっくりと動き始める。

「そんじゃ、まずは一本！」

その言葉とともに黒いナニカが勢いよく伸び数メートル先にあつた木が一瞬で切り倒された。

『お見事』

「ドーも。そんじゃ次々行こう」

「おしつ、こんなものですかね。計15本。これだけあればしばらく持つでしょう」

『お疲れです。ついでに小分けにしましょうか』

「だね。最後の一仕事しますか」

枝や葉を切り落とし、太い幹とその他に分けていく。ついでなのでそれにも魔力を練つてやった。

『ほんと、便利ですねえ、この固有能力みたいなのは』

「でしょー。遠距離の武器にもなるしバインドにも使えるなる。しかも相手にネタがばれても対策の方法は限られてくる。ほんとにこの能力大好き」

まあ、完全なるアニメの影響ですがね。

『おや、ノーヴェさんから通信です』

「はいよ」

プライドに言われ通話に出る。

『ユタ。魔法の練習はどんな感じだ？』

「今ひと段落したところですね。どうしました？」

『お、それはいいタイミングだ。終わってんなら大人チームの練習を見学しに行かぬーか？そろそろ六課のメンツが模擬戦を始めるんだってさ』

「是非！」

思わず即答してしまう。母さんの映像しか知らないから生で見れ

るのは感慨深い。

『んじや、チビ達も呼ぶからまた後でな』

「はーい」

この合宿最高だ。

来年もあるのならまた来たいね。

その時は母さん達も来れるといいけどなあ

9話 く悪夢く

陸戦場に着くと、先ほど話題に上がっていたなのはさんが絶賛模擬戦中だった。

組み合わせは……なのはさんvsスバルさん、ティアナさんか。1vs2なのに、なのはさん普通に受けきってる。すつつつご。

お、あの飛竜……ああなるほど。フェイトさんとキャロ&エリオか。

「あれは……アルザスの飛竜……!?？」

「正解！キャロさん竜召喚士なんです」「エリオさんは竜騎士！」

あの飛竜の名称を一発で言い当てるとは流石優等生。相変わらずエリオ達も凄いねえ。

「で、フェイトママは空戦魔導師で執務官をやっています」

あ、模擬戦終わった。くう、もう少し早く来れてれば。

次のメニューはフィジカルトレーニングしながら魔法訓練やらその他さまざまなハード練習に切り替わった。

……休憩なしで続けるってマ？

「局の魔導師の方たちは……皆さんここまで鍛えていらっしやるんでしょうか？」

「ですね」「ま……まあな」

アインハルトが質問するとヴィヴィオちゃんとノーヴェエさんが返す。

「スバルは救助隊だし、ティアナは凶悪犯罪担当の執務官。他のみんなも程度の差はあってもみんな命の現場で働いてるわけだしな。力が足りなきゃ救えねーし自分の命だつて守らなきゃならねー」

「ノーヴェエも救助訓練はガッツリやってるんですよ」

ああ、そうだ。母さん達、六課の皆に憧れて、強くなりたい……つて思ったこともあったっけ。

……また帰ったら母さん達にみっちり稽古つけてもらおうかな。

今は練習見学を早めに切り上げてホテルに戻りメガーヌさんと談笑中。

その内容は……

「で、ここで火を強めて」

「なるほど」

はい料理です。この方めちやくちや料理上手なんですもの。もはや談笑じゃない。

弟子入りしてる気分です。

おいこらプライド、呆れてんのわかってるからな。

「「おつかれさまです」」

「あ、なのはさんたち帰ってきましたね」

「そうねえ、ユタちゃん。先にみんなと一緒にお風呂に入ってきたら？」

「わかりました。ではまたその後にご指導お願いします！」

「私なんかでよければいくらでも♪」

「ふー、極楽極楽♪」

なんだここ。温泉沸いてるって。神地かなにかですか。

温泉ある理由も中々おかしい。

適当にほったら沸いてきたって。ギャグマンガじゃないんだから。

「……？…騒がしいな」

ヴィヴィちゃん達の方を見るとなんか騒いでる。

ぬるっとしたものが、とか。触られた、とか。

……？

今度はアインハルトのいる辺りで騒ぎ始めた。

お、水斬り成功してる。おめでとうアインハルト。
今度はスバルさんたちが騒ぎ始めた。

……なんか水色の髪の毛のいかなかった？その人にリオちゃんが胸も
まれた、ように見えたけど。

え、ちよつと待つて。リオちゃん、ぶつ飛ばすのはいいけどこつち
にとんで…

「げふっ！」

あつぶなああ!!!

間一髪避けれた。

飛んできた人は、うん、石畳に直撃してないだけマシでしょう。水
に打ち付けられるのも結構痛いはずだけでも。

「もーダメだよセイン。こういうイタズラは！みんなが転んでケガで
もしたら笑い事じゃすまなかつたんだし」

「セクハラも犯罪なんだからね」

「私が営業妨害で訴えたら捕まるしね」

「まったく、こんなのがあたしより年上かと思うと涙が出てくるわ」

あの後、セクハラしまくってた犯人はセインさんというのが判明し
説教されている。

「う……うう……。なんだよー！ちよつとみんなを楽しませようよ
思っただけじゃんかよー!!ケガとかしないようちゃんと気を付けて
たつっーの！これでも聖王協会のシスターだぞー！」

現在は騒ぎの原因であろう人が正座させられて説教を受けてる。

……この人がノーヴェさんより年上？なのになんだこの喚きよう。

小学生みたい。

「自慢じゃねーがあたしはお前らほど精神的に大人じゃねーんだから
な!？」

「(言い切ったし開き直った…)」

「ホントに自慢じゃねーよ」

そのあとはセインさんがみんなに謝って回っていた。
ヴィヴィオちゃん曰く、お茶目が過ぎることもあるがとても優しい
シスターだとのこと。

……お茶目とは？

「セイン、訴えない代わりに交換条件をのまない？今夜と明日の朝、みんなのご飯作ってよ。そしたら今夜一泊してつてもらえるようシスターシャツハに頼んであげる」

「ホントか!?そんなので良ければいくらでも!」

「示談成立だね」

どうやら話まとまりそうです。

あんまり関係ないんだけどね。

気がつくくと、あたり一面が炎の海になっていた。

私はというと、それを船の上から無表情で眺めている。

両腕を動かそうとすると違和感がある。動かせないし、何より自分の腕ではない感覚がある

見てみると腕ではなく義腕があった

周りには指揮官らしき人間が数人いた。

(オ——イエよ、ゆりかごの次の向かう先は——だ)

?ちゃんと喋って。よく聞き取れなかった

なんだろう、またおかしいことを周りは言っている。

世の中の大戦を止める?世界を救う?

世界を救うためだというのなら、なぜ私は世界を焼き尽くしている

?

あ、母さん。あの、この人たちすごい変なこと言ってるんだけど。……？なのはさんにフェイトさん、スバルさん、ティアナさんにエリオなんかも来てる。珍しい。

それに戦ってきたのか乗り込んできたのか所々怪我をしている。

え？私を助けに来た？

どういうこと？

あ、近寄ってくる

——駄目だ、こっちに来ちゃだめだ！

きたら、私は——

「ダメッ！」

……夢？ああ、よかった。

『マスター。大丈夫ですか？』

「ユタさん……」

「あ、あー。うん。寝起きとしては、さいつつあく。もう大丈夫。心配かけたね。アインハルトも、大丈夫だから。

……ああ、また夢で、良かった」

プライド曰く、小一時間ほど魘うなされていたらしい。

ずっと呼びかけていてやっと起きたとのこと。

「ああ、本当に、よかった。誰も、殺してなんかない、よね」

『当たり前でしょう。マスターに人は殺せるわけがありません。何より、マスターが悪意を持って傷つけようとした場合、私めが全力を持って邪魔させて頂きます』

今となつてはプライドの憎まれ口でとても安心できる。

「アインハルト、私の両腕、ちゃんどついでる、よね」

「はい。しっかりとついでいます。両腕共に」

「そう……よかった。」

……ごめん、ちよつと外の空気に当たってくる。すぐ、戻ってくるから。プライド、預かってってくれる?」

「え? あ、は、はい」

眼帯をつけてフードを深く被つて外に出た。

「プライドさん、ユタさんは……」

『まあ……別に口止めされていないので構わないでしょう。』

マスターは最近魔される事が頻繁に起こっています』

「内容を聞いても……よろしいでしょうか」

『私が聞いたものは、曰く自身の体から両腕がなくなって義手がついている、曰くゆりかご、というものに乗せられ周りを焼き尽くしている、家族も、友達も、何もかも。そのような内容が多いらしいです』
「……いつからですか?」

『私の記録に間違いがなければアインハルトさんと初めて殴り合った日からです。あの日から一週間に一回ほど。多い時には3日連続で見ただけもあります。夢の中は毎回一緒らしいですが』

「わかりました、ありがとうございます。……すいません、ユタさんを追いかけてもらっても?」

『どうぞ。ああ、ついでです。私も連れて行ってください』

「承知しました」

『但し私は隠し持っていてください。……あまり言いたくない言葉を選びますが、霸王の血を受け継ぐ貴女になら、アインハルトさんにならきつと話してくれると思います。ですが、私がいるのがわかったら

気を使って話してくれないと思いますので』
「わかりました」

「最近多いなあ。……多分、私のオリジナル……オリヴィエの記憶、なんだろうね。あーにしても夢とはいえ嫌な感触なことって」

外の冷たい風に当たると頭痛なんかは一向に治る気配はない。

思いつきり頭をぶつけて記憶喪失になれば治るのだろうか。

んなこと出来ないだろうけども。

寝っ転がって休んでいると足音が聞こえてくる。

……アインハルトだろうね。

「ユタさん！」

はい当たり。

「アインハルト。どしたのそんな慌てて」

「ユタさんが心配で追いかけてきました」

「私はもう大丈夫だよ。外の風に当たってだいぶ楽になったから」

「それは良かったです。あとはユタさんが見た夢について聞きたいことが」

「夢については話すつもりはないよ？」

即答で返すと少しだがムツとした顔になった。

「……なぜですか？」

「アインハルトには関係ないよ」

「関係あります！ユタさんが見てるものはおそらく聖王オリヴィエの記憶の一部です」

「だろうね。今アインハルトの口から聞けて改めて納得したよ」

「……わかっていたのですか？」

「なんとなくは、ね」

「ユタさん。私にも霸王イングヴァルトの記憶があるんです。なので、ユタさんのお役に立てるかもしれません。それに……ユタさんがそのような夢を見るようになったのは私と戦った日からと聞いています。それなら私に責任が……」

「あー、アインハルト。そういう理由じゃないんだよ。別にアインハルトが原因だろうがなんだろうが、私にとっちゃやどうでもいい、些細なことなんだよ」

「では、どういう理由で？」

「アインハルトに夢の内容を伝えると、もしかしたら秘密にしてくれるかもしれない。でもそれすら私にとっては嫌なんだ。私自身のこととで他の人に迷惑をかけたくない。」

……私はね、できることなら誰にも迷惑をかけたくないんだ。それこそ母さん達には昔に散々迷惑かけちゃってるし。」

私は、周りのみんなに迷惑をかけたくないし心配させたくない。苦しいことはなるべく自分以外の人に背負わせたくない。それが自分のことだというのなら尚更。ただそれだけ。これは私の問題。だから周りには言わない」

「…………貴女の愛機であるプライドさんやあなたのお母様達にも、言わないのですか？」

「うん、そうだよ。元より私自身の出生がどうのこうのとか、聖王のクローンだとか、心底どうでもいいからね。そんなことで母さん達に心配をかけたくない。…………だから、これは私自身の問題なんだ。私が自分で解決すべき問題」

さ、そろそろ戻ろう。寒くなってきた」

「はい…………」

10話 くいざ陸戦試合く

く陸戦場く

「はい、全員そろったね。じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんからー！」

「あ…あたしですか？」

と、なのはさんに言われ少し恥ずかしがりながらノーヴェさんが前に出てくる。

「えー…ルールは昨日伝えた通り、青組と赤組に分かれて行います。今回は人数の都合上6人と7人に分かれます。

フィールドマッチ形式の試合になります。

ライフポイントは今回もD S A A公式試合用タグで管理します。

あとはみなさん、怪我のないよう正々堂々ががんばりましょう」

「」「はーいっ！」「」

しれつと後ろから囁いちしてもカウンターされそうとか思ったり。まあ今回は単独行動での戦闘じゃないからしっかりと指示を聞かねば。

「じゃあ、赤組元気にいくよ！」「青組もせーの！」

『』『セーット！アーアップ！』『』

各チームのリーダーである、なのはさんとフェイトさんが掛け声をしそれに合わせ全員がセットアップをする。

チーム編成

赤組

フルバック

F B : キャロ LIFE 2200

センターガード

C G : ティアナ LIFE 2500

ガードウイング

G W : フェイト LIFE 2800

ウイングバック
 WB : ユタ LIFE 2500
フロントアタッカー
 FA : ノーヴェ LIFE 3000
フロントアタッカー
 FA : アインハルト LIFE 3000

青組

フルバック
 FB : ルーテシア LIFE 2200
センターガード
 CG : なのは LIFE 2500
ガードウイング
 GW : エリオ LIFE 2800
ガードウイング
 GW : リオ LIFE 2800
ウイングバック
 WB : コロナ LIFE 2500
フロントアタッカー
 FA : ヴィヴィオ LIFE 3000
フロントアタッカー
 FA : スバル LIFE 3000

〈青組〉

「序盤はたぶん同ポジション同士の1on1。均衡が崩れるまでは自分のマツチアアップ相手に集中ね」

ふむふむ、つまりティアナさんの作戦によると私は……

「つまりは、私はリオ&コロナちゃん、もしくはエリオと一騎打ちでしようか?」

「エリオは私が相手する予定。ユタちゃんはリオちゃんとコロナちゃんをお願いします」

「イエッサーです。なのはさんあたりが来ない限りは足止めはできると思っています」

「わかった。倒せそうなら遠慮なく倒しちやっていいからね」

「了解しました」

〈赤組〉

「向こうは前衛と中盤に突破力の強い子がそろってる。序盤は守備を固めて向こうの足を止めていこう」

「リオちゃんとコロナちゃんはユタちゃんをお願いします。私はティアナに集中しないとイケないから」

「はいっー!」

『それではみんな元気に……』

メガーヌさんが開始の合図の用意を始める。

『試合開始〜!』

「ウインググロード!」「エアライナー!」

試合が始まると同時にノーヴェさんとスバルさんが多くの足場を作る。

「いくよっ!コロナ、リオ!」

「オツケー!」

「頑張ろう!」

「アインハルトく、ヴィヴィオちゃんをお願いしてもいいかな?」

「承りました!」

今回はもちろん眼帯なんてつけておりません。そこまでアホじゃない。

自分のマッチアップ相手についてはおおよそ見当はついている。

おそらくは…

「やっぱりね」

「あれ?もう追いカケツコは終わりですか?」

「ユタさん、お相手お願いします!」

「遊び盛りの二人を相手に逃げ回ってもただの無駄な体力の浪費だからね。ここらでやりあおうか」

「(ユタさんが止まってくれた。ユタさんの魔法戦に持ち込まれたならこつちが不利、なら先手必勝!) 双龍演舞、炎龍!雷龍!」

「(ユタさんにはまだまだかなわないかもしれない。けどこの魔法なら!) 創成起動、創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに!叩いて碎け!『ゴライアス』!」

と、リオちゃんが雷と炎の龍を。コロナちゃんはそこの建物より

も大きいゴーレムを創成してきた。

かつこよ。何その龍、私もやりたい。

「へえ、コロナちゃんもゴーレム使うんだ」

「はい、私の唯一自慢できる魔法です」

「へえ、じゃあ私も対抗させてもらおうかな。ユタおよびプライドの名のもとに銘ずる。主の敵を殲滅せよ『ギガンテス』！」

と、私はコロナちゃんのゴーレムの半分くらいの大きさの岩人形『ギガンテス』を創成した。

「やつぱり、ユタさんも……」

「コロナやヴィヴィオの言ったとおりだったね」

「およろ？驚きの反応が見れると思ってたけどイマイチ。私がゴーレムクリエイトを試合で使ったことがあるの2, 3回だけなはずなんだけど。まいつか。さあ、やりあおう」

「えー！コロナちゃんもすごいけどユタもすごい！」

「そうねえ。二人とも年に年齢である精密なゴーレムを造れるなんて。とても特訓したのね。でも……ユタちゃんのゴーレム、迎撃用って感じじゃないわね。時間稼ぎのためかしら？」

一方そのころ、休憩室ではメガーヌとセインは見学しながら感想や意見なんかを言い合っていた。

「時間稼ぎ？なんでまた」

「ユタちゃん魔力を練り上げてるわね。きっとゴーレム以外にもあの二人への対抗策があるからかしら？」

私の言葉と同時にコロナちゃんはゴライアスを操作し私に向かってくる。それに応じるようにギガンテスが前に出る。

リオちゃんは炎を出しながら向かってくる。

さてはこのハリボテゴーレムがどこまで通じるか。

「やあつ！」

「炎龍砲！」

そんな淡い希望を打ち砕くかの如く速攻で壊された。ハリボテとはいえ時間稼ぎしてほしいから頑丈に作ったはずなんだけど。

ま、とはいえほんの少し時間稼げたからまあ良しとしましょう。

「ロックバインドー！」

壊されたゴーレムの破片をつかってバインドを仕掛ける。壊したゴーレムがバインドになるのは予想外だったのかゴライアスへバインドは命中、足を止めることができた。リオちゃんへは魔力弾を爆発させ砂煙を上げるとともに一時的に身を隠す。そして私の位置をさらに後ろに下げる。

こんな子たちとインファイトしてられるかっての。

「さープライド。一年間ただ療養していただけじゃないところを見せようか」

『了解です。マスター』

昨日、練習でやった時のように足元の少し後ろに魔力を込める。すると影のような黒い物体にゆっくりと質量を持たせ始める。

本当はもつと早くできるけど演出はしなきゃね。

魔力を込める理由は影を操るため。

正確には魔力の変換資質が『影』というなんとも不可思議なことだったのだが。

影が、ゆっくりと私の後ろでヨコに、そして縦に広がっていく。影が質量を得たかのように。

「きた、ユタさんの……」「何……あれ……」

いいねえ。私の背後が真っ黒になった事に驚きと違和感を隠せていない。特にリオちゃん、いい顔してるねえ。コロナちゃんは多少知っていたけど直に見て改めて驚いたのかな？

「そんじゃあ改めて相手をお願いするよ。リオちゃん、コロナちゃん」

宣戦布告をすると同時に影に無数の目、口を持たせる。

まあ、目と口はもちろん偽物ですはい。まだ視覚共有とかできません。

そして、これを初めて見た人や映像で知ってる人でも直に目にした人は決まってこういう。

「怖いです！」

「あははー。だろうね。さてと、ここからが本番だよ」

と言うとコロナちゃんもリオちゃんも構える。

が

「影の拘束」

「え!?!」

ゴライアスの足元から影が伸びゴライアスとコロナちゃんをバインドする。

がんじがらめ、というよりは細かい関節や力の入れやすい部分を締め上げることによる破壊しづらく逃げにくいバインド。なお母さん仕込みです。

……たまーに馬鹿力で引きちぎる人とかイレイザーで消し飛ばす人とかいるけど。

「ぎ、コロナちゃんはしばらく無視できる。次はリオちゃんかな。コロナちゃんを守りつつどこまでやれるのかお手並み拝見というこう」

「っ、炎龍。紅蓮拳！」

「わー！」

あつぶなあ。いきなり炎の砲撃打ってくるとは。本能で近づかせたくない、とでも思ったのかな？

いやしかし、昨日見て炎と雷の変換資質あるなーくらいは思ってたけど。砲撃もできるのね。未恐ろしい子だ、その才能羨ましいねえ。つと、そんなこと言ってる暇なさそう。

「よつとー!」

リオちゃんへ向けて影を勢い良く伸ばす。

それを避けられはするが先ほどリオちゃんがいた地面はまるで切り裂かれたようになっていた。

それを見たリオちゃんは素手では危ないと判断したのか剣を装備した。

「うん、正解だね」

今度は何本も連続でリオちゃんに向けていく。

それをリオちゃんは後ずさりしながらも剣で何とか捌いていた。

「前に出れない!なら……」つ、はあっ!」

「へ?」

と、リオちゃんがいきなり剣をおさめてまた砲撃を仕掛けてきた。しかもさつきより高威力で。

そのせいか実体化していた影はほぼすべて消された。

……なんつー威力なの?番長と張り合えるんじゃない?いや確かに燃費考えてあんまり高耐久のものにはしてなかったけども。

「雷神装・虎砲!」

「!」

と、土煙に紛れてリオちゃんが接近しており腹に打撃を入れられた。

その勢いで後ろにすっ飛ばされ壁に激突し崩れた瓦礫に飲み込まれる。

ユタ LIFE 2500↓1500 (ダメージ1000)

「コロナ、大丈夫?」

「うん、バインドも何とかとれたよ」

『コロナーリオー。ナイス!』

「あ、ルーちゃん。そっちは?」

『ヴィヴィオを今治療中。で、アインハルトがなのはさんと交戦中』

「じゃあ、あたしたちはどうする?」

『作戦もあるし、コロナちゃんはそのままユタの警戒で、リオは合図でいつでも動けるように』

「了解!」

「とはいっても、ユタさん出てこないね。クラッシュで動けないのかな?」

「気絶しちゃったのかな?」

「どちらも違うね」

「え!」

「シャドウボックス」

不意を突いて散布していた魔力を使って影の箱を創り出しリオちゃんのみを覆う。

コロナちゃんもできないことはなかったがゴーレムがあつたのでやめておいた。流石に魔力が切れる気がするし。

「げほっ。あー痛い。少しは受け流したのにあのダメージって。どんな馬鹿力なのやら」

「リオは、チームの中で腕力と魔力が一番ですから!」

「なるほど納得。パワーだけならアインハルトとも並べそうだね。うん、いい選手になれるよ。」

……ゴライアスが面倒だなー。私みたいな単純命令だけの自動操縦型ならいいんだけど。どう思うプライド」

『むしろゴライアスを潰すことができれば勝ちでしょう』

「ですよ。まあ多分無理だけど」

と、再度距離を取る。

リオちゃんを覆った影も、あの力の前だとあんまり足止め期待できそうにないから急いで……

「ゴライアス。パージブラスト!ロケット・パ——ンチ!」

「へ?」『あ』

どごーんという音とともに再度瓦礫に飲まれる。

普通にびっくりしてしまった。

ユタ LIFE 1500↓1000 (ダメージ1000)

まあ、けどやられっぱなしじゃいられないよね。

「そりゃっー！」

瓦礫をすっ飛ばして影をゴライアスの関節めがけて延ばす。すると、ゴライアスを操作して影を殴って消そうとしてくる。

なので影をできる限り細くしてゴライアスの攻撃を避けながら再度バインドをする。

いや、正確にはバインドもどきか。

「予想通り。大きいから小さいモノを狙にくいし思った以上に精密な動作は苦手とみた」

「これくらい…！」

コロナちゃんは無理やりバインドを引きちぎってきた。

うん、ありがとうねわざわざ罫にかかってくれて。

「えっ？」

すると、引きちぎれた瞬間バインドが爆発した。

ゼロ距離なのでゴレムが耐えられるわけもなく崩れ落ちる。

そして、落ちていくコロナちゃんを影で捕らえ思いつきり自分に向けて投げつける。

自分はそれと同時に走り出し、腕にずっと発動直前状態にしていたある魔法をかける。

「せえやっー！」

「くっー！」

そのまま後ろにすっ飛ばす。

コロナ LIFE 2500↓1600(ダメージ900)

「(なんか、ものすごい硬い石か何かで殴られたような)」

「ふいー、なんとかできた。時間稼ぎも終わり」

ユタの腕は肩から指の先まですべて黒いナニカで覆われていた。影ではない、何かで。

『ユター…もう少し時間稼ぎお願い！』

「りょーかいです。さあてリオコロコンビ、もう少しお姉さんと遊びましょー」

『マスター気持ち悪いですから本気でやめてください』
……泣くぞ。

「ユタさん、残念ですがそれはもうできてませんよ?」
「え?」

「だって、リオはもう逃げてますよ」

……リオちゃん、いつの間に。瓦礫に飲まれたりで気づいてなかった。

『え!??』

「へ?どうしました?」

『いや、リオとルーちゃんがこっちに!しかもユタちゃんとティアナさん以外が2on1状態に!』

「はい!??」

……なるほどね?つまりは……

「すぐそっちに戻るから少し耐えてて!」

『わかった!』

「いかせませんよ。ユタさん」

「あー再構築しちゃってるか」

と、コロナちゃんがゴライアスを操作し近づいてくる。

けど、やることは変わらない。

私は影を使ってゴライアスを少しずつ削りながら後ろに下がって
いく。そして、スキができたなら

「両腕斬り落とし完了!あとは、影の拘束!」
シャドウバインド

「ま、また…足元から…」

と、逃げながら地面にばらまいていた魔力で半壊状態のゴライアス
とコロナちゃんをバインドする。

まあ、ゴーレム半分壊すのに少し手間取ったけど。

「今回のはかなり強いバインドだし大丈夫でしょ。さてとキャロのほ
うに向かわないとね。予定より時間喰っちゃった」

コロナちゃんの力を侮っていたつもりはないけど、想像よりもやり
にくかった。

これはまた課題だ。

それはそうとキャロの元に行かなきゃ

11話 陸戦試合 決着

現在、キャロはリオとルーテシアによる2on1をなんとか捌いていた。

が、それも時間の問題かのように思われていた。

「はあっ、はあっ」

「ふふーん、そろそろかな」

「いや、まだです。アルケミック・チェーン！」

と、キャロは無数の鎖を出しリオとルーテシアに向かって放出する。しかし二人はすべてよける。

「ふふーん、あたらない♪」「ユタさんのより避けやすいですよー！」
「それはそうだよ。だってそれは捕まえるための鎖じゃなくて、撃墜のための布石だから！」

という鎖に引っ張られながらユタが現れる。

「相変わらずの機転のよさナイス、キャロさん。リオちゃん、君の砲撃の威力使わせてもらうねー。吸収放射、紅蓮拳！」

「へ?」

と、ユタはリオに撃ち込まれた三分の魔力砲撃を吸収し、ある程度を影に蓄えて置いた魔力を、一気にルーテシアとリオに向かって放出する。

大爆発が起きると共に、地面にはリオとルーテシアが倒れていた。

ルーテシア L I F E 2200↓0 (ダメージ2200)

リオ L I F E 2600↓0 (ダメージ2600)

「いえーい！ナイス！」

「勝利のV!!」

と、ユタとキャロとハイタッチをかわす。

キイイイイイン

ん?何の……

「へうっ!?!」「いたっ!?!」

キヤロ LIFE 1100↓0 (ダメージ1100)

ユタ LIFE 200↓0 (ダメージ200)

「はい、キヤロにユタちゃん撃墜」

「な、なのはさんいつの間に……」

「勝ったと思った時が危ないとき！現場での鉄則だよー」

撃墜された私たちは、そのまま観戦場所へ向かう。辿り着くとそこにはルーさんとリオちゃんもいた。

『先程の光景、シグナムさんに送ったらキツく絞られそうですねえ』
「本気で死ぬるからやめてくださいプライド様」

「(良し……タイミングは今!) プラスター1ツツ! (私の残り魔力もそんなに多くないけどマルチレイドで一網打尽!)」

「(なのはさんが集束に入った!) 紅組生存者一同ツ! なのはさんを中心に広域砲を撃ち込みます! 動ける人は合図で離脱を!」

「分割多弾砲で敵残存戦力を殲滅。ティアナの集束砲を相殺します!」

「モード【マルチレイド】」「シフト【ファントムストライク】」

「ニスターライト——!! ブレイカー1ツツ!!」

「……これ、なんて最終戦争?」

規格外の収束砲の相殺を初めて見た私の感想は間違っていない。

Team 青

なのは LIFE 0 (ティアナの集束砲を相殺しきれず撃墜)

エリオ LIFE 0 (集束砲が直撃し撃墜)

スバル LIFE 60 (ヴィヴィオを集束砲から守り戦闘不能)

コロナ L I F E 30 (ゴライアスで防御するも防ぎきれず戦闘不能)

リオ L I F E 0 (ユタの吸収放射により撃墜)

ルーテシア L I F E 0 (ユタの吸収放射により撃墜)

ヴィヴィオ L I F E 1800

T e a m 赤

ティアナ L I F E 110 (なのはの集束砲を何とか相殺)

フェイト L I F E 0 (集束砲直撃直前エリオにより撃墜)

ノーヴェ L I F E 0 (集束砲が直撃し撃墜)

キャロ L I F E 0 (なのはの弾幕により撃墜)

ユタ L I F E 0 (なのはの弾幕により撃墜)

アインハルト L I F E 1350

「えーと、残ってるのが…三人？」

『ティアナさんとヴィヴィオさんとアインハルトさんですね』
すごい、あの中生き残ったんだ。

あ、ヴィヴィオちゃんやんがティアナさんに近づいて行ってる。アインハルトもティアナさんを守るためなのか向かって…お、先ヴィヴィオちゃんついた。アインハルトもすぐ着いたな。

あ、ティアナさん撃墜された。

たぶんヴィヴィオちゃんとアインハルトの三度目の勝負、かな？

おつ、ヴィヴィオちゃんいいカウンター決まった。およ、アインハルトもカウンターし返した。無意識のうちに出たのかな？

アインハルト L I F E 1000↓0

ヴィヴィオ L I F E 700↓0

『はい、試合終了。結果は両チーム全員戦闘不能により引き分け！お疲れ様。』

「それでは皆さん」

『『お疲れさまでしたー！』』

「あー、疲れた」

『もっとやりたいくせに何を言ってるんですか』

「あ？わかる？」

『何年マスターといえると思ってるんですか。で、正直な気持ちをどうぞ』

「まだ体動かしたくてウツズウズしてる。今ならなのはさん相手でも喧嘩挑めそう」

『ほう？言いましたね？』

「……ごめんウソつきました。でもそれくらいモチベーションはあります」

さすがはプライド。私のことよくわかってる。

まあ、終わりは終わりだ。しょうがない。

「じゃ、おやつ休憩と陸戦場の再構築をしたら2戦目いくからねー。2時間後にまた再集合！」

『『はーいっ！』』

「え？」

『……マスター、細かな日程の詳細の確認は？』

はい、しておりますでした。

ちゃんと予定表を確認してみると、計3回の陸戦試合があるらしいから……あと2回か。

「プライド、録画はずっと回してたよね？」

『もちろん。簡単な編集をして後にシグナムさんたちへ送信する予定です』

「OK。撮影は任せた」

『任せました。10秒につき100魔力で請け負いましょう』
「ドクコトよ。100魔力って何よ新しい単位出してこないで」

〜数時間後〜

三回のチーム戦が終わり、今はみんな休憩中。

ノーヴェさん、スバルさん、ティアナさんは温泉

なのはさんとメガーヌさんはキツチンで談話

フェイトさんはエリオ、キャロと団欒を（混ざりたかった）。

そして私たちは……………

「あうう…動けない」「腕が上がらない…………」「おきられない…………」「…………動けません……………」

「みんな限界超えて張り切りすぎるからだよー」

「一生懸命やったからだねー」

私とルーさん以外みんな筋肉痛で動けてない。

「ルーちゃんとユタさんはなんで平気なのー?」

「そこはそれ、年長者なりのペース配分がね」

「シグナム姉さんとヴィータさんに鍛えられたら嫌でもペース配分は身につくからねえ」

何を言ってるのかコロナちゃんは。もし納得できないなら一度受けてみるといい。あの鬼コーチの特訓もといしごきを。

『あ、マスター。シグナムさんからメールです。、余計なことを言うなよ?』だそうです』

…………何あの人、テレパシーでも持つてる?

「そういうえば、アインハルトはこういう試合初めてだよね?どうだった?」

と、ルーさんがアインハルトに聞く。

「はい、とても勉強になりました」

「スポーツとしての魔法戦技も結構熱くなれるでしょ」

「はい…………いろいろいと反省しましたし自分の弱さを知ることでもできました。わたしの見ていた世界は…見ていたものは本当に狭かったと」
「今日の試合が良かったなら…この先こんなのはどうかなくて。ユタが出ていた試合でもあるんだけどね」

ああ、DSAAのことかな?

「ディメンション D ・ スポーツ S ・ アクティビティ A ・ アソシエイション A 公式魔法戦競技会」

やっぱり。

「出場可能年齢10歳から19歳、個人計算ライフポイントを使用して限りなく実戦に近いスタイルで行われる魔法戦競技、全管理世界から集まった若い魔導師たちが魔法戦で覇を競う。その名もインターミドル・チャンピオンシップ」

ルーさんが細かく説明を入れてくれるので私から説明することはほぼないかな。

インターミドルの話になり、ヴィヴィオちゃん達も目を輝かせながら話し始めた。

「私たちは今年から参加資格があるので…出たいねって言ってたんです」「そうなんです！」「全国から魔法戦自慢が続々集まってくるんです！数は少ないですが格闘型の人も！」

と、初等科トリオがさらに詳しく言ってくれる。

「自分の魔法、自分の格闘戦技がどこまで通じるか、確かめるにはいい場所だよ。ちなみに今年は私も出る！」

「二「わー」二」

ルーさんも出るのか、是非とも当たりたいね。

コツコツコツコツ

あ、この足音は…アノヒトだ。

「はあい、みんなー。荣誉補給の甘いドリンクだよー」

「出ましたね！魔王ー！」

「誰が魔王っ!?？」

「貴女ですよ！3戦目でなのはさんティアナさんフェイトさんのトリオで潰しに来たトラウマもとい恨みは一生忘れないですよ！シグナム姉さんたちとの特訓より死の間際にたどり着きましたもん！」

やっぱりなのはさんとメガーヌさんだ。

ちなみに最終試合の出来事のこと、開始30秒くらいで潰されました。

地獄とはまさにこのことか、と。

録画を見た母さんたちは爆笑しつつファイラとかは引いていた

らしい。

シグナム姉さんはそれだけ脅威に思われてたんだろうと、一応フオローしてくれていた、らしい。

〜温泉〜

「インターミドルかあ、アインハルトも出てくれると健全でいいんだけどね」

「そうだな。今日の試合でやっぱり確信した。あいつらの探してる強さは競技者としての強さだ。命のやり取りや削りあいじゃねえし何かをするための強さでもねえ。練習重ねて自分を高めて公正なルールの中で相手と競い合う」

「相手にも自分自身にも勝つ戦い……だよね」

「ああ」

と、ノーヴェ、スバル、ティアナが話している。

「まあ、あいつらが大会に出るなら……あたしも覚悟決めなきゃならねーんだけどさ」

「ちゃんとヴィヴィオたちの『師匠になる』ってことでしょ？」

「ノーヴェの未来だってまだ探し中なんだし、この先どんな道に進むかヴィヴィオやアインハルトたちと一緒に探していけばいいよ」

と、スバルとティアナがノーヴェに言う。

「こうして見るとスバルはやっぱりノーヴェのお姉ちゃんよねえ」
「姉です！」

「……まあ、不本意ながら」

〜子供陣〜

「インターミドルで強い子って実際本当に強いよねえ。ユタちゃんなんかがいい例だし」

「そーなのー！」

何言ってるんですか、なのはさん、開始速攻でぶっ潰しに来たくせに。接敵からの収束砲で秒殺KOされたの初めてだよ。

「都市本戦の上位あたりからはプロ格闘家に進むのもよくいるんですよ」「そうなんですか……」「あれ？コロナのゴーレムって大会規定では……？」「持ち込みはダメだけど毎回そばで組み上げるのはオツケーだって」

「あ、そういうえば参加資格の方は……」

「年齢と健康面は問題なくオツケーよね」

「コーチとセコンドはノーヴェが全員分引き受けてくれるそうです！」

「ノーヴェ師匠なら安心ですよね！」

「はい」

「あ、そういうえばユタさんはどうするんですか？一応ユタさんが希望すればユタさんのコーチとセコンドもやってくれるそうですが」

「いや、私はいらないかな。それに八神家から出ると思うし。……何より、八神はやての一人娘として出たいから。あ、でも練習はもちろん継続してやらせてもらおうよ」

それをいうとみんな喜んでいいた。まあ流石に高頻度、というわけにはいかないだろうけどね。

「あともう一つ……これ今も変わってないわよね？『安全のためc1ass S S 3以上のデバイスを持って装備すること』」

「デバイス……持ってないです」

と、アインハルトが申し訳なさそうに言う。

アインハルトってデバイス持ってなかったんだ。

てことはデバイス無いのに変身魔法あんなにうまいのか。羨ましい。

「あら、じゃあこの機会に作らなきゃね」

「その……でも真正古代ベルカのデバイスは作るのが難しいと……」

「フッフッフ、私の人脈甘く見てもらっちゃ困りますねえー。私の一番古い親友とその保護者さんってば次元世界にその名も高い。バリツバリに真正古代ベルカな大家族ー」

ん？ちよいまって。ルーさんの言う家族にすっごい心当たりがあるんだけど。

『マスターの考えであってますよ』

心を読む愛機が言ってくる。ってことは……………

「八神家の皆さんに頼めばきつとノリノリで組んでくれるよ!」

デスヨネエ。

『あ、マスター。はやてさんからメールです。、いま、ウチのこと呼ばんかったか?だそうです』

「あの人地獄耳か何かかな?」

『あ、またメールです。地獄耳なんて言っていないよなあ?だそうです』
…………もうヤダ、あの家族。

「ああ、忘れてた。そいやアインハルト、インターミドルに出る気があるならどんな感じかを知るために私と模擬試合、一度やってみる?」

「え…いいんですか?」

「もちろん。ていうかアインハルトも言ってたじゃん。本気で試合をして欲しいって」

「そうですが…………」

「よし、決まり。明日の昼にでもやろう。ルーさん、インターミドルと同じ設定のリング作れる?簡易的なので良いので」

「もちろん!私を誰だと思ってるのよ」

よし、これでアインハルトの約束の件はおわり。あとは…

「コロナちゃん、じゃあまた後で部屋でね。アインハルト、今日はみんなと寝て。私はコロナちゃんと少し話があるから」

「え?あ、はい、わかりました」

最後に爆弾だけ落として置いて部屋を出る。後ろでコロナちゃんが質問攻めにあってるが私は悪く無い。

『通報案件ですかね』

「いや何も悪いことしてないでしょうが」

12話 くvsたぬき（一方的）

『マスター。ではリハビリを開始します』

「あいよー」

部屋に戻り、プライドがいつもリハビリに使ってる映像を投影してもらう。

ready?の文字が浮かび上がり、目をよく解してから集中力を高める。

格好?暑いから上下ともに下着ですよ。上はシャツもきてるけど。

「いつでもどーぞ」

『では開始します』

コンコン

「ユタさん、きました」

「あいよー。はいつていいよー」

「お邪魔します」

と、コロナちゃんが入ってくる。けどまだリハビリしてるからもう少し待ってもらうんだけど。

「もう少しだけ待ってて、これ終わるまで」

「はい、わかりました」

「……はい、出来た」

『結果を出しますので少しお待ちを……87%です。前回から4%アップです。全盛期ほどではないとは言え、かなり良くなりましたね』

「そうねえ。でもやっぱり違和感あるかな」

『それは左右での視力の差が原因かと』

「それと、どうせやるなら100%にしたいよね」

『鍛えればいけるんじゃないんです?』

ま、それは頑張るとして。

「コロナちゃん、お待たせ。ま、とりあえず座って座って」

「コロナちゃんを促して、横に座ってもらう。」

「で、お願いって?」

「ユタさん。……私を、鍛えてくれませんか?」

「というと? 私悪いけど、コーチ経験皆無だよ。それに、コロナちゃんには私以上にしっかりしたコーチいるでしょ? ノーヴェさんが」

「それは分かっています。でも……。少しだけ私のことを、お話ししても?」

「うん。どうぞ」

「……私、2年前のインターミドルを見たときからずっとユタさんに憧れていたんです。だから、その時に大怪我を負ってしまったのも知っています。去年丸々、どの試合でも見れなくなって。私、ユタさんの都市本戦をみてから、ユタさんみたいになりたいって思ってたんです。そんな中、練習で一緒になれたり合宿でも一緒にできるって知って」

「んーと、コロナちゃん。私のスタイルを知ってるの? 戦績なんかも。」

都市本戦まで見てたってことは、知ってるんだろうけども」

「はい、近距離戦では決して自分からは仕掛けない超カウンター型。魔法戦では影を主体に、リフレクトと吸収放射を使いこなして相手の攻撃を利用して戦うスタイル。戦績もライフ0にして勝った数より判定勝ちの方が多い」

「そうだね。そこまで知ってて私に憧れる? 世間では真正面から勝てない相手を見切って逃げまくっている弱虫だ、なんて叩かれたこともあるのに」

当時の私は一戦一戦に全力掛けててそんな評判聞いてる暇なかったけど。

「私、ゴーレムや反射、影なんかを駆使して格上の相手と逃げながらでも渡り合えることって凄いことだと思いますよ。私なんか上位選

手とやったらそんなことできませんもん」

「……あー、ダメ。こういう風にマジな顔で言われると照れる。」

「それで、私。リオやヴィヴィオより色々なものが劣っているってわかってるんです。ただし特別な魔法が使えるっていうだけで」

「コロナちゃん、それでいうなら私も少し特別な魔法が使えるっていうだけだよ」

「ですが」

「反論しようとするコロナちゃんを一度制して、あらためて自分の口で言う。」

「それに、才能の話でいうなら今この合宿にいるメンバーの中で私が一番劣ってる」

「え?」

『マスター?その話はしてもいいんです?話したくないみたいなおことを言ってますでしたっけ?』

「いつ言ったっけそれ。覚えてないからいいや。細かいことは気にしない」

「コロナちゃんはなんで私が格闘戦と魔法戦でカウンター型を極めようとしたかわかる?」

「ええと…」

「コロナちゃんは口ごもる。」

「答えは私が魔法戦技能が皆無だったから。より正確に言うならば、私は王道の戦い方の才能がなかった」

「というとプライドも諦めたようにため息を出しコロナちゃんも驚いた顔をする。」

「コロナちゃんから見て私ってどんな人に見えた?」

「わ、私は、ユタさんは11歳でインターミドルの都市本戦に出場なさいましたし試合を見た限りでも相手のペースに持ち込ませなかったり相手の攻撃を利用して戦っているからとても魔法戦技の才能のある人だな。カウンターや反射、吸収放射を実戦で使うのって、練習

をすごく積まないといけないと思いますし」

「うん。まずそもそも前提が違うね。」

私が試合でカウンターを駆使するのは私にカウンター技術の才能があるからじゃない。

それしかできなかったから。それに尽きるんだよ。

……わたしもコロナちゃんみたいに憧れてる人達はいてね。特に私の師匠達って死ぬほど強くて、高すぎる壁で、高すぎる憧れなの。それに私がインターミドルでずっと目標にしてた人も、真正面から全てを潰しに行くような人だった。……そんな戦い方をしたかった。

だけど、私はいくら鍛えても打撃力がつかなかった。筋肉がつかなかった……のほうが正しいかな。

いくら鍛えてストライクアーツの型を身につけて打つても、同世代どころか年下の子にすら負けてね。

それに師匠達からも無理だって断言されちゃったから、諦めざるを得なかった。

そこでまず、ストライクアーツではカウンター型の一択になった。私は生まれつきなのかわかんないけど筋力なんかがともつきづらかった。年下の子にすら打撃力負けてて、嘆いた記憶があるなあ。

だから攻撃しても相手には大したダメージにならない。相手にペースを渡さないようにするのは、そうしないと私は後手に回ってしまうから。私はパワーでなんとかする、みたいな方法は取れないから。それに筋力がつきにくい関係上、とても打たれ弱いからね」

「でも、ユタさんは今日のチーム戦で私に」

「ああ、1戦目のやつ？ コロナちゃんならどんな魔法かわかってる気がしてたんだけどな。まあ話は戻りまして。」

カウンターを極めたからといって結局は拳の強さが関わってくる。私はそう考えた。けど私にはその肝心の拳自体の強さが無い。スピード、威力はカウンターの性質上相手からもらえるけれど、ただの拳だと決定打にはなりにくい。さて、こんな時コロナちゃんならどうする？」

「私は……腕を固くします」

「うん、私と一緒に。私もね、同じ結論に達したんだよ。で、考えたのがコレ」

陰で家の外から一つの石を持ってきて、コロナちゃんに示す。

この魔法に関しては説明するより一度見せたほうが早いからね

石に対して魔法を使い、手が初戦の時と同じように、全体的に黒くなる。

「これを受けたコロナちゃんはこういったものだと思った？」

「え？うーんと、ものすごい硬い石…みたいな」

「うん、半分正解。ものすごい硬い、はあってるけど石じゃない。…いや、石だっけアレ」

『金剛石だから石では？』

「あ、なら正解か」

「え？金剛…え？それって…」

「あ、気づいた？まず大前提として炭素っていう物質を構成する元素があつてね。この炭素同士の繋がりを変えることで鉛筆の芯からダイヤモンド並みの硬さまで変化させることができる。」

そして、ダイヤモンド並みの硬さにしたものを纏えばそれは鉄壁の鎧かつ硬い武具にもなる」

『マスター、そんなに秘密をベラベラと喋っていいんですか？』

「いーの、コロナちゃんめちやくちや真剣に聞いてくれてるし」

今なんかもブランゼルに録音しながらもしつかりと聞いてくれる。

「でも、それなら全身を覆ってしまえばいいんじゃないんですか？」

「私も最初はそう思ったんだけど。コレねえ、意外と使い勝手が悪い上に魔力の燃費が悪いんだよね。一試合に一回纏う程度に留めなきゃいけないの」

多分、これで大方私のことは話したよね？あー、疲れた。

閑話休題

「それで、話がそれたけど改めてコロナちゃんが私にお願いしたいこ

とを、教えてほしいな」

「あ、はい。私……ユタさんにノーヴェ師匠とは別で特訓をつけて欲しいんです。ユタさんみたいに強くなりたくて……」

私が強い、ねえ。それに関しては異議あるけど、まあ答え自体は決まっている。

「いいよ」

『いいんですかい』

「そうですね……ダメに決まって……って、へ？」

プライド、いつもの冷静なツツコミはどこに行ったの？口調が変になってるよ。

「けど、条件がある」

「条件？」

「それは……」

【合宿三日目】

「あー、眠い」

『あれだけ寝たのにまだ眠いんですか』

しよーがない。寝すぎて眠いってやつだよ、プライドさん。本能みたいなものだ。

コロナちゃんはもうすでに起きているようでベットには私一人だった。

今現在はカルナーズの時間で8時半。

今日の合宿の予定は……

「ユター？起きてるー？八神司令と連絡ついたからお願いー」

「はいー、今行きますー」

いまからアインハルトのデバイスの交渉と昼からはアインハルトと試合。

さて、多分今回の合宿で一番疲れるぞ。気を引き締めないと。特に母さんとの交渉は。

『変なところで覚悟を決めないでください。馬鹿馬鹿しいので。まあ同情はできませんが』

「同情してくれるだけありがたい」

と、私は部屋を出た。

私は、覚悟を決めるとルーさんやアインハルトのいる部屋まで来た。

「ルーさん、きたよー」

「お、きたきた。いまから八神さんと通信するから何かあったら頼むわね。ユタ」

……まあそれくらいは別にいいんだけど。

問題は余計なことを喋られないかどうか。

絶対何か爆弾投下してくる。

そんな自信がある。

「（八神司令：一体どんな方なんだろう。数々の事件を解決してきた歴戦の勇士っていうし、やっぱり怖い方なのかな…）」

アインハルトを見るとなぜか緊張している。

「あー、アインハルト？緊張するだけ無駄だよ。リラックスリラックス。あとお願いがある」

「なんですか？」

「私が冷静さを欠いたと思ったら遠慮なくぶっ叩いて」「へ？」

よし、保険は用意できた。

『あ、オーツス。ルールー。ユタ』

「おいーつす。アギト」「んちやーアギト」

『デバイスの件だよな？ちよつと待ってて』

と、赤髪の男の子っぽい口調のアギトさんが出てきた。そして母さんを呼びに行った。

そして、映ってきたのは

「たぬ……たぬき……?」

たぬきの仮面をかぶった人だった。アインハルトもポカーンとしている。

「あー母さんがとうとうたぬきになった! みんなに狸って言われてたからとうとうなつちやったか!」

『アホ! まだなる気はないわ! まだ狸になる前にアンタの親を卒業せないかんわ!』

「まだ!? てことは狸って自覚はあるんだね!? 認めたな! 言質とつたからね!」

『うっさいわ!』

スパン!

「ユター、話が進まないから少し黙って」

「痛つつつ、はい。ごめんなさい。アインハルト、手加減なさすぎ…」

『それはそうとー』

と、画面の母さんが狸のお面を取りながら。

『ユタはもうエリオに告ったんか?』

「なにサラツととんでもないこと言ってるの!!!!」

案の定爆弾落としてきた。

しかもよりによって……

「え?」ユタってエリオのこと好きだったの……?」

まっずい話を変えないと……。

「いや、あのー」

『そうやでー。2年前のインターミドルも都市本戦で優勝したらエリオに告白するーって張り切ってたもんなあ』

「だーかーらー!!!人の秘密ばらすな! てか何で知ってるの!?!」

『決勝で負けた時もなが一番悔しかったかって言ったらエリオの前で無様に負けたことを一番悔やんで泣いてたもんなあ』

「だからなんでしってるの!?!」

『言っとくけどウチだけじゃなくてなのはちゃんやフェイトちゃんも知ってるからなー。あとはシグナムやシヤマルも。エリオは知らんけどなー』

「なぜに!?!? 言いふらしたでしょ!」

『してへんわ! 2年前のあんたほどわかりやすい奴はおらんかったわ! それよりはよ告りーや。そしたらウチも安心できるんやから』

「年齢〓独身歴の人に心配されたくはないね! 母さんこそ早くいい人見つけたら!?!? 見つけれるならだけど!」

『いま言うてはならんことを言ったな! 帰ったら覚えときーや!』
ガン!

あれー? なんか目の前に星が浮かんできた……

ドサツ

『……アインハルトさん、容赦ないですね』

「え? ユタさんがこうしろと」

最後にプライドとアインハルトの話し声がかすかに聞こえてきて意識が途切れた。

『よし、ユタは黙らせてもらったことやし。改めてルールー。お久しぶりやー』

「八神司令、お久しぶりです。今日はお休みなんですねえ」

『そーなんよー』

「(この方が……)」

「あ、それで今日はですね、この子の」

『あー聞いているよ。霸王イングヴァルト陛下の正統血統ハイデイ・E・Sイングヴァルト。格闘戦技【霸王流】を継承してて。ちよつとやんちやもしてたけど今はノーヴェ師匠やヴィヴィオ達と一緒に魔法戦技に一生懸命。真面目で一生懸命なええ子やって。そんな子にならいくらでも協力するよー』

「ありがとうございます!」

と、アインハルトが頭をさげる。

『公式魔法戦用のデバイスやったっけ? どんなのがいいか決まってる?』

「あ、はい……!」

『装着型とか武器型とか』『なんでも相談にのるよー』

と、はやてさんの横からアギトにリインも映ってくる。

「えと…格闘戦技だけで戦いたいので武器型ではない方が…」

『そーかー。格闘家さんやもんねー。ほんなら体の動きを阻害するよ
うな装着型も良くないかなー。スバルのナツクルやキャリバーも、あ
れなんだかんだでめっちゃ重いしなー』『そうなんですよねえー』

「ですから、その、この子達のように補助・制御型の方がいいなど」

と、アインハルトはクリスやプライドを持って示す。

『なるほどなー。ほんならクリスやプライドの性能をベースに
真正古代ベルカエンシユントのシステムで組むのがええかな』『補助・制御型か。そ
れなら機体自体はすぐにできそうだな』『ですね。あとは性能設定と
調整です』

『そやねー。ほんならアインハルト』

「はいっ」

『霸王の愛機。まずは軽く取り掛かってみるな。八神はやてとリイン
&アギトがノリノリで組んであげよ』

『『お任せだ！（です！）』』

「ありがとうございます！」

『まあ詳しい話も聞きたいから合宿が終わったら、ユタあたりに一度
ウチに遊びにでもきてな。特にウチのユタに勝ったこととか聞きた
いしなー』

「え？あ、いや、その…あれは…」

『そやけど合宿ええなー。ウチらもまた行きたいなー』

「またいつでもいらしてくださいー」

13話 〓VSアインハルト〓

〓八神家近くの砂浜〓

「師匠！そっういえばインターミドルの参加申請、今日から受付開始ですよね！」

「ああ」

砂浜にはストレッチをしているミウラとザファイラがいた。

「師匠に教えてもらったこと。ヴィータさんやシグナムさん、シヤマル先生に鍛えてもらった技！それからいつもはやてさんやリインさん達してくれる美味しいおやつに恥じないように。ボク、頑張りますっ！」

ミウラ・リナルデイ（12）

区立学校中等科一年生

Style：ストライクアーツ八神家流

Skill：抜剣

Magic：ミッドチルダ

インターミドル参加履歴：初参加

「頑張りますよ？」

「いや、2度言わなくていい。がんばれ」

「そっういえば以前あつたユタさんも出るんですか？」

「ああ。ユタは強いぞ。勝ちたいのならば今以上に特訓が必要だ」

「……はいっ！」

〓ミッドチルダ南部 エルセア第9地区〓

「あ、リーダー！」

とある高校ではリーダーと呼ばれる女がいた。

そのリーダーと取り巻き3人は見た目は不良。中身はいい子ちゃん。（証言者 ユタ）

リーダーは、ハリートライベツカ。赤い髪が特徴で一人称がオレ。取り巻きは長身のロングのミア。なお成績優秀。ちっちゃくてサングラスっぽいものをかけてるルカ。マスクがトレードマーク？の

リンダの3人

「それ、大会の参加申請つすか？」

「おうよ。今日から参加受付開始だからな」

「いやー、今年こそリーダーが優勝つすよ！」

「去年は惜しかったつすからねー！都市本戦であんな変なのに負けちまってる」

「ばかやろう！てめえリーダーが気にしていることを！」

「え？いやでも…」

と、ルカとリンダがいうとルカが慌てながら言う。

「ハッ！」

「ぐすつ……ぐすつ……」

「ホラみる！泣いちやったじゃねーかつ！」

「スンマセン！ほんと、スンマセンッ！」

「いいんだ！泣くほど悔しい気持ちを胸にッ！オレあ頑張る！今年は負けねえ!!」

「オオスッ！」

ハリー・トライベツカ（15）

市立学校高等科2年

Style：我流魔導戦

Skill：近接射砲撃

Magic：ミッドチルダ

インターミドル参加履歴：3回

最高戦績 都市本戦5位入賞

「あ、リーダー。ユタさん、今年から復帰するらしいですよ」

と、ミアがいうと

「それはほんとかつ！っていうか、なんでミアがそれを知ってた？」

「ユタさんから報告きてました」

「ミア、ユタとメアド交換してたのか？」

「はい」

「あいつ！オレとはやらなかったくせに！ミアだけかよ……まあい

い。今年で2年前の雪辱は果たしてやる…」

「ダールグリユン家」

「このあいだまで世間を騒がせていた自称霸王。わたくしが叩き潰してやろうと思っていましたのにいつの間にか姿を消してしまつて」

「今年も聖王陛下も10歳になりましたので参戦なさるようですよ。もしかしたら霸王の子も出てくるかもしれませんね」

ある一室では金髪のお嬢様らしき人（実際お嬢様だが）のヴィクトーリアと執事の長身美男子のエドガーがいた。

「それはいいですわね。もし出てきたらいい機会ですわ。旧ベルカの最強覇者は聖王でも霸王でもなく『雷帝』ダールグリユン。その現実を雷帝の血を（ほんの少しだけ）引くこのわたくし！ヴィクトーリア・ダールグリユンが叩き込んでさしあげますわ！」

ヴィクトーリア・ダールグリユン（17）

Style：雷帝式

skill：神雷

Magic：ダールグリユン

インターミドル参加履歴：5回

最高戦績 都市本戦準決勝（3位）

「今年も知らしめられるといいですねえ。去年は決勝前に負けられましたし一昨年は聖王の血を引く方に負けられましたから」

「いいですからエドガー。さっさと参加申請書を出してきなさい。あとお茶を早く」

「かしこまりました。……ああ、そういうえば。今年からユタさんが現役復帰するようですよ。ジークさんにも会いたいののでまずはお嬢様とコンタクトを取りたいとメールが来ておりました」

「……そうですね。わかりましたわ。いつでもいらしてと返信しておいて」

「かしこまりました」

とある荒野ではひたすらランニングをしている少女がいた。

炎天下の中フードをかぶって。まるで注目されるのが嫌かのように。

しかし、ずっと同じペースで走っている。

ジークリンデ・エレミア (16)

Style : 総合魔導戦技

skill : 鉄腕

Magic : エレミアン・クラッツ

インターミドル参加履歴 3回

最高戦績 世界代表戦 優勝

「ユタ：またやりたいけど…合わせる顔もないのにまだやりたいと思っ
てまう…」

くクラナガンく

森の近くではヴィヴィオとノーヴェが軽く練習をしていた。

「まずは予選突破。目標は都市本戦！」

「おうよ」

「頑張つて鍛えるよー！」

高町ヴィヴィオ (10)

Style : ストライクアーツ

skill : カウンターヒッター

Magic : ベルカ&ミッドハイブリッド

デバイス セイクリッド・ハート (ハイブリッド—intelligent)

コロナ・ティミル (10)

Style : ゴレム創成
skill : ゴレム操作
Magic : ミッドチルダ
デバイス ブランゼル (intelligent)
リオ・ウエズリー (10)
Style : 春光拳+ストライクアーツ
skill : 炎雷変換
Magic : 近代ベルカ
デバイス ソルフエージュ (intelligent)
ルーテシア・アルピーノ (14)
Style : 純魔法戦
skill : 召喚・治癒
Magic : ミッド&ベルカハイブリッド
デバイス アスクレピオス (Boost)
インハルト・ストラトス (12)
Style : 霸王流
skill : 断空
Magic : 真正^{エンシ}古代^{エント}ベルカ
デバイス ???

「さてはて、今年こそ目指せ都市本戦及び世界大会優勝、だあね」
『先を見据えるのも良いですが小さな獅子に足元を掬われないよう』
「わかってるって」

八神ユタ (12)
St. ヒルデ魔法学院中等科1年生
style ストライクアーツ&魔法 : 超カウンター型+影使い
skill 影変換
magic ベルカ&ミッドハイブリッド
device 傲慢^{プラ}の欲^{イド} (intelligent)

インターミドル参加履歴1回
最高戦績 都市本戦決勝(2位入賞)

合宿三日目 昼食時

「ルーさん。セツティングってもう済んでる?」

「もちろん。公式試合とそっくり同じものを作ったわよ。ダメーシ
フィードバックやクラッシュエミュレートなんかもね」

「今回のアインハルトのデバイスなしの部分を補う所は?」

「もちろんやってるわよ」

「ありがたい」

と、今は景色のいい草原でピクニック的な昼食を取っていた。

主にノーヴェさんとルーさんと初等科3人と。もちろんアインハ
ルトもいる。

「セコンドはアインハルトにはノーヴェさん達?」

「うん、そうだよ。それとユタは本当にセコンドはいらないの?」

「うんいらなしいし必要ない。それに……私のセコンドは母さんやシグ
ナム姉さんだけだから」

「おつ、今の発言は親思いのいい子の発言だねー。八神司令に報告し
なくちや♪」

「いや!ダメ!色々とまたいじられる!」

『マスターが恥らうとは……明日雹でも降るんですかね』

と、珍しくユタは顔を赤くしている。

(あ、最後に質問いいですか?)

(ん?何?)

(ユタさんってなんでそんなに頑張れたんですか?初出場で都市本戦
に出場、しかも2位まで勝ち上がれるなんて、生半可な特訓じゃ無理
だって私でもわかります。でもユタさんは成し遂げました。何がユ

夕さんの原動力になってたのか、知りたくて……)

(……なんでだろうね)

(あ、答えづらかったら答えなくて大丈夫ですよ！)

(いや、答えづらいとかじゃないんだけど……。元々強くなりたいてって思うようになったのは5歳くらいの頃からなんだよね。

私が……弱いせいで母さんやシグナム姉さん、あとは母さんと同じくらい大事な人を傷つけたから。

自分の弱さのせいで大事な人を……姉さんを死なせてしまったから……。裏路地と一緒に捨てられたあとも私を見捨てずにと守ってくれた人を……。

……あとは母さんが強くなっていく私を自分のことのように喜んでくれるのがとても嬉しいからかな。母さんが喜んでくれるから、私は過去のことがあっても辛くても頑張れる)

く 仮説試合場所 午後2時半く

試合場所には私とアインハルト。

私のストッパーとしてルーさんが着き、アインハルトにはノーヴェエさんが着いた。

観客は初等科トリオ含め他何人か。

大人組はみなさん練習に行かれましたよ。

『じゃあ、公式戦と同じでライフは15000。クラッシュエミュレートもあり。4ラウンド制』

「はい」「おっけー」

『それじゃ、両者共にセットアップを』

「セットアップ」

「武装」

の掛け声と同時にアインハルトは大人モードに。私はいつもの方

から先が露出している夏の少年みたいな感じに。

『マスター。今日はどういった試合運びを？』

『どうしましょうかねえ。ま、やりながら考えるよ。どうせ吸収放射と反射砲撃リフレットは使えないだろうからやり方は決まってくるだろうけど』

『承知しました。では決まり次第教えてください』

「あいあいさー」

『いくよー。レディーファイト!!』

試合が始まるとアインハルトはすぐに距離を詰める。

「断空拳！」

「あぶっ！？」

一発目からいきなり必殺クラスの拳を撃ち込んだ。

それをユタは想像していなかったのかギリギリ避けている。そしてすぐさま距離をとるがアインハルトはすぐさま肉薄し追撃をする。

「昨日の試合で確信した。ユタさんに影生成やゴーレム創成の隙を与えたら主導権を握られる。なら！やられる前にやる！」

「（ん、まあ予想通りつちや予想通り。初手に断空拳は予想外だったけど。そんじゃあ仕込みいきますか）」

ユタは近づかれたら影で反撃し、できない部分はカウンターはせずを受け流し、執拗にアインハルトから距離を取ろうとする。が、それをアインハルトは許さずこちらもまた執拗に密着戦を試みようとしている。

この中でノーヴェだけがユタの逃げ方が少し異質なことに気づいていた。

「（ユタのやつ、リング全体を通してように逃げてんな。影を多用してるから気付きにくいけど、床一面に魔力散布してる）」

「空破断！」

「つとお！せやつー！」

「！」

と、ユタは攻撃をかわしアインハルトに足払いをし、地面にひれ伏せさせる。

「影の拘束」
シャドウバインド

すると、そのアインハルトの周りから影が出てきてアインハルトをがんにがらめにバインドをする。

「捕獲完了。この隙に……」

「ぐっ……（ただの影だと思ってたけどかなり強いバインド……でも……これくらいなら……！）」

と、ユタはまだ通っていない部分を通りながら距離を最大限引き離す。そして腕の硬化魔法の準備をし始める。

「っ……断空拳！」

「あら。そんな抜け方されるのは初めてだ」

アインハルトはユタを自由にさせるのはまずいと思ったのか強行策として床に無理やり断空拳を撃ち込み床を壊した。そして床に貼り付けるようにしていたバインドから抜け出してユタに迫っている。それに対しユタは逃げようとせずその場に立つ。

そして……

「はあっ！」

「うおりゃー！」

ユタとアインハルトは互いに拳が顔に入り、互いに後ずさる。

「え……？」

「痛つたい。ふふっ。さすがにこれは予想してなかったかな？」

アインハルトはユタが避けたり受け流したりすることなく拳を受けたことに戸惑いを隠せていなかった。

「やっぱりダメか。アインハルトくらい頑丈な人だとただのカウンターは意味ないね」

【ライフ】

アインハルト 15000 ⇨ 14000

ユタ

15000 ⇨ 12500

「やることはやったし……ここからは接近戦だ。アインハルト。八神流格闘術を君に魅せつけてあげるよ」

「……………望むところです!!」

インターバル1回目

「ゲホツ…少し調子に乗りすぎた……」

『やはり硬化魔法を用いたとしてもハードヒッター相手に近接格闘戦はやはり分が悪いようですね。今後は余程のことがない限り禁止です』

「そうする」

『ライフ回復するので息でも整えておいてください』

「うん」

『それで、終わりました?』

「終わったよ。次からは……アインハルトには悪いけど格闘戦は終わりにさせてもらおう」

インターバル回復

ユタ 5000↓10000 クラッシュエミュレート 全回復

アインハルト 8500↓13000 クラッシュエミュレート

全回復

『それじゃあ第二ラウンド、開始!』

アインハルトは1ラウンド目と同じようにユタに主導権を握らせないと思ったのか開始直後にユタに突撃する。

しかし…

「悪いけど、もうアインハルトの得意部門に付き合うのは終わりだよ。
シャドウ・リッパ
影 斬」

「っ!?」

すると、突撃していたアインハルトの足元から影が飛び出してきてアインハルトを襲った。

ライフ

アインハルト 13000 ⇨ 12000

クラッシュエミューレート 腕部及び腹部、脚部多数裂傷

アインハルトは直ぐに切り替え、再度ユタに向かって行く。が…

「まだまだ」

「くっ!」

数歩近づいた瞬間に、また足元から影が出てアインハルトを斬りつける。

その間にフィールドの全体から影による触手のようなものが出る。

「っ!それなら…」

アインハルトは逃げ場はないと悟ったのか向かってくる影を必要最小限だけ迎え撃ちながらユタに強引に近づきに行く。

「(近距離に持ち込めれば…!)」

「うん正解だね。だけど…」

するとユタは自分の近くから影を伸ばしアインハルトに勢いよく飛ばす。

それを避けられはするが何度も追尾をする。だが周りは影を至る所に配置されていて直ぐに捕まえる。

「捕まえた」

「ぐっ……しかしこの程度…」

バインドに似たもをかける。

しかし、それを無理やり引きちぎろうとしているが…

「そーっ!れっ!!」

「えっ?がっ!?」

ユタが自分からアインハルトを引っ張ろうとしているとも簡単にち

ぎれた。

が、ちぎれた瞬間アインハルトが爆発に巻き込まれる。

「まだまだ」

そして、倒れ込まれる前に再度影で捕らえコロナの時のように自分に向かって投げつける。

アインハルトは空中でなんとか体制を立て直そうとしているが

「遅いよー。せやっー!」

「っっ!」

疑似カウンターのようなものを受けアインハルトはリング外に激突した。

『リングアウトダウン』

ライフ

アインハルト 12000 → 5800

クラッシュエミューレート 腕部熱傷

左腕 肋骨1番2番 骨折

『カウント 10 9 8……』

く観客席く

「ユタさん……すごい……1ラウンド目のが嘘みたい……」

「あのアインハルトさんに圧倒してる……」

「やっぱり……ユタさんはすごい!」

観客席ではヴィヴィオ達3人が観戦しているが、3人とも驚いていた。

陸戦試合で戦ったりオとコロナもユタの影の使い方などに驚いていた。

「あ、でもユタさん結構辛そう?」

「本当だ、でもなんで?ダメージあまり受けてないのに」

「(正念場だな。ユタの変化に気づけるほど冷静か……)」

「(やっぱりあの影って相当魔力を消費するのね。いつ魔力切れしてもおかしくなさそう)」

『4……3……2……』

『マスター、魔力使いすぎです。もう少し考えてください』

「はあっ…はあっ、りよ、りよーかい。このまま終わってくれると楽なんだけど」

「……っ！まだやれますー！」

「……そうこなくっちゃー！」

アインハルトがリングに上がってきて再度構える。
それを見てユタも構える。

『マスター、影の使用は少しお控えください。でないと硬化魔法まで解けてしまいます』

「(オツケー消費抑えて戦ってみる)」

『レディーゴー！』

「(あの影から逃げ切るのはほぼ無理。なら強引に接近戦に持ち込む！)」

「(多分もう地面からの影だと決定打は無理そうだし、必要な分だけ残して魔力の回収をしながら……接近戦でケリをつけようかな)」

開始と同時にアインハルトはユタに接近する。ユタは影を駆使しながら再度リング全体をくまなく通るように逃げる。

「(多分そろそろネタに気づきそうだし3ラウンドに持ち込まれたら厄介だな……)」

「……？(影を使って反撃してこない？何かを狙ってる？けど、これは好機！)」

アインハルトは好機と見たのか一気に加速しユタに近づく。

そして、ユタの足元めがけて拳を打ち込み床を壊す。

「っ！あぶな……」

「逃がしません！空破断！」

そして、足が止まった隙を見逃さずユタに殴り込む。

ユタはギリギリのところまでガードしていたが威力を殺しきれておらずそのまま地面に叩きつけられる。

『ダウン 10 9 8 ……』

ライフ

ユタ 12000 ⇨ 10000

クラッシュエミュレート 背中強度打撲

「ゲホッ、まだやれます！」

「……」

『クラッシュエミュレートは治しませんがよろしいですか？』

「ん、o k o k。最後の仕込みもできたから大丈夫かな。けど万が一のために魔力は残しといてね」

『承知しました』

『ファイト！』

「ふう。にしても初見なはずの『影』にこうも喰らいついてくるなんて。やっぱりすごいねアインハルトは」

「ありがとうございます。この試合にも勝ってみせます！」

「うーん、それはもう無理だね。もう仕掛けは終わったから」

「え…？」

「アインハルトは勝つなら1ラウンド目です私を動き回らせずに無理矢理にでも動きを封じるべきだった。私が動き回ってた理由は…」

と、ユタが床を見る。

するとアインハルトも気づきユタに向かって飛び出す。

「遅いっ！」

「ぐっ！」

床が突如せり上がりアインハルトを思いつきり突き飛ばす。

「まだまだ！」

「きやつ!?？」

今度はユタの足元から影が伸びていき上空に飛ばされていたアインハルトをつかむ。そしてそのまま床めがけて投げつける。

ライフ

アインハルト 5800 ⇨ 3000

「影シャドウバインドの拘束ダブル」

と、最初にかけたバインドの二倍の量をアインハルトにかける。

中でも影を細くし両腕両足の関節を中心に縛られ、その上から地面に貼り付けるようにバインドをされた。

アインハルトは文字通り一本動かせないでいた。

『バインディングダウン 10……9……』

「はあ はあ」

「ぐ……これしき……」

「あー、無駄だよ。これ、ちよつとやそつとの力じゃ外れないよ。特に今のアインハルトには絶対無理」

『3……2……』

「ゲホッ。お疲れさん。アインハルト」

「……！」

アインハルトは最後の力を使って振り切ろうとしているが動く気配すらない。

『1……0！ 勝者 八神ユタ！』

14話 く合宿の終わりく

「体全身が痛い……」

『物は試しとは言いますが、アインハルトさんと殴り合うところなるのは明白でしょうに。自分の体の体質のことお忘れで?』

私は試合が終わって部屋でベットに倒れこんでる。

1ラウンド目でアインハルトと殴り合ったのが効いてきているのか全身、特に腕が痛い。

『治療促進をかけるので力を抜いて楽にしてください』

「了解…。腕の硬化してても衝撃が消えるわけじゃないのがなあ。改良の余地たくさんありそうだけど…」

『ま、改良した代わりに魔力をまたごっそりを使うようになって更に使い勝手悪くなりそうですね』

「だよねえ…。ただでさえ影の方に魔力を回してるのに」

コンコン

? 誰だろ

「どーぞ」

「はぁーい。ユタ。大丈夫?」

「失礼しまーす」

「お、お邪魔します」

「お邪魔しまーす!」

入ってきたのはルーさんとヴィヴィオちゃん、コロナちゃん、リオちゃんだった。

「あれ?アインハルトは?」

「アインハルトは別室で休憩中。で、ノーヴェさんとお話中」

「そう」

『そういえばみなさん。マスターはいまほとんど動けないのでいままで振り回された分やり返せるチャンスですよ』

は?いま何て言ったこの愛機。

しかもルーさんとリオちゃんが目を光らせてるのは気のせいかな？ ヴィヴィオちゃんとコロナちゃんは慌ててるけど。

「ふふーん。それじゃあ」

「遠慮なく！」

「へ？ 嫌、やめ……」

そして、その後ユタの悲鳴が響き渡ることとなる。

くある一室く

ユタとはまた別のところでノーヴェとアインハルトが話をしていた。

「どーだった？ ユタとやってみて」

「はい……改めて思いました。私の見ていた世界は……本当に、本当に狭かったものだ」と

「そうか。それならよかった」

「ノーヴェさん」

「ん？」

「改めて、インターミドルに向けてご指導お願いします！」

「おう。しっかり鍛えて行こうぜ」

「で、何か御用で？」

「色々聞きたいことがあってね。特にその『影』について」

「というと？」

「間近でちゃんと見せて！」

特に何かを聞かれるというか、単に見せてくれと言うお願いだった。

「まあそれくらいなら構いませんよ」

別に隠すようなものでも無いし、直に見られたからと言って何が変

わるわけでも無いし。

うん、影を実体化させた途端みんな急に後退りするのやめようか？

「普通こんなの間近で見せられたら怖いわよ!?」

「そう?」

かっこよく無い?影が大量の目と牙を持つてるの。

これを初めて見た時もう、感動したものだよ。

「ユタ、この影ってどこまでできるの?」

「さあ?試したことがないですね。やろうと思えば鈍器にでもできるとは思いますが」

実際試したことないからわからない。

「ま、割となんでもできるって思ってくれたら良いですよ。その分魔力消費が半端ないですけど」

「やっぱり?」

「ええ。って言うか気づいてたんですか?」

「当たり前じゃないの。私を誰だと思ってるのよ」

その後も魔法戦技について夜遅くまで話したり試合動画を見たりしました。いやあ、やっぱり楽しいねえ、なんてことを思ったりしました。

そんなこんなで四日間の日程も無事終了し私達はミッドチルダへ帰る時間に。

「じゃあみんな」「ご滞在ありがとうございました♪」

「こちらこそ」「ありがとうございますー!!」「」

くミッドチルダ 首都次元港く

「ミッドチルダ到着ー♪」

「車回してくるから少し待っててね」

「「はーるー」」」

あとのはなのはさんに家まで送ってもらえばゆつくり休める。

アインハルトと殴り合ったやつがいまだに響いてるからあんまり無理はしたらダメだとノーヴェェさんに念押しされたので大人しく送ってもらうことにしました。

「でも、みんな明日からまた忙しくなるねえ」

「インターミドルに向けてはっちり練習しなくちゃ」

「はいっ！でも大丈夫です！」

「うちのコーチがトレーニングメニュー作ってくれますから！」

おお、ヴィヴィオちゃんにコロナちゃん。威勢がいいね。

「ま、しっかり鍛えていこうぜ。そういやユタはどうすんだ？」

「私は練習に来る頻度は減ると思います。これからがっつりとシグナム姉さんや母さんとの練習も増えるでしょうし」

「そうか。まあ来れるときだけこい。チビ達も喜ぶから」

「そうさせてもらいます」

ここで今更ながらコロナちゃんが緊張してることに気づいた。何かそんなに緊張するようなこと……

『マスター、練習に付き合う際に条件を付けたってことお忘れで？』

「あー、そういえば」

(条件がある)

(条件…?)

(うん、とは言ってもそんなに難しくはないよ。

私と練習する事をちゃんとコーチ……ノーヴェェさんに言うこと。それが条件)

(え!?!な、なんでですか?)

(なんだって……それが師弟の関係みたいなものでしょ。ちゃんと、正式な師匠以外から教わるってことを師匠が把握しておかないと。確かに秘密の特訓をして師匠を驚かせたいって言う気持ちはわからなくはない。けどそれとこれは話が別。それができないならこの話はなし)

(で、でも…)

(強くなりたくて私に頼むつてのはわかる。けど、ノーヴェさんもノーヴェさんでしつかりとコロナちゃんと向き合ってる。

それに……言っちゃ悪いけど今までのコロナちゃんの言い方だとノーヴェ師匠のことを信用してないっていう風にとれる)

(そんなこと……そんなことないです！ノーヴェさんは信用しています！)

(なら、言えるよね？コーチのことを信用してるなら、ちゃんと頼めば受け入れてくれる。大丈夫。私もそのときはちゃんと援護してあげる)

うん、ごめんなさい。かんっぜんに忘れてました。そいやそんなこと言いましたね。

「コロナちゃん、ほら」

「は、はい…」

と、コロナちゃんが緊張しながらノーヴェさんのもとに行く。

さてはてどうなることやら。

「ん？どうしたコロナ」

「の、ノーヴェさん。実は私、ユタさんとも個人的に特訓をしてもらいたいと思ってるんです」

「……それはどうしてだ？あたしに不満でもあったか？あったなら言ってくれ」

うわー、ノーヴェさんの顔が超が付くほど不安な顔になってる。

そりやそうだよな。自分の知らないところで他の人にも教えてもらうとなったら誰でもこう考える。

「いえ、違うんです！ストライクアーツやゴーレム操作なんかじゃない、ユタさんと模擬戦を徹底的にやる事にしたんです！その過程で何かあったら教えてもらったら、って考えてて……。なのでノーヴェさんに不満があるとかじゃないです！決して！」

「ノーヴェさん、私が初めてコロナちゃんたちと会ったときに私たちが試合してたの覚えてます？」

「あ、ああ」

「その時に1発当てることができたならなんでも一つお願いを聞くと約束してたんですけどね、そのお願いがこれです」

「しかし…」

「ご心配なく。あくまでノーヴェさんが教えることを軸にして教えていくつもりです。というか、ストライクアーツとかゴースト操作の応用なんかは私が教えられる範疇を超えています。なので私はあくまでも、できる限り実践に近い形で相手をすることに留める予定です」

「ならいいんだが…」

と、チラツとヴィヴィオちゃんやりオちゃんの方を見る。

ああ、不公平なんじゃないかっていうのも心配してるのね。

「それと私をヴィヴィオちゃんやコロナちゃんのスパーリングの相手として使いたいときは、シグナムさん達との練習がない日ならいつでも呼んでください。それくらいなら相手になれます。…ヴィヴィオちゃんたちもそれでいい？」

「はいっ！」「大丈夫です！」

「…ならあたしはもう何も言わねーよ。その代わりに、しっかりと相手してやってくれ」

「もちろんです」

『何かあったときは私が通報しておきますのでその点はご安心を』

おい、何かをやる前触れみたいに言うんじゃない

「（インターミドルねえ。ヴィヴィオちゃんたちにとっては初めての『決定的な敗北』を知る場になりそうだねえ）』

『（マスターも順調でしたが最後の最後にそれを叩き込まれましたもんね）』

「（それ言わないお約束でしょう）」

うーん、未だに2年前のことを思い出すと頭が痛くなる。

「インターミドルってかなり沢山の子が会場するんでしょ？予選会とかあるんだっけ？」

「あ、ええと……確か地区選考会というのがあって」

「そーです！選考会では健康チェックと体力テスト、あとは簡単なスパーリング実技があつて」

「選考会の結果で予選の組み合わせが決まるんです」

「普通の人は『ノービスクラス』。選考会で優秀だったり過去に入賞歴があつたりするひとは『エリートクラス』から地区予選がスタートします」

「勝ち抜き戦で地区代表が決まるまで戦い続けてーそうしてミッドチルダ中央17区から20人の代表と前回の都市本戦優勝者が集まってー」

「その21人でいよいよ夢の舞台」

「『都市本戦です！』」

「ここでミッドチルダ中央部のナンバーワンが決まるんですよ」

「テレビ中継も入ります！」

ティアナさんが聞いたことに初等科トリオのみんながすごい生き生きと答えた。元気でいいことだ。

「まあ、さすがに私たちのレベルだと…」

「本戦入賞とかは夢のまた夢なので」

『都市本戦出場』を最高目標にしてるんですけど」

あれ？一気に落ち込んだね。

ま、私も都市本戦優勝がひとまずの目標だけでも。

「その…都市本戦で優勝したら終わりですか？」

あれ？アインハルト知らないの？夏の風物詩とまで言われるほどかなり有名な大会なのに。

「もちろんその上もありますよ。『都市選抜』で世界代表を決めて、選抜優勝者同士で『世界代表戦』です。ミッドだと選抜メンバーは3人ですね。ユタさんも一昨年ので本当は都市選抜に選ばれてたはずなんです…」

「ま、私は怪我しちゃったからねえ」

「そこまで行って優勝できたら…文句なしに【次元世界最強の10代女子】だね」

まあ、正直そんなのはまだ夢のまた夢なんだけど。

もちろんいつかなってなろうとは思ってます。

「ノーヴェさん、ユタさん。率直な感想を伺いたいんですが。今の私たちはどこまでいけると思われますか？」

アインハルトに聞かれ思わずノーヴェさんと目を合わせる。

「ノーヴェさんからどうぞ」

「ああ。もともとミッド中央は激戦区なんだ。D S A A ルールの選手として能力以上に先鋭化してる奴も多い。ユタと戦ったアインハルトやコロナ達もそれは身に染みてわかっていると思う。その上での話として聞けよ。」

ヴィヴィオたち3人は地区予選前半まで。ノービスクラスならまだしも、エリートクラスじゃまず手も足も出ない。

アインハルトはいいとこ地区予選の真ん中あたりまで。エリートクラスで勝ち抜くのは難しいだろうな。そうじゃ次はユタ」

「はい、えーと。あんまり評価としては変わらないんですけども。いまのアインハルトたちの実力からして、アインハルトは運が良ければ予選の準々決勝あたりにギリギリ届くかな、つてくらいかな。それこそミッドチルダって格闘戦なんか一切やらない選手もいるし格闘技者対策をこれでもかかってくらいしてる選手もいるから。」

ヴィヴィオちゃんたちは悪いけどノーヴェさんとほとんど同じ。エリートクラスだとボコボコにされるだろうね。現段階なら、ね」

最近、真面目なことばかりな気がする。こんなの私じゃない。

まあ今はどうでもいいか。

「……でも！まだ2ヶ月あるよね！？その間全力で鍛えたら？」

「ま、どうなるかはわからねーな」

「右に同じく」

「あたしも勝つための練習を用意する。頑張つてあたしとユタの予想なんかひっくり返してみせろ」

「「はいっー」」

まあ脅しはしたけどこの子達の成長具合からすると普通にエリートクラスで戦えるくらいには成長すると思います。

アインハルトもくじ運よければ予選突破も夢じゃないくらいには
なると思うよ、うん。

だって私が行けてるんだから。

そこからみんなの練習内容を（対策立てれないかなーと言う邪な考
えがないわけじゃない）聞いていた。みんながんばえーと思いつつ。

「ーで、あとユター！」

「はいっ!？」

びつくりしたあ。急に呼ばれるとは思ってなかった。

ん?てか私にも用意してくれたの？

「アインハルトの試合をみてて私が思ったこと…お前はテクニクは
あるが魔力が足りてない。だから…:…これかとある特訓をしても
いたいんだが…」

「私はいいですけど…一応シグナム姉さんや母さんに許可を取って
もらえると」

「それなら昨日のうちにとってある」

「なら、大丈夫です。ありがとうございます」

まあ後にこれが地獄になるとは予想してなかったんだけどね。

15話 師弟の関係

〜二週間後〜

『マスター。生きてます?』

「ま、まだ辛うじて…」

辛い。予想以上に辛い。

ミッドに帰ってきてきて次の日にノーヴェさんにリストバンド4つ送られてきたんだが…これを付けるとあら不思議。

めっちゃ体重くなり魔法も使いにくくなりました。

正確には魔力の運用がしにくくなった。

なんでも魔力負荷をかけるリストバンドとか。

出力マックスで四個つけろとのこと。

それで本気のスパーや寝るとき以外はつけたらと言われてその通りにしてるが…

「これでシグナム姉さんの練習を普段通りのノルマをこなさないといけないんだから余計辛い…」

『一応、治癒促進の魔法はかけてますが…疲れてるのは魔法の無理な酷使のせいなので。あまり効き目がないんですよ。なので今まで以上にしつかりと休んでください』

「はい」

さて、授業も終わってるし…さつさと家に帰りましようかね。

シグナム姉さんとの特訓かあ、さてはて生きて明日を迎えられるかなあ。

〜八神家〜

「ふう…なんだかんだこの体の重さにも慣れてきたかな?」

『きつしよいですね』

「おお、ど直球な罵倒」

『たった1日で慣れるマスターへは妥当かと』

いや、半日も付けければ慣れるでしょうが。

それと魔力の運用方法を少し変えたからかもね。

「ただーいまー」

「お帰り」

家に入ると聞こえてくる声の一つ。

「ただいまシグナム姉さん、少し休憩したら特訓お願い〜」

「それなんだがなミウラも来ることになったから少しだけ予定を遅らせるつもりだ。風呂にでも入って汗を流してこい。どうせリストバンドをつけた状態でランニングしながら帰ってきたんだろう?」

「ピンポンピンポン。大正解です。それで体が慣れてきたって言ったらプライドからドストレートにきつしよって言われたけど」

『当たり前でしょうが。私はマスターよりも人並みな感性を持っていますから』

「私の感性が狂ってるみたいな言い方やめてくださいませんかプライドさん」

『遠慮します』

「なんでよ!??!」

プライドとある意味いつも通りの口論をしていると不意に笑い声が聞こえた。声の主はと言うとまさかのシグナム姉さんだった。

「ふふっ。相変わらず仲がいいな」

「どこが!??!」『何処がでしょう?』

「そういうところさ。ほら、早く入ってこい」

「はーい」

シグナム姉さんの座っていた机にプライドを置いて自分の部屋に授業道具を放り込みお風呂へ突撃した。

『ん?シグナムさん。このいかにもプレゼントです的な二つの箱はどうされました?』

「今答えを言っているじゃないか。プレゼントだよ」

『ふむ?今日は何か特別な日でしたでしょうか?』

「特にそういう訳ではないな」

プライドめ、わかっているながら聞いているな？

見た目の禍々しさからは想像もつかないようなおちやらけた声でユタが気づかなかった二つの箱について執拗に聞いてくる。

「察しの通りだよ。これはユタの復帰祝いだ。満足か？」

『いえいえ。そんな我がマスターの師をおちよくって満足するなんてそんな。マスターは愛されてるなあ。シグナムさんもマスターのこ
と大好きなんだなあ、としみじみ思っておりますが』

「今直ぐ叩き切ろうか」

『ほんっとマジですいませんでしたおやめくださいシグナム様』

「ふっ、冗談だ」

『冗談に聞こえませんでしたよ』

本気で言ったのだから当たり前だろう、とは言わずにプライドの文句を右から左に流す。そこでふと思いついた事をプライドに伝える。

「そういえばプライド。『雷帝』殿が来ていたぞ」

『ヴィクトーリア様が？それはまたなぜ』

「さあな。ユタにも伝えておいてくれ。雷帝殿の自宅に時間がある時に来てくれと言っていたと」

『畏まりました。そういえば今年のインターミドルのセコンドはどうされるので？聞いたところによるとミウラさんも出られるのですよね？』

「ザフィーラ、ヴィータ、シャマルがミウラにつくことになっている。仕事の都合で3人揃わない時もあるだろうが、問題ないだろう。ユタには主はやてと私がつくさ」

ああ、そうだ。2年前のような過ちは決して犯さない。

次こそはユタの家族としての役目を全うする。

『……シグナムさん。いえ、シグナム様』

「ん？」

『もしかしてですが、2年前のことをお考えになられてませんでしたか？』

「……！」

プライドに心境を言い当てられ、思わず息を呑んでしまう。顔にでも出ていたのだろうか。

『アレに関しては誰も悪くありません。強いていうのなら予測出来ないかったマスターが悪い、ですけども。そもそもあんな土壇場を出してくる技があのような事態を引き起こすなど、誰も想像できませんし予測出来ません。何故ならばあの場合は『ルールに守られた場所』なのですから。そのルールを意図的ではないとはいえ貫通してくるなど考え付くわけがありません』

「だが、それでも止める判断は下せた。現にヴィータは止めようとしていた。だが私がそれを制した。その結果がああ惨事を引き起こしたと言っても過言じゃない。

もちろん決勝の相手の様子がおかしくなったのはわかっていた。しかし、それでもタカを括っていたんだ私は。

「私たちが育ててきたユタならばきつと大丈夫だ、と」

『ですがそんな幻想はすぐさま打ち砕かれた、と』

「こういう時に何の遠慮もなしに言ってくるプライドの性格には少しばかり助けられるな、何て思いながら再度口を開く。

『彼女』のセコンドについていたご友人がいなければユタは最悪の結末を迎えていた可能性だつてあっただろうな。

「本当ならユタに師匠と思われることすら烏滸がましいとさえ思うよ。」

「愛弟子の危険を察知できないで何が師匠か」

『……そう、ですか。しかし、一つだけ言わせてください』
「?」

『マスターはシグナム様をずっと信用しておられます。あの時も、療養中の時も、……もちろん、今も。あなたはマスターにとって家族以上に憧れ存在そんじゆうなのです。アナタはそれだけマスターへ影響を齎そした。もちろん良い意味で。それだけは努お忘れなきよう』

「……ああ。わかっているさ。だからこそその戒めさ。つと、ユタのやつ相変わらずの早風呂だな」

『全くです。一応生物学上は女の子なんですから、もう少ししっかりと

と入ればいいものを』

「プライド、わかっていると思うが先の話は」

『ええ。他言無用ですね。この借りはまた後日マスターの秘蔵ファイルとやらを見せていただくことで帳消しとさせていただきましょう』
「はは。そうだな。とっておきを見せてやる。にしてもプライドは相変わらず感情豊かだな。本当にデバイスなのか、中に人が入ってるんじゃないかと疑いたくなる」

『何処ぞのお人好しな大家族の方々になんかそういうふうになられたのでね』

「そうだったな」

風呂の方からバタバタと物音がして私もプライドも暗黙の了解とばかりに話題を切り替える。別に聞かれてまずい訳ではないが、復帰に意気込んでいるユタに聞かせるべきではない。

それと同時に呼び鈴が鳴りミウラが来たのがわかった。

「それじゃあ私はミウラを迎えに行ってくる。プライドはユタにストレッチを十分して砂浜へ来いと伝えておいてくれ」

『承知しました』

「あり？ シグナム姉さんは？」

『ミウラさんをお迎えに行きました。適度に体を慣らした後砂浜へ行くように、と言伝を預かっております』

「はーい。……死にたくないから念入りにやつとこう」

『どうせ吐くまでやるんですから乙女として死ぬのは変わらないでしょうに』

「どっちにしろ死ぬのは確定なのやめよう？」

その後、結局吐いた。

そろそろお嫁に行けないかもしれない

ミウラにはめちやくちや優しくしてたのに。解せぬ。

次の日

ミッドチルダ南部 抜刀術天瞳流 第4道場

「……ノーヴェさん。なんでミカヤさんとのスパarringを組めたの……?」

『人脈広いですねえ』

「え、そんなに凄い方なんですか?」

「うん、居合抜刀の師範代をやってるし。ミッドチルダじゃミカヤさんくらいの居合剣士はそうそういないと思う」

私とアインハルトは今ミカヤさんの道場に来ていた。

母さん達がみんなな仕事だったため予定が空いているのでOKして来てみるとまさかのミカヤさんのところ。先にも言った通り居合抜刀の師範代でめつつちや強い。戦ったことはないけど研究だけはしてたからよく知ってる。

「……時にアインハルト」

「何でしょうか?」

「その肩の猫は?」

「テイオです」

「愛猫?」

「私のデバイスです」

「…デバイス」

「デバイスです」

「母さんたちお茶目がすぎない?」

「ですが機能は折り紙付きです」

『お茶目に関してはマスターもあまり人のこと言えないでしょう』
「それもそうか」

こんなのがいいって画像見せたらノッリノリでプライド作ってくれたから感謝しかないけど。まさかの猫とは。

「ま、待たせちゃ悪いし早く入ろうか」

「はい。そうですね」

「失礼しまー」

「天瞳流抜刀居合。水月」

「へ？」「ユタさん！前隠してください！」

は？え？待て待て。今どうなったの？

恐る恐る下を見下ろしてみると……

綺麗に服だけ切られて色々と丸見えだった。

「ぎゃあああ！なにするんですか！」

「いやいや。ナカジマちゃんにユタには初対面で恐ろしさを伝えておけと言われていたのでね」

「ノーヴェエサンツツ!? 私何かしましたか!?」

『色々としておりますね』

解せぬ。

「はあ…まさかこんなところに来て服を剥がれるとは…」

「あつはつは」

「…何か言うことは無いんですか？ミカヤさん」

「……………。眼福、だったねえ？」

「なぜ疑問形!?!」

「あのー練習をしたいのですが」

と、私とミカヤさんとのショートコントみたいなものはアインハルトの一言で終わりを告げた。

「おお、すまないね。では、改めてユタちゃん。アインハルト。練習相手にご指名頂いて光栄に思うよ。ただ私も出場選手だからね。あまり手加減はしてあげられないよ」

「構いません。コーチからは【斬撃の怖さを体感してこい】と言われて
います」

「私はミカヤさんみたいな剣士タイプと近距離での対策をするために来ましたー」

「ふむ。ナカジマちゃんから聞いた話ではアインハルトは格闘型ストライカーでおかつバリバリの接近戦型インファighter。徒手格闘型ピュアストライカーにとつての斬撃の危険性と、素手と武器。この間合差がもつ危険性を感じてもらおうかな。その代わり私はきみのような接近戦型対策を。まあ言ってしまうえばインファighter接近戦型に何もさせずに斬り落とす鍛錬をしたいと思つてたんだ。利害が一致したわけだね」

「その通りです」

「で、ユタちゃんは……近距離に接近された時の対策を。そのかわり、私は魔法に対する対策を、ということかな？」

「その通り。大正解です」

「それじゃあ、時間もあまり無いし始めようか。アインハルトからだね」

「よろしくお願いします。お役に立てるよう頑張ります」

「怖いな、瞳がそうは言つてないぞ。殴り倒す気満々じゃ無いか」

「お見せしますー覇王流の斬撃対策。行きますよ。テイオ」『にやつ！』

16話 過去の精算

とある日

「あ、母さん。今日はヴィクターさんの家に行くから帰り遅くなるー」
「わかった。了解やで。しつかり話して来いや？」

「うん」

今日はオフの日なので、少し遅くはなったけど雷帝ことヴィクトリアさん、略してヴィクターさんのところへ行くことにした。

「プライド、ヴィクターさんに連絡しておいてもらって良い？」

『畏まりました。それにしてもマスター』

「ん？」

『ピンクの髪留めと黄色いリストバンドは…』

「え？何か変？」

『いえ、大変お似合いかと』

「ん、ありがとう」

唐突にプライドが誉めてくるなんて何かあるんじゃないかなろうか、とか思ったけど誉められたのは純粋に嬉しかったので軽く流す。

うん、後できっととんでもないこと言ってくるヤツだ間違いない。

『お望みならそうしましょうか？』

「やめて」

心の内を読んでくるプライドはいつものことなので聞き流しながら体を充分に慣らし、プライドの合図で私は走り出した。

「ハッハッ…とうちゃーく。にしても相変わらずデツカ…」

『さすがはお嬢様、ですね』

ヴィクトリア家へ無事到着。さてさて、ヴィクターさん達いるかな。とか思ってたんだけど家を前にした瞬間に謎の緊張感が出てきた。

「……」

『逃げたらどうなるかお分かりですよ？』

「うぐっ…わ、わかってるって」

プライドに逃げ道を絶たれ、意を決して呼び鈴を鳴らす。
しばらく経って出てきたのは執事服を着た若い男の人。確か…エドガーさん、だっけ。

「ようこそお越しくございましたユタ様にプライド様」

「お久しぶりです。エドガーさん。去年は色々とお世話になりました」

「いえいえ。お嬢様のご要望でもありましたからお気になさらず。応接室へご案内しますね」

「はい」

そうして通された応接室は、本当に応接室なのかと疑うくらいに広い

私の部屋の倍はあるんじゃないかなろうか。

「広すぎて落ち着かない……」

『発情でもしてるんで?』

「してないわっ!」

くだらないと思いつつも体が勝手に反応して言い合いしているとドアが開いてそこから1人の女性が入ってきた。この家の持ち主、ヴィクトリア・ダールグリンさん。ヴィクターと呼ばせていただいている嘗て私がインターミドルで戦った上位選手の1人。

長い金髪に気品ある緑の瞳に、ロングスカート系を身につけているめちやくちや綺麗な人(そして巨乳)。古代ベルカの「雷帝ダールグリン」の血をほんの少しだけ受け継いでいる遠縁の子孫の貴族のお嬢様、だっけ?。その縁もあつてか仲良くさせてもらっていた。

「お久しぶりですヴィクターさん。まずは最初に。去年は本当に色々ありがとうございます」

と深々と頭を下げる。すると肩をもたれてゆつくりと優しく上げてくる。

「いいのよ。あれくらい。それには…私にはあれくらいのことしかできなかったのだから。プライドも久しぶり」

『ご無沙汰しています。ヴィクトリア様。私はもう疲れましたので

本日のツツコミ役は任せします』

「そんな役を任されても困るのだけれども……。……ジークの件よね？」

『はい』

名前が出て一瞬体が固まってしまいが、なんとか返事をする。

「少し待っててちょうだい」

そうしてヴィクターさんは部屋の外へ向かった。

「失礼します。ユタさん。お茶を入れて来ましたのでどうぞ」

「あ、ありがとうございます。エドガーさん」

「執事ですのでこれくらいは当然です。そんな畏まらずとも大丈夫ですよ」

途中でエドガーさんがお茶を淹れてくれたが緊張して味なんてあまりわからなかった。

何度も深呼吸していると扉の外からヴィクターさんの話し声が聞こえてきた。

(……ク！ユタがわざわざ……。てくれたのよ？はや……。行きます……)

(いやや！ユタには……。顔がない！)

(いいから……。)「来なさい！」

と、ヴィクターさんが連れて来てくれたのは……

メイドだった。何言ってるかわからないと思うが私もわからない。

「……ジークさん、とうとうそっち系の趣味に走りましたか…雑草生活だけでは飽き足らず……」

「なんか勘違いされとる!?？」

『趣味に関してはマスターも人のことは言えませんよね?』

「……プライド」

『はい?』

「カメラ起動して」

『サーイエッサー』

「ちよっ!??なんで写真を撮るん!??」

「なんか、面白いしレアだったので」

「ユタ……」

あれ？なんかヴィクターさんが震えてる。

「よし！いったれ！ヴィクター！」

「その写真あとでくださいな！」

「へ？ヴィ、ヴィクター？何を言っとるん？」

「いいですよヴィクターさん。いくらでも」

「やめえやー！！！」

『はあ……みなさん。当初の目的をお忘れで？』

「「あ」」

「……」

「まあ……こうなるのは……」

『ある意味想定通りです』

気まずい。ほんつとに気まずい。まともに顔を見れない、穴に入りたいとはこのことか。

だけどそうも言っていられないし……とかいって何から切り出せば……。

プライドをチラ見するも今回は口を出す気がないのかダンマリしている。自分でやれですねはい。わかってました。やれば良いんでしようやれば。

「えーと……改めてお久しぶりです。ジークリンデさん。一昨年は世界選手権優勝おめでとうございます」

「う、うん……ありがとうございます……」

そう、目の前にいるメイド……じゃなくて黒髪のロングのツインテール。ちよつとロリ要素が混じってそうな顔のこの人こそがジークリンデ・エレミア。

2年前の世界選手権優勝。その他数々の実績。疑いようもない名実共に10代次元世界最強。

そして……

私の右腕と左目を潰したのもこのジークリンデ・エレミアだ。

「……………」

やっぱり超気まずい。

私もジークさんも無言で目の前の机を見つめている。

だが、いつまでたっても話はできそうにない。

えーい、いつまでもこんなじゃダメだ。

「え、えーと。ジークさん。私、2年前のことで話をしにきました」

「やっぱりまだ怒つとるん……………」

と、ジークリンデさん改めジークさんは未開の地に放られた小動物のようにビクビクしながら聞いてくる。

……………なんか言いづらいな。

「ええまあ、正直なところで言うとおのことに関してはまだジークさんには怒ってます。けど…あの時は私はジークさんの事情を何も知らないでいました。見舞いに来てくれたヴィクターさんが教えてくれるまでは。……………ですけど、けど今回話をしに来たのは別件です」

「別件…？」

また怒られる、罵られるとも思っていたのか、怯えつつも不思議そうな顔でこちらを見てきた。

何度か深呼吸をして、まっすぐジークさんを見つめる。

「ジークさん……………いや、ジークリンデ・エレミアさん。2年前は数々の暴言を言ってしまった、すいませんでした」

と、私はジークさんに頭を下げた。

「えっ!? いやアレはウチが…」

「それとーっ、お願いをしにきました」

「へ?」

言い返そうとしてくるジークさんの言葉を遮るように言葉をかぶせて言う。これは、絶対に譲れなかったから。

「これから、私と戦う時……………あの技を使うことを躊躇わないでください」

い」

それを言った時、ジークさんもヴィクターさんも驚いて目を見開いていた。

「え？…え？…どういう…」

「ユタ？…それはどう言うことなの？」

「どう言う意味も何もそのままの意味です。…その技に選手生命を断ち切られかけた私がこう言うのも悪いかもしいんですが、気にするほどの技では無いのかもしれないと、そう思いました。それに対策も考えましたから。なので…終わったあと勝つたのに謝るなんて真似は2度としないでください。お願いですから。」

…私にとって、それが一番嫌なんです。それに関してはジークさんが一番よく分かっているはずですよ」

「うん……わかった」

「ありがとうございます。では、私はこれで。今日は突然なのに時間を空けてくださってありがとうございます」

ジークさんは来なかったが、ヴィクターさんとエドガーさんが見送ってくれた。その帰り際にヴィクターさんが手首を掴んできた。

「？…どうしました？」

「ユタ、今年から復帰するって言うのは本当なのよね？」

「もちろん。その為に鍛えてますから」

「なら覚悟してなさい。都市本戦で一昨年の雪辱は晴らしてあげるわ」

「望むところですよヴィクターさん。…ジークさんも頑張ってください」と伝えておいてください。では」

私は軽く挨拶、もとい宣戦布告を済ませるとヴィクトリア家を出て家に戻った。

『さて、マスター、本当はどうなんですか？』

「あーうん。正直いうとアレに関してはどーにもならないんじゃないか、と思っってはいる。あんなハツタリ……言うんじゃないかな？」

『どーでしょうね。どちらにしろやることは変わらないんですから良いのでは？』

「それもそうだね。母さんにも、エリオにも、シグナム姉さんにもかっこ悪いところは見せないように頑張るだけだしね。目指せ都市本戦優勝、そして更には世界選手権出場！」

『では微力ながらお力添えをしましょう。しかし以前にも申し上げましたが小さな獅子に足元を掬われないよう』

「もちろん。誰であろうと全力を尽くすよ」

「ジーク、いる？」

「いるよヴィクター」

ユタを見送った後応接室に戻るとジークの顔つきが少し変わっていた。まるで何か覚悟を決めたかのように。

「だけど何処か安堵しているかのような感情も読み取れた。」

「ね？言った通りだったでしょう？ユタは怒ってないって」

「うん…」

ユタの気持ちは痛いほど理解できた。けどジークの気持ちも痛いほど理解ができた。自分で制御ができない力のせいで大切なものを壊してしまう。格闘戦技は大好きなのにその技のせいで相手に消えない傷を植え付けてしまう。一昨年はユタの左目と右腕。去年はミカヤの右手。この子はとても優しいから途轍もない重荷になっているのがわかっていた。

だからこそ常に相手を気にかけて試合をしていた。取り返しのつかないことをしない為に。そしてその優しさ故に起こったすれ違いは見ていられなかった。

だけれど今のジークは少し違っていた。

「ジーク、予め言っておくわね。ユタと同様、わたくしもあなたの首を狙っておりますので、精々首を洗って待っていないさい！」
「……うん、絶対負けへんよヴィクター。ウチは誰にも負けへん」

17話〜VSジークリンデの映像を見よう〜

「一体何がどうなっただけでいらっしやるんでしょっか」

『私から皆様宛にメールしたからですね』

「いや薄々勘付いてたけど犯人プライドかい！」

今この上映会にいるのは私、ヴィヴィオちゃんコロナちゃんリオちゃんトリオにノーヴェさん。そしてアインハルトにミウラ。イエーイ12歳以下大集合〜ってアホかい。

「一応聞こう。プライドから来たメールにはなんて？」

「一昨年のユタさんとジークリンデさんの決勝ビデオを、しかもセコンド視点から見せてくれるって」

「よしプライド。あとで話し合おうか」

『謹んでご遠慮いたします』

先に言っておこう。

私は縛られているので拒否権はもう無いです。

なんでこうなってるかって？私もわからない。

「なんでよりもよって自分がボロカスにされてるのをもう一回、しかもみんなと一緒に見なくちゃいけないの…」

『どうせ見るんですから、それならばついでにジークさんと戦う可能性のある方々に見せておいた方が様々な面からの助力を得られると思います。あとは単純にマスターのそういう姿が見たくて』

「ぶった斬ってやる」

影を駆使して叩つ斬ろうにも魔力錠とかいうやつので魔力練れないんですけどね。

ソレはそうとして一度ぶった斬る。

「嫌だね。見るなら1人で見ろ！てかそもそも大勢で見ても私がボロ雑巾にされる姿が…」

「「だめ…ですか？」」

「うぐっ」

『おーつとここで初等科トリオの素晴らしい上目遣いがマスターへクリティカルヒット。マスターの心が凄絶に砕ける音が聞こえました』

グッジョブ3人です』

「プライド、お前本当感情豊かだな」

『お人よしの大家族にそう作られていますので』

ちなみに私のHPはもうマイナスです。

もういいよ。どうせ知られるくらいなら見てやろうじゃない。

「それじゃあ、開始するぞ?」

「「はーい!」「「よろしくお願いします!」」

「もう好きにして……」

　　2年前 インターミドル都市本戦決勝前日

「それでは、ユタ選手。初出場で決勝戦進出おめでとうございます!
今のお気持ちは?」

「え、えーと。正直ここまで勝ちあがれるとは思ってもなく嬉し
いです。決勝戦も悔いの残らないよう全力でジークリンデ選手を
……私の憧れた選手を倒したいと思っています」

ユタは記者達にインタビューを受けていた。

それに緊張しながらもしっかりと答えていた。

「それに……私を家族だと迎え入れてくれた人や……大切な人に喜ん
でもらいたいので……明日は絶対に私が勝ちます」

「おおー!言い切りしましたねえ!かつこいいですよー!それではイン
タビューありがとうございます!」

「い、いえいえ」

「だえああ!なんでこのシーンからあるの!?!?」

『私が入れました』

「私が育てましたみたいと言わないでくれる?」

別の場所ではジークリンデもまたインタビューを受けていた。

「ジークリンデ選手、最後に明日への意気込みをお願いします」

「は、はいっ。えーと、ユタ選手はとてもすごい選手やと思ってます。みんなは判定勝ちやと面白くないと思ってる人もいるみたいですが……ウチはKO勝利より判定勝ちを狙う方がすごいと思っっています。それにユタ選手は何より試合の組み立てがうまいです。………なので、明日は開幕から全力で、ユタ選手を倒したいと思っ
ています」

「はい、ありがとうございます！いい記事が書けそうです！」

『だ、そうですよ。マスター』

「うう…ジークさん。そんな真面目なコメントを……私そんなすごいのに…」

「なに言つとんやー。あれだけ勝ち進んでるんや。すごいよ。ユタは。しっかりと胸を張りいや」

「う、うん。シグナム姉さんにも、母さんにも、ザフィーラにも、……もちろんプライドにも教えてもらったことを明日は今までの試合以上に出し切ってみせる」

『はい、その意気です』

「明日はうんと応援するからなー！」

「うん、ありがとう。母さん。プライド」

決勝戦前日の八神家は親子水入らずの状態になっていた。なんでも周りが気を利かせてくれたんだとか。

このときは誰も【あの事故】が起こると思ってもいなかった。

く決勝戦 当日 第一会場く

控え室にはユタ、セコンドとしてはやて、シグナムの三人がいた。ザフィーラは観客としてみるのだそうでここにはいなかった。

「どうや？ユタ。準備はええか？」

「うん、バツチリ。それじゃあプライド。最後の確認と慣らしも含め

「てもう一回やらせて」

『はい、いつでもどうぞ』

「うん。……セットアップ」

と、光に包まれる。

その後にはセットアップした状態になっていた。

「ん…よし、影は絶好調。その他の魔法も…母さん、ちよつとだけお願いしていい?」

「はいよー。んじゃいくで?」

母さんの合図でいくつかの小さな魔力弾が撃ち込まれる。それをリフレクト、吸収放射を使って母さんに弾き返す。

「ん、こつちもよし」

『よかったです。それで本日の作戦は?』

「今までと大して変わらないよ。ジークさんを無理やりこつちの土俵に引きずり込んで影、リフレクト、吸収放射、カウンター、持てる全てを使うだけ。そのあとは状況に応じて考えていく。何かあれば随時伝えるよ」

『畏まりました』

時間が刻一刻と迫ってくる。途端に震えが出てくる。変な汗も。

そんな私を見かねたのか背中を思い切りバシンと叩きてきた人が1人。

「いっつたいなあ!なにすんの!」

「怖気付いてる愛弟子に喝を入れたのさ」

「もうちよつと加減してもらっていいですか!?!」

「だが断る」

「断らないでくれませんか!?!」

ショートコントにしか見えないやり取りをすることでユタとしても気分が少し軽くなる。

シグナムもそれを感じ取ったのか改めてユタへ向き直る。

「ユタ。一応確認しておくぞ。試合の時は…」

「うん。わかっている。自分を信じる。だよね」

「わかっているならいい。私も全力でサポートしてやる。だからお前も

全力を出しきれ」

「わかった」

コンコン

「八神ユタ選手、入場お願いします」

ジークリンデが会場に入ると同時、観客一気に沸く。まるで地震が起こってるような感じだ。

ユタも同じように入る。するとジークの時ほどではないが会場が沸く。

しかし、ジークもユタもお互いにそんなことは気にしてすらいなかった。

「正直、本当にここまでくるとは思ってたわ。今日はよろしくな。ユタ」

「こちらこそ、ジークさん。今日は胸を借りるつもりで全力で行きます」

「あははー。顔はそう言ってないでー。倒す気満々やな。……けどウチも同じや。今日の試合も、全力でやらせてもらうで」

「それではインターミドル 都市本戦決勝を行います。ライフは15000。お二人とも正々堂々と！」

「はい」「わかりました」

と、その言葉と同時にユタも、ジークも、構えを取る。

「それでは……試合開始っ！」

「鉄腕……解放！」

「プライド、腕硬化の準備だけはしておくから補助お願い」

『畏まりました』

試合開始直後、ジークは出し惜しみは無しとばかりに『鉄腕』を解放し両腕に籠手を装備する。

それを見てユタは大きく後ろへ下がる。ジークを近接へ近づけさせない為に。

「それじゃ、行くで。ユタ」

「ええ、どこからでもどうぞ」

ジークは足に思い切り力を込め、ユタへ肉薄する。

右フリックを繰り返すもユタは寸でのところで影の壁を出し、攻撃を防ぐ。

「(やっぱり『視え』でも対処が難しすぎる…今防げたのはラッキーだ)」

「ウチを前に考え事かー？ユタ」

「いえいえ、そんな不躰なことは…っ！」

影の壁を解きパンチをしてきた腕に影のバインドとして絡みつかせ再度ジークから距離を取ろうと試みる。が、そんなものは関係無しとばかりに絡みつかれた右腕ごとユタへ向かって振りかぶりバインドを引きちぎる。魔力収束砲と共に。

しかし顔目掛けて飛ばされた収束砲は僅かに頬を掠めたのみ。

だけどやられてばかりのユタではなく。

「爆！」

「!?？」

ジークがちょうど次の動きをしようとしたところでユタが叫ぶと、右腕に残存していた影がジークを巻き込んで爆発した。

「よし…成功。あとは…」

「やっぱり変に絡め手をやろうとするのは悪手か…なら当初の予定通り、近接戦で早めに決着をつけに…」

片や近づこうとし、片やそれをさせまいと迎撃する。ジークは影を的確に弾き、潰し、確実にユタへ肉薄していく。ユタはというと影で

の迎撃は得策ではないと判断したのかリングの中心から半径数メートルをひたすら動き回り、受け流し、カウンターを仕掛け続ける。

「こんの……ちよこまか動くなあ！」

「そうする必要があるので！せやっ！」

「くっ！」

と、ユタは動き回りながらもジークを寄せ付けないように必要最低限は影で攻撃をいなす。時折死角から影で攻撃するも鉄腕で防がれダメージは入っていない。

「…っ！ゲヴェエア・クーゲル！」

「?! (魔力弾を展開してきた…しかもかなり高密度。だけどそれなら……)」

「ファイアツ！」

「リフレクト！」

ジークが弾幕を打ち込むと同時、ユタは反射魔法を使う。

「いたた。まさかそうくるとはなあ」

「げー、もう少しダメージ食らってくださいよ」

ユタはすべての弾幕を跳ね返すのは無駄だと考えたのか致命傷にならない程度に反射をする。

ジークもそれは予想外だったのか反射された弾を何発か食らっていた。

【ライフ】

ユタ 15000 ↓ 11500

ジークリンデ 15000 ↓ 12500

クラツシユエミュレート 互いに無し

「プライド、残り時間はどれくらい？」

『2分半です。が、仕込みを考えるとなるとまともに戦えるのは1分程度が限度かと』

「おっけー。……流石に腕の魔法を構築して戦う暇はないか……このラウンドはとにかく仕込みに行く。サポートよろしく」

『どれで行きます?』

「秘密兵器アルファで」

『厨二病ですか?』

「うるさいなあ!ほら、例のハコだよ!」

『承知しました』

「...?また何か企んでる顔してるな。けど関係ない。兎に角近距離戦に持ち込むだけや」

ジークがユタへ向かって駆ける。それを見てユタはリング中央を使うようにして逃げ回りながら所々で迎撃をしていく。そしてジークがまたユタを追いかける、の繰り返しとなった。ユタは目隠しも含めて足元を狙って攻撃していたが、試合時間が残り30秒を切ろうかと言う時、試合が動く。

「っ!?いつの間に!?」

「逃さへんでー。せやっ!」

「っ!」

ジークがいつの間にかユタの懐に入り込んでいた。恐らく土煙に紛れて移動をしていたんだろう。そのまま脚を掴まれ投げ飛ばされる。

「がっ!」

「まだまだ!」

「くっ.....!」

そしてユタは関節技を脚に決められる。

誰もがユタの負けが頭によぎった。しかし当の本人ユタは不敵に笑う。

「.....フツ、ようやく、ようやく近くまで来ましたね」

「?なんや、負け惜しみか?」

「忘れてませんか?私の魔力の変換資質のこと。近接...は...私も望んでいたことなんです」

「はっ.....!」

ユタの考えに気づいたジークは即座に関節技を外し離れようとする。

しかし一足遅くユタの近くから出て来た影がジークを切り裂く。

「痛たた……。ふうー、なんとかなつたあー」

『アホマスター。無茶すぎです』

「うん、自覚してる。でも無茶しないとジークさんには勝てないのはわかってるでしょ？それよりクラッシュの回復ナイス」

『せめて一言言ってから無茶をして下さい』

「善処するよ」

「(侮ってるつもりはなかった。でも心のどこかで慢心してたってことやな。……何をしとるんやウチは！ユタにも失礼やろ！)」

【ライフ】

ユタ 11500↓8000 ボディ蓄積ダメージ 27%

ジークリンデ 12500↓9700 クラッシュエミユレート

右肩部及び両腕 裂傷多数

カンカンカン！

『第1ラウンド終了！』

「どうや？仕込みは終わったか？」

「うん、終わった。あとは……いつそれに、どうやって引っ掛けるか」

「簡単じゃないか。足を止めてやれば良いだけだろう？なあユタ？」

「無茶言うなあ……シグナム姉さんは。……まあ期待には答えてみせませよ」

『セコンドアウト』

【ライフ】

ユタ 8000↓13000 ボディ蓄積ダメージ13%

ジークリンデ 9700↓14500 クラッシュエミユレート

全回復

『第2ラウンド、始め!』

開始の合図と同時にジークはユタに向かって走る。

しかしユタはそれを見て少し下がっただけで逃げようとはしていない。

「(? なんかの作戦か? …まあわからんもんを考えてもしゃーない。とにかく、先手必勝や)」

「(逃げ回りながらじゃうまく仕掛けられない可能性がある。なら多少リスクを背負ってでも接近戦を仕掛けるしか…)」

と、近距離でのジークの【鉄腕】とユタの【影】の攻防が開始された。

「(キッツ…でもここまでできた。あとは出来るだけわざとらしくない隙を作っていつて…)」

ユタはジークを引きつけながらリングの中心に近づいていく。

「(よし、ここ!ここで耐えろ!)」

ユタは腹をくくり影での攻撃を激しくする。

切りつけたり、打撃攻撃をしたり、バリエーションが広くなっていった。

しかし、ジークは鉄腕や弾幕を駆使し影を防いでいた。

一瞬の瞬きすら憚られるほどの激しい攻防に観客は大きく沸く。

願わくばずっと見ていたいと、そう思っていただろう。

だけどジークの脳裏にあったのは、ユタの異質さ。今までの試合とは明らかに違うユタに警戒を跳ね上げていた。

同時に早めに決着をつけようと決め、動く。

「いまやっ!」

「!」

僅かな隙を見つけ、影を抜けて来たジークがユタに膝蹴りをする。完全に不意をつかれたことでふらついてしまったユタに絞め技を決め、一気に意識を断とうとした。

「ぐぐ……………」

「はよ落ちた方が楽やで」

ユタへ警告するのは彼女故の優しさからか。本気でやれば意識なんてすぐに断てるのにそれをやらないのはユタの体を心配してからか。

だけどユタにとってはそれが反撃の狼煙になった。

「っ…勝った気に…なるのは早いですよ…寧ろ捕まえたのは…こつちです。ぐっ…影 シヤドウ・リツバー 斬…！」

「っ!?？」

床からではなく、ジークの膝から出てきた影が、ユタごとジークの体を切り裂く。思わぬ反撃により締め技が緩んでしまいその一瞬を突いてユタは抜け出す。

「にが、すかあ！」

「はあっ！」

逃してはならないとジークは鉄腕による追撃を仕掛ける。

それを見てユタは影を使うでも逃げるでもなく、選んだのは迎撃。ジークの拳に右手を合わせ、パンチの威力を利用して回転する。同時に発動直前まで構築しておいた硬化魔法を展開し硬い拳によるカウンターをジークに決める。

「…っ！」

「まだ、まだ。影の拘束」
シヤドウ・バインド

一気に流れを掴んだユタは今までリングに仕込んでた魔力を全部使うかの勢いでジークへ影魔法を仕掛けていく。

影でのバインドでジークを捕える事ができたのを確認し即座に次の魔法を発動させにかかる。

「やっど、やっど、できた。闇の箱！」
ブラックボックス

「え!?？なんやこれ！」

ユタのカウンターによりリングの中央に飛ばされたジークを影でできた箱が覆う。

その箱の中は一筋の光すらない完全な闇だった。

「な、なんや!?？なんも見えへん！どこ行つたユタ！」

「一箇所にとまってると危ないですよーって、聞こえないか」
「!?」

と、多分観客とかからはわからないが（というかわかったら怖い）
ジークは四方八方から影での攻撃を受けていた。

完全な闇ということもあり反応しきれておらず次第にライフが
減って来ている。

ライフ

ユタ 13000↓6200

クラッシュエミュレート ボディ蓄積ダメージ70%

ジークリンデ 14500↓10000

クラッシュエミュレート 全身裂傷多数 脇腹強打撲

「ゲホッ、あとは、ゆっくりと」

「……………」

無論ユタとてこの程度でジークが終わるとは微塵も考えていない。
更に確実にするために次の策を、と考えていた。が…

突然なんとも言い難い怖い恐怖がユタを支配した。

「ガイ…………ク…………」

闇の箱から何か聞こえてきたかと思うと爆発が巻き起こる。

「は……………」

と、次の瞬間にはジークを閉じ込めていた影は跡形もなく消えてい
た。

そして、そこに現れたのは

まるで機械のような冷たい瞳のジークリンデがいた。競技者とい
うよりは、まるで暗殺者のような。それを見て今の今まで考えていた
作戦を即座に放棄した。せざるを得なかった。

「(は?ちよつと待てちよつと待て。あれ、相当強度高く作ったよね?)

いやそんな事はどうでも良い。とにかく……)プライド！魔力を全部防
御に回して！」

『承知しました！それとマスター、お気をつけて！あれは明らかに……』
「わかっている！早く！」

普段の冷静でおちゃらけていた筈のプライドですら焦った声にな
る。そんな2人を1人の破壊者が遮る。

「ガイスト・クヴァール」

「!?？」

ジークは突然ユタの目の前から消えた。

『マスター！後ろ！』

「えっ!?？がっ!?？」

プライドの声により反応できて避けてはいたが……ソレが齎した
結果はユタにとっては最悪の一言だった。

「…嘘お、なにこの威力。初めて見た」

ジークの一撃は、ユタの硬化魔法のかかっている右腕ごと、リング
を綺麗に削り取っていた。巻き込まれたのは右腕だけではあったが、
それでもリング端まで吹き飛ばされてしまうほどの威力だった。

「……これマジでやばいやつだ。プライド、早く、クラッシュ、治して。
流星に片腕だけじゃ……」

『違うんですマスター！治せないんです!!』
「は……」

珍しく焦っているプライドの言葉と共にまたジークがユタに向か
う。

ゾオツという悪寒が走りユタはとっさに身構える。がジークは四
肢を攻撃して麻痺させられ、ユタは膝をついてしまう。

そして、また大きく振りかぶってユタに向かって……

「(え？ちよつと待って？あれ受けるの？嫌だ……死……)」

『マスター！避けて！』

「ジークさん！止まって！」

「！」

と、プライドの声により顔をわずかにそらして直撃を免れた。

ジークもセコンドの声で一瞬我に返り、なんとか拳の軌道を、ほんの僅かに逸らす。

しかし、『直撃を免れた』だけであって、ジークの一撃はユタの左目を綺麗に潰した。

「がっ、ゲホッ……」

そして、そのまま倒れこむ。

「はっ……!?」

ジークは先ほどまでのように機械のようでなく、試合をしているときの顔に戻っていた

「(あー、これダメだ……調子乗った罰かなあ……。もうちよつと研究してればよかった)」

ユタの胸中にあつたのは、己の準備の甘さによる後悔。

だけどソレを塗り潰すかのような一言が。

「……ユタ、ゴメンな」

「……え？」

ジークリンデの優しすぎるが故の言葉が、ユタの胸に突き刺さる。負傷した眼や腕などの痛み以上に、ゆたの心に深く突き刺さる。

(え? 何で……私……謝られたの……? なんて……? ただお互いに全力を出して戦っただけなのに……何で? ……私が弱かったから? 最後の技は使うつもりなかったとか……? それで使っちゃったから謝られた……?)
「ふ、ぎげ……」

何かを言おうとするも、体は言うことを聞かず、悔しさをはじめ色々な感情が混ざる。だけど立ち上がるには遠く及ばず

そのまま意識を失った。

18話 視察

「うん。改めて見ると思った以上にフルボッコだドン」

『敗北の達人でもやってるんで?』

「残念ながらそんな特殊なゲームはやってない」

最終的に私が重傷を負った上でK・Oされた試合を見て私以外の皆さんがそれはもうお通夜状態。

「ま、みんなここのインターミドルで都市本戦優勝しようと思ったらアレは避けて通れないと思った方がいいよ。ノーヴェさんも、この子達をインターミドル選手として導くならそれを覚悟しておかないやダメですよ」

「わかってるさ。けどそれはユタもだ。都市本戦を優勝するってならアレをどうにかしなきゃならないのは同じだ」

「もちろん。その為に色々と準備しますから。それと…今の映像改めて見て少し気づいたことがありますし」

それについてみんなから聞かれたが、それは内緒ということでき通した。秘策にも繋がってくるし、敵になるかもしれない子たちに手の内をバラすような事はしたくないからね。

「それじゃあ私の敗北鑑賞会は終わりということでもよろしいでしょうか?」

「ああ、ありがとうな」

「まあ隠すもんでもないですしね。よし…それじゃあプライド、叩っ斬る」

『やれるもんならやってみやがれです』

あ、このやろ!魔力運用を妨害するんじゃない!

1週間後 地区選考会第1会場

『どうですか?めばしい人はいましたか?』

「うん、何人か」

今はヴィヴィオちゃん達初等科トリオやアインハルト、ミウラの応援と視察も兼ねて地区選考会を見に来てた。いやはや懐かしいねえ。一昨年は私も視察される側だったのに。

それはそうと開会式でのエルスさんという上位選手による選手宣誓もとい『えい！えい！おー！』は爆笑してしまいました。アレ今時やる人いるんですね。

「にしても……」

私はさつきプライドに言っただけで急遽撮ってもらったビデオを繰り返し再生しながら唸る。

どっちも決して弱くない。なんなら片方は都市本戦で見てもおかしくないくらいの強さは持っていたように見える。だけどそんな相手からの攻撃を全て避け、ボディブローの一撃で沈めている。

「この白い髪のロングの子……アインハルト並みにしか見えないんだけど」

『リンネ・ベルリネッタ。今年初出場ですね』

「やだなー。私、この子と同じ予選組なんだけど」

『潔く諦めてください。これは現実です』

はあ……とため息をつきながらビデオを消す。誰かいないものかと周りを見渡すと見慣れた顔を見つけ、そちらへ向かうことにした。

「ヴィクターさん達発見」

『ジークさんもいますね』

あの人たちも視察かなと思いつく。意外にも周りに騒がれていないのが助かるね。

「あらユタ。あなたも視察？」

「そんなところですか。って、なんでジークさんはフードを？」

「だって目立つの嫌やもん……」

と、私たちは初出場の選手達を見ながら感想を言い合っていた。

「というか、ユタ？この前来たときも思ってたんだけど、なんで左目を包帯で隠しているの？」

「あ、ウチもそれ思ってた。怪我は治ってるんよね？」

「かつこいいからに決まってるでしよう?」

バカを見る目で見てこないでください。てか、ジークさんにバカを見る目で見られたくはない。雑草を食うような人でしようが貴女。

(……過ぎました!)

ふと会場に目をやっているとなんか聞き覚えのある声が聞こえてくる。

振り向くと……

「あ、可愛い番長」

「誰がだ!」

「あなたがですよ」

赤いポニーテールに赤い瞳をしている砲撃番長ことハリー・トライベツカ、そしてその取り巻き(不良っぽい超いい子ちゃん)がいた。見た目不良なくせして中身超優等生(成績除く)の4人も混ざりさらに人が多くなる。

「お」

と、ハリーさんがヴィクターさんを見た。このあと始まるのは見なくてもわかるので会場に再度目を向ける。お、あの子のカウンターめちやくちや綺麗ね。

「ポンコツ不良娘!どうしてあなたがここに?」

「ヘンテコお嬢様じゃねーか。あれ?今年はお前選考会からスタートだっけ?」

「違うわよツ!シードリストも見てないのツ!?わたしは6組の第1枠!」

「あーそうだったか?」

うん、予想通り口論になった。この人たち毎回こうだよねえ。仲良いのなんの。ていうか、お二人さん?わたしを挟んでケンカしないでくださいませんか?うるさいですよ

ガキン!×3

「なんですか、都市本戦常連の上位選手がリング外でケンカなんて！」
そして更にとある人が現れ、鎖型のバインドがかけられる。そのバインドの主は短めツインテールの黒髪で、つるんとしたおでこに眼鏡を掛けているエルス・タスマンさん。私は戦ったことはないけど。

「っていうかさ、喧嘩している2人に対してバインドをかけるのはわかる。なんで私までバインドされるの？」

「会場には選手のご家族もいるんですよ？インターミドルがガラの悪い子達ばかりの大会だなんて思われたらどうします！」

「そやけど」

「リング外での魔法使用も良くないと思いますが。あと私にバインドかける理由を教えてください」

『今回は珍しくマスターに同意します。エルスさん』

「ああつ!!?チャンピオン！ユタさん！」

……なんでそんな大声で叫ぶのでしょうか？貴女のオタク気質ばらしますよ？ほら、さつきまでは周りがザワザワしているだけだったのにそれが会場中に伝播したじゃないですか。めっちゃ見られてる。

「チャンピオン?」「どこどこ?」「あー！いた！あそこー!」「二階席のあそこ!!?」「一昨年の世界戦優勝者！ジークリンデ・エレミア選手！それに去年のミッドチルダ都市本戦3・5・8位の上位選手勢揃いしてる!」「それに一昨年の2位もいる!」

あー、こりやめんどくさい。目立ちたくないのに。あとジークさん、ドンマイです。一緒に大衆の目に晒されましょう。

「あ、ほんとだ！あれ？でもなんでユタさん達バインドされてるの?」

「……なんでだろう?」

おおう、コロナちゃん達みんな来てたんですね。

んん?ミウラもいる。いつの間にみんなと仲良くなってたの?ずるい！私も行きたい?

というよりもやばい、これだと私がMみたいに見られちゃう。やめて見ないで!

『誰もそんなこと思っていないのでご安心を。バカマスター』

「バカマスターはひどくない？それと相変わらずの読心術なようで『お褒めに預かり光栄にございますマイマスター』」

「褒めてないのよねえ…」

「騒ぎになるのもめんどくせーな。ま、ここはおとなしく退散すつか」

「そんな簡単に!?!?」

「まったくよ、あなたと会うとどうしてこうグタグタになるのかしら」

「この人もまた!!?!?」

「よつと」

「切断て!そんな柔らかいですか?!?!?」

ハリーさん、ヴィクターさん、私の順でバインドを解いていった。

ハリーさんとヴィクターさんは自強化魔法で、私は影で切り落とされた。

「(ぐぬぬ…:一年間で結構成長したはずの私のバインドをあんな簡単に!やはり今年は例の新兵器に火を吹いてもらわねば——!!)」

「お、そーいやアホのエルス」

「誰が『アホの』ですつ?!?!?あと私のが年上ツ!できれば敬語ツ!」

「うっせーよアホ。お前とオレは同じ組だからよ。まあ楽しくやろうぜ」

「去年の雪辱、果たしますからね!」

「おうよ、やれるといいなあ。ま、オレもユタに雪辱を晴らすつもりだから負けるつもりはねーけどな。オレと当たるまでちゃんと勝ち上がってこいよ?今年は初参加組も結構アツイからな。負けないうにせいぜい頑張れや」

と、番長が宣戦布告をしてくる。私としても願ったり叶ったりだけど…

「できるものならやってくださいよ。にしても、やっぱり悔しかったんで?」

「そうだよ!今年はお前に『影』を使わせてやるからな!オレのときはほとんど使わなかったからな!お前は!」

「だって、番長相手だとリフレクト駆使した方がやりやすいですもん」

視察が終わりヴィヴィオちゃんたちとも別れ帰路に着いた。
今は母さんの家で料理中。八神家特製シチューを作ってます。
ちなみに、私の中での3凶(母さん、なのはさん、シグナム姉さん)も勢揃い。やったね。地獄なんか生ぬるく感じるよ。行ったことないけど。

珍しく時間が合ったから一緒に帰ろうとなったらしい。

「そーいえば、ヴィヴィオちゃん達って結果どうだったんですか？」

「えーと、確かみんなスーパーノービスからだって聞いたよ」

「ミウラは？」

「ボクもスーパーノービスからです！」

ミウラもスーパーノービスねー。ガチガチに緊張してたところしか見てなかったけど勝ったんだ。すごいなあ。

「なのはさん、ヴィヴィオちゃんに頑張つてと伝えておいてください」

「うん、わかった」

「ユタも足元すくわれんように気をつけえやー」

「わかつてるよ。今年こそ……」

「ユタなー今年こそ告白するって張り切ってるんや。なのはちゃん、フェイトちゃんに頼んでエリオに観に来るよう伝えてもらっつていてええか？」

「ちよーや、やめ、やめい！」

何を考えてるの！このためき！そんなふうになんかの恋路を面白がるから相手を見つけれないんだよ！

そう思った瞬間に顔の横を何かが通った。

「今何を思ったか言うてみい」

「ナンデモアリマセン」

『にしてもマスターがまたもや恥じらうとは……やはりはやてさんの方が上手なんですわ』

「そやでープライド。まだまだユタには負けんわ」

「じゃあ、はやく結婚…って！危ない!?!？」

「つい手が滑ってクラウソラス投げてしまったわ、すまんなあ。で？なんやて?」

「イエ、ナンデモアリマセン」

偉大なるお母様。一つだけお願いがあるのです。

せめて料理中に狙うのはやめよう？

なのはさんが帰ったあとみんなで鍋を囲み、軽くストレッチをしてミウラと共に砂浜へ出る。そこにはシグナム姉さんとザファイがいた。

「ユタ、特訓だがこれからはミウラと一緒にやってもらうぞ」

「え?私は別にいいけど、どしたの?」

「お前の予選の中にハードヒッターがいるだろう?それならミウラとやればいい練習になると思ってな。それにミウラはエリート戦一回戦でミカヤ選手と戦う。刃物相手ならお前が適任だ」

「えっ?えっ?」

「ミカヤさんとなのか…ど、どんまいミウラ」

初戦でミカヤさん…本当にどんまい。いや負けると決まったわけじゃないけど、初出場の時の私並みにくじ運悪いね。

ま、私としてもハードヒッターと練習できるなら願ったり叶ったりなのでこういう采配をみてるかと本当に師匠なのだとし物思いに耽ってしまう。

「えっと…ボクなんかでいいんでしょうか?」

「いいだろう?ザファイ、ユタ」

「もちろん」

「ああ、俺は構わん」

「ということだ、ミウラ。今後はユタと一緒に練習していく。また詳しいことはその都度言っていく」

「は、はい!ありがとうございます!よろしくお願いしますねユタさん!」

「私こそよろしくミウラ」

「そこまで！」

「押忍！お疲れ様でした！」

ミウラとのスパリングが終わり、一気に疲れと汗が噴き出て地べたに座り込む。ザファイがスポーツドリンクを渡してくれ、それを少しずつ飲み、徐々にペースを上げ飲み干す。

あー美味しい。

「はあっはあっ、なんでユタさんそんなに平気そうな顔してるんですか……」

「それはねー、ミウラ。この人たちと1年2年も特訓すれば嫌でもスタミナ身とペース配分身につくんだよ。ね、シグナム姉さん」

「そうだな。久しぶりにアレやるか？」

「謹んでご遠慮させていただきますシグナム様」

「なんだ、つまらん」

「それやると私が死ぬの！」

「一体何をしてたんですか？」

『休憩最低限かつひたすらスパリングですよ。反撃禁止の。簡単に言えばシグナムさんからの攻撃をひたすら避ける特訓です』

本当にあの特訓はもう嫌だ。体力万全の状態でならたまにはやろうかなと思ったりもするけども今は絶対に嫌だ。死ぬ自信しかない。

にしても…抜剣ねえ。すごい打撃のやり方だ。

収束砲の威力を利用して素早く重い打撃を繰り出すねえ。

羨ましい才能だよ。

「さて、ユタはまだ動けるんだろう？最後は私とやるぞ」

「ええっ…せめて遺書をかかせて」

「大丈夫だ。まだ殺しはしない」

「まだ!??てことは殺す気でもあるの!??」

「いいから、やるぞ」

結局逃げられませんでした。せめて遺書くらい書かせてください。

「ほえー、ユタさんすごい」

『ミウラさんも十分すごいですよ。マスターの【影】に対して初見であそこまでやりあえるとは思ってませんでした』

「あ、えーと。プライドさん、でしたっけ？そんな、ボクなんてまだまだ…」

いま、ボクの目の前ではユタさんとシグナムさんの手合わせが行われていた。けど、すごいという言葉しかでてこない。ユタさんはシグナムさんの猛攻をことごとく避けるか受け流し続けている。

「ねえ、プライドさん。ユタさんってこの練習をいつからやってたんですか？」

『私が造られる前からやっていたとのこと…少なくとも3年以上前ほど前だったかと』

「え!?？」

す、すごい…

『まあ、マスターは体質なんかの問題でミウラさんのような戦いができませんからね。いつもミウラさんがやってるような練習の代わりにこればかりをやってたんです』

「なるほど…」

『あ、忘れてました。マスターから伝言あったんです。【ミウラ、頑張れ。初出場の私でも都市本戦の2位までいけたんだからミウラもきつと勝ち進めれる】だそうです』

「……ありがとうございますー！」

あ、ユタさん達の手合わせ終わった。

ユタさん、汗だくでそのまま倒れこんでる。

そしてこの後はシグナムさんと家に運ぶこととなりました。

く予選本番 地区予選第2会場く

「お、ミウラすごい。あのミカヤさんに勝ったんだ」

『すごいですねえ。大金星ですね』

「ま、そのあとザファイとヴィータにこつてり絞られてたけどなー」

いまは控え室で待ってる。私の対戦相手は運の悪いことに当たりたくなかったリンネ・ベルリネットだった。あいつ変わらずのくじ運の悪さ。

スーパーノービス戦を見た感じシード選手より強い気がする。

近距離が強く、つかみ技も強い、タフネス、砲撃も使いこなしてる。パワーも強い。投げ技もされたら致命傷レベル。

本当に超パワー型って感じ。

あとは………相手を見下してるくらいかな。

「ま、他人のことよりまずは自分のことや。今回はシグナムがおらんからウチがしつかりと見といてあげるで。しつかりとやってきいや」
「もちろん。………そんじゃあプライド、最後確認の意味も込めてセットアップ」

と光に包まれる。

「相変わらずその格好なんやなー」

『いい加減変えたらどうです？そんなことだからエリオさんに振り向いてもらえないんですよ』

「うっさいよ！気にしてること言わないで！」

『まあ、それより………今回はどうします？』

「そーだねえ、リフレクトと腕の魔法メインに組み立てつつ、適宜影使う感じかな。だからサポートよろしくね」

『了解しました』

コンコン

「八神ユタ選手。入場をお願いします」

セットアップを解き、案内人の人と共に会場へ向かう。

19話 　　くVSリンネ・ベルリネツタく

く予選第2会場く

アナウンズと同時に私達はリングのそばに向かう。同時に相手もリングに向かって来る。

目の前にしてよくわかる。初出場とかいうの絶対嘘でしょこれ。

「ユタ。いい報告が2つあるけど聞くか？」

「え？うん。どしたの」

「ヴィヴィオちゃん達みんな2回戦まで勝ったって。あと応援にもきてくれてるらしいけど」

「あ、ほんとだ。あそこにいる」

と、観客席を探してみたら割と前の方にヴィヴィオちゃん達がいる。こういう時に眼がいいのって便利だねえ。

「ありがたいなあ。んでもう一つ、3時の方向見てみい」
「？」

と母さんに言われその方向を見ると

エリオ、キャロ、フェイトさん、ルーテシアさんがいた。

ボンツと私の頭が一瞬でショートしかけた。

「何一丁前に顔を赤くしとんや？」

「こ、この狸……」

うー、この人は……

まあ、それはそれでありがたいですけども！ただ余計負けられなくなっただけで。

何度か頬をペチペチと叩き気持ちを切り替える。

「それじゃあ、行ってきます。母さん」

「うん、行ってらっしゃい」

リングに立ちリンネさんと向き合ったが、改めて今年が初参加なのかと疑いたくなる。それくらいには鍛えてあった。

「よろしくリンネさん。精一杯やらせてもらおうよ」

「……」

あーはい。無視ですかそうですか。

『マスター、今度は何やらかしたんですか』

「いや、何もやってないはず。ていうか初対面だし」

と、プライドと喋りながらリングの端に移動する。深呼吸をなん度も繰り返して心を落ち着ける。

そしてお互いに構えた。

『さあ、カウンターやリフレクト、影を駆使し都市本戦2位まで上り詰めた経験のあるユタ選手。それに相対するは、ここまで1ラウンドK・O・で勝ち上がってきており、パンチや砲撃などの威力は都市本戦常連組にも劣らない力をもつリンネ選手！』

実況席の人がすぐく場を盛り上げるような実況をしていた。うん、てかここまで1ラウンドK・O・なんかい。こーわっ。

そんな思いを他所に審判の人が改めてルールを説明していた。それを確認し、審判の人がリング外に出る。

カーーーーン！

そして開戦のゴングが鳴った。

「はあっー！」

「っ……っ！」

ゴングが鳴ると同時にリンネはユタと距離を詰めアツパーを仕掛ける。それを間一髪でユタは避けた。

ほんの僅かとはいえユタの体勢が崩れたところをリンネはすかさ

ず追撃をする。ユタはそれを何度も執拗に避け続ける。

「せやつー！」

「つーりゃー！」

ユタは顔に来たパンチを前に避けながらカウンターをかました。

リンネが僅かにぐらついたスキを利用して距離を取る。

「あつぶな。ペース持つてかれるところだった」

『今のカウンターは見事です』

「どうも。にしてもヴィヴィちゃん然りジークさん達然り、見るのと体験するのはやっぱり雲泥の差だね。思った以上に速いや」

と、そんな話をしてる間にも何事もなかったかのようにリンネは立ち上がる。ライフも殆ど減っていなかった。

「ありや、ほとんどダメージ無し？それは予想外」

『どうやら体も頑丈みたいですね』

「だねえ。羨ましいことだ。ま、だけど運良くこつちもダメージ受けなかったから初回の当たり合いはドローということだ。んじゃ、硬化魔法組み立てつつ、一旦近距離持ち込むからサポートお願い」

『了解しました』

すると、リンネは距離が離れていながらも格闘戦のような構えをした。それを見てユタもいつでもカウンターが出来るよう構える。

「(この距離なら…砲撃？でも突進してくる可能性もあるし、警戒…)」

リンネは思い切り腕を振り、遠くから収束砲撃をうってくる。1発だけでなく何発も。

だがユタは予想出来ていたから今度は慌てず確実に避けていく。一部、影で受けたりはしていたが。

「……」

「あれ、もう終わりか」

当たらないとわかったのかリンネは砲撃をやめ、再度格闘戦の構えをする。

それを見たユタは影を少しずつ実体化させる。

「さーてと、バカス力撃つて来てくれてたおかげで魔法構築も充分。

さて残り時間は……5分弱か。プライド、少しだけ無茶するからヨロシク」

『限度を考えてくださいいね』

その言葉と同時にユタとリンネが互いに接近する。

リンネは無理矢理ながらもユタに打撃を当てようとしますがそれを紙一重で避けられ、受け流される。リンネとしてもユタが近接戦に応じてくるとは思っておらず少し意表をつかれた形になり動揺が動きに現れていた。

そして……

「(隙ができた!)」

「(食いついた!)」

とユタが作った明らかな隙を狙い、リンネが腕に魔力を集中させ胸を殴りにいった。

ユタはそれを少し体をそらし腕で受けその勢いで回転しリンネの側頭部に裏拳を叩き込んだ。

「がはっ……」

「ふう……やつとダメージをいれた。ここまでしてようやくまともなダメージって何この子」

ユタはいつの間にか腕の硬化魔法も発動していた。

ライフ

リンネ 150000↓98000

ユタ 150000↓138000

『ダウン 10……9……8……』

ダウンカウントが始まりユタはその場から少し離れる。

『今のカウンターは100点ですね』

『ども。でもこれで接近戦はしばらくやってこないといいんだけど』
『そうですね』

『6……5……4……』

「っ……! やれます!」

「うん、だろっうねえ」

リンネは少しふらつきながらも立ち上がる。
そして互いに再度構える。

『始め！』

と再開と同時にリンネは距離を詰めて来た。

近接戦はしてこないと思っていたユタは驚いてしまい、少しのタイムロスを与えることになってしまった。

「(マジですか!?!?)」

「はああっ！」

と、リンネはパワーのある拳でラツシユをしてくる。

ユタは少し反応が遅れたものの的確に避け、受け流していく。

そしてしばらくそれが続いた時

『カンカンカン！』

第一ラウンド終了のゴングがなった。

「ふう……なんとかなったあ……」

「珍しいなあ。ユタが近距離に徹底するってのは。なんか策でもあるんか?」

「うん。一応ね。まだ使うかは未定だけど。できれば……影は使わずに勝つのが理想だけど、まあ無理だと思うからその場その場で考えるよ」

「そうか、まあがんばりーや」

「うん」

「リンネ、あのカウンターはしかたありません。一旦あれは忘れましょう」

「はい、次は無理矢理にでも全てを耐えて打ち返してみせます」

「その意気です。あなたは才能があるのだから、あの選手を蹂躪して

あげましょう。見せつけてあげなさい、才能の差を」

「わかりました」

「とはいえ、あの選手の【影】には気をつけてくださいね？いつ来るのか予測が付きませんから」

「はい」

『セコンドアウト』

インターバル回復

リンネ 9800↓14000 クラッシュエミュレート 全回

復

ユタ 13800↓15000

『カーーーーン!!』

ゴングがなるとリンネは距離を詰めようとし、ユタは逆に距離を取ろうとする。

「(まだ接近戦でくる？まあそれならやることは変わらないけど警戒はしておかないと……。あのボディブローを受けたら洒落にならないし)」

距離を引き剥がせないと思ったユタは足を止めて迎え打つ覚悟をする。

1ラウンド目の時のようにリンネは打撃を繰り返しユタはそれを避けながらもカウンターを狙う形になった。

片や執拗に攻撃を続け一撃必殺を打ち込む隙を狙い、片や執拗に避けて受け流しカウンターを狙う。

それが2分ほど続いた頃だろうか。

「(キター!)」

とリンネがパンチをして来たのを前に避けながらユタは顔にカウンターを決める。硬化魔法を施した腕での確実なクリーンヒット。それがユタを油断させた。

「っ……………！」

「んなっ!?？」

リンネは、直立不動で構えた状態のまま微動だにしていなかった。

「やああああー！」

リンネはユタの腕を掴み床に叩きつける。

「がはっ……………」

そして立ち上がる前にリンネはユタに拳を叩きつける。

ユタもとっさにガードしようとするが間に合わず何発も入れられる。

そして、更には至近距離での収束砲撃ブレイカーを撃ち込んだ。1発だけでなく、何発も。

『ダウン 10……………9……………』

ライフ

ユタ 15000↓2000 クラッシュエミュレート ボディ

蓄積ダメージ 57%

リンネ 14000↓9600 クラッシュエミュレート顔面強

打撲

「リンネ、完璧です」

「ありがとうございます」

とリンネとコーチが話している。

『3……………2……………』

(おおーっつっ!!!)

と、あと少しで決まろうという時に観客が湧く。

リンネが不思議に思っユタの方を見ると

「はああ、ゲホッ……………うん、まだやれます」

まだ闘志が消えていないユタがいた。

「あー痛い。めつつつちや痛い。だけどまあクラツシユがないだけマシか」

『そうですね。本当ならこの時点で棄権すべきですよ?』

「プライドのおかげだねえ……にしても近距離戦に無理に付き合い過ぎた。シグナム姉さんに怒られる…。」

スウー。さてと、仕込みも含めて持つてる手札を全部、惜しみなく、全力で使っていくとしますか。あ、念のために腕の魔法はそのまま継続させるつもりだけど魔力がヤバくなったら言っつてね」

『了解です。健闘を祈ります』

リンネは少なからず動揺していた。

過去の映像（とは言っても2年前のものだけだが）を見る限り、クラツシユはほとんどなかったのは気づいていたが、それはユタの受け身が上手いだけだと思っていた。だからこそ逃さず、あれだけ近距離で叩き込んだ。本来なら立てないはずだった。

カーカーン！

そんなことを考えているとゴングがなった。

慌ててリンネは構える。

「…?」

だがユタはリンネから距離をとる。

「(来ないのなら…私から行けばいい!)」

とリンネはユタに向かって突進する。それを見てもユタは一切動揺する素振りはなく、冷静に見ていた。

『影 斬』

「え?」

ユタがそう呟くと同時、リンネの足元から影が飛び出し斬りつけた。

とつさに回避をするも全てを避けてられなかった。

「あれ?あんまり入ってないな。もう少し傷を負うと思ってたのに。まあここからほんのちよつと近距離戦するしあんまり関係ないか」

とユタはリンネの背後に一瞬で移動してみせる。

「なっ!?？」

リンネは完全にノーマーク、と言った感じで驚いていた。そして、ユタはリンネを影で確実に斬りつけた。

だか、ユタの用いた移動法に一番驚いていたのはリンネやセコンド達ではなく、観客席にいたミウラだった。見覚えがある、なんてレベルじゃ無いのだから。

「ぐっ…」

「はい、逃がさないよ」

と、たまらず距離を取ろうとしたリンネをユタは影で捕え、思い切り地面に叩きつける。

「…のおー!」

と今度は収束砲撃を撃って脱出を試みようとする。

「リフレクト」

「ぎゃっ!」

ユタはそれを待つてましたと言わんばかりに反射する。

これは近距離でリンネは影により動きに制限がかかっていて、反射砲撃を避けられるわけもなく自分の撃った砲撃に飲み込まれた。その瞬間に影によるバインドも施されて。

『バインディングダウン』

ライフ

リンネ 9600↓3960

クラッシュエミュレート 全身裂傷。肋骨3本骨折。背中強打撲。

ユタ 2000↓1600

クラッシュエミュレート ボディダメージ蓄積68%

『マスター、いつの間にミウラさんの【抜剣】を?』

「プライドのいない間とかにこっさり練習してた」

そう、ユタはミウラの【抜剣】の技術を使ってリンネの背後に回った。

足元に収束系魔法を使いその威力を使って爆発的な推進力を生み出す技術を、真似たのだ。

その魔力の元は、リンネが幾度となく放ってきたモノだった。

「けど……正直もうやらない。体が持たないコレ」

『それが懸命ですね。抜剣はミウラさんの頑丈さがあつてこそそのあの荒技ですから』

『6……5……4……』

「はあつはあつ……た、立ちました。まだやれます!」

リンネは影にバインドされた状態ながらも立ち上がった。

だがリンネにとってピンチであることには変わりはない。

「あのまま寝てもらってたら楽に終わってたんだけど。まだまだやる気満々だこつて」

「私は……負けるわけにはいかないんです!私は強くなるって決めたんです!」

とユタの皮肉の混じった発言に対しリンネは少し荒ぶった声で言う。

「うん、だけど私も負けるわけにはいかないからね」

リングがなると同時、リンネはバインドされたままユタに向かって走り、ユタに近づいた瞬間にバインドを引きちぎる。

が、それはリンネの負けを確定にしてしまった。

「!?」

ユタの影が突然爆発しリンネとユタを巻き込む。

かなりの威力だったので多少はユタもダメージを受けていた。そしてその爆発に紛れてユタはリンネの顎にアッパーを命中させ、完全に気絶させた。

ライフ

リンネ 3960↓0

ユタ 1600↓500

『決着!勝者はー!八神ユタ!!最後の最後まで行末がわからない試合でしたが都市本戦2位の意地を見せましたユタ選手!しかしリンネ選手もルーキーとは思えないほど素晴らしい試合をしてくれました!観客の皆様、二人に盛大な拍手をお願いします!!』

アナウンスと同時に会場を拍手の音で満たされる。

「……ありがとうございます。八神選手」

「いえ、こちらこそありがとうございます。リンネさんにも伝えておいてください」

「わかりました。それとは別件であなたに後で話したいことがあるのだけどいいかしら？」

「？まあ私は構いませんが」

「ありがとうございます。ではまた後で」

とリンネを担ぎに来たコーチと話す。

コーチの言葉がよくわかってないままユタは会場をはやてと共に後にした。

↳選手控え室↳

「あー！ー全身痛い…至近距離での収束砲撃は酷い…よくライフ持っ
ていかれなかったよ……」

「よー言うわ。あんたも同じようなことしたやろ」

『ま、油断してたマスターの自業自得ですね』

「二人とも：勝った私を褒めてくれてもバチは当たらないと思うよ？」

「ユタを甘やかしたら私がイラつくから嫌」

『褒める時は褒めますが、今回に至っては褒める事より咎めることの方が多いのですが？シグナム様からもメール来てますが、死刑宣告聞きます？』

「絶対に嫌」

プライドのに全く反論ができない。死刑宣告も持つてるとかいうし、遺書でも書いておこうかな？！？

けど我がお母様。アナタ様の言い分には反論したい。

なにより私がイラつくからって。そこは甘やかしたら調子にのるか
らとかにしておきなよ。

「あ、ユタ。メールや。ヴィヴィオちゃん達から。えーと『2回戦突破
おめでとうございます！私たちもユタさんみたいに頑張ります！お
疲れ様でした！』やって。ええ子やなー」

「うん、そうだね。俄然やる気出て来た」

「え、ユタつて女子なのにロリコンなんか……捕まらんようにきいつけえや」

「なんで!?!?なんでそうなったの!?!?」

『心配しないでください。万が一があつたら私が証人になつてあげますから。少しくらいは刑は軽くなると思いますよ?』

「私が間違いを犯す前提で言わないでくださいませんか!?!?」

コンコン

「はあーい」

とそんな話をしてしているとノックの音がした。

入つて来たのはリンネ選手のセコンド兼コーチの人だった。

「失礼します。リンネのコーチをやつております、ジル・ストーラと申します。八神ユタ選手にお話があつて来ました」

「ユタに?」

ああ、そういや何か言つてたっけ?

「八神ユタさん。改めて初めまして。フロンティアジムでコーチをしております。ジル・ストーラと申します」

「はあ、私に何か?」

「単刀直入に言います。八神ユタさん、私の元で鍛えませんか?」

……?…?…?…?…?…?…?

「すみません、今なんと?」

「私のところに来て鍛えませんか?」

「お断りします」

即答で断るとジルさんも目を点にして驚いてる。なんなら母さんも驚いていた。

「それは…なんでですか?あなたには才能があつて私はそれを伸ばせる自信があります。実際、あなたと戦つたリンネも一年であれだけ成長できました。それに2人で共に鍛えれば、より強くなれます。確かに初対面で信用してくださいと言うのは無理があるかもしれませんが……」

「そう言うわけじゃなくてですね。まあ、才能の有無は置いておきま

して。今のところは私のコーチ、セコンドは私の家族だけなので。…
申し訳ないです。私の身勝手です」
「そう…ですか。わかりました。無理強いはしません。ですが…：少
しでも興味が出たらでいいの、その時は連絡してください。あ、これ
私の名刺です。では」

と言ってジルさんは出ていった。

20話 同門対決 コロナVSアインハルト

「ねえ、母さん。なんでこんな事をしているのかを説明願いたいんですが」

「ウチの気分がええからや♪」

「いやそれは見ればわかるけど」

今は母さんの車で帰っている…筈なんだけどすごく狭い。理由としては、なぜか後部座席で母さんの抱き枕状態になっているからです。いや本当になんで？

運転はシャマルさんがやってってくれてるから大丈夫なんだけど。恥ずかしいからやめてほしい。

「♪」

「なんでそんなに上機嫌なの？」

「ふふーん、別に♪」

と、こんな感じで聞いてもはぐらかされる。

横の座席を見るとシグナム姉さんとミウラ、助手席にはザファイがいるがシグナム姉さんもなぜか気分がいい感じでミウラは母さんたちのテンションに困惑している。

うん、わかるよ。私ですら困惑してるから。

「あ、そういえば三回戦の組み合わせってどうなってんだっけ？」

『いまトーナメント表を出しますね』

もう構うのも馬鹿らしいやと思ひ話題を変えると、プライドがトーナメント表を表示してくれる。

「ありがと。えーと……私の相手は、この人確か去年の予選2位だけ」

『学校の合間などでの資料集めからですね』

「うん。そういえばミウラは？」

ふと気になってミウラに聞く。

「ボクはヴィヴィオさんですよ！もう、今から楽しみでしょうがないですー！」

元気だね。

他の子はどうなってんだろ

『リオさんは、ハリーさんかエルスさんで祝日のプライムマッチで勝った方ですね。コロナさんは……どうやらアインハルトさんとのようですね』

「はい？本当に？」

『そして、コロナさんとアインハルトさんの試合で勝った方がジークさんとやるみたいですよ？』

「うわあ。くじ運悪う。いや私も人のこと言えないけどさ」

まさかの同門対決。しかもこの組み合わせ。悪意しか感じられないのは気のせい？

にしても……どうしようかな。インターミドルが本格的に始まってからコロナちゃんとの練習はあまりできてないし……。とかいって私が行ったところで対アインハルト練習になるかと言われるとNOだし……。

そもそもどちらかに加担するのは……ノーヴェさん的にはOKのかな？

『マスター、コロナさんからです。練習を一緒にしたいんですけど、ご予約は空いていますか、と』

「あー、うん。私としては空いてる日になら構わないんだけど……シグナム姉さんとの練習がない日になっちゃうけどそれでもいいなら、って伝えておいて」

「別に私たちとの練習を減らしても構わないぞ？」

「いやいや、それとこれは話が別だよ。シグナム姉さん達の貴重な時間を貰ってるのにそんな蔑ろにする気はないよ。……でもなあ、練習してあげるって言ったの私だし……。とりあえず、コロナちゃんにシグナム姉さんとの練習が無い日を連絡しておいて。それから練習日を調整していく」

『了解しました』

くプライムマッチ開催日く

『マスター、本当にいいんですか？プライムマッチを見に行かなくて
も』

「いいか悪いかで言われたら…まあ、悪いけど、一応録画は頼んである
し。…それよりはコロナちゃんとの練習のほうがいいかなって」

『それは構わないんですが…いくらなんでも自分の練習を疎かにしす
ぎでは？』

「それについてはご心配なく、私の相手はゴーレム創造系魔法の使い
手だから。コロナちゃんとならいい練習になる」

『左様ですか。ま、コレで負けたらシグナム様達にこっぴどく絞られ
るだけでしようし？』

「怖いと言わないで」

さて、録画はルーさんに頼んでおいたしコロナちゃんの練習場所に
向かいますか。

「あ！ユタさん！今日も来てくれたんですか！」

「うん。よろしくね」

練習場所になっていた公園にいくとコロナちゃんとオットーさん
が休憩していた。今はランニング終わりらしい。

「ユタさん、ここ1週間毎日ありがとうございます」

「いえ、私も操作系の魔法の使い手が相手なのでちようどいいってだ
けですから。あとはシグナム姉さん達が忙しくて練習があまり出来
ていないですし」

『と、いうのは建前でコロナさんが心配なだけです』

「おいコラ」

この愛機は……。いや確かに心配でしたけども。バラす必要はな
いと思うんですけど？

「ユタさんが……。私を…」

「コロナお嬢様!?!」

ほら見ろ、赤面しちやっただじやないか。

「落ち着いた?」

「は、はい…:すいません」

「悪いのは全てプライドだよ。謝る必要はない」

『なぜ私のせいなのかを説明願いたいのですが?』

自分の言動^{デイク}を振り返って見なよプライド。

「…:オットー、ユタさん」

「はい?」「ん?」

「わたし、アインハルトさんに勝てると思う?」

…:どうしたの。コロナちゃんらしくない質問だね。

「そ、それはもちろん」「急にどうしたの?」

コロナちゃんは小さく笑いながら胸中を吐露しだした。…:余程心配なのか、それともまた別の想いがあるのか。

「わかってるんです。ユタさんにも一度お話したことがあります
が、私は普通の初等科4年生で少し変わった魔法が使えるだけ。アインハルトさんは才能も実力もあつて霸王流つていう正統派の技もあつて

ものすごく努力してる。今も、きつと。

普通に戦ったら勝てっこないよね」

と、コロナちゃん的笑顔には全く力が感じられない。

「でもね?」

コロナちゃんがさらに続ける。

「私にしかできない魔法があるつてヴィヴィオやリオが言ってくれるの。ノーヴェ師匠とオットー、それにユタさんも私のいいところをいっぱい伸ばしてくれてる。ルーちゃんが作ってくれたブランゼルもいる。

だからね…:勝つ、絶対に勝ちます!三回戦は私が勝つ——!!?」
「——はい!」「うん…:強いね、コロナちゃんは」

本当に強い子だ。私なんかより遙かに…。

「さ、休憩終わりです！次のメニューに行こう！オットー！ユタさん！引き続きお願いします！」

「はいっ！」

「もちろん。絶対にアインハルトに勝とうね」

く夕方 ミッドチルダ市内 魔法練習場く

「ふーん、番長勝ったんだ」

『リオさんの次の相手はハリーさんですか。なかなか厳しいですね』

まあ、私はエルスさんよりは番長の方がやりやすいから私的にはラッキー。にしても結果だけだと本当に接戦だったばいね。

「おーい、ユタ。再開するぞ！」

「はい！今行きます！」

オットーさんが抜け、代わりにノーヴェさんが合流。いまは最後の調整をやっていると。とは言っても私のやることと言えば魔力運用の調節とかの微調整くらいなだけだ。

「お前たちの試合、いよいよ明日だな」

「はいっ」

お前たちとはもちろん、コロナちゃんとアインハルトの試合のことだ。

「お前のセコンドは私とオットー。ユタは試合があるから観に来れるかは分からんらしいが……」

「時間が合えば応援には行きますよ」

「ありがとうございますっ！」

「で、アインハルトにはデイエチとウエンデイ。まあセコンド対決にはならねーな。あいつらは単に保護者役だから」

「はいー」

と話しながらも私を交えた最後の調整をノーヴェさんとコロナ

ちゃんとやっっていく。

「さて、このへんにしところ。今日までお前に教えたことでアインハルトとは十分に戦えるよ」

『戦える』だけじゃ嫌ですよ。勝ちたいです」

「そりやもちろん」

「勝つための作戦……ちゃんとあるんですよ」

「コロナ？お前……？」

ノーヴェさんにもこつちを見てくるが、わからない、という意味を込めて首を横に降る。現に作戦とかの話は私も初耳だ。

「構えてください！ちよつとだけお見せします！」

と、コロナちゃんが構える。その構えはまるで……

——ドギョーン！——

「は……？」

「コロナ……お前……!!??」

「今のは一瞬だけでしたが後先考えなければもう少しやれます」

あまりに見覚えのある構えから繰り出されたのは、同じく見覚えのある技。

「こんな技を教えた覚えはねえぞ!?!?身体への負担がでかすぎる！」

「コロナちゃん……私も同意見だよ。その技はやるべきじゃない」

「今のもゴーレム操作の応用ですよ。ちゃんとノーヴェ師匠、それとユタさんにも教わった技の延長です」

確かに……そんな魔法を少し教えた記憶はあるけど……。だけどゴーレム操作の手助けになればと思いきや教えたことだった筈なのに。

「これくらいやらないとアインハルトさんには勝てませんから」

「だとしても身体に危険があるような技はコーチとして容認できねーよ」

「うまくやります」

「それでも……」

「まあまあ、とりあえずコロナちゃんの言い分を聞きましようよ」

と、ノーヴェさんを落ち着かせる。コロナちゃんは何か決意している感じがしたから。

「チームナカジマの4人の中で——私1人が色んな能力で劣っていること。自分が1番わかっています。

でも、だからってアインハルトさんやヴィヴィオやリオ、ユタさんやノーヴェ師匠にも、気を遣われたりしたくないんです。

みんなのこと大好きだから、がっかりされたくないんです。

証明したいんです——わたしだってチームナカジマの一員でアインハルトさんとだってちゃんと戦えるんだって」

あー、ダメ、わたしこういうのには弱い。出来ることなら全力で背中を押してあげたい……けど、どうしても過去のことから躊躇ってしまう。それ故、何も言えなくなってしまった。

『でも、だからと言って身体に負担のある危険な技を好きに使っていないというわけには行かないのは、コロナ様ならお分かりでしょう?』

「プライドの言う通りだコロナ」

「プライドもノーヴェさんも……まあ、そこはわたしも同じ立場ですけど」

「あう……」

「つーわけで練習時間延長だ。明日に疲れを残さねーギリギリまでその技の使いどころを詰める。

証明しようぜ。お前らしい戦い方でアインハルトに勝ってやれ」

「わたしも全力で手伝います」

「はいっ！ありがとうございます！」

～三回戦開催日 予選第1会場～

『マスター、本当に次の相手は見なくても大丈夫なんですか?』

「…ごめん、今日だけはこつちを優先したい。大丈夫、ちゃんと、私のこともやるから。今日だけは」

『まあ構いませんが、その代わりキチツと勝ってくださいね?』

「もちろん」

いまはコロナちゃんの応援に来ている。

試合は4ラウンド判定勝ちです。超急いで第2会場からきたよ。なかなか危なかった、とだけ言っておきます。

まあそれはさておきコロナちゃんの試合がもう始まるうとしていた。

昨日までの練習を見る限りアインハルトにも、もしかしたら勝てるかもしれない。

『いつからマスターはロリコンになられたんですかね……』

「コラ、まだなつてないよ」

『まだつてことはなる気はあるんですね。わかりました。はやてさんに伝えておきます』

「ちよつと待て!?!?なりません!なりません!なるつもりもありません!コロナちゃんに対してだけです!」

『え?!?コロナさんが好きなんですか?!?!?』

「なんでそうなる?!?!?」

『冗談ですよ。わかっていますからご心配なく』

「この……クソ愛機が」

まあ、ロリコンでないとわかってるならいい。

「お、始まるね」

『そうですね』

コロナちゃんとアインハルトが入場し互いに向かい合っている。

「…頑張れ」

『マスター、なんでそんなにコロナさんを応援するんですか?』

プライドが聞いてくる。うーん、なんでだろうな。

「あー、うん。昨日のコロナちゃんの想いを聞くまでだったりあの技を見るまでは、両方を応援、って思ってたんだけど…ね。ちよつと、昔のことを思い出して、つい」

そう言っている間にもコロナちゃんとアインハルトの試合は始まる。

「うん、マイストアーツ創成戦技もしっかりできてるね」

『あれだけマスターと練習してましたからね。それを抜きにしても流石と言うべきでしょう』

マイストアーツ
創成戦技マって言うのは格闘戦技とゴーレム創成を組み合わせた戦技のことだ。

ゴーレムを腕の部分だけを創成し腕に纏い、格闘戦技をつかいアインハルトを殴る。感覚的には私の腕の硬化魔法と似ているらしく、少し助言を加えたこともあったつけ。

「お、アインハルトはコロナちゃんを見失ったね」

『ゴーレム創成できますね』

そうだ、とにかく自分の土俵に引き摺り込め。わざわざ相手の得意な土俵に乗る理由はないのだから。

ゴーレム創成をさせまいとアインハルトはコロナちゃんにラッシュをする。

みるみるうちにライフが削られていく。

そして、殴り飛ばされる。が、その間にも詠唱は終わっていた。

「叩いて碎け——【ゴライアス】ッ！」

コロナちゃんは飛ばされながらもゴーレム創成をした。

『Rock Bind』

そして流れるようにアインハルトにバインドをする。

「ギガントナックル！」

そのままアインハルトにゴーレムの腕をぶつけ、場外へ弾き飛ばした。

『ダウン コロナ選手及びゴーレム ニュートラルコーナーへ』

「はいっ」

ライフ

アインハルト 5200

コロナ 3500

「うん、完璧だね。あとはどれだけ優位を保てるか」

『あの技を使わずに終わればいいんですが』

「うん、そうだね」

あの技はつかわないに越したことはない。

そして、試合再開直後、アインハルトはゴーレムの攻撃をかいくぐ

り空破断を繰り出しコロナちゃんをゴーレムから引き剥がす。

ライフ

コロナ 1300

「霸王流、破城槌！」

「うおっ、あのゴーレム壊すか」

『流石の攻撃力ですね』

創造主のいなくなったゴーレムをアインハルトは持ち前のパワーで粉碎した。これだとう見てもコロナちゃんの不利。余程の策がない限りは盤面をひっくり返せないだろう。

「でも……まだ終わりじゃないよね？」

そうだ、コロナちゃんはまだ終わりじゃない。

筋力 体力 魔力量だとチームナカジマの中だと一番目立たないかもしれない。

でも冷静さや知性、発想力は4人の中でナンバーワンだと思う。なんなら私よりも上だろう。

「でも……身体操作は負担が大きすぎるんだよなあ」

『そうなのですか？』

「うん、シグナム姉さんにも何度も釘を刺される程度には」

ダウンから立ち上がり試合再開するとコロナちゃんは棒立ちになっっている。

「(1ラウンド残り20秒。インターバルで回復させたら何かあるかわからない。コロナさんにはヴィヴィオさんのようなカウンターはない。接近戦で押し切る！)」

【ファイト】

「(S.t.^{ザンクト}ヒルデの一年生になって——ヴィヴィオと出会って友達になっって。

格闘技をやってるって聞いて随分びっくりしたっけ。

一緒に居たいから一緒に練習するようになって。格闘技が好きとか嫌いかよくわからなかったけど。

わたしが格闘技や魔法戦技をやめちゃったら
ヴィヴィオと友達でいられなくなる気がする。

でもホントは、ヴィヴィオみたいに上手くできなくて楽しくなくて。

そんな時はノーヴェ師匠がいつも励ましてくれたり導いてくれた。
格闘戦技が大好きでいつかママを守るくらい強くなりたいつて
話すヴィヴィオはいつも素敵で。

春光拳と炎雷魔法をもっとマスターしたいって頑張っているリオ
は格好良くて頼もしくて。

ご先祖様の遺志を継いで本当の強さを手に入れたいつて一生懸命
なアインハルトさんはすごく立派で。

家族のみんなに喜んでもらいたくて自分の体質のことも顧みず強
くなりたいと思つてたり、好きな人に振り向いて欲しくて頑張つてい
たユタさんはとてもすごくて、憧れて。

そんなみんなに恥ずかしくない選手でいたかった。

あともう少し…みんなと同じ目線で、同じ速度で歩いて行きたくて
だから——痛くても使おうと決めたんだ」

そして、アインハルトとコロナの距離が縮まる。

「ネフィリムフィスト！」

「!?？」

コロナちゃんのカウンターが綺麗にアインハルトの顎に直撃した。
続けて回し蹴りをし、アインハルトは倒れた。

『ダウン』

ライフ

アインハルト 970 クラッシュエミュレート 中度脳震盪

視界混濁

コロナ 1100

カウント8でアインハルトはふらつきながらも立ち上がる。

「（格闘戦での反撃はないとコロナさんを侮った———こんな形では終われない———）」

「（残り10秒……創成している時間はない。ネフィリムフィストで押し切ろう！）」

そして、互いに距離をつめ格闘戦が繰り広げられる。

「ネフィリムフィスト 《虎咆》！」

そして、強烈な打撃がアインハルトに命中した。

それと同時にゴングが鳴った。

「コロナちゃんのあの技、練習の時にも思ったけどヴィヴィオちゃんとりオちゃんの技だよ。あの調子だと他の人の技もあるかな。私のもあったりして」

『いまは作動も安定していますね。あのまま押し切れたらよかったですね』

まあ、あれはしょうがない。最初のネフィリムフィストでアインハルトが警戒しちゃったしね。

コロナちゃんのあれは最初だからこそ意味がある。

「まあ、落ち着いていけば勝てるとは思うけどな」

『本当にそこですね』

「でもなあ……あの技はコロナさんの持ち味を殺してしまうのが……。焦らなきゃ、なんとでもなりそう……だけど」

21話 決着

「身体自動操作？」

「ええ、ゴーレムを動かす時の要領で自分の体を操作しているんです」
リング外ではインターバルに入ったアインハルトとデイエチ、ウエ
ンデイが話をしていた。その内容は、コロナの技の正体について。

「巨体のゴーレムを動かせるだけの力です。そのまま打撃に使えばま
さに『巨人の拳』。そしておそらく事前にプログラムした動作——
特定のカウンターを設定したトリガーで自動再生するようにもして
います」

「そっか、特定の打撃に反応して自動で撃つようにはしておけば……」

「反応時間ゼロのオートカウンターっスね」

「対策は？」

「あります。さっき思い出しました。次ラウンドでやってみます」

インターバル回復

アインハルト ライフ7530 クラッシュエミュレート 全身

軽度打撲 左腕中度打撲

コロナ ライフ 11180

観客席では、何かに思いを馳せながらユタとプライドが会話をして
いた。

「身体操作に自動反撃。格闘戦だと優位に立てそうだけど実際にはそ
うじゃないんだよなあ。特にアインハルトみたいな才能に溢れてる
人に対しては優位どころじゃない。自分を餌にするようなものだし」
『もともと、身体操作はタイムロスが出やすいですもんね。それに、コ
ロナさん自身の動きにも限界はありますし』

「それに……コロナちゃんには悪いけど今使っているのはヴィヴィオ
ちゃん達の真似事。そんなものはアインハルトには通用するとは思
えない。だからこそ初見の時に倒しきれなきや意味がなかった」

と、私が喋っている間にも予想通りコロナちゃんが押され出している。

格闘戦で押していくつもりなのかコロナちゃんはゴーレム創成をしようとはしていない。

「そうとう焦ってるだろうね」

『自身の切り札が通じなければそうなりますよ』

「まあ、そうなんだけど」

「ネフィリムファイスト「マイストアーム」！」

コロナはゴーレムの右腕を作りアインハルトに向ける。

「(身体自動操作や頑強な腕部武装。霸王わたしにとってその対策は、600年前から取り組み続けた課題だったんです)」

アインハルトは真正面から受け止めゴーレムの腕を破壊する。コロナの右腕を巻き込んで。

その直後、上空にいたコロナに近づき叩き落とした。

ライフ

コロナ 9010

「(痛い、痛い、痛い！けど！まだいけるはず！左のリボルザーキャノンからのスパイクのコンビネーションが——)」

「鋼体の型『牙山』」

コロナは再度アインハルトに向かっていき、アインハルトは防御を固めた。

コロナは左の打撃からの回し蹴りを繰り返すも、アインハルトは威力を殺さずに肘で受け止め、逆にコロナの四肢を破壊する。

ライフ

コロナ 7660 クラッシュエミュレート 左拳骨折 右脛強

度打撲

アインハルトは更に追撃をする。

「(拳が来る！大丈夫、オートカウンターが動作する！)」

そして——アインハルトは拳をぶつける直前で止めた。

「(しまっ……)」

もう、遅かった。

発動した自動操作を止めることができわけもなく、ユタのカウンターを模したコロナのカウンターを避ける。

ドカン！

そしてそのまま上から叩き潰した。

「うまいね……オートカウンターの間合いを読み切って空振りさせて反撃。完璧な筋書きだね。にしても予想してたけど私のカウンターもやっぱりあつたね」

『コロナさん……心が折れてもおかしくありませんよ。先ほどのアインハルトさんの攻性防御で拳も足もクラッシュしてますし』

ユタとプライドは冷静に戦況を分析する。その上でコロナの勝ち目が限りなく低いと分かっているが、それでも尚、コロナがこのまま終わるわけがないという確信も持っていた。

「コロナちゃんならきつと……大丈夫。ここからでも……きつと」

「大……丈夫……です」

「……!?？」

「マイストアーツとネフィリムフィストは……ここからが神髄ですから……」

コロナはフラフラしながらも立ち上がる。

「終わりになんてしません！」

ライフ

コロナ 530

「ネフィリムフィスト、フルコントロールモード」

「五体の完全操作。それも外から動かしていますね。……コロナさんもそこにたどり着いたんですね」

アインハルトには先人の記憶……特に聖王女オリヴィエと話している光景を思い出していた。

そしてそれは、観客席にいたクローンもうひとりも。

「ですが、その技は危険を伴います。危険なことになる前に…が終わらせませす！」

「終わらせません。私だって自分に胸を張ってみたいから——!!」

「(五体の完全外部操作、そしてこの距離。コロナさんの最大攻撃はおそらく……)」

「ガイストダイブ！」

コロナはアインハルトに高速で突撃した。
それをアインハルトは防ぐ。

「(防がれた!?!?)」

「(やっぱり高速突撃! 読めてなければ食らってた——!)」

「(それでも当たるまで何度だって……!!?)」

コロナは何度も何度もアインハルトに向かっていく。

が、一歩届かない。防がれ、避けられていく。

その間にもコロナの体は限界が近づいていた。

「骨が折れようと腕が千切れようと、神経が切れようと戦える五体の完全外部操作。その引き換えに持っていかれるのは膨大な魔力制御のリソースと限界を超えて動かされぶつけられる体の損傷。アレは、本当に最後の切り札なんだよね」

『なるほど。シグナム様が教えない理由も納得です。マスターがこんな事をしようものならすぐに選手生命は断ち切られていたでしょう』
それ以上であれば……あの技は……

「ん……もうそろそろ決着かな?」

思わず昔のことを思い出してしまった。いけないいけない。集中しなきゃ。

アインハルトさんが反撃をしようとしたのをみて私は距離をとった。

「(手も足も…体中が痛いよ。最後の切り札も決定打にならない。やっぱり無理なのかな…。どんなに頑張っても…アインハルトさんには…)」

もう、自分自身でも諦め掛けていたのがわかった。

このまま折れてしまった方が、きっと楽かもしれない。どうせ幾ら足掻いても…

「コロナお嬢様ツ!!?」

そんな、私の考えをセコンドからの声が遮った。

「まだですよ!まだ練習の全部を出し切ってません!僕やユタさん、姉様と一緒に練習した強さ!ゴoremマイスターとしての戦い!諦めないで見せてくださいっ!!?秘密の切り札なんかなくて…そんな無茶な戦いをしなくたって!

コロナお嬢様は強いんですっ!!?」

…オットーは本当にいい先生だなあ。私なんかにはもったいないくらい。

そうだ、忘れていた。私は…

(コロナちゃん、試合の時は、自分を信じて戦うこと)

(自分を信じて…ですか?)

(そう。まず、自分を信じないっていうのは、一番ダメ。それはコンディションにも関わってくるし、なにより劣勢になった時には手遅れになる。でも、相手が格上で自分の技が通じなくて心が折れそうにな

る時があるかもしれない。実際に私もそうだったし）
（ユタさんですか？）

（うん。ヴィクトーリアさんとやった時なんだけどね。けどね、自分を信じれず、諦めたらダメ。それだけは絶対にしちやダメだよ。その瞬間、負けを意味するから。それでも、もしかしたら心が折れそうになるかもしれない。そんな時はね…今までの自分のやって来たこと、自分に関わってくれた人たちを思い出してみて。そうしたら…きつと、立ち上げられる）

「（そうだった、私、何してたんだろ。私は 格闘技選手でもあるけどそれ以上に——）ごめんなさい、オットー、ノーヴェ師匠、ユタさん」

「（自動操作を解いている。魔法戦に切り替えた？）テイオ、全力警戒です」『にやっ！』

「ケイジング・スピアーズ」

岩の柱を創造しアインハルトさんを覆った。

「ごめん、ブランゼル！もう一度お願い！」

『Yes anytime!（はい、いつでも！）』

「創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに、蘇れ巨神！叩いて碎け【ゴライアス】！」

得られた僅かな隙を使いゴーレムを再構築する。

「そうだ、私は…：：：ゴーレムマイスターだ！」

「（再構築だけあって創成が早い！それでも破城槌ならゴライアスは一撃で…！）」

そして、アインハルトさんがケイジング・スピアーズを碎きゴライアスを壊そうと向かっていった。

『にやあっ！』『!?』

だから、私は後ろに回り込んだ。

「マイストアーム【スパイラルフィンガー】！」

ゴーレムの腕を纏いアインハルトさんに打撃を与える。

けど、ピンチには変わりはないのはわかっていた。けど思っていたのは…昔のノーヴェ師匠に言われたことだった。

(練習、やっぱりキツイか?なんでこんな思いをしてまで…って思ったりするか?)

(その…)

(まあ練習も組手も苦しかったり痛かったりするけどよ、それもみんな最高の瞬間のためなんだよな)

(最高の瞬間?)

(練習した技が綺麗に打てた時、会心の一発をドカンと打ち込めた時、自分が前より強くなっていることを実感できた時。そんな瞬間をお前らに山ほど味わって欲しいから…少し苦しい練習をさせることもある。けど、それを乗り越えた先に待ってる楽しさを…お前にも知って欲しいんだよ)

「コメットブラスト!シユートツ!」

私は魔力弾を岩で覆ったものを何発もアインハルトさんに打ち込んだ。けど、それをかいくぐってアインハルトさんはわたしと距離を詰めてくる。

ゴーレムを操作して近づけさせないようにする。

それと同時に、床に手をつく。

「ロックバインド! (そうだ…ノーヴェ師匠が教えてくれたのは強くなることの楽しさ。特訓に付き合ってくれたオットーはわたしが強くなるのを自分のことみたいに喜んでくれた。ノーヴェ師匠はいつも私のことを気遣ってくれた。ユタさんは自分のこともあるのに私を一生懸命向き合ってくれた。)

見てもらわなきやならないのは—本当に自分に胸を張れるのは。

1人で思いつめた末の必殺技なんかじゃなくて—

チームとコーチ、みんなと一緒に重ねてきた練習の成果—」

アインハルトさんにバインドをしてゴーレムのギガントナツクルを直撃させる。

「(ティオ……助かりました)」『にやー!』

ライフ

アインハルト 640

「ああ…アインハルト、大丈夫つかか？」

「大丈夫、ダメージ緩和と回復補助がティオの本領。アインハルトをしつかりと守ってくれてるよ。ティオのサポートとアインハルトの頑丈さと霸王流の鉄壁防御。並の攻撃じゃ進撃する霸王は止められないよ!」

ノーヴェたちがコロナを信じているのと同じようにデイエチたちもアインハルトを信じていた。

ここからは二転三転と攻防が続いていた。

ライフ

コロナ 190

アインハルト 510

「これで決めるよ、ブランゼル、ゴライアス!」

『Yes!』

「パージブラスト、ドリルクラッシュャーパンチ!!?」

コロナはゴーレムの右腕を回転させながらアインハルトに飛ばした。

アインハルトは真正面からそれを受け止めた。

「霸王流——旋衝破アーツ!」

そのままゴーレムの腕を投げ返しゴーレムを破壊した。

それはコロナとしても予想通りで、崩れたゴライアスの破片を使い更に追撃をかける。

破片が床に落ちると同時、それらは床から生えている石の触手のようになりアインハルトへ向かっていく。

だが、それすらもアインハルトは真っ向から壊す。

「(これが本当の最後の一撃!)」

崩れ去るゴライアス、石の触手に紛れてアインハルトの後ろに回り

込んでいたコロナは右腕にゴーレムの腕を纏っていた。

が、アインハルトはそれを読んでいたかのように振り返り

「霸王【断空拳】！」

コロナに必殺の一撃を撃ち込んだ。そのまま後ろに吹き飛ばされ壁に激突する。

ライフ

コロナ 0

『決着！アインハルト選手の勝利です！』

コロナvsアインハルトの同門対決は、アインハルトに軍配が上
がった。

～第一会場 救護医務室～

「頑張ったんですが届きませんでした。アインハルトさん、やっぱり強いです」

「でも、あと一歩のところまで追い詰めてたぜ」

「いい試合でしたよ。コロナお嬢様はやっぱり強いです」

救護医務室には包帯をあちこちに巻かれたコロナと付き添いに来たノーヴェ、オットーがいた。

「お前のすごいところ、ちゃんと証明できてたよ。オフィシャルレコード公式戦績と満員の観客が証人だ。お前の創成戦技はマイストアーツいくらでも応用の効くいい技だ。鍛えたら鍛えただけ強くなる。

今のチームで一緒にやっていけるよな？」

「はい、私はチームナカジマの一員ですから。みんなと一緒に練習していききたいです」

そんな良い雰囲気の中、医務室の扉近くで小さな話し声が。

(マスター、早く行ってください)

(いや…この空気の中いくのは……)

(じれったいですねえ)

(いやだつてさ…)

『ノーヴェさんっ！コロナさんっ！オットーさんっ！お客さんです！』

「あ、おいコラー！」

この愛機！なんでわざわざ呼ぶかな？！？

「ユタさん…？」

「あ、あー、えーと、コロナちゃん、お疲れ様」

この時、自分でもかなり辿々しいのはわかっていた。ただ、正直なところ、何を言えば良いのか分からない。下手な慰めは逆効果だろうし。

「ユタ、お前の試合はどうだった？」

「4R判定勝ちです。で、急いでこっちにきました」

『聞いてくださいよ、ノーヴェさん。マスター、コロナさんに教え方を間違えたんじゃないか、余計なことをしてしまったんじゃないかってずっと自分を責めてるんですよ』

「何バラしてんの？！？」

ほら見ろ、ノーヴェさんにジト目で見られたじゃないか。

「ユタさん、そんなことないですよ。私はずっと、ユタさんに感謝しています」

「僕もですよ、お嬢様がここまで強くなられたのもユタさんの手助けあってこそです」

「そうだ。少なくともユタのお陰でコロナのマイストアーツの練度は予定よりもはるかに上がったんだからな」

「そ、そうですか…」

それなら…まあ、よかった、のかな？

「ああそうだ。コロナちゃん、あとノーヴェさんやオットーさんにも言わないといけないんですが」

「…？」

「これからも私、八神ユタはコロナ・ティミルの練習相手が続けたいと

思っているんですが、構わないでしょうか？チームとしてやっていくかどうかはまだ未定なんですが…とりあえず最初は、コロナちゃんの魔法戦技の練習相手として」

あ。あれ？みんなが驚いてる。そんなに変なこと言ったかな？

「ユタさん！こちらこそお願いします！」

「アタシとしては構わないぞ」

「僕も構いませんよ」

「はい、ありがとうございます」

『皆さん、マスターのワガママを聞いてくださりありがとうございます』

さてと、それじゃあ家に帰りますか。

「それでは、失礼します」

「おつかれ様でした。ユタさん、4回戦以降も頑張ってください！」

「うん、ありがとう。コロナちゃん。ノーヴェさんもオットーさんも失礼します」

「おう、気をつけて帰れよ」

「これから宜しくお願いしますね」

挨拶を済ませた後は直で家に帰宅しました。

「……っ！はあ…はあ…」

久しぶりに、悪夢を見た。

もう良い加減に覚えてしまったオリヴィエの記憶

それともう一つ。お姉ちゃんの夢を。

つまるどころ、私の心がまだまだ弱いから、なんだろうか。

思わず、蹲ってしまふ。

「うう…お姉ちゃん…おいて…いかないで…」

頬を伝う涙にも、ずっと声をかけてくれていたプライドにも気づかず、母さんに強引に抱き寄せられるまで、その状態が続いていた。

22話 過去の記憶

あれからの試合は

ヴィヴィオちゃん vs ミウラ

リオちゃん vs 番長

の試合があつたが結果はミウラ、番長の勝利だった。

映像で見たけど、どれも接戦だった。だけどもある意味予想通りの結果とも言えた。

つまり三回戦の結果、チームナカジマの初等科組は全滅したことになる。

私の4回戦は映像確認だけだとアインハルトみたいなハードヒッター。最近、ハードヒッターとやるのが多い気がするのは気のせいだろう。

そして……アインハルトは、ジークさんとらしい。

「さーてと……それじゃあ練習行ってきます」

「行ってらっしゃーい。気をつけえよー」

「はーい」

1人で練習というのも味気ないがまあ仕方ない。それに……昨日の夜のことがありさらに心配をかけてるし、これ以上心配をさせたくなかった。

「だけど……何故だろう。今はとにかく1人が寂しいと感じてしまった。」

翌日

また、夢を見た。最近多い。

「だけどいつもと違ったのは夢の中身。」

ジークさんとの夢でもなければ、オリヴィエの夢すら見なかった。今まで夢を見た時はそのどっちかは絶対あつたのに。その代わりに

たった一つの夢だけを見た。

昔の…まだお姉ちゃんと一緒に母さんにお世話になっている頃の夢だった。

そして……………

なんのいたずらか、姉さんが死ぬ場面もあった。

正確には、殺されかけて、もう死ぬ寸前の場面。私のせいで、私に流れる血のせいで、殺されてしまう夢。

(ユタ、これからはこの人にお世話になるんだよ。もう…辛い思いはしなくて済むよ)

(?)

(はやてさん、これからはこの子を宜しくお願いします)

(ええって、そんなにかしこまらんでも。それに、ユタちゃんだけやない。マリナも、ユタちゃんも、これからはウチの家族なんやから)

(ユタ……あなたは普通の女の子。クローンであるとか関係ない。女の子らしく、恋もして、元気に、幸せに…………)

(なんでや！約束したんやろ！ユタと、これからはずっと一緒にいるって…)

(はやてさん、嘘をつく形になってしまいました。これからは…あの子を…)

ジリリリリリリ!

そんな夢は目覚ましの音で途切れた。

「ツハア^{!!}?はあっ……………はあっ……………」

最近いつもこうだ。お姉ちゃんとの夢ばかり見てしまう。その度に心が苦しくなる。だけど…逃げるのは許されない。私が弱いせい

で、私がオリヴィエのクローンなせいで……

「いや、そんなことを考えちゃ……。早く学校の準備を……」

心に残ったネガティブな気持ちを無理やり吹っ切って私は準備をして学校に向かった。

↳St. ヒルデ学院↳

「アインハルト。おはよう」

「ごきげんよう、ユタさん」

アインハルト発見。相変わらずの高嶺の花っぷり。

「ユタさん、これはやてさんからお預かりしています」

「やっプライド。1日ぶり。アインハルトー。何もされなかった？」

『マスターの恥ずかしい過去は遠慮なくバラしましたのでご心配なく』

「ちよつと待とうか？何してくれてんの君」

「い、いえ、何も聞いてませんよ……？」

「ちよいまち、アインハルト、なぜ疑問形」

「い、いえ。決して、エリオさんの前で喋ることが飛んだとかそういうのは聞いてませんので」

「よし、プライド。あとでお説教」

『外界からの会話を遮断しますね』

このやろ！自分がデバイスだからって調子乗ってるな！

「ユタさん……？今日、どうされたのですか？」

『……？マスター、今日はどうかしたんですか？』

と、まさかの二人同時に同じことを聞いてきた。

「どうしたって？何が？」

「ええと、すごく辛そうな感じがしまして」

『心なし空元気というか。何かあったんですか？』

「いや、何もない」

『そうですか。インターミドル予選もまだあるのですから体調管理に

は本当にお気をつけください』

「うん」

急に何をいうんだらうね。この愛機は。

まあ、当たってるっちゃ当たってるんだけど。ていうかそんなに顔に出やすいのかな私。

↳翌日 抜刀居合天瞳流 練武城↳

「はあ、ジークさん対策ですか」

「ああ」

「ミカヤさんいるなら私いらないんじゃないか？」

「いやいや、そうでもないぞ。私とユタちゃんではジークの分析の仕方が違うかもしれないじゃないか」

「ミカヤさんと私でも抱く感想は大して変わらないと思いますけど…」

翌日、私はミカヤさんのところに来ていた。

なんでも、アインハルトのジークさん対策の練習をするらしい。

……ぶっちゃけると、対策したところで大して変わらないと思ってるんだけど。

「そういえばアインハルトはヴィヴィオちゃん達のことには心配じゃないの？私、結構心配してたりするんだけど」

「そうですね……。心配はしていますが不安はありません。砕けた夢は、何度でもつなぎ合わせて、自分の弱さを超えて強くなっていけること。一流選手達はみんなそうやって強くなっていったと聞きます。

みんな、きつとすぐに立ち上がります。そして必ず強くなっていくてくれます！昨日よりもっと、今日よりもっと、きつと信じられないくらいに！」

……なるほど。

「じゃあ、アインハルトは負けられないというわけだね」

「ミカヤさん、なかなかの無理難題な気がするんですが」

「いえ、絶対に勝ちます！」

三日後 予選会場

4回戦からは一つの会場で行うらしい。これは一昨年も去年も一緒だった。

移動の手間が省けたのはいいね。

オープニングバトルは予選1組、つまりアインハルトとジークさんの試合なので観客席は見事に満員御礼。

「さすがに人が多いな」

『そりゃあ、元世界王者の試合ですからね』

元世界王者とはもちろんジークさんのことだ。

「あ、番長発見」

「あ！ユター！」

いつもの4人組で歩いていたのは番長ことハリーさん達だった。

「ユター：お前、俺の試合を見ずに帰ったららしいな？」

「映像でちゃんと見ましたって」

「はん、まあいい。……ん？あれはエルスか？なんであんな格好」

「ほんとですね。あの格好ってことは……」

下でエルスさんを見つけた後、ハリーさんと目を合わせ示し合わせたかのように下に降りる。

「よう、デコメガネ！」

「おはようです、エルスさん」

「おや、ハリー選手にユター選手」

あれ？エルスさん、デコメガネはいいんだ。アホデコメガネだと怒ってなかったっけ？アホが付いてなかったらいいのかな？

「なんだ、お前。今日はスタツフか？」

「そうなんですよー」

「似合わないなー」

「なんでですかっ!??……えー、コホン。今大会では私、チャンピオンのセコンドを務めることになりました！」

あ、つい本音が。エルスさんはオタク系女子のイメージ定着し

ちやつてるからな。特に本屋であったときのせいだと思う。

って、え？

「まじかつ!?!?」

「まじですか!?!?」

「えっへん！立候補したら快諾していただけました！」

「本当は？」

「ものすごく遠慮されたのを拝み倒し…って、なに言わすんですか！」

「いや、エルスさんが勝手に乗ってくれたんでしょ…」

『マスター、バカなことはやめてください』

いや、この場合バカなのはエルスさんだ。

「チャンピオンのそばで見て、勉強しようと思っっています」

うおお、見た目の通り真面目だ。

「にしても、ジークさんは今年もセコンド不在だったんですね…。1人で戦いたがるのは相変わらずというか」

「あいつは未だに人懐っこいんだか人見知りなんだかよくわかんねーな」

『優しいけど人見知り』ですかねえー。けど、心の奥底は掴めない方ですが、私たちの心は掴まれています。選手も観客も、みんな彼女の戦いを見たくてここにいますから」

そのあと、エルスさんと別れハリーさんと観客席に上がった。そこでヴィクターさんとも合流できた。

「はあ、ヒトガゴミノヨウダ」

『せめて棒読みはやめてもらえませんか?』

だって、そう思えるほど人多いんだもん。

「ヴィクターさん、ジークさんは今日も万全でした?」

「ええ。けど…なにやらアインハルトの方を気にかけていたわよ。【勝つても笑わない】って。相当辛い思いや寂しい思いをしてきたん

だろうかって」

「また：相手を気遣う前に自分を気にしたらいいのに」

「それがジークのいいところなんだけどな」

「ハリーさんもジークさんとは付き合い長いですもんね。けど：私からしたらそれは単なる傲慢ですよ」

「厳しいわね、ユタは」

そんな話をしていると会場が歓声で揺れた。

ジークさんが入場したんだろう。

「二「アインハルトさー！ファイトー！ツ！」」

「あらあら、元気ね」「いい声援だな」「あれ、やる側も恥ずかしくないですか？」

それがヴィクターさん、ハリーさん、私の順の初等科トリオナミウラの応援への感想だった。

アインハルトとジークさんの試合は、段々とアインハルトが押され始めていた。

……うん、私よくジークさんと少しとは言え渡り合えたよね。

今のライフ状況はアインハルトが5810、ジークさんは14800。

少しアインハルトが厳しいかな。

そんなことを考えているとジークさんが【鉄腕】を展開した。

すると、その瞬間にわたしを頭痛が襲った。何度も見ているはずなのに。なんで？

「つつー！」

「ユタ!?」「お、おい」「大丈夫?」

「へ、平気です」

『……』

あれ? 珍しくプライドがなにも言わない。

「大…丈夫、です。それよりも、きましたね」

「ええ、『鉄腕』ね。古流ベルカの武術の世界は広いようで案外狭いものなんです。いくつもの源流から触れ合って混じり合って、今に繋がってる。私の雷帝式がそうですしジークが使うエレミアの技も同じ」

「お前のぐい先祖様は雷帝なんとかだっけか?」

『「ダールグリユン」ですわっ!』

頭痛をひた隠しにしながら試合を見て、その間もヴィクターさんが色々言ってくれてるけど頭の痛さでなにも入ってこない。ここまでの頭痛は初めてだ。

「ジークの源流は『黒のエレミア』。格闘戦技という概念すらなかった時代に己の五体で人体を破砕する技術を求め、戦乱の世の中でその技を極めて言った一族」

うん、知ってる。【エレミアの神髄】もその技の一部。そしてそれは嘗てのオリヴィエと共に過ごした人の技術だから。

ああ、うん。だいぶ頭痛は治まってきたかな?

「ユタ、大丈夫?」

「大丈夫です。すいません、ミアさん」

「エレミアアアアア!!」

「つつ!?」

アインハルトの悲痛にも似た叫び。それを書いた瞬間に私の意識は、再度襲ってきた頭痛によって途切れた。

そこからは、なぜかまたオリヴィエの記憶が途切れ途切れで夢になって出ていた。

く医療室く

う……ん、頭がいたい。なんでこうなってんだっけ？

『……ター』確か、ジークさんとアインハルトの試合を見てて、『……マスター』急に頭痛に襲われて『起きてくださいっ！』

「ああもう！うっさい！」

と、ガバツと起き上がる。すぐそばには母さんがいた。

「おきたかー。ユタ、もうあんな戦い方はやめてーな。心臓が持たんわ」

「……？なんのこと？え？試合でもしたの？」

「とぼけたらあかんで。なんか亡霊みたいな目で格闘家かってくらい真正面から殴り合ってたやろ。まあ、勝ったからええけど」

「は……？」

母さんの言っている意味がわからない。

『マスター、なにも覚えてないんですか？』

「……うん。なに、私ハードヒッターと真正面からぶん殴りあったの？」

と、返すと母さんとプライドが見つめ合っている（ように見えた）。

「あんた、気絶した後試合の十分くらい前に目を覚ましてウチとも口をほぼ聞かずに試合してそのまま倒れ込んで気絶したんやで？ほんまに何も覚えてないんか？」

「うん……何も覚えてない」

え、私そんなことしてたの？全く記憶に……。

『これがその時の映像です』

するとプライドが記録していた映像を私の前に投影してくれる。その中身はもの見事にハードヒッター相手に影もほとんど使わず真正面での攻防を繰り広げていた私だった。かなりの辛勝になると

思っていたけどそんなことはなく、なんなら終始圧倒していた。
そして試合が終わり母さん達の元へ辿り着いた瞬間に倒れた。

「……」

『これでもまだ思い出せませんか？』

「……うん。ごめん。母さんも、ごめんなさい。心配…かけた』

「そう思ってるならよし。体の方はどうや？」

「今は特になんともないかな。頭痛もしないし体が痛いとかも無い」

「なら良かったわ」

その後はシャマル先生が来て色々と注意なんかされて検査でも特に異常なしと判断されたので帰ることに。

「あ、そう言えばアインハルトとジークさんってどうなった？」

『ジークさんの勝ちですね』

「やっぱりかあ。あいつ変わらず強いんだから」

「アインハルトもアステイオンも頑張ってたんやけどなー。ま、それはそうとユタも目を覚ましたことやし行こうか」

「へ？行くってどこに？」

「ヴィヴィオちゃんにユタ、アインハルトやジークリンデ選手、ヴィクトーリア選手たちってみんなベルカ時代の王様たちの血を引いてるからな。だから、そんな人たちが一堂に集まっているから過去のことについて話し合う会を設けた方がええやろってことで色んな人たちがホテルの最上階に招待してるんや。あとはアンタが行けば全員集合」

え、やだな。行きたくない

「悪いけど…わたしいか……」

「ほな、いくでー！」

「私に拒否権はないの？？」

「ない」

「いいきったよ！？」

そのまま母さんにとあるホテルの最上階まで連行された。

23話 くユタのお姉ちゃん 前編く

「さて、みんなくたべながらでええから、ちよう聞いてな」

私はとあるホテルの屋上にいる。そこで少し遅めの夕食という名のバイキングをしていた。

「にしても・豪華だねこれ」

そう、集まっているメンツがなかなか豪華だ。

八神司令こと母さんに元世界チャンプのジークさん、インターミドル都市本戦の上位入賞者であるミカヤさん、ハリーさん、ヴィクターさん。そしてハリーさんの取り巻きのいい子ちゃん3人組、初等科トリオ、ミウラ、アインハルト、ノーヴェさんが一堂に集まっていた。「みんなも知つての通り、今日の試合を戦った2人には少し複雑な因縁がある。『黒のエレミア』の継承者ジークリンデと『霸王イングヴァルト』の末裔アインハルト、2人をつなぐのは聖王女オリヴィエ。かつて戦乱の時代を一緒に生きてベルカの末裔が今この時代にまた集まってる。それにこの場には雷帝ダールグリユンの血統ヴィクトリアがいるし、ここにはおれへんけどもう1人旧ベルカ王家直系の子がいる。

これが偶然なのか何かの縁や導きの結果なのかはわからへん。

そやけどこれはあくまで老婆心というか大人側の心配としてなんやけど」

「老婆心で…母さん独身なのに…？もしかしてもう結婚適正ねんれ

『ガスツ！』……」

「ユーター？何か言ったか？」

「い、いえ、何も言ってますん」

「ならいいんや♪」

こ、怖い…ナ、ナイフが頬を掠めた……。

やりすぎだよ！みんなが引いてる！

「コホン、これだけ濃密な旧ベルカの血統継承者達が一堂に会するゆーんはちよつぴり気にかかるところなんや。インターミドル中の大事な時期やし、みんなが事件に巻き込まれたりせえへんように私た

ちも守って生きたい。ウチとしてはユタのこともあるしな。

そのためにもアインハルトやジークリンデ、ヴィヴィオちゃんやユタが過去のことを話し合う会に私も参加させてもらいたいんよ」

え：やだな。私としては聖王女オリヴィエのことに關しては割り切ってるんだけど。確かに最近ずっと聖王女オリヴィエの夢は見ているけど、それはそれ、これはこれだ。

「同じ真正古代ベルカ継承者同士、生きたい場所や資料があるなら私も全力で協力するよ」

「はい」

そうして先ずはアインハルトが自身の持っている記憶について話し始めた。

「クラウスとオリヴィエは、共に仲の良い友人でした。そして、共に鍛錬し合うライバルでもありました。彼女の紹介で『エレミア』とも出会い、良き友人になりました。それは戦乱の世の中でほんの束の間、だけど永遠のようなどても平穏で幸せな日々だった。あの頃は：本当にそう思っていました」

「やっぱりウチのご先祖様と知り合いやったんやね。名前は覚えてる？」

「ヴィルフリッド・エレミア——『リッド』と呼ばれていることもありました」

「ジークはその人のこと覚えてねーのか？」

「申し訳ないんやけど：個人の記憶はほとんど残ってへんから」

ハリーさんが聞くとジークさんは申し訳なさそうにいう。

「あの、なんだかすごい話を聞いちゃってる気がするんですが……」

「貴重なお話ではあると思うんですが……」

「大丈夫！わたしたちもあんまり変わりません！」

「いろいろ聞かせてもらいましょう」

「そやねー」

別のテーブルではミウラ、りおちゃんにコロナちゃん、エルスさんやミカヤさんがそんな感想を抱いている。

多分私が同じ立場でも同じ感想を抱いてると思う。

「ともあれ、クラウスとオリヴィエ殿下はシュトウラで時を過ごして、『エレミア』もまた私たちの良き友人でした。」

でも、ますます戦火は拡大して言って…聖王家は『ゆりかご』の再起動を決めました。過去の歴史で幾たびが使われた強力無二の戦船。玉座に就く者の命や運命と引き換えに絶対の力を振るう最終兵器。

オリヴィエはもともと『ゆりかご』内部で生まれた子でした。けど、ゆりかごの王としての資質は薄いと認定されシュトウラへの人質として利用されたんです」

こうして聞いていると、本当にアインハルトは過去にいたという霸王の記憶が鮮明に残っているんだらうね。だけど……

何故こうも、さも自分がそうであるかのように語るのか。アインハルトはアインハルトだ。クラウスはクラウス。何故そう割り切れないのだろうか。

もちろんみんなが私みたいな性格じゃ無いのは理解している。

それでも……アインハルトはまるで、自分の人生を捨ててまでもクラウスという記憶を、受け継ぐべきだと考えているようにも聞こえてしまう。

「ですが、ゆりかごの研究が進んでいったこと…そしてオリヴィエの戦闘と魔導の才能が諸国に響くほどに磨き上げられてしまったこと。

それで本国に『ゆりかごの王』となるために呼び戻されることになりました。」

ゆりかごの王になれば自由も尊厳も未来までも奪われることを知っていたクラウスはそれを止めようとはしました。

だけど…私は彼女を止められませんでした、戦ってでも止めようとして何もできずに破れました。彼女の微笑みをくもらすこともできずに」

……いろいろと知らないことが溢れてくる。けどそれに伴って頭痛が時々起こるのを繰り返す。正直にいうと結構痛い。けど我慢で

きないほどじゃない。

「そうしてオリヴィエは国に戻ってゆりかごの王になりたった一年で『諸王時代』は終わりを告げました。けどクラウスとオリヴィエは二度と合うことはありませんでしたが」

「クラウス殿下とウチのご先祖様とはそのあとは…？」

「リッドはオリヴィエが国に呼び戻される少し前から姿を消していません。普段からどこにいるのかよくわからない人でしたがエレミアの力や言葉が必要な時はいつの間にかそこに来てくれたんです。

けどオリヴィエが悲しい決意をした時もそのあともずっと会えないままで」

「クラウス殿下は不義理な友達を恨んでたんかな？」

「そんなことないですよね？」

不安そうにいうジークさんの言葉にヴィヴィオちゃんも反応する。

「クラウス殿下は大切な人を一度に二人失っちゃったわけですから」

「そうですね…見つけたらまずは1発殴ってやりたいとは思ってました。

だけど…理性ではわかっててもいるんです。エレミアが…リッドが悪くいんけではないって。

ともあれ、その後クラウスとエレミアの縁は繋がることなくオリヴィエを乗せたゆりかごも姿を消してクラウスは戦の中で短い生涯を終えました。

私から話せるのはこれくらいです」

はー。これこそまさに生の歴史の授業だ。感慨深いね。

私が血筋じゃなければ、だけど。

「ウチに聞きたいことゆーんはその頃のリッドについて？」

「何かご存知だったらと思っただんですが。…ユタさんも、何かご存知だったり、しませんか？」

「残念やけどウチの実家にもエレミアの資料はあまり残ってへんのよ」

「そうですか…ユタさんはどうですか？」

「……………」

話を振られ私は黙ってしまおう。うん。わかってる。本当なら話してあげるべきなんだろうけど。それでも……

「ユタ?」「ユタさん?」

ジークさんとアインハルトが不安そうにこつちを見たのと同時、もうこの際だから私について、全部話してしまおうと、決心してしまつた。

「ぶっちゃけると、私は所々とはいえ記憶がある。なんならそのゆりかごとやらに乗る前後あたりの記憶も」

その一言で母さん以外の全員が驚いた顔をした。それに構わず言葉が続ける。

「話すのは構わないの。でもね……この際だから改めて、言っておこうと思う。私は……ただの八神ユタ。聖王女オリヴィエの血は確かに引いてる。でも……本当にそれだけ。私は聖王女じゃない。……でもオリヴィエの記憶があるのは事実。死ぬほど辛い記憶としか言えないけど、それでも良いなら話してあげれるよ」

「い、いえ、無理なさらず……。元より私が巻き込んだんです。ユタさんが辛い思いをしてまで……」

とアインハルトは遠慮するようにいう。けど、本当に話す分には別にいいんだよね。ただ、何故かそれと連動してお姉ちゃんのことを思い出してしまっただけで。

「この際だから……母さん。私の生まれとかお姉ちゃんの事とかも話しておいたほうがいいかな?」

「うちはアンタに任せるで。話したいなら話せばええ」

「わかった」

「先ずは結論だけ言うと、オリヴィエはクラウドのことを……多分他の大切な人達のことをずっと、ずっと大切に想っていただろうってこと。だからこそゆりかごとに乗って戦争を終わらせなきゃいけない決意をしたんだと思う。みんなを守るために自分だけ犠牲になれば良

いなら、それで良いと信じて。

……だけど、本当は辛かったんだと思うよ。独りでいる時にはずっと泣いている記憶しかないから。私にはアインハルトのいうクラウスだとかリッド達との楽しかった記憶は、残っていないから。それからアインハルトの記憶と同じと思ってくれたら良い。ゆりかごに乗って、戦争を圧倒的な力で以て強制的に終わらせた。個人の記憶として話せるのはこの程度。ごめんねあんまり力になれなくて」

そんな私を慰めるようにアインハルトやヴィヴィオちゃん達が声をかけてくれるけど、やっぱりというかお姉ちゃんの記憶も同時に蘇ってきて、泣きそうなくらいに辛くなる。だけど、グツと我慢して次の言葉を紡ぐ。

「ここからは私自身の記憶。どうせだからみんなにも、私の生まれとか、大切な人について知っておいて貰いたいなって、思ってたね。私のお姉ちゃんんだけど、えーと写真写真……あ、プライドに保存してないんだって。母さん持ってたりする？」

「もちろん。プライドに送ろうか？」

「お願い」

そうして数十枚の写真が送られてくる。その中から適当に一枚を投影すると母さんの家に来たばかりの時の集合写真が大きくみんなの前に映る。

「この蒼髪の人が私のお姉ちゃん。……全然似てないけど、私にとってはたった一人の、大切なお姉ちゃん。八神・サミダレ・マリナ。私をずっと育ててくれて、ずっと一緒に居てくれた人。」

……察してるとは思うけど、私はオリヴィエの子孫とかじゃない。私は、ゆりかごを起動するために作られた鍵、有り体に言えばオリヴィエのクローン。お姉ちゃんは、そんな私がゆりかごの王として座れる年齢になるまでの育成係をやっていたの。だけど……そんな私のこととか周りとか、どうでもよくて、本当にただただ、お姉ちゃんのこと大好きだったなあ……」

感傷に浸りたいけど、それよりも私について、知ってもらわなきゃね。

私の最初の記憶は

ガラス管の中でよくわからない液体の中に沈んでいるところ。チューブか何かがあるのか不思議と息苦しいことはなく、周りには白衣の研究者たちがたくさんいた。

私は記憶力がいらしく胎児からの記憶がちゃんと残っている。

そして、試験官から取り出されたあと私は、地球と一緒に捨てられることとなる

五月雨マリナお姉ちゃんと会うこととなる。

お姉ちゃんは透き通るような藍色の髪にサファイアのような目。年は十代前半だったとおもう。

お姉ちゃんは私の世話役だった。だから私にとってお世話役立った彼女は姉も同然だった。

「ほ、ほらー。ユタちゃん。ご飯食べてー」

「やー!」

「ほら、お……美味し……いよ?」

研究所のご飯は栄養しか考えてなくて味が不味かったのでよく嫌がっていた。

それをなんとか食べさせようと姉さんは美味しく食べてみせようとしていた。が、まずい!というのが顔に出てしまっていたので成功したことはなかった。

「あ、ユタ。ほら、検査に行かないと」

「うーあー」

そして、ご飯以上に研究者たちの【検査】は嫌だったのも覚えていく。

よくわからないコードにつながれたり注射器で何度も腕を刺されたり、とにかく嫌なものだった。

そして、4年弱が経ったある日

「なんで！なんでですか！なんでユタを捨てるなんて…」

「もう決まったことだ」

お姉ちゃんと私は共に呼び出され、私を捨てると言ってきた。当時の私はよく理解していなかったけど、お姉ちゃんはすごく怒ってたなあ。

「そんな理不尽な…あの子はまだ4歳ですよ!?？あんまりじゃないですか!」

「はあ…随分と偉くなったものだな。お前を拾ってやって育ててやったのは誰だ？もう忘れたのか？それとも…情でも移ったか？それに依然としてゆりかごの適正値の低い出来損ないに金をかけて生かすだけ無駄だと結論付けただけのこと。廃棄処分じゃないだけマシだろう？ま、今現在、新たな適正値の高いクローンが出来つつある。それも踏まえた上で失敗作に期待する必要もなくなった。それだけのことだ」

「っ！そんな言い方って…」

「まだ何かいう気か？そんなに心配ならお前もユタと一緒にしてやろう」

「え？それはどういう…」

お姉ちゃんが聞き返そうとすると突如激しい痛みが走って、目の前がフワフワした。お姉ちゃんも同じよう倒れたけど咄嗟に私を庇ってくれたのか不思議と痛くは無い。

「目を覚ませばわかるさ」

そんな研究者の声を最後に、意識を失った。

それからどれくらい時間が経ったのかな。気がついた時にはまあ二人で裏路地にいたんだ。

お姉ちゃんは自分も一緒に捨てられたんだと察するのにそんな時間はいらなかったみたいで、苦しそうな顔をしていた。でも私を見つけた瞬間に強く、だけど優しく抱きしめてくれた。

「ああ、でもユタもいる。よかった……。にしてもお金もほとんどないし持ち物も服だけって：よほど私たちには生き残って欲しくないのかなあ。あの人たちが生み出した命なのになんでこんなに簡単に捨てられるのかなあ。

……………

うん、考えても仕方ない。生きる術を身につけないと」

だけとお姉ちゃんは超ポジティブ精神を持っていたらしい。

なんかすぐに吹っ切れていたのはわかった。

「よし、まずは仕事を探さないと」

そういいながらお姉ちゃんは私を抱きながら裏路地から出た。

余談だけど、表通りにいた人に変な目を見られたがここは地球という星の日本らしい。

管理局の管轄外の星らしいね。この時の私はまだそのことを知らなかったけど。

こうして、お姉ちゃんは私を生かすために働こうとしたが……。現実はその甘くはなかった。

一年もしないうちに、お姉ちゃんも私も、心身共にボロボロになっていた。

24話 くユタのお姉ちゃん 中編く

く地球 日本東京都 とある裏路地く

「なのはちゃん。いたく？」

「こつちには何も情報は出てきて無いかな。フェイトちゃんは？」

『私も……』

「どうやら、シグナムたちも見つけてないみたいやし…早よ見つけなあかん」

ここには機動六課のメンバーである八神はやて、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、シグナム、ヴィータが来ていた。スバルは別件で動かなければならず来ていなかった。

なぜこの五人がわざわざ地球まで来ているかと言うと、とある情報が入り、この地球に「聖王のゆりかご」に関わる人間がいるかもしうのがわかったから。

ただでさえ、今ミッドチルダでは高町^{聖王}ヴィオと「聖王のゆりかご」に関することで手一杯なのだ。

そこへ更に「ゆりかご」に関わってくるかもしれないのだ。

危惧して調査にくるのは当たり前だろう。

「にしても……本当にいるんかな？」

「間違いないって。なんでも、研究に関わった人からの情報だとか」

隊の中で共有されている写真—今回搜索している人物—を見ながらそう呟く。

「……あ!?？」

「え?…あ!?？」

『どうしたの!?』

はやてがなのはの後方にとあるものを見た途端、素っ頓狂な声をあげてしまう。それになのはも驚きながら後ろを振り返り、フェイトは通信越しだったのでよくわかっていなかった。

なのは達が見た方向には年齢はおそらく10代後半、しかし髪はボ

サボサ、服装もところどころ破れていて全体的に埃っぽい。包帯もところどころに巻かれている女性がいた。

目は、控えめにいつても死んでいる。

おそらく、見出しを整えれば美人なのだろうが、藍色の髪も、サファイアのような目も、間違つても綺麗だとは言えなかった。

そう、彼女達が探している人物にそっくりだった。

「……………！」

その光景に2人はただ立ち尽くすだけだった。

『二人とも！どうしたの！？？』

「あっ」

フェイトからの通信のおかげで我に帰り急いで追いかける。

「フェイトちゃん！今すぐ合流しにきてー！」

『えっ？』

「多分見つけたからー！」

「あ、シグナム、ヴィータ。今すぐ集合や。…………うん、そうや。多分見つけたと思う」

こうして、ただ一人の少女を5人が追いかけた。

ユタの保護者だった私、五月雨マリナは追いかけてきていた2人に気づいていた。ユタを造った人たちがいずれ何かしてくるのは分かっていたからすぐに逃げようとも思った。

だけど黒い服装をしていた人に呼び止められ、敵じゃないことを必死に説得されて少しは信じてみようと思えたのとお腹が空きすぎて少しでも恵んでもらえないかと考え二人をユタの居るところまで案内することにした。だけど気づいたら2人は5人になっていた。

「あの…何故そんなに人がいるんです？」

と、警戒しているとわかるような声で5人を睨みつける。

「そんな警戒せんでもええよ…って言ってもそう簡単には信用できんよなあ」

「心配しなくても私達は何もしないさ」

「…………わかりました。今は、信用します。ですが…その前に、約束して

欲しいことがあるんです」

「ええよ。なんでも、とは言えれんけどできる限りのことはするよ」
私を呼び止めた人が少しだけ警戒したのがわかった。だけどそんな大それたことを頼む気も、気力もなかった。…きつとユタのことを探しにきた人たちだろうから、ユタのことを引き合いに出せばきつと受けてくれると思えたから。

「貴女達があの子の事を探しにきたと言うのは、わかっています。私達は抵抗も、何もする気はありません。だから…お願いします。あの子を、助けてください」

そんな私の言葉に、この人達は各々の言葉で『勿論!』と言ってくれた。この人達ならユタを任せられるのかもしれないと、思えてしまった。

そのまま5人を隠れ家…と呼ぶにはあまりにも質素な裏路地の一角まで案内し、いつも寝ている場所を見せる。カーテンで簡単に仕切りをしているだけの寢床ではユタが気持ちよさそうに寝ていた。

「はやて…やっぱり」「うん、そうやな」

何かを納得している5人を見てやっぱりユタを探しにきたのかと納得する。

「…あ、おねーちゃん。おかえりなさい」

「ただいま」

「そのひとたち、どうしたの?」

「食べ物を恵んでくれる人達。失礼のないようにね」

「はい」

「それで…なんとなくわかってはいますが、そんな大勢で何の用なんですか?もし仮にユタを強引に、と言うのなら私は全力で阻止させてもらいます」

死んだような目をしながらも戦う意思を見せる目の前の少女。そんな少女に臆する事なくウチは口を開く。勿論『ゆりかご』について

余計な心配の種を取り除きたいと言う思いもあったけど2人の様子を見てそんなものは遙か彼方に飛び、2人を絶対に助けて見せると誓ったから。

「違う違う。連れ戻すとかじゃないんやけど…とりあえず信用してもらうっていう理由でもこつちの身元を明かさなあかな。ウチらはミッドの機動六課つちゅー部隊。ウチはリーダーの八神はやて」
「機動六課…?」

だからウチらはできる限り敵対心を見せずに身元を明かした。目の前の少女は機動六課すら知らないらしく戸惑っていたけれど。

「そうや。まあ、簡単にいうと特殊な警察みたいなもんや。で、なんでウチらがいるのかというと…」

「はい。ユタのこと、ですよね?」

「話が早くて助かるわ。とある情報筋から君らのことを知って、最悪なことが起きる前に保護するようにって指令が入ってる」

「ああ、それは…願ってもないことですね…」

と、目の前の少女は安堵したような表情をした。だけど少女の言い方はまるで自分ではなくユタと呼んでいた子が保護されるから安心して見えているように見えた。

「でも、何故そうも私達を?…貴女達にメリットがあるように感じられないのですが」

「あーうん。実はな…上からの命令っていうのも本当なんやけどそれ以上に君たちを見て、守らなあかん!って思っちゃったんよ。もちろんその子も守るし君も守るつもりや。どうかな?悪い話ではないと思っやけど」

「…:分かりました。今はあなた方を信じます」

「うん、ありがとう。そんじゃ、ついて来てもらえるか?」

「分かりました。ユタ…行くよ」「はい。ねえねえ、ご飯はー?」「もうちよっと我慢してね…」

くミッド行き船 船内く

「ほな、改めて自己紹介するな。ウチは八神はやて」

「私は高町なのは」

「私はフェイト・T・ハラオウン」

「シグナムだ」「ヴィータだ」

「私は…五月雨マリナです。ユタのお世話係でした。今は…姉です。それで、この子はユタ」

と言いながら寝ているユタを抱いている。

「そんじゃ…ちよいとその子…ユタやったか？ユタは席を外してもらいたいんやけど…シグナム、ヴィータ。頼めるか？」

「おう」「わかった」

と、シグナムとヴィータが未だ寝ているユタを抱き上げ別の部屋に行く。

「あ……」

「大丈夫だよ。シグナムもヴィータちゃんも信用できる人だから」

と、抱いて連れて行くシグナムとヴィータを不安そうな目で見るマリナをなのはちゃんが優しく言ってくれた。

「それで、ユタを保護してもらえるとこの子は……本当なんですか？」

「うん。それは信用してくれていいよ。さつき上に掛け合ってウチのところに来てもらうことになった」

「八神さんのところですか…？」

「うん。あ、そうそう。どうせならはやてって呼んでーな。んで、ちゃんと経緯を説明するな。」

今、ミッドチルダではその子とは別の聖王のクローンとゆりかごについていま緊迫状態なんよ。だから、その関係者がどこにおるかかわらんし、君らをこれ以上事件に巻き込みたくないっていうのもあって、ユタちゃんのこと【地球から保護してきた子供】じゃなくて【孤児院から引き取った子供】という名目でウチが預かるのが最善なんじゃないか、っていう話になったんよ」

「……なるほど。でも、もし私達を捨てた人達が襲ってきたら…」

「心配せんでも大丈夫！ウチはこんなに包容力ある大人な女性って感

じやけどその実、管理局の中で1、2を争うくらいには強いから！それにウチの横にいるのはちゃんやフェイトちゃんも同じくらい強い。勿論さつきユタちゃんを抱いていたシグナムとヴィータもな」

そう言うのと五月雨マリナちゃんは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていた。良い顔してくれるわあ。

……まあ誇張しすぎなのだけど。でもその甲斐あつてかようやく無表情以外のこの子の顔が見れたからよしとしよう。

「で、最後君をどうするかなんやけど……どうかな？マリナもウチにこんなか？」

「え……？」

それをいうとマリナちゃんは驚愕……というよりも自分が良いのか、みたいな顔をしてこつちを見てきた。

「いいん、ですか……？」

「うん。それにマリナちゃんがユタちゃんを近くで守れるようにもその方がええやろ？」

「それは……そうですが……」

「家のことなら心配せんでもええよ。自慢じゃないけど結構大きいからな！今更家族が1人2人増えたとして大丈夫や！……で、どうかな？」

「……ごめんなさい。少し、考えさせて、ください」

マリナちゃんは今にも消えてしまいそうな声で頭を下げた。元よりすぐに受け入れられるとは思っていなかったから問題は無い。マリナちゃんにとつても考える時間も欲しいだろうし。

「うん。大丈夫だよ。まだミッドチルダまで時間はあるからゆっくり考えて。勿論断ったとしても特に何かするつもりもないから安心してーな。考えが纏まるまでユタちゃんと一緒にご飯でも食べてきたら良いよ」

「お、きたきた」

クルーっという人に食堂に案内されるとそこにはご飯を食べさせ

てもらっているユタがいた。確か…シグナムさんとヴィータさん。

お粥らしきものを食べていたユタはとても良い笑顔をしていて、久しぶりに見た笑顔で少し嬉しくなった。

「ほら五月雨もご飯食べな。地球だとロクなもん食べれてなかったんだろ？」

私の返答を聞くことなくヴィータさんが私の腕を引っ張りユタの横に座らせた。特に何を食べたいとかが無く困っているとヴィータさんが色々と頼んでくれる。ものの数分で色々な食べ物が目の前に出てくる。

「…ありがとうございます。いただきます」

久しぶりに温かいご飯を食われて、何故か目の前がぼやけてしまう。何度も何度も拭うが一向に治らない。

「ひつぐ…おいしい、です」

「ならよかった」

それからユタと一緒に色々なことを聞いた。とは言ってもシグナムさんやヴィータさんから主と慕っているはやてさんの事、はやてさんとすぐく仲の良いなのはさんやフェイトさん達のこと。ヴィータさんは誇らしげに、シグナムさんは当然というように語り、本当に慕われているんだな、と感じた。

ユタもシグナムさん達といた時のことを話す時はとても嬉しそうに、楽しそうに話していた。

「で、五月雨はどうするのか決めたのか？」

「…いえ。どうすればいいか、わからなくて…。今まではとにかくユタを生かすことに必死で、今回もユタさえ生きてくれるのならそれで良いと、思っていました。でも…いざ自分の事となると何をすればいいのか…」

シグナムさんは未だ迷っている私の頭を優しく撫でてくれた。そのまま言葉を続けた。

「五月雨はどうしたいんだ？」

「え？」

「今まではずっとあの子を守るために命を賭けてきたんだろう？じやあ今度は自分の為にわがままを言ったって誰も責めやしないさ」

わたしの、したいこと。

そんなものを考えたことがなかった。だって、私が頑張らなきゃユタが…。

「それに出会ったばかりの私たちが信用できないというのも分かるよ。けどあの子を生かしたいという束縛にも等しい想いの為にこれ以上五月雨だけが犠牲になる必要はない。：私達も五月雨達と会ってほんの数時間だが、この場の誰もが君たちの事を大切に想っている。だから、五月雨の背負って来たものを、少しでも良いから私たちに背負わせてくれないか？」

「……」

シグナムさんの言葉で、自分の中で頑張って保ってきたものが崩れるような感じがした。

誰かに頼つても良い？そんな事許されるの？

だって、研究所でも、地球でも、どこでも、自分で何とかしなきゃ、ユタと一緒に居られなかった。：自分1人で何かをしなきゃいけないかった。他人を頼るなんて……。

「おねーちゃん？だいじょうぶ？」

「うん、だいじょうぶ、だよ」

「ほんと？」

「うんほんとほんと」

「よかった！」

そんな私を心配したのかユタが膝の上に乗り私をみる。ユタの笑顔を見て私のやりたいことが一つ、たった一つだけ思い浮かんだ。

「あ…そっか。私……」

私は、ユタと一緒に居たい。一緒に笑っていたい。

ただそれだけなんだ。

「シグナムさん、私…」

「ん？」

「私は、ユタと一緒に生きていたい。あの子を守ってあげたい。……一緒に、笑っていたい。ただそれだけなんだと、思います。だから私も、ユタと一緒に……」

行かせてください。その一言を言おうとした途端に声が出なくなる。この人たちはとても優しい。だからきつと大丈夫なはずなのに、心のどこかに不安が巣食っている。

言葉に詰まった私の頭をシグナムさんは再度ポンポンと優しく叩く。

「そんな焦らなくて良いんだ。ゆっくり時間をかけて私達のことを信用してくれたらそれでいい。ま、そうでなくとも『家族』が増えるのは大歓迎さ。主はやても同じ考えだろう。お前が心の底から私たちと家族になりたいと、そう思える日が来るのを私たちはゆっくりと待っているだけさ」

「……」

ガツシヤアアアン！

「!?？」

「あつちよっ！シグナム少し手伝ってくれ！この子が……」

「分かったすぐに行く。五月雨殿も手伝ってくれるか？」

「は、はいっ！」

音の出所を見るとユタとヴィータさんがいた。そして……多分机をひっくり返してしまったのか、辺りに食べ物散乱しているもの見事にヴィータさんがかぶっていた。ユタはとうちよつと散っている程度で全然汚れていなかった。

「ユタ、ダメでしょ？ほら、ごめんなさいって」

「ごめんなさい……」

「いいっていいって。にしても派手にひっくり返したなあ。その子に怪我がないのが幸いだよ。怪我させたつてはやてに知られたら……お怖い」

「その時はちゃんと伝えておいてやるから安心しろ」

「それチクるってことだよなシグナム!?？」

「……ユタ」

「なにに？」

「この人たちといて、どうだった？」

「たのしかった！」

「この人たちと、これから一緒にいたい？」

「うん！でもお姉ちゃんもだよ？お姉ちゃんがないのは、わたし、いや」

「大丈夫だよ。あの日約束したもんね。私は、ずっとユタと一緒にいるって」

ユタの言葉を聞いて、改めて私の心は決まった。

「シグナムさん。ヴィータさん」

「ん？」

「？」

「はやてさんと…もう一度話させてください。どうするのか、決めました」

「わかった。すぐに呼ぶ」

「ほら、君はこっちに」

「うん！」

シグナムさんに抱き上げられても嫌な顔ひとつせず、それどころかとても嬉しそうな顔をしているのを見てより一層私の決意は固まった。

「八神はやてさん。私も覚悟を決めました。私も一緒に連れて行ってください」

「うん、もちろん！よろしゅうなマリナちゃん♪」

「こちらこそよろしくお願いします。多少は家事の心得もありますので家ではどうぞいいようにお使いください」

「いや、そんな便利道具みたいにはするわけではないんやけど…。ウチとしては家族が増えるのは大歓迎や！」

「はい…ありが…と…」

バタツ

「!?ま、マリナ!?」

「スウ……スウ……」

「な、なんや…寝ただけか」

「びつくりしたあ…」

「本当にね…」

それから暫くの間はずっと、夢見心地のような感覚だった。

くミッドチルダ 八神家く

「そんじゃあ、うちの家族を紹介して行くな」

「は、はい…」

八神家のリビングには家族全員集合していた。

右から

はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、リイン、アギトと並んでおり順番に自己紹介をしていく。

そしてマリナ達の番になった。

「私は…五月雨マリナ」

「ユター」

と、マリナとユタはかなり簡潔に挨拶をした。

「ちやうちやう。違うやろ?」

「あ…そうでした。八神・サミダレ・マリナと八神ユタです。これからよろしくお願いします」

「よろしくやー」「よろしく」「よろしくなー!」

などなど、挨拶が終わり八神家のおもてなしのパーティが始まる。

「ユタ、これからはこの人たちにお世話になるんだよ。もう…辛い思いをしなくてすむよ」

「?」

「はやてさん、これからはこの子を宜しくお願いします」

「ええって、そんなにかしこまらんでも。それに、ユタちゃんだけやな

い。マリナ。君もやで。マリナも、ユタちゃんも、これからはウチの家族なんやから」

「ありがとうございます……!」

「おっ、初めて笑ったな。可愛いでー♪」

「……………?」

と、はやてがからかうとマリナは赤面した。それを見て回りもユタも笑ってる。

〜数ヶ月後〜

「ほら!はやてさん!起きてください!」

「うー、もうちよつと…」

「そんなこと言わない!」

パサツと起きるのを渋っているはやてさんの布団を私は無理やり剥ぐ。

「ぎゃあ!目が!」

「ほら、早く起きないともっと太陽の光を浴びせますよ?」

「わ、わかった!おきる!おきるから!」

と、言いながら布団から出てくるはやてさん。

なんでこんな風にするかって?

普段弄られている仕返しです!

「ほら、朝食も作ってますので」

「わかった」

と、着替えているはやてさんに言いながら私はリビングに戻る。

そこではシグナムさんたちがもう食べている。

「はは、この家も随分と賑やかになってきたな。マリナなんか大分キャラ変わってないか?」

「ほえ?私ほもともこんな感じですよ?地球では、ただ……精神的に参ってたので…」

「す、すまん…」

「いえ、大丈夫です。それよりも今日の卵焼きは自信作なのです！
あつたかいうちにどうぞ！」

「おう。いただきます。…美味し!?？」

「いよっし！」

「うー、おはようやー」

「「「おはようー」」」

そんなこんなで、今日も八神家の一日は普通に始まる

と、誰もが思っていた。

「さーてと、今日はユタの5歳の誕生日ー。思いつきり豪華な料理を
作らないと」

「やったー！ケーキは？あるー?」

「あるよー」

いま、八神家にはマリナとユタの2人しかいない

そんな2人をすこし離れたところから見つめている、5人ほどの集
団がいた。

そして、音もなくマリナたちに近づく。

「ん!?」「きゃ…」

そして、手際よくマリナの口を塞ぎ手を縛り、ユタも同様にして車
に詰め込んだ。

そして、八神家は空になった。

25話 くユタのお姉ちゃん 後編く

「……………」

「オイオイ、そんな睨まないでくださいよ。一緒の研究所にいた仲間じゃないですか？ま、元ですけど」

どこ、ここ。突然後ろから目隠しされて縛られて、車で連れ去られたところまでは覚えてる。

目隠しを取られるとどこかの廃屋みたいな場所にいて、目の前には研究所で見たことある人が。

「(ユタは……………?)」

「そんなあたりを見回さなくても大丈夫だよ。あのガキはまだ生きてます。ま、もうすぐ始末する手筈ですが」

「……………」

「息苦しいでしょう？口枷くらいは外してあげましょう」

「プハア！ふぎけるな！なんでそうまでして…………ユタの人生を弄ぶ！」

「あーもう、うるさいですよ。上からの命令なんですから私に怒鳴り散らさないでいただきたい。私が命令されたの2つ。1に『聖王の出来損ないが生きているかどうかの確認』。2に『生きていたのなら確保。その際マリナがいるようなら一緒に連れてこい。もし抵抗したならば生死は問わない』。ま、ということですので抵抗しないのであれば命は取りませんので大人しくしてくださいね？」

「…………嘘をつくな。そんなことをあの研究者達が言うわけがない」

私が指摘すると、真顔だった顔が急に歪んだ笑みになる。ああそうだ。こいつは、こんなやつだった。

「ははっ！やっぱりわかるか！ああそうさ、そうだよ。今のは嘘だ。俺、ちとポカやらかしてなあ。間違って作りかけの奴殺しちまってそれでお上の奴らカンツカンなの。で、下手すりゃ殺されるってんで研究者たちから逃げている訳」

取り繕っていた敬語が急に砕け、研究所で一番嫌いだっただと、確信した

「ま、そゆわけだからどうやってたら許してくれっかなーって思っただけ。手土産でもあれば許してもらえんじやないかって。でもその場合の手土産は何がいいかなーって考えたところお前たちのことを思い出した」

「……まさか」

その男の、言わんとしていることがわかってしまった。つまりは…。

「お、わかったか？お前の考えている通り聖王の出来損ないが生きていることを研究者達は知っていた。で、時折「マリナ達から情報が漏れるとまずい」って懸念してるのも思い出したんだ。

てことはだ。

お前とユタの首を差し出せばあいづらも許してくれるんじゃない？

って考え今に至る。その為にお前が捨てられた場所を匿名で管理局に放り込んで、ずーっと監視を続けて、お前達がどうなったのか探っていたんだ。いやしつかし、まさかあの八神司令のところ引き取られるとは思わなかったわ。お陰で予定が大幅に狂ったわあ。…つと、だから喋って機動六課とか出されちゃ流石にまずいんだよな。さっさとお前らは始末させてもらおうよ。俺の自由のために」

と、男は魔法式を展開し始めた。

「……さげな」

「ああ？」

「身体操作…」

「うおっ？」

男は突如立ち上がったマリナに蹴り上げられとっさに避ける。その隙を使い無理矢理縄を引きちぎって立ち上がる。

ふざけるな…ふざけるなふざけるなふざけるな！

なんの権利があつて、ユタの命を弄ぶ！なんでユタから人生を奪う！あの子は…

ただの女の子なんだ…！

「〜やるじゃん。研究所での記憶とか他の情報源からだど戦闘はからつきしだつて話だつたんだけどな。一般人の男数人に対して何もできなかったつて。けど…そうじゃないみたいだな」

男の言葉はもう耳には入つてこなかった。私の胸の内は、ただ2つの感情が支配していた。

「殺してやる…。絶対に…」

「おお怖いねえ、なら俺はその前にお前を殺すでしょう」

「待つててね、ユタ。すぐにいくから。私は、ユタと一緒に生きるつて約束したもんね。約束は、守るよ」

「くっ…」

「おいおい、威勢がいいのは最初だけか」

「まずい、この男…強い。」

「よつと」

「きやあつー！」

男は突如私の周りから魔力弾を撃ち込んできた。

いつの間に展開したの!?!?

「がはっ…」

「はあ、最初のを見たときはちよつと期待したんだけどな…こんなもんか」

魔力弾に気を取られているうちに懐に潜り込まれ鳩尾を殴られ吹っ飛ばされた。

ああ、身体中が痛い。骨も内臓もかなり損傷してるな…。

右腕なんて、ちぎれてもおかしくなくらい痛いし血が出てるし。…ていうか、動かしてるって感覚すらないし。

けど………!

「まだ……ま……だ!」

私は身体操作のリミッターを解除した。

いつかシグナムさんに教わった中で、1番得意だった身体操作魔法。だけどずっと使い方には注意されてたっけなあ。

(いいか?これは使い方を間違えれば強くなる代わりに体を壊してしまふ。だから……そうだな、これくらいがちょうどいいだろう)

(はい、わかりました。…大体魔力3分の1くらい、って感じですか?)

(そうだな。いいか?間違ってもこれ以上強い操作をしようとするな。特に……怪我をしているときはな。怪我をしているときにも使えるのが利点でもあるが欠点でもあるのがこの魔法だ。下手をすると、体の限界を超えて動かされた代償に死ぬ可能性すらある。それだけは絶対にしてはダメだ。…お前は、ユタと一緒に生きていくんだろ?)

(はい、わかっています)

「(ご)めんなさい、シグナムさん。けど……そんなことを言ってもらえそうにありません)……ふう、身体操作、フルバースト!」

「ん?」

私は、密かに練習していた外部からの完全操作をする。完全操作に切り替えると同時にシグナムさんの行動を写し取ったような攻撃をした。

すぐそばの鉄パイプを取りシグナムさんのような剣撃を叩き込む。

「うおっ……」

「はああ!」

「ちっ!」

無理やり蹴り飛ばされ距離を取られるも、手応えは確実にあった。

「逃さない!!」

身体中が悲鳴を上げる。けどお構いなしに追撃をしに行く。するときつきまで立ちっぱなしでほとんど動こうとしなかった男が初めて回避行動を見せた。

やっぱりシグナムさんのレベルなら通じる!

「せやあつー!」

「ふんっ」

先ほどと同じように突如周りに魔力弾が出現し私に向かって撃ち込まれてくる。

それを鉄パイプで弾き飛ばしていく。

しかし、数が多いこともあり何発か受ける。

だが私はそんなことも御構い無しに男に突っ込む。

だけど、これはしてはいけなかった。

私は、魔力弾を受けながらも男に突撃するべきだった。

「……え」

「そんなんだから……お前は負けるんだよ」

男が盾にしたものを見た瞬間に体が止まってしまふ。盾にされたものは見間違えようもない。

ユタだった。

それを見て私は身体操作を思わず解除してしまう。

「(なんで!?! いつの間に!?!)」

そして、冷たいものが私の胸を貫く。それと真反対に、とても温かい感触が。

男はいつの間にか刀を装備しており、私の胸を綺麗に貫いていた。

「お姉……ちゃん?」

「ユ……タ……」

「さようなら、五月雨マリナ」

ああ……ごめんね……ユタ……

そのまま私の意識は、消えていった。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

「あーあー、うっせえよ、どうせお前も死ぬんだよ」

そんなことを男はいうがユタは聞く耳を持つていなかった。

それはそうだ。目の前で一番大事な人が倒れているんだから。

死という概念をまだ理解していないユタにも、これがどう言った状況かわかっていた。だからこそ、マリナのそばから離れようとしな
い。いや、できなかつた。

ドカアアアアン！

「な、なんだ!?？」

突如、男のいる廃屋の壁が爆音と共に崩れ去る。

正確にいうなら爆破された、だろう。

その先には……。

「やっぱり……!」「……っ!」「オラてめえか!ユタとマリナに何し
やがった!」

怒りに満ちた八神はやて、シグナム、ヴィータがいた。

「…シグナム、ヴィータ。10…いや5秒で片付けるよ。最優先は

……ユタとマリナを助けることと……その男の確保や」

「了解した……」

「絶対許さねえ!」

「ごめん…ごめんな、マリナ…。ウチの…せいで……」

「マリナ!気をしっかり持て!」

「ユタ、みちや…だめだ」

そこからは言った通り5秒で決着した。

本物のシグナムの剣撃とヴィータの怒涛のラッシュにより、男は一

瞬で戦闘不能になった。

はやては、マリナのそばに跪き泣いていた。

シグナムはマリナに止血を施し手を強く握って声をかけ続けた。

ユタはヴィータに抱き抱えられていて、マリナの姿を見せないよう離れたところにいた。

マリナは体も冷たい。もう、命はないように思えた。

「……は……やて……さん？しぐな……む、さん」

「マリナ!?？」

「よかった、目が覚めたか！安心しろ、すぐに医療班が来るからな」

「ユ………タは……？」

「無事や！後はあんたを助ければ終わりや！」

「ああ、よかった……。シグ……ナムさん、ごめ……さい……おしえ……もらたのに……」

「大丈夫だ。今は無理に喋るんじゃない。傷口が開くぞ」

「はや……さ……。伝言を……お願い……ます。あの子に……ユタに……」

「アホー！自分で言いや！なに弱気になってんや！」

「ユタ……あなたは普通の女の子。クローンであるとか関係ない。女の子らしく、恋もして、元気に、幸せに……って……。はやて……さん、シグナムさん……ユタを……お願……」

こんなに喋れるのは、死ぬ直前に死者は一時的に回復するというよくわからない現象なのか。マリナは血を吐きながらもしゃべり続けている。

「なんでや！約束したんやろ！ユタと、これからはずっと一緒にいるって……」

「はや……さ……嘘……ついたことになっ……ごめんなさい……ごめんなさい……これからは……あの子を……よろしくお願いします。それと……ありがとう……ごぞいしました。私を……家族にしてくれて……。みんな……だいすき……です」

「マリナー！」

その言葉を最後にマリナは

息を引き取った。

「……。シグナム、ヴィータ、撤収しよう。これ以上こんなところに……マリナを置いておくわけには、いかんからな」

「承知した」

「わかった」

はやては、涙を拭いながらも立ち上がり、男とマリナを回収し本部に戻った。

26話 く親子喧嘩く

「これで私の話は終わり。……まあ、みんながそう言う反応をするのは、わかってた」

話が終わって辺りをみてみると案の定お通夜状態。まあこんな話を聞いて騒げる方が精神的にやばいか。

「コロナちゃん、合宿の時になんで辛いのに頑張れるのか私に聞いたよね?」

「え? あ、はい」

「私の強くなりたい理由。これでわかってくれた?」

「……はい」

コロナちゃんは暗い顔をしながら頷いていた。はー、だからあまり関わりたくないし話したくもなかったのに。

「アインハルト、もう理解してくれてると思うけど、私にとって聖王女オリヴィエの血は、この瞳は、生まれは、呪いのようなものなの。：母さんの子になってから、ずっと心配をかけたくないって、そう思ってた。けどどこの血が、この瞳がトラブルを呼んで、それで母さんを悲しませる」

「……」

「本当ならこんな血は要らないって、そう言いたい」

そう告げると母さんやヴィヴィオちゃん、果てはアインハルト達の顔も曇る。

「……ごめ」ま、それはそれとしてこの血のおかげで母さん達と出会えたのもまた事実。元より私自身の出生とか、血のつながりとか心底どうでもいいからね。だから……ヴィヴィオちゃん」

「っ、はい」

アインハルトが何かを言おうとしている上から被せるように言葉を続ける。

捨てられたあたりの話からずっと目を曇らせてるヴィヴィオちゃんに声をかけると驚いたのか少し声が高くなっていた。それに構わず言おうと思っていたことを口に出す。

「ヴィヴィオちゃんは、自分が造られたから私が捨てられ、悲しい思いをした。そう考えてるんでしょ？」

「……はい」

予想通り、ヴィヴィオちゃんは私の経緯を自分のせいだと思い込んでいたらしい。確認のために聞くと余計に声から元気がなくなっていた。

「はあ……だろうと思った。さつきも言ったように私の生まれとか、血の繋がりとかはどうでもいいの。なんなら経緯もね。……どちらにしろ『ゆりかごの鍵』として適正値が低かった私は廃棄処分か、殺処分されるかだっただろうし、たまたま捨てる理由がヴィヴィオちゃん、もしくは他に作ってたクローンの子になっただけなんだからそんなに気にしなくていいんだよ」

「……」

「元より、さつきも言ったけど私に流れる血のおかげで母さん達と出会えたの。確かに小さい頃は辛かった。だけど私にはお姉ちゃんがいて、母さんたちがいて……捨てられたおかげでみんなと会えて、ジークリンデ・エレミアっていう目標もできて、魔法戦技も大好きになれて。そして今ではヴィヴィオちゃんやみんなと楽しく練習できてる。」

「だから……それ以上自分を責めないで」

「……はい」

「つと、はい辛気臭い話は終わりにしよう。……で、いいよね？母さん」
横でずっと静かに見守っていた母さんに問いかけると何やら腕を組みながら考えていた。……やな予感。

「うん大丈夫。だけどウチとしては一個不満がある」

「はい？」

「マリナのことを言葉だけじゃあまりにも伝えきれん！あの子の仕草とか癖とか、得意料理とか！まだまだ話せたやろ！」

「そっち……？」

「あの子なあ、シグナム……あ、このピンク髪のザ武士って感じの人な。この人のこと大好きすぎてな……」

「はい母さん話が長くなるからやめようねー親バカにしか見えないよー」

「親バカで何が悪い!」

いや悪くないけど、果てしなくめんどくさいの分かりますか？

閑話休題

「……」

「ヴィヴィオさん?」「ヴィヴィイちゃんどないした?」

ヴィヴィイちゃんがなんか考え込んでいた。どうしたんだらうね。私のことについてまだ吹っ切れていないのだからか。

「ああ、いえ。…ユタさんのお話でちよつと色々と考えてしまったのと、それとは別でアインハルトさんやチャンピオンたちのお話と『エレミア』って名前で改めて思い出したんです。『エレミア』って名前が冠された武術家の手記を無限書庫で見かけたような気がして」

「それ、私も覚えがある!検索目録でタイトルを見ただけだったけど」
「確か、古代ベルカ項目だった『歴史上の人物の手記』のみだしで!」

と、明るく振る舞ってくれる初等科組。ちよつとでも空気を変えたいと言う思いからなのか。でも私にとってはそれが少し有難くも感じました。

ていうかヴィヴィイちゃんもコロナちゃんもリオちゃんも無限書庫に入ったことあるの?いいなあ、私入ったことないのに。

「母さん、無限書庫での探索許可ってもらえるものなの?」

「そやね、ウチから許可を申請してもええんやけど…もつと手っ取り早い方法があるよ」

「?」

どういうことだろうと思っているとヴィヴィイちゃんがカバンから一枚のカードを出す。

「わたし、無限書庫の司書資格を持っています!」

「」「ええええー」「」「」

うそー、ヴィヴィイちゃんなんで持ってたの……羨ましい。

「あたしたちも立ち入りパスは持ってます!」「そうなんです」「はー……。君ら、どういう小学生なの」

まさか、リオちゃんとコロナちゃんも持ってるとは…。

「じゃあ、早速明日にでも」

「私たちで調べて来ます!」

「持ち出しできる資料なら持ち出し申請も!」

と、初等科トリオが言う。

元氣いいねー。そういう子好きだよ。

『またロリコンになってますよ変態マスター』

「ロリコンじゃないわい。あと、久々に言うけど心を読まない」

『それは無理な相談です』

「ですよー知ってた」

「:わたしも行きます」

「ウチも…」

「それ、オレたちも行けねーか?」

「わたしもですわ」

「いやいやいや!」「勝ち残ってるみなさんはまだ試合が!」

と、無限書庫への探索に名乗りをあげたのはアインハルトを始めジークさんに番長、ヴィクターさん。

うん、この人たちが行くなら、わたしは行かなくてもいいかな。

「ここまで聞かせてもらった話の結末を子供達ばかりに任せるのもなんだか落ち着きませんわ」

「とくにウチはご先祖様のことなんやし」

「それに、試合前だからって練習以外は何もしてねーってわけでもねーんだ」

おおう、番長達は妙にやる気ですね。頑張ってくださいね。いい報告待ってますよ。

「敗戦組はまあ、気兼ねなく行けるから付き合おうとして」「わたしもチャンピオンのお供をしませんと」「な…ならボクも行きます!」

ミカヤさんにエルスさんにミウラまで行く気らしい。みんな元気なこと。

「わたしはパス…ほんなら、全員行くつてことでええなー!」…母さん、私はパスつて言つただけだ」

私には断る権利すらないのか。理不尽を許すまじ! 独身の神の理不尽を許すな!

「ユタ? いま何を思つとつたか言つてみい」

「イエナニモ」

「クラウソラス」

「急に魔力弾をぶつけようとしてこないで!」

「はあ、やつぱアンタと一緒にいたら落ち着けれんわ」

「こつちのセリフだ!」

「んじや、本局の宿舎も押さえられたし皆で一泊して朝イチで行こか?」

母さんの問いに私を除く全員ではーいと言う。

はあ…やる気が起きない。

「ずいぶん親切にして下さるんですね」

母さんにヴィクターさんが言う。

「私自身ベルカっ子やからね。 同胞同士仲良くしたいんよ。 それにユタのこともあるしなー」

「私はどつちかと言うと関わりたくないんだけど」

「できるなら、ジークの過去にはあまり触れて欲しくないと言うのも本音なんです。 あの子は『エレミア』ですけど…中身は本当に普通の女の子ですから」

「わかつてるよー。 そやけど、そのジークリンデも自分の過去とアインハルトの過去に向き合つて行くつもりなんやろ? 私もそれを応援してあげたい…ゆーんはダメかな?」

「おう、お嬢! 何ごちやごちややってんだ! さつさと荷物まとめろよー」

「今行きますわ！」

八神司令、ジークに変わってご厚意に感謝いたします」

「うん♪これからも仲良くしてくれたり嬉しいよ」

そして、ヴィクターさんはヴィヴィオちゃんに手を引かれて離れていった。

「ユタ」

「何？」

会場に私と母さんだけが残り静寂に包まれる。それを見計らったかのように名前を呼ばれた。

「今回はアンタも関わるべきやと思うてる」

「……何で？」

「自分のご先祖様としつかりと向き合うチャンスつてことや」

「別に：私は聖王女オリヴィエが、その人がどんなことをしてた人とか興味がない……。聖王女は聖王女、私は私だし……」

「はあ：ユタ。一つだけ言うとかわ」

「？」

「いい加減、そうやって逃げるのはやめえや」

母さんからそう言われ、思わず息が詰まる。呼吸が苦しくなる。：

「ただこれだけは反論したくて、無理に口を開く。」

「……逃げない」

「いいや、逃げとる。それは断言してやるわ。ユタは、興味ないって言うのは、行きたくないってのは、また自分のせいで誰かに迷惑をかけるかもしれないって思いからやろ？ だけどそれは違う。あの子たちはみんな自分の意思でアインハルトやジークリンデ選手達のご先祖様について知ろうと決めて動いてる。」

ユタ、あんたのその行動はみんなを馬鹿にしとるのと同じや」

「……違う」

「違わへんよ。マリナも言ってくれたやろ。聖王女の血を引いていようが関係ない。あんたは普通の女の子や。何処にでもおる12年しか生きていない子供。それで他人に迷惑をかけずに、って思いは立派

やとは思うよ？

でも：ウチはユタの母親なのも忘れんでや。：あんまりこんな言い方したくないけどな、子供は子供らしく、親を頼ってーな。今のユタは：見ていてすごく心配なんよ。一回くらい、全部打ち明けてほしい

「……じゃん」

「？」

「出来るわけないじゃんか！」

「あ、忘れ物しちゃった！」

「もー何やってるのヴィヴィオ」

「ごめーん！すぐとって来るから先に行つて！」

「わかったー」

荷物を置いている部屋へ向かう最中、ふと忘れ物に気づきりオたちに断りを入れて逆戻りする。

「早くしないと鍵閉めちゃうかも……」

大広間の扉に着き、手をかけるとまだ鍵は閉まっておらず、すんなりと開いてくれた。

「よかつ……」

「出来るわけないじゃんか！」

「っ？？」

扉を開けた瞬間聞こえてきたのはユタさんの声。いつもの元気をくれる陽気な声じゃなく、苦痛に満ちた悲しい声。それに驚いて思わず隠れてしまった。

「私は、私達は！あの日母さんが、みんなが家族になつてくれてからずっと、ずっとずっとずっと！八神家のみんなが大事で大切に大好きで！シグナム姉さんなんか会った時からすごく優しくかつたしヴィー

タさんもずっと楽しませてくれてた！母さんも危険なことわかってるのにその上で家族として迎え入れてくれたから本当にずっと大好きなの！でも、だからこそずっと心配かけたくなくて！」

「……アンタは抱え込みすぎなんや！さっきも言うたやろ！ちよつとくらいウチを頼れって！アンタはまだ12歳の子供なんやから！自分1人で全部どうにかなる訳ないやろ！アンタが人に心配かけたくなって頑張ろうとしてんのは分かるけど余計に心配するだけや！」

「じゃあ何！また聖王の血が云々って相談すればよかつたの!?？母さん達がすごく悲しそうな顔になるのはいつつも私の事なのに!?？」

「当たり前やろうが！それが親うちゅーもんや！」

「私にとってそれが1番嫌なの！」

「ウチにとつちやアンタのその行動が1番辛いんや！マリナの時みたいに何もできないのが歯痒くて辛いんや！何もできることがなくて見守ることしかできないのがどれだけ辛いか！」

「私もだよーなまじ記憶力が良いせいであの日お姉ちゃんが死んでしまふところとか、その時の母さんやシグナム姉さんがお姉ちゃんの近くで見せたあの顔が！ずっと私の心の中に留まつてるの！」

それ以来悲しませたくなくて！その為には強くならなきやって思つて頑張つて！だけどいざ本番で決勝まで行けたあの日にまた心配かけちやつて！すごく、すごくすごく辛かった！悲しかった！だからこそもっと強くならなきやつて思つて今日まで頑張つてきた！

だけど！

アインハルトと会つてしまった日からまた聖王がどうのこうのつてまた心配をかけちやつてから！あの日以来ずっと、ずっとずっとずっと聖王女オリヴィエの記憶に甦られ始めてから！

……私は、もう、自分のこの血が、嫌いで嫌いでしょうがないの。いつつもそう。母さんを悲しませるのは、私に流れる聖王女の血。だったらこんなもの、要らない……。いつそのこと……この眼も、一年前のあの日、抉り取れてしまえたらどんなに良かったか」

初めて見せるユタさんの本音。それを吐き出していたユタさんの声は最初こそ強かったけど段々とか細く、弱く、最後には泣きながら小さく呟いていた。

私にとつては他人事のように思えなくて。だけど何を言えば良いのかわからなくて。

助けたいけど今の私では到底無理だと、そう思ってしまった。

「私に流れるこの血が嫌い。この血のせいで大好きな人たちを悲しませる。だけど……この血のおかげで私は、私達は母さん達に出会えた。」

……もう、どうすれば良いのか、わからないの」

「あ、ちよつ、ユター」

ユタさんは涙を拭いながら言い、出入り口へ向かう。それをはやてさんが呼び止めるも、扉の取っ手を握った時に少し止まっただけで。

「…無限書庫には、ちゃんと行くよ。私自身と向き合うってチャンスだって言うのは納得してるから。…だけど、それだけ。私は私。聖王女は聖王女。」

私は……聖王女じゃない。アインハルトとか、ジークさんとかの願いには、何も関係がない」

パタンと扉が閉まり、ユタさんがどこかへ行ったのだろうと分かる。けどどこの雰囲気の中でも良いのかなと思いついその場から動けずにいた。

「……ヴィヴィオちゃん、出てきても大丈夫よ」

「うえつり?」

だけど隠れていたのはバレていたらしく、いつもの活発なはやてさんからは考えられないような弱々しい声で呼ばれ少しびっくりしてしまう。

「え、えーと、その……ごめんなさい。聞くつもりじゃ……」

「ええよええよ。気にしてへんから。…プライドもすまんなあ。こんな不甲斐ない親で」

『いえいえお気になさらず。ですがまあ、御二方に言いたいことロツキー山脈並みに大つつ量にありますますが今はやめておきましょう』

「はは、ありがとーな。……それでヴィヴィオちゃんはどないしたん？」

「え!??えーと、忘れ物しちゃってそれで取りに戻ってきて…そしたらユタさんの声が聞こえて思わず隠れちゃいました……」

「…ごめんなあ。見苦しい所を。やっぱりウチはつくづく親つて言うのに向いてへんなあ…。なのはちゃんが羨ましいよ。傷つくことを恐れずに真つ直ぐぶつかれて、もっと仲良くなれて。ウチよりも母親つていうのをやってる時間は短いはずなのに立派な母親で…。あ、この話は内緒でお願いな」

笑いながらそう言うけれど、どう見ても無理して笑っているようにしか見えなかった。

「……ヴィヴィオちゃん」

「っ、はいっ!」

「きつと無限書庫でユタは無理してでもいつも通り振る舞うと思う。だから…無限書庫から戻ってくるまではユタのこと、気にかけてあげてくれないかな?」

「勿論です!任せてください!」

「ありがとうなあ。プライドも、もしユタが暴れたらその時は遠慮なくやるんやで?」

『お任せください。はやてさん直伝の魔力回路ハツクの腕を見せつけてあげましょう。なによりマスターに他人を傷つけてしまう度胸なんてありませんし、元よりそうだった時は止めるつもりでしたので。とりあえずマスターの黒歴史5選あたりを公共放送で流しましょうか』

「それをやるとウチにもダメージきそうやからやめてな?」

「そうやって笑いながらはやてさんにプライドさんを預けられ、会場を後にする。」

「ただどうしても、嫌な予感が拭えなかった。」

↳翌日 管理局本局内部↳

「あ、ユタさん。これ愛機のプライドさんです。昨日忘れてましたよ」
「あらま、ありがと。んでプライドは何も変なことしてないよね？」
『マスターよりも補助しがいのある方でしたので正直言うと乗り換えよっかなーとか思いました。おかげでクリスマス様と三日三晩の熱い夜を過ごすことになりましたが」
「1日しか経ってないが？」

「はい、みなさんこちらですー」

ヴィヴィオちゃんに案内され無限書庫へ案内される。今は一般解放区画だとのこと。何度かきたことあるけど広すぎていまだに覚えきれていない。

「目的地はこの先ですよー」

と、今度はゲートの前まで案内された。

「では、こちらのゲートから入ります！書庫の中は無重力なので慣れていないと気分が悪くなる方もいらつしやいます。そう言う時はすぐにお伝えくださいね！」

はーい、と一同で答える。いつのまに遠足になったんですかね。

「それでは古代ベルカ区画に……ゲート・オープン！」

その言葉の直後、私たちはなんとも言い難い不思議な空間に出た。

「「「おおー！！！！」」」

周りには本棚が大量、いや、大量の域を超えて所蔵されていてその空間が無限に続いている。

そして、何と言っても無重力だ。

初めて来る人……特にミウラや番長、ジークさんは戸惑っている様子だ。

私はというと……

『マスター、器用なのか影が便利なのかよくわかりませんね』

「影が便利があつてと思う」

私特有の魔力変換で影を作り、それで体を支えることでなんとか体

勢は保てる。少しコツはいるけど動きやすくはある。影のロープで体を繋いでいるようなものだろうか。

「それでは目的のエリアに向かいまーす！……あれです！……ここが今回の目的の場所！」

「どこかの王家が所蔵していた書物庫らしいですよ」

「一時調査は行われているんですがとくに危険物は確認されてないそうです」

無重力空間をしばらく進み扉を見つけるとヴィヴィオちゃんたちが元気に説明してくれる。

うん、ていうか危険物とかそんなものあるの？

『前は守護用のゴーレムや迷宮なんかがあったらしいですよ』

「へー、そうなんだ。つか、しれっと心読まないでもらって良い？」

『無理な相談ですね』

知ってた。

「それじゃ扉を開きますねー」

ゴゴゴゴと、いかにもな音を立てて扉は開いていった。

中には……

「ご覧の通り迷宮型ですー！」

文字通り、迷宮がそこにはあった。

「とりあえず10箇所くらいまでありそうな場所を絞り込んだので」

「手分けして探しませんか？」

うん、いいね。その案でいこう。というか、私は初めての土地には弱いから1人だと死ぬ。確実に。

ちなみに班分けは

ヴィヴィオ&ミウラ

ハリーさん一味&エルスさん

ヴィクターさん&コロナちゃん

ミカヤさん&リオちゃん

アインハルト&ジークさん&私

その際にヴィヴィオちゃんから大丈夫なのかとか、色々確認されたけど体調万全だから大丈夫と返した。だけどそれでも心配そうな顔

は無くなっていなかったけど。

「さー！それでは調査に入りましょう！」

「「「「おー！！！」」」」」

「ユタのそれほんまに便利やな」

「便利ですけど魔力の消費を最小限にしないとすぐガス欠になっちゃいますねコレ」

「けどいつ見ても…珍しいって思ってます」

うん、だろうね。私も未だになんてこうなってるのが不思議だし。

「うーん、にしても当たりはなさそう。アインハルトたちは？」

「ウチはまだ見つけてへん」

「目的の本はないようですが…この本棚はクラウドたちが生きていた時代とかなり近いものようです」

「目的の無いかあ…キツイな……。ああ……。そういえばハルにやん」

「……」

本探しの最中に急にジークさんが発した言葉が理解できず、私もアインハルトもジークさんの方をじつと見てしまった。

「あの…」

「ジークさん、それってアインハルトのこと？」

「あああ！そや！言ってるんかった！『アインハルト』やから『ハルにやん』って呼んでええ？って聞こうと思ってたんよー！そしたらいきなりこっちで呼んでもーたー！ー！ー！」

……なんだ、この面白い光景は。ジークさんが頭ブンブン振り回してるしアインハルトは赤面してるし。

とりあえず、写真は確保した。

「アインハルト・ストラトス。ジークリンデ・エレミア。ユタ・ヤガミ」

そんな、楽しい本探しは突如あらわれた乱入者によって止められた。

声のした方向を見ると魔女がいた。金髪でいかにもな魔女が。けど、見たことがある。

「……フアビア・クロゼルグ選手？なんでこんなところに」

クロゼルグという名前を呼んだ瞬間また頭がズキッと痛くなる。少し魔力制御が揺らいで体が傾くけど何とか耐える。

『真名認識・水晶体認証終了』

「[[&?]]」

突然、魔女の周りにいた悪魔のようなものが巨大化し口を大きく開けてきた。

『吸収』
イタダキマス

そして、私たちはそれに食べられた。

私たちは、小さくされて小型の瓶に詰められてしまう。

「あなたたちには後で聞きたいことがあるから個別の瓶。今はエレミアの手記を——」

ダメだ……こいつの言葉を聞いてると……頭が……いた……。

「ガイスト・ナーゲル！」

そんな中、外から私の瓶は破壊された。正確にはジークさんの『エレミアの神髄』が発動して壊した余波で私のも壊れただけだった。

けど、未だに頭の痛さは治らない、

むしろ酷くなっている。

目の前の光景を見ることすら辛い。

私はその場に漂うしかなく、そのまま意識を失った。

27話 く本音く

頭が、割れるように痛い。

おかしい、古代ベルカとか、の、末裔とか、に、あつ、てか……ら
……ず……と

記憶も、いろ、んな物が頭の中、で、ごちや、ご、ちやして

『マスター、目を覚ましたのなら早く拾っ……マスター?』

ユタは、無意識のまま起きていた。そして、セットアップをし、虚
ろな目をしながらもどこかに行こうとする。

そばで服と一緒に漂っていた愛機であるプライドの言葉も届いて
いなかった。

「……」

『マスター、どうしたんですか!』

プライドが声を荒げる。

それも当然だ。

ユタの変換した影が右腕、そして顔の左半分、正確には左目の部分
を覆っていた。いや、覆うというよりは溢れ出していると言った表現
が正しいかもしれない。

「さがさ……なきや……」

『マスター! いい加減目を覚ましてください!』

そんなプライドの声も届かずユタは誰かを探しに行ってしまった。

「ミウラ・リナルデイ、ヴィヴィオ・タナマチ」

ファビアは、ヴィヴィオ達を見つけると同時に名前を呼んだ。そし
て掌にいた悪魔っぽいものが巨大化し飲み込もうとする。

「デイバインバスター!」

それをヴィヴィオは魔力弾を撃ち回避した。

「ファビア・クロゼルグ選手ですよね? インターミドルで勝ち残って

る。説明してくれませんか？どういうことか」

「私は『魔女』だから。欲しいものがあるから魔法を使って手に入れる。ブラックカーテン【失せよ光明】」

「!?？」

突然、2人の視界が真っ暗になる。

「魔女の呪いから逃れる術はない」

そして、2人もあっけなく飲み込まれた。

が……

「……？オリヴィエの末裔は……？」

ヴィヴィオだけ瓶詰めになされていなかった。

「名前を間違えたかな？…いいよ、瓶詰めできなくてもどうせ逃げられないし。ダールグリユン達の方もそろそろ制圧できてる頃。念のため人質も預けてあるし、入り口の守りも万全。もう誰もここにたどり着けない。あとはゆっくりエレミアの手記を探すだけ」

別の場所では、ヴィクターとコロナが大量の悪魔相手に応戦していた。

「ヴィクターさん、あれ…」

「？」

コロナが親玉のような悪魔を指差す。

すると、そこには瓶詰めにしたハリー、エルス、ミカヤ、リオたちが出た。

「なんてことを……」

「？」

だが、瓶の中の人たちは危機とは思っていなかったらしい。

エルスは口パクで『あと1分』と伝えた。

それは、イレイザーの準備完了まで1分という意味に他ならなかった。

その意味を受け取った2人は不敵に笑う。

「ハリーさんのイレイザーなら自力で脱出できますね！」

「まあ、そのくらいは当然ですわね！むしろ1分以内に全滅させてあの不良娘に恩を着せてあげますわ！」

「そうしましょう！」

場所は少し戻りファビアのいる場所。

「(エレミアの手記、別に興味があるわけじゃないけど奪って私のものにする。オリヴィエ、エレミア、イングヴァルトの三人への復讐はクロゼルグの血統に課せられた使命)」

『魔法の誇りを傷つけたものは未来永劫呪われよ』だっけ？」

そんなファビアの探索を中断したのは

「そんなこと言ってるから時代に取り残されるんだよ。時空管理局嘱託魔道士ルーテシア・アルピーノ！盗聴・窺視及び不正アクセスの件でお話を聞きに来ました！」

ルーテシアだった。

「なら、ルーテシア・アルピーノ、これを見て」

ファビアはユタたちに使った悪魔を使う。

『真名認識、水晶体確認』

そして、また巨大化し飲み込まれ——

「ソニック」

たかと思つたが飲み込まれておらず、いつの間にかヴィヴィオを抱きかかえていた。

「名前を呼んで相手を飲み込む……古典的な技だねえ。だけど時代はスピードなんだよね。古い技に固執してちゃあ取り残されるよ」

ルーテシアを睨むファビア。その懐を何かが駆け抜けた。

「ティオ、ナイス♪」『にやー♪』

それはティオだった。ティオは的確にアインハルトの入っていた瓶を取り返していた。

「……！」

「さーて、おとなしく降参したほうがいいよ？でないとお姉さんがお仕置きしちゃうから」

「魔女をあまりなめないほうがいい」

「……」

「あ！ユタさん！よかつた無事……で？」

「ユタ？」

フアビアとルーテシアが向かい合っている頃、ヴィクターとコロナの元にユタが現れる。

だが、二人とも困惑していた。

ユタの影を見たことはあつたがあんな使い方をしたのを見たことがないから。

だがそれ以上にユタの冷たい目に驚いていた。そんな表情をする人じゃないのを知っていたから。

「……邪魔」

「!?？」

ユタの足元から突然影が絨毯のように広がったと思うと無数にいたと思えた悪魔に向かって影が下から一気に伸び突き刺さる。

だが、コロナたちの安全を全く配慮しておらず結果的にコロナもヴィクターも僅かだが傷を負った。

『キィー！』

それを見てまずいと思ったのかりーダーっぽい悪魔は何処かに行ってしまった。無事だということは避けたということだろう。

それを追いかけるようにしてユタもどこかに行ってしまった。

「ゆ、ユタ!?？」「ユタさん、どうしたんですか!?？」

『コロナさん！ヴィクターさん！』

2人が追いかけると途中で通信が入った。それは人ではなくユタの愛機のプライドからだった。

「プライドさん?」 「プライド? どうしましたの?」

『2人とも、急いでマスターを追いかけて止めてください! でないと、マスターは……ああもうっ! またですかっ!』

「え?」 「どういう……」

『とりあえず、早くお願いします! ああついでにコロナさんかヴィクターさんのどちらか私の回収をしてください! すぐ近くなんで! それじゃ!』

「どう? 投降する気になった?」

「……………」

ファビアは壁際に捕らえられていた。が、諦めている気配はなく何かを詠唱している。

「警告だよ。詠唱を止めなさい。でないと公務執行妨害も追加に……………」

ルーテシアが右腕をあげると、そこには人形のようなものが張り付き、グローブが花へ変えられる。

その直後に真上から瓶詰めにする時に使っていた悪魔のしかかってきた。

「コノ……………」

デビルユナイト
「悪魔合体」

リーダー格のような小さい悪魔たちが次々とファビアに取り込まれていく。そして最後には飲み込まれたかと思うとその中で光りだし、少し大人びたファビアがいた。

「魔女誇りを傷つけた者は――」

「未来永劫呪われよって? まー向かってきてくれるなら望むところ!」

「這え 穢れの地に」

「んんっ!? ふおおっ!?」

突如ルーテシアが地面に激突した。まるで、そこだけ重力が発生したように。

「(重力発生系、ミッドやベルカのは随分違うなあ!)」

「撃って」

悪魔によって槍がルーテシアに放たれる。

「!」

が、それはアインハルトによって止められていた。

「クラウドス…!」

「スパークスプラッシュ!」

更に、驚いているファビアの後ろからヴィヴィオが現れ殴り飛ばした。

「ロック!」

ヴィヴィオによりバインドをかけられ、ファビアは再度捕らえられた。

「2人とも目覚めたんだ? ナイスタイミングだよ」

「ええ、ルーテシアさんのおかげです」

「助けてくれてありがとうとルー!」

「なんのなんの。他のみんなも急いで探さないとだね」

そこに、新たに1人——ちっちゃくなったジークリンデが現れた。

「魔女っ子どこ行ったー!」

「チャンピオン…」

「ハルにゃん!?」

「あの子の魔法にやられちゃいました?」

「ううー恥ずかしながら」

「じゃ、魔女っ子に元に戻してもらいましょうか。事情も聞かないといけないですし」

だがジークリンデとアインハルトを見たファビアは更に怒りを露わにする。

「私は——呪うことをやめない！私を見捨てた王たちを私は絶対に許さないから！」

ファビアは、バインドを無理やり解き姿がさらに変化し、翼が生える。

「……！みつ……け……た！」

そこに、さらに乱入者——ユターが現れた。

ユタのその姿を見て、この場にいる人はどう思ったのだろうか。思ったことはいろいろあるだろうが一つの思いだけは全員にあった。

今のユタは止めないといけない、と。

「クラウドス……あと、クロゼルグにエレミアも……。嗚呼、やっと……」

ユタはアインハルトとファビア、ジークに向かい影を一気に伸ばす。

3人は慌てて避けはするもいた場所は綺麗に削られていた。削られた跡をみて3人は臨戦体制に入る。けどアインハルトとジークリンデの2人には明らかに迷いが見られた。

「ユタさん！正気に戻って！」

ヴィヴィオが叫ぶが届かず、この場の全員に対して敵対行動をとり始める。縦横無尽に影を伸ばし、縮め、拡げ、命を狩らんと動く。

「黒炎！」

「ちよ、ちよつとまって！」

「ユター！何やってんねん！あつ、ちよつ、あぶつ……？」

「ユタさん！どうしたんですか……？」

ファビアは魔力弾を撃ち対抗する一方、ヴィヴィオやアインハルトたちはどうするのが正解かわからず避け続けている。

「イレイザー・バーストツ！」

そんな、縦横無尽に伸縮していたユタの影の大半を誰かの砲撃が
気に消しとばした。

「ユター！お前何やってんだよ！」

「ユタさん！なんで……………」

「これはまたとんでもないことになってるね」

「ばん…ちよ、リオちや、ミカヤさん…」

それは、ハリーのイレイザーだった。それにより瓶をぶち破り捕
まっていた人が脱出、すぐさまセットアップを済ませる。

「みなさん！」

「無事だったんですね！」

そこにコロナとヴィクターも集合し、全員がユタを取り囲む。

「じゃあ、とりあえずは…行くわよ？プライド」

『ええどうぞ。ちよつとやそつとじゃ壊れませんので思い切り』

「せえやあつ！」

ヴィクターは手に持っていたプライドを思い切りユタへ向かって
投げつける。それを影で受け止められたりすることなく、ユタのお腹
へ着弾する。同時にユタの体の中へ取り込まれ左手の甲にプライド
の紋様が現れる。

『どうもマスター。お気分はいかがですか』

「ぜんつ…ぜん良く、ない。ああ、また、まただ。頭が、グラグラして

……………ああああ!!!」

ユタは影を全員に向かって鋭利にした影を勢いよく伸ばす。

全員避けるか撃墜をしようとしていたがその直前に影が地面に突
き刺さる。

「プ…ライド！なんで、なんで邪魔するの！」

『当つたり前でしようが！私は、マスターが人を殺しそうになるな
ら、全力で！邪魔をすると！言いました！忘れたとは言わせませんよ
このアンポンタン貧乳マスターが！』

「う…るさいうるさい！私のことなんて何も、なにも知らないくせに
！」

『えーえーそうですとも知りませんとも！どこぞのアホマスターはな

んつつつつにも言ってくれませんかね！ですがこれだけは言えます！マスターにそんな他人を傷つける姿なんて似合いませんよ！あついでに悲劇のヒロインぶってる姿もですね！』

「じゃあどうすればいいの！私は……」

「パニッシャー！」

動きが止まった隙を見逃さずエルスがバインドを仕掛ける。それもそうでプライドから全員へ、ユタの動きを止めるからその隙を狙って力づくで止めてくれと通達されていたから。

が、エルスのバインドは影で即座に対応され防がれる。

「私は……」

「……っ！ユタさん！」

アインハルトがユタに接近する。

「ああ、そうだ。アインハルト、キミだよ……キミと会ってから……私……」

ユタは周りに散らせていた影をアインハルトに向ける。それに対しアインハルトは霸王流の構えを取る。

しかし2人が戦うよりも先に、ユタが悲痛な声を上げる。

「私は……私は！普通に生きてきたかった！笑っていたかった！母さん達と家族として過ごしていたかった！くだらない事で喧嘩になったりとか、そういう普通の子として生きていたかった！

オリヴィエのクローンとしてじゃなく、普通の女の子として！お姉ちゃんとした最後の約束も守りたかった！普通に生きようと頑張った！

なのに！アインハルトもクロゼルグも！みんな！私を、オリヴィエとしてしか見ようとしてくれない！私に深く関わってくれるのは、オリヴィエのことしかない！それでいっつも悲しい思いになる！思いにさせられる！

なんで昔のもういない人のことで私が苦しい思いをしなきゃいけないの！

大好きな母さん達にも心配させてばかりで！もう母さん達の
悲しい顔なんて見たくなかったのに！

なんで……なんでなんで！オリヴィエじゃなく私として見てくれないの！

こんなことなら私は……生まれたいほうがよかった！

この身がどうなろうともユタを止めようと覚悟し接近したはずの
アインハルトの心を、ユタの言葉が最も容易く砕く。

「私、は……」

何かを言おうとするも、何を言うべきか、言ってもいいのかわからぬ
思いのせいでアインハルトは口を開くことができずにいた。

「こないなら……こっちから、いくよ」

「っ？？」

ゾオツと寒気を感じ、崩れかけていた構えを再度整える。それと同
時に影が今まで見たことのない速度で放たれる。

首を横に逸らすことでなんとか避けはしたが、頬には一筋の傷がで
きていた。

『アインハルトさん！構いません！思い切りぶっ飛ばしてください
！』

「プライドさん、ですが……」

『話をしたいならまずはマスターを止めてから！でなければもつと酷
い事になります！』

ユタの左手の甲から響くプライドの声にアインハルトは改めてユ
タと向き合う。

その時に影で顔半分が覆われていたせいで分かりにくかったがユ
タはずっと涙を流している事に気づいた。その事実が余計にアイン
ハルトの心を苦しくする。

「…わかりました。ユタさん。これより力づくで止めさせていただきます」

ます。多勢に無勢ですが…今だけはお許しください」

「やれるものなら…やってみろ」

28話 死闘の幕開け

まず接近したのは一番近くにいたアインハルト。影の制御はプライドが妨害しているせいもあってか普段ほど繊細な動きはできておらず、簡単に懐に入り込む事に成功する。

数回殴り合ったところでユタの動きが急にピキツと鈍り、左側へよろけた。それを見逃さずアインハルトは必殺の構えをとる。

「霸王・断空……」

「……」

『っ、ダメですアインハルトさん、畏……』

「拳……」

「ガアッ！」

ユタの鳩尾へ向かい放たれた拳は当たらず、無重力なのを活かし横向きになったユタは右の掌で受ける。その勢いで回転し逆にアインハルトの顎へカウンターアッパーをクリーンヒットさせた。同時に硬化魔法を発動させていたことでアインハルトは一瞬にして意識を断ち切られていた。

『まっ……たく、肉体制御のハック方法も聞いておくべきでした……！』

「いい加減、じゃま、しないでよ」

「お断りします！」

影を練ろうとするも未だプライドの妨害が効いているのかうまく実体化できずにいた。それに少しもどかしくなったのか意識混濁しているアインハルトへゆつくりと近づく。

「ガンフレイム！」「紅蓮拳！」

「……っ！」

ユタにアインハルトへ近づかせまいと、リオとハリーは焰の砲撃を放つ。

それをユタはほんの少し見、そのまま飲まれる。

「ちよっ、やりすぎでは!?？」

「これくらいやんねえと止まらねえだろあのバカ！」

「確かにそうかもしれ……ませ……」

「あ？何きよどつてんだお嬢……」

煙が晴れるとそこには、影を展開することで傷一つ負っていないユタが立っていた。

「うっそだろ!?？」

「皆様離れて！」

「吸収……放射」

ドガアン！

「あぐっ!?？」

「きやつ……」

「……っ！」

ヴィクターが離れるように言うも既に遅く、ハリーへ向かって先ほど打ち込まれた焰が放たれる。ハリー、リオ、ヴィクターは間一髪避けはしたものの爆発に巻き込まれ壁に打ち付けられた。

『ぐっ、魔力制御を強引に奪い返しますか……』

「フーツ、フーツ。……ッ、アアアアッ！」

ユタの足元へ影が一度収束し、咆哮と共にアインハルト、ジークリンデ、ファビアの元へ放たれる。

ユタの目的はあくまでも、その3人だった。

「天月・霞！」

「創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに！叩いて碎け！『ゴライアス』！」

「デイバインバスター！」

アインハルトをヴィヴィオが、ジークリンデをミカヤが、ファビアをコロナを守る。だがそれすらユタは見越していたかのように影を再度動かしていた。

「影の拘束」
シャドウ・バインド

密かに展開されていた影が3人の足元から伸び、バインドが掛けられる。コロナはゴライアスに載っていた関係上避け切ることはできなかったがヴィヴィオとミカヤはうまくかわす。それを見たユタは

再度影を展開しようとするもプライドの邪魔によりうまくできていなかった。

その隙を利用し近づいたのはヴィヴィオ。それともう1人。

「ユタさん！」

ヴィヴィオが後ろから抱きつくと同時に、ミウラも前から抱きついた。

「お願いです！これ以上はやめてください！何よりはやてさんが悲しんじやいますよ！」

「そうです！それに師匠やシグナムさんもきつと悲しみます！だから…いつものユタさんに戻ってください！」

「もう…無理なの！私は、みんなのところに帰れ、ない。だから…はあつ、じゃま、しないでよ！みんなは！何も関係ない…！」

「嫌です！」

「っ…なん…そうまでして…！」

「ユタさんが好きだからに決まってるじゃないですか！」

「だけど！私は！私自身が…嫌いなもの！もう、放っておいてよ！」

「絶対に嫌です！自分のことが嫌いなんで…そんなの悲しすぎます！」

「なら僕たちが何度だってユタさんの凄いとこるか好きなどころを伝えます！ユタさんが自分自身を好きになれるように！」

「………ッ！」

ユタは余計に辛そうな、泣きそうな顔をしながら影を使って2人を引き剥がす。2人は壁に打ち付けられるも、すぐさま立ち上がりユタの前に立ちはだかる。

「まだ邪魔するなら…もう、容赦、しないよ」

「構いません！安心してください、ユタさんの想いも、悲しみも、全力で受け止めて見せますから！」

「…警告、したから、ね」

ヴィヴィオは嘗ての自分を思い出していた。余りにも、似通ってい

たから。

「(自分のせいで大好きな人を傷つけちゃうのが苦しいのは凄くわかる。…だけど!) 行きますよユタさん。今日だけは私の方が先輩です。」

「何…言って…」

「ミウラさん、きっと私の力だけじゃ届かないので、力を貸してくれませんか?」

「勿論です!」

2人でユタさんの前に立ちはだかる。絶対に止めなきや。

「(凄く…泣いてる。きつと…ずっと辛かったんだろうな。誰にも言うことなく、独りで全部抱え込んできたんだろうな。だから…)」

「(普段のユタさんもきつと、ありのままのユタさんに違いはない。けど今のユタさんもきつとありのままのユタさん。誰にも心配をかけたくなって独りで悲しんじゃって。だから…)」

「(独りじゃないって全力で伝えなきや!)」

「…:創主ユタの…名の下…:敵を切り裂け。冥府ハーデスの影」

ユタさんが右手を上げると岩が持ち上がり、それに影が纏わり付き一体のゴーレムになる。その手には影の大鎌を持っていた。

「行け」

「ミウラさん!崩れた岩を足場に!」

「!わかりました!」

影のゴーレムは真っ直ぐに向かってきて鎌を振り上げる。それを2人は浮遊していた岩を足場にし横によける。

「ヴィヴィオさん!ゴーレムはボクがなんとかします!ユタさんはお願いますね!」

「わかりました!任せてください!」

ヴィヴィオを追撃しようとしたゴーレムに向かい再度ミウラは跳躍し、ゴーレムに踵落としをきめ地面に叩き落とす。

『ギギ…』

だがゴーレムは碎ける事なく、ほんの僅かに纏っていた影が崩れて

いただけ。だけどそれを見たミウラは、何よりも先にユタの努力の結晶に想いを馳せていた。

「格闘戦技も魔法もこんなに使えるようになるまで頑張るなんて、どれほど努力したんだろう。……どれだけ悲しかったんだろう。だけど、今だけは負けるわけにはいかない」スウー拔剣！」

ミウラは足の装甲に魔力を集中させ、抜剣を起動させる。

「全力で蹴ったのにほんの少し影が消えただけ。なら……もつと強く、速く……」

ミウラは足に力を込め、再度ゴーレムに近寄る。本来のユタの魔力制御の精度からならリスクが大きすぎるように思える事でも、今ならば出来るかと確信していたから。

『ギ……』

「(やっぱり単調操作しかできないんだ！これなら……)」

ゴーレムに命令された行動は『敵を見つける。その敵を斬りつける』の二つのみ。それをミウラは直感で理解し持ち前の拳の威力でゴーレムを殴り、蹴りつける。

「飛燕！」

『グガア！』

ゴーレムが大鎌を振り下ろすも、ミウラはそれを上に避け岩を蹴りゴーレムに肉薄する。そのまま魔力を込めた脚でゴーレムを粉碎する。

「よしっ！速くヴィヴィオさんのところに……」

その頃にはバインドをかけられていたミカヤやコロナ、爆発に巻き込まれて打ち付けられていたハリーやヴィクター達、さらにはアインハルトも復帰しており、対面しているヴィヴィオとユタを取り囲んでいた。が、手を出す気はないらしく、2人を見守っていた。

が、アインハルトだけは手を出す資格が無いと考えていた。

「(私は……どうすれば)」

ユタを止めたい。ユタを助けたい。そのどちらも本心なのは間違いない。ただどここの現状を起こしたのは紛れもなく自分が原因。

だからこそ、何をすべきか分からなくなってしまっていた。

「はあっ、はあっ…：やっぱり、ユタさんは凄いですね」

「凄く…：ない。こんなもの…。どれだけ努力しても、結局大好きな人達を悲しませることしかできないんだよ。この血のせいで。それに、私は…：強くないから。母さん達の教えすら守れず。だから、こうするしか、ないの」

ユタさんの動きは明らかに鈍かった。いつもなら反応できていたはずの私の拳すら反応できず、影での対処もプライドさんの妨害のせいも相まって単調にしかできていない。

だけどそんなユタさんにも決定打が全然取れないのもまた事実だった。軽い打撃は入ってもそれ以上が入らない。ユタさんの体捌きは本当にすごいな…：って、普段の私ならそう思って楽しくなっていたんだろう。

けどユタさん自身がユタさんの努力を否定しているのが、凄く嫌だった。悲しかった。

「気持ちには、凄く、物凄くわかります」

「…：…？」

「だって私も同じでしたから」

「何の…：こと…」

だからこそ、同情を誘いたいわけでは無いけど、私のことをユタさんにも知って貰おうと思つて、過去のことを話す。ユタさんも辛いはずなのに話してくれたから。だから私も包み隠さず話そうと、そう思った。

「私もユタさんと同じ聖王オリヴィエのクローンなのは知ってますよね？ 鍵として生み出されて、ユタさんと違ってゆりかごへの適正値もそのままに作られました。そしてゆりかごの王にさせられました」

「…：…」

「そのせいでママに助けてもらえるまで心も体も思い通りにならなくて、ママ達を殺しかけちゃった事があって。ずっと辛かったんです。

けどママ達は私がオリヴィエのクローンだってことも全部纏めて受け止めてくれました。全力でぶつかり合ってくれたからこそ家族になれました。リオやコロナもそんな私と友達になっただけで。私を私として受け入れてくれた人達がいたからこそここまで来れました。

きっとはやてさん達もユタさんの全部を受け止めてくれます。もちろん私達も全力で受け止めます。だから…止まってくれませんか？」

「……ごめんね。もう、無理なんだ」

そう呟くと同時にユタさんは影を足元に収束させていく。これは…。

「ッー」

幾度となく見たユタさんの得意技とも言える影。それを足元に収束されると同時、縦に、横に拡がる。そこから数多の触手―1つは鋭利に、1つは鈍器のように、1つは鞭のように―変化し私に向かってくる。ここはルールやシステムで守られた場所じゃない。だから1発受ければ下手をすれば死ぬ。

だからこそ私の眼はより冴えてくれ、何処をどう避ければいいのか教えてくれた。それに映像で何度も見ていたのも避けられた理由の一つだった。

「やっぱり、相変わらず視力は、良いね……。今のとか、ゴーレムも本気なのに、全部避けるん、だから」

「あつたりまえじゃないですか！ 私たちがどれだけユタさんやアインハルトさんに憧れて、それでいて勝とうと研究してきたと思ってるんですか！」

「……私、に？」

「はい！ ずっとずっと私達より沢山努力してて！ それでいて優しいユタさんに勝ちたくてずっと研究していました！ リオやコロナ、ノーヴェと一緒に！」

「……私は、ヴィヴィオちゃんたちに、そうまで尊敬されるような、人間じゃない」

「かんつつけないです！」

もうずっと自分のことを卑下し続けているユタさんに思わず叫んでしまった。そんな私に驚いたのかユタさんが纏っている影が一瞬ビクツと揺れた。

「私にとって、私達にとってユタさんは大好きで尊敬できる先輩！そこにユタさんがどう思っているようが関係ないです！私達は私達の意志でユタさんを慕っているんですから！」

「……じゃあ、その幻想を、今すぐ、取っ払うのをお勧めするよ。ヴィイオちゃん。殺す気は無いけど、手加減はできないから、気をつけ、てよ」

「かまいません！私が勝ちますから！」

『申し訳ありませんはやてさん。マスターを止められず……』

「構わへんよ。ごめんなあプライド」

『謝るのは私の方です。……今はヴィイヴィオ様が止めておられますが、いつまで持つかわかりません』

「わかってる。急いで……あんのど阿呆の目を覚まさせようか」

『全力で支援致します』

29話 く本音と本音く

「プライドさん！お願いがあります！ユタさんにかけてる魔力妨害なんですけど解いてください！」

ヴィヴィオが真つ先に声をかけたのはユタの愛機であるプライド。だけどその提案はあまりにも受け入れ難い内容だった。

『っ、何を、お考えですか！そんなことできる訳が』

「大丈夫です！信じてください！」

『しかし…』

ユタの粗雑な影操作を避けながら何度も何度もプライドへ打診する。それにとうとう折れたプライドが叫ぶ。

『ッ…知りませんよ！』

「大丈夫！大船に乗った気で居てくださいいね！」

プライドが魔力妨害を解除。ユタはヴィヴィオの真意が分からず困惑するが、すぐに頭を切り替え影を足元に収束させる。

そして狙うは聖王ヴィヴィオではなく霸王アインハルト。

影はアインハルトへ向かい勢いよく放たれる。

「ッ！」

「はあっ！」

だがヴィヴィオはそれを許さず影目掛け魔力砲をぶつけることでぎこちないアインハルトを救う。

「もー！今は私だけを見てください！アインハルトさんに手は出させませんし、そんなにやりたいなら私を倒してからにしてください！負けませんけど！」

「ヴィヴィオさん、私も…！」

「大丈夫ですから！アインハルトさんは手を出さないでください！きつと今のユタさんとアインハルトさんでは逆効果ですから。だからここからは私と…！」

「ボクですよね！」

「はい！」

そうしてヴィヴィオと共に立ち上がったのはミウラ。互いに背中

を合わせるように構え、ユタを見る。

ヴィヴィオは足に力を込め跳躍、1秒とかからずユタに近づく。ただそれよりも早くユタの影が操作され、巨大な鞭のようにしなりヴィヴィオをはたき落とす。

反応しきれなかったヴィヴィオは地面へ墜落する。

「……」

「ぶはあー！」

しかし極限の状況下な為かヴィヴィオの集中力はとても高まっていた。

鞭が当たった瞬間に踏ん張ることをやめ飛ばされた方向に自ら跳び、地面に激突する際には魔力を纏いクッションにしていた。その為ダメージはさほど受けていなかった。

「そんなものですかユタさん！いつものユタさんより遅いですよ！」

「じゃあもつと、速く……」

「それに！私1人じゃないって分かりませんか！」

「抜剣・空牙！」

「っ……！」

初手で一気に距離を詰めるのは何もヴィヴィオだけの得意技では無い。ユタがヴィヴィオへ注意を向けている隙にミウラが背後に回り抜剣で強襲。

ユタは間一髪受け流せはするがそのまま壁に激突する。

「ぐっ……。あゝあゝあゝ……！」

悲鳴にも聞こえるユタの雄叫び。それと同時に今までの比にならなくらい影が縦に、まるで壁のように広がっていく。いままでは精々5メートル弱程度に広がっていた影は10メートル以上になっていた。

「フッフフッフ」

「気をつけてくださいいね！」

「大丈夫です！」

「……ッ！アアッ！」

広がった影から幾重もの触手が鋭い刃となりヴィヴィオとミウラ

へ向かう。

「アクセルスマッシュ！」

「抜剣！」

それに対して2人が取った行動は迎撃。しかもユタへ向かいながらの迎撃だった。

あたりに浮遊している岩を足場にしながら的確に影を砕いていく。ヴィヴィオが反応できなかったものはミウラが、ミウラが反応できなかったものはヴィヴィオが対応することでお互いに無傷でユタに近づいていく。

「なら…もつと数を…！」

「甘いです！」

ユタは再度影を使い攻撃しようとするもそれより速くヴィヴィオとミウラが接近する。ヴィヴィオとミウラが先手を取りラッシュを叩き込み、ユタはそれをなんとか凌ぐ。

「やあつ！」

「っ…」

「抜剣・星煌刃！」

ヴィヴィオがユタの懐に潜り込み数発打撃を入れ、防ぎ切れず体勢を崩したユタへミウラは抜剣を命中させる。

影でのガードも硬化魔法をかけた腕でのガードも威力を逸らすこともできなかったユタは勢いよく吹っ飛び床へ激突した。

「っ……」

ユタは影を展開しなんとか立ちあがろうとするも、あまりのダメージからふらついていた。

「ミウラさん、ここからは私に任せてください」

「はい…お任せします！」

ヴィヴィオはミウラと一言二言交わし、ルーテシアからは魔力錠を託され1人でユタの前に降り立つ。そしてゆっくりと近づいていく。

「ユタさん、もう終わりましたよ。これ以上は…」

「……嫌」

「なら、無理矢理にでも止めます。一度全力でぶつかってそれから…」

ちやんとお話ししましょう。きっとユタさんの悩みも解決できます」

「……んな」

「？」

「そんな、ことで！解決できてたら！私は今、こんな事をしてないんだよ！私の気持ちなんて何もわからないくせに！目の前で大切な人を失ったことすら無い癖に！それでどうやって私の気持ちがわかるって言うの！ふざけるのもいい加減にしてよー！」

「はいそうですよ！ユタさんの悲しみは私には計り知れないですよ！でも解決できないなんて、そんなのわからないじゃないですか！もしかしたら……」

「希望そんなのはもういい！いらない！私は、もう！アインハルトと関わりたくない！でも、周りがそれを許さない！なら！私かアインハルトがいなくなるしかないじゃんか！」

「それでどうする気ですか！ユタさんが消えるつもりですか！それともアインハルトさんを殺しますか！どっちでもいいですけど、そんなの私が許さないです！」

「だから、ヴィヴィオちゃんには関係ないって言ってるじゃんか！私が何をしようが、私の勝手だ！」

「関係あります！だって私はみんなと一緒に魔法戦技を続けていきたいですもん！」

「！」

もう子供の口喧嘩だった。ユタの叫びに対してヴィヴィオも少しムキになり怒りながら叫び返す。互いの意地を譲らないが故の喧嘩だった。

「あーもう！分からず屋！」

「こつちのセリフだよ！私なんかに関わらず、みんなで過ごしてればいいじゃんか！私に構わないで！」

「だーかーらー！そこにユタさんやアインハルトさんがいないと意味がないんですって！」

ヴィヴィオの言葉を聞き、ユタはギリ…と歯を食いしばる。そして

最後に、逃げるように叫ぶ。

「いいからー！もうー！ほつといてよー！」

互いの距離が約5メートルほどの近距離に近づいた時にユタの足元から五本程度の影が生成され、ヴィヴィオへ向かって勢いよく伸びる。

ヴィヴィオは変わらずこれを迎撃しようと腕を振りかぶる。

「クラウソラス」

だがそれよりも速く影を撃ち落とされる。

「!?？」

「はやてさん!?？」

魔力弾が飛んできた方向を全員が見るとそこには八神はやてが浮遊していた。その顔は至って真面目でユタのことをじつと見つめていた。

「ヴィヴィオちゃん。ありがとうーな。ユタのバカを止めてもらって。それで今、譲れないモノのために立ってってくれるのもわかる。だけど……ここからちよつとだけ、ウチに譲ってくれへんかな？」

「え? あ、はい」

「ありがとう」

ヴィヴィオは、はやてからの提案をすぐに飲み大きく下がる。代わりにユタの前へはやてが立つ。

「母さ……」

「はあ……ユタ、一つだけ言うで?」

「…何?」

はやてはユタを見て、大きく息を吸い、そして叫ぶ。

「イメチェンするにしてももう少しなんかあったやろがい！」

はやての渾身の叫びに、ユタを除く全員が思わずすっこけたとか。

「なんつやねんお前は！女の子らしい服装とか全然せんし！セットアップ姿も参考にしたの男とかいうし！挙げ句の果てに今回イメージしたと思ったらそんなだっさい姿やし！あんたなあ、インターミドルを見てくれた同僚から『八神司令の息子さんすごいですね！』って言われるウチの気持ちも少しは考えろど阿呆！」

「っ、好きなものをイメージしろって言ったの母さんじゃんか！それでイメージしながらセットアップしただけだよ！それに、コレはもう、魔力を纏いやすいようにしただけ！ダサいとか言われる筋合いはないよ！それに女の子らしいとかよくわかんないし！」

「とりあえず『あ、これかわいいなあ』って思う服を着るとかでええやろがい！」

「やだよ恥ずかしいし！絶対に母さんいじってくるし！」

「あつたりまえやろ！お前の女の子らしいフリフリな服とかもう弄りがいの塊や！」

「開き直んな！それに母さんに婚期こないのまいっかい私のせいにするけど！母さんがお酒入ったら悪酔いするからじや無いの！それで私のこと死ぬほど自慢してウザがられてるってよく聞くよ！」

「ちよつ待て、誰にや！告げ口した犯人誰や！なのはちちゃんか？フェイトちゃんか？それともヴィータ達か！白状せえ！」

「心当たりあるじゃんか！それ直せばいい人見つかるんじゃないの！」

「やつかましいわ！愛娘を自慢して何が悪い！そもそも有望株のいるお前にだけは『いい人見つかる』とか言われとうない！」

くだらない口喧嘩。だけど段々とヒートアップしていきゆたの状況とは裏腹に喧嘩の内容があまりにもどうでも良すぎて見守っていた全員が呆け、次第にクスクスと笑いを堪えきれていなかった。

「ふう、スッキリした。そんなじゃあユタ…ここからは本気の話し合ひしようか？」

はやては泣いているようにも怒っているようにも見える顔だった。

「……何を、今更話すって言うの」

「そりやあユタ自身の事について以外に無いやろ。お前なあ、とことんふざけたことを言うたらしいな。なんや？生まれないう方がよかつたやて？ええ加減にせえよ。いいか？この世になあ、不必要な命なんてもんはあらへん。それはアンタも同じや」

「私にとつては不必要だよ！大好きな母さんに悲しい顔をさせるくらいなら、こんな命いらないよ！」

「はっ！それで自分だけ消えるってか！傲慢にも程があるわ！人間なんてものはなあ、感情つちゅーもんがあるんや！悲しみも辛さも感情の一部や！なんや？ユタはウチに感情を捨てると、人間をやめろって言いたいんか！それになあユタが消えたらウチらは余計に辛いだけや！それくらい分らんのか！」

「わかるよーわかってるよそんな事！母さんは優しすぎるから私のことをずつと気にするだろうって！でも、私に流れる聖王の血はもうどうしようもないじゃんか！コレ以外に私のことで母さんを悲しませない方法がわかんないんだよ！」

「んなことお前に求めとらんわ！子供のことで心配するのも安心できるのも嬉しくなるのも子供ユタの悩みを解決してあげたいって言う感情も親の特権や！ウチにそんな負い目感じずにユタはユタらしく居ればええやろが！たかだか12歳のガキンチョの癖して色々考えすぎなんやお前は！」

「考えちゃうに決まってるじゃんか！母さん達って仕事でいつも疲れて帰ってくるし偶にとても辛そうな顔してるし！けどそれで聞いた時もみんな『大丈夫』って苦笑いして何も教えてくれないし！お姉ちゃんの時とか、みんな、ずつとずつと辛そうな顔してるのに私の前では無理して笑うし！」

互いに言いたいことを言い合っており、唐突に会話が途切れ沈黙が訪れる。それを破つたのは…

「はあー…いやまあ、予想通りつちや予想通りやけど。どんだけ抱え込んでたんや。ごめんなあユタ。気づいてあげられんで。やっぱり、ウチは親失格やな」

「……んで、なんで母さんが謝るの！悪いの私じゃんか！今までも！

今も！なんで母さんが謝るの！私は悲^{そん}しい顔^なが見たくないだけだったのに！悪いのは母さんじゃないのに！」

「だけどな！」

「ッ！」

「それとコレは話が別や！いつペンそこに直れど阿呆が！だーれがいつどこで『他人を意図的に傷つける』方法を教えた！」

「……」

「ユタ、抵抗するもよし逃げるもよし。好きにせい。ひとまずお前の頭を思い切りぶん殴る。話はそれからや」

30話 親と子の関係

「本当ならこんな形で手合わせしとうなかつたなあ」

「私だって…嫌だよ」

逃げるもよし抵抗するもよしと言われたユタが選んだのは…育ての親への反抗だった。影をユラツと展開させ、はやてはという何事もないかのように手をパン！と叩き良い笑顔を見せながらユタへ語りかける。

「まーとりあえずそれは置いてこうか。それよりはよ来い。お前の全力、ウチにぶつけてみーや。あ、そうそう。なのはちゃん流の仲直りの方法実践するの初めてやから多少は目を瞑ってな？ま、今のユタ如き本気ださんでも余裕やけどな！」

「……」

はやては大胆不敵に、ニカッと笑いながらユタの前に仁王立ちし挑発をする。それに対してユタはなかなか影を使おうとしなかった。それを見かねたはやてはさらに声を荒げて言う。

「はよせえって言ったのが聞こえんかったか！それともなんや！お前の覚悟はその程度か！それともなにか！ウチにお前の全力を受け止められないとでも思ってたのか？舐めんよユタ！お前はウチの子になってからの7年間何を見てきたんや！その程度の覚悟なら捨ててまえ！そんなやからいつまで経ってもエリオに告げない臆病者なんやろがい！」

「ツ…：うるさいうるさい！母さんにそんなこと…」

「そう思うなら早くせえ！ウチにお前の覚悟を示してみい！」

それをキツカケにユタは今日一番の影の展開を見せた。もはや壁とでも言える程大きく上下左右に広がっていく。

「おーおー、相変わらずやな」

けどはやては全くと言っていいほど焦りもしなければ警戒もしていなかった。まるで分かっていたかのよう。

「どうなっても…知らないよ母さん」

「構わん」

「……。影の雨」
シャドウレイン

影の壁から出るは数多の触手が鋭利な切先、鈍器、または鞭など様々な形状になりはやてにむかつていく。

「ふん。甘いなあ」

それに対してはやては魔力弾を幾つも作り出し、触手の一本も逃さず的確に撃ち落とす。わずか数秒の間の出来事だった。

「な……」

「なんや？この程度ウチにできんとも思うたか？何年お前の成長を見守つてきと思つとる。お前がどう技を使うかお見通しやし、そもそも今みたいな広範囲殲滅の技術を誰が叩き込んだと思つとんや？」

はやては一步も動いていなかったのにユタは一步後ろに――無自覚に何かを感じ取つていたのか――下がった。

「ほら、早く次やらんかい。もしかして今のが限界か？」

「そんな……わけ……」

その言葉を皮切りにユタは足元へ影を全て収束させる。そして今度は肩幅程度の楕円状に影を展開し、そこから鋭利な刃物の形状に変えた一本を速度に特化させて放つ。

「おーおー、芸がないなあ？」

だがはやてはそれも見越していたかのように魔力弾で撃ち落とし

た。ユタはムキになり何度も仕掛けるがその悉くを真正面から撃ち落とされる。

「一撃の速度に重きを置いた一撃はシグナム仕込みだったなあ？んでその心構えなんかはヴィータから」

「っ……」

ユタが次に取った選択は四方八方からの攻撃。はやての周りに影を展開させ何度もまるで痲癩を起こした子供のよう――攻撃を仕掛けるもその全てを、死角に來た攻撃すらも撃ち落とされる。

攻撃の雨が止むとはやては肩をグルグル回しながらじつとユタを見据える。

「おっ、もう終わりか？」

そして笑みを浮かべユタへ告げる。

「ほな、そろそろ行くでー？」

ずつと直立不動だったはやてはゆっくりと足を進める。ユタはたじろぎ後ろへ下がってしまう。

「いや…こないで！」

「そうは言うてもなあ」

ユタは何度も何度も影を射出するも全て防がれてしまう。その目には明らかな怯えの感情が混じっていた。それと同時にもつと別の何かも。

「近づかへんとお前をぶん殴れんやろ…がいつ！」

先程までと同じように魔力弾で撃ち落としながら——時には拳で殴り落としながら——ユタへゆっくりと近づいて行く。

はやては何事もないかのように近づいているがユタから放たれる影は次第に速くなっていた。

「すげ…」

「とんでもねえな…」

「流石はやてさん…」

その光景を周りは固唾を飲み見守っていた。

だがユタに異常が起こる。

「っ!?？」

「お？魔力切れか？思ったより遅かったな」

ユタから溢れ出ていた影や足元に展開していた影が突如として消える。同時にユタを襲ったのは魔力切れによる倦怠感で無重力空間なのも相まってその場にフワフワと流れてしまう。

「いやー我が子ながらえらい魔力量やわ。やっぱりウチに似たんかな」

「っ……」

「さつきまでの影での一撃もウチら八神家じゃなけりや無傷では済ま

んかったやろうし、なのはちゃん達でも苦戦必死やったかもな。いやあシグナム達との特訓を耐え切っただけのことはあるわ」

ユタからの反撃が一切なくなり、無音となったその場に響くはやての言葉。

ポタ…ポタ…

そしてそれを打ち消すように何かが滴り落ちる音がユタから発生していた。

「何で…何で、そんなこと、今いうの…」

「そりゃあ愛娘の努力を親が褒めんでどーする。怒るのと褒めるのは別の問題や」

「いっつも…いっつも、褒めてくれたり、しなかったのに」

「あーうん、それはごめんな。どーにも褒めるの苦手なあ。つい照れ隠しで褒めるより先にいじってしまっくんよ」

「……お姉ちゃんの事があってから、ずっと、ずっと無理して笑ってたのに」

「当たり前やろ。ただでさえ辛かったはずのユタにこれ以上心配かけてたまるか」

「それで…母さんが辛かったら、意味ないじゃんか……」

「けどユタの為になるなら本望や。なにより、マリナからもユタをお願いしますって頼まれたしな。ま、頼みなんてなくてもお前の事は全力で守るつもりやけどな」

ゆっくりと、はやてはユタへ歩み寄る。

「ユタ」

「……なに」

「今、あえて聞く。ウチら八神家をどう思ってる？」

「……」

ユタは思わず口を閉ざしてしまう。それをはやては急かす事なくジツと待つ。

そして、口を開いた。

「大好き……。ずっと、ずっとずっと、あの日家族に迎え入れてくれた時から、ずっと、大好き。母さんも、シグナム姉さんも、ザフィーラも、ヴィータさんも、シヤマル先生も、リインさんも、アギトさんも、みんな大好き」

涙を流しながら小さく呟いたユタを見てはやてはニカツと笑いながらユタの頭へ手を伸ばす。一瞬双方に怯えた様子が見られたが、互いに意を決していた。はやてはわしゃわしゃと頭を撫でながらユタへ再度問いかける。

「そうか。ならこれからはどうしたい？本当にウチらの元から消えた人か？本気なら……止めはせんよ」

「……いやだ」

「何が嫌なんや？」

「ずっと、ずっとずっと母さん達と家族でいたい……笑っていたい……。シグナム姉さん達ともっと特訓して、インターミドルで勝ち上がりたい。シヤマル先生の料理ももっと教わりたい。……みんなと、ずっと一緒にいたい。」

……お姉ちゃんずっと一緒に、みんなで、笑っていたかった……。もう叶わない望みを口にしたユタははやてから力一杯、だけど優しく抱擁される。

「ずっと……一緒に笑っていたかった」

「うん」

「一緒に生きて欲しかった」

「うん」

「インターミドルも…見て、もらいたかった。勝って、褒めてほしくて」

「うん」

「学校の成績も、見て、褒めてもらいたかった」

「うん」

「また頭を、撫でて欲しかった」

「うん」

「またお姉ちゃんの料理が…食べたかった。誕生日を、祝って欲しかった」

「うん…うん」

「お姉ちゃんに…死んでほしくなかった。お姉ちゃんが死ぬくらいなら、私が死んだ方が良かったって、何回も思った。でも、みんな、私のせいじゃないって、私は生きろって、ずっと…余計に辛くて、悲しくて、でも明るく振る舞わなきゃって思って…」

「そうやで。どれだけ辛くても悲しくても、生きなくちやあかん。それにな、あのマリナが今のユタを見て何も思わんわけないやろ」

「…わかってる」

「けどユタが苦しんでるのをわかってた上で無限書庫まで行くように発破かけたのもウチやからなあ。ほんとごめんな。マリナにも今度2人で謝りに行こう」

「…うん」

「んで、これからどうしたい？」

「…」

「言わへんと分からんよ」

再度訪れた無音の空間。だけど存外早くそれは崩れた。

ユタは、はやての腕の中からゆっくりと出て顔をゴシゴシと拭く。そして一歩後ろへ下がりが顔を上げる。

「これからも…ずっとずっと一緒にいたい…。八神ユタとして…貴女の子供でいたい」

そこにはもう泣きじゃくる聖王クローンはおらず、決心をした1人の子供ユタがいた。

その子供をはやてはなんの躊躇いもなく引き寄せる。

「勿論や。お前は誰がなんと言おうとウチ、八神はやての一人娘や。誰にも文句は言わせん！聖王の血を継いでいようが関係ない！ユタはユタや！」

普段のユタの口癖をはやてがおおらかに宣言するよう言い、今日初めてユタが笑顔を―拙かったが、心の底から―見せた。

「……ありがとう、母さん」

「どういたしまして」

31話 くまたもう一度、みんなとく

母さんとのある意味最初で最後の親子喧嘩は私の完敗で終わった。魔力切れからくる倦怠感に抗えずへたり込んでしまったけど不思議なことに全く辛くない。それどころか何処か清々しい気もした。

思えば、自分の内にある感情を全部吐き出したのは初めてだったかもしれない。

『どうもマスター。ご機嫌麗しゅう』

ただの首飾りに戻ったプライドが陽気な雰囲気話してくる。それをジト目で見ながら口を開く。

「…何。絶対ロクでもないこと言おうとしてるでしょ」

『今日ばかりは違いますね。……そうやって1人で全部抱え込んで悩むからいつまで経っても貧乳なんですよ』

「やかましいわ!」

案の定ロクでもないことを言われ思わず叫んでしまう。

お着替え中の皆様がこつちを見てくる感じがあるが、もう条件反射のようなものだからしょうがない。なお着替えているのらフアビア選手によつて裸にされていた為です。

『事実でしょうが! だいたいなーにが『自分は聖王とは関係がない』ですか! 一番馬鹿みたいに引きずってるのマスターでしょうが!』

「それもこれもあーだこーだ言いがかりつけてきたの向こうじゃなか!」

『他の人を見習ってくださいよ! 全員が自らの血統に責任を持って動いてるでしょうが! それを逃げる言い訳だけはうまい具合に探して問題を先送りにしてたツケでしょうが!』

「うるっさいなあ! わかつてるよそんなこと! 私の心が弱いせいだつて私が一番よくわかつてるっての!」

『そう言う問題だけでは済まないというのもいい加減わかつてください

い！』

「あはは…」

「やっといつものユタって感じだな」

「ですわね」

「相変わらず仲良いなー」

「ですわねー」

「良くない！』『良くありません！』

「よしっ、修復完了！それじゃ…色々と話が逸れてしまってたがフアビアちゃん。改めまして管理局海上司令の八神はやてですー」

「っ…」

「大丈夫やで。ウチはもうそんなに怒ってないから。君が悪意を持ってこんなことをしたわけじゃないのも分かってる。君もユタ達と同じで心に傷を負ってしもうただけ。ここの建物や傷みにたいに治せるもんなら治してあげたい。命があつて元気もあるならわざわざ悪いことをしたり辛いことをしたりする必要はない。ちゃんと話して迷惑かけた人には一緒に『ごめんなさい』をしよ。そしたらきつと全部がいい方向に進んでいくから」

フアビアを優しく諭した母さんはそのまま皆へ向き直る。

「痛い痛い！あの、ちよっ…」

「ええからはよ来い」

ついでに私の首に腕を回しながら。

「それじゃあ皆。ウチらはこの子連れていったん戻るな」

「はいっ！」

「フアビア、別れ際に皆に謝つところか？ほら！ユタ、お前もや！」

母さんに強引にみんなの前に連れ出される。だけど、みんなの顔が見れない。

「……」

「……ごめんなさい」

横でフアビアが謝るけど、どんな顔をしてみんなを見ればいいのか
わからず下を向いてしまう。謝るべきなのはわかっている。だけれど
どうしても言葉に詰まってしまう。

そんな私を母さんは責めたりする訳でもなくただ無言で背中をさ
すつてくれていた。

「ユタさん」

私の前に来たアインハルトに声をかけられビクツとなってしまう。
けど、怯えている場合じゃない。

「その…アインハルト。ごめ…」

「ごめんなさい」

「え…？」

謝ろうとすると、アインハルトに言葉を被せられ先に謝られてしま
う。それに動揺してしまい思わず顔を上げてしまうと深々と頭を下
げていた。

「え？え？ちよ、ちよつと待って、今回悪いのは私だよ？なんでアイン
ハルトが謝るの」

「元々といえばこれは私の時いた種なんです。ユタさん…本当にごめ
んなさい。そして…一つだけ言いたいことがあります」

「……」

「私は、あなたともう一度仲良くなりたいと思っています。ご先祖様
のことは関係なく、私と、あなたとで」

「……………うん」

アインハルトは言い終わるとみんなの元へ着替えをとりに行つた。
アインハルトの言葉へ当たり障りのない返事しかできなかつた。
私はもうみんなと魔法戦技をやっていく資格なんかないのに。殺し
にきた相手をどうしてこんな直ぐに許せるのだろうか。普段通り接
してくれるのだろうか。

それが分からず余計に心が苦しくなってくる。

それからしばらく経ちみんなが着替え終わって私たちの周りに集
まってきた。

…今しかない。謝るなら今しか…。

「あ…そ、その…みなさん…。今回、迷惑をかけて…」

「ユタさんっ」

詰まりながら頑張つて声に出そうとするとヴィヴィオちゃんに手を掴まれる。それに驚いて顔を上げると屈託のない笑顔がそこにはあった。

「ヴィヴィオちゃん…？」

「私なら見れますよね。だってユタさんに傷つけられてませんもん」

その笑顔はどこまでも温かく、どこまでも優しくかった。

「それにしてもユタさんって本当に凄いです！私、本気で打ち込みに行ったのに全然決定打が取れなくて！ユタさんの頑張った結晶の塊って感じがしました！…これからもユタさんのインターミドル見るのすつごく楽しみですし、一緒にトレーニングしたいなって心の底から思いました！」

「で、でも。私、錯乱してたとは言えみんなを殺そうとして…シグナム姉さん達に鍛えてもらった技術を傷つけるのに使っちゃって。もう魔法戦技なんてやる資格…もうないよ」

自嘲気味に言うヴィヴィオちゃんがまっすぐ、真剣な瞳でこつちを見てくる。

「…ユタさん。一つだけお願い聞いてくれませんか？」

「お願い…っ」

「はい。明後日の午前中に少しだけお時間をください。そして私と試合をして欲しいんです」

「っ、さつきも言ったけど私にはもう、魔法戦技をやる資格なんて…」
「いいですから！今回だけです！約束ですよ！」

そう言つて断る暇無くみんなの所に戻っていく。

それに釣られてみんなの方を見るとジークさんや番長達とふと目が合う。

「おいユター！」

「ユタあー！」

「っ…」

その瞬間に番長とジークさんが思い切り私の名前を叫ぶ。びつく

りしてしまっただが2人はさらに叫び続けた。

「今回はお前に不覚とつたけどな！都市本戦では見てやがれ！お前の【影】も吸収放射も！全部を使わせた上で完膚なきまでに叩き潰してやっからな！間違っても予選落ちするんじゃないやねぞー！」

「うちはユタと戦えるのをずっと楽しみにしてる！てっぺんで待つてるから、早よ登ってきてなー！」

「……」

どうしてこうも、みんなは優しいのだろうか。私にまだ魔法戦技をやってもいいと言ってくれるのだろうか。

「ユタ！わたくしが一昨年の雪辱を晴らすまでは負けるんじゃないやありませんわよ！その不良娘にも、ジークにも、誰にもね！」

「いつか真剣勝負をしようじゃないか！ユタちゃんの【影】と私の居合抜刀でね！」

「また練習を一緒にしましょう！それにボクもユタさんと全力で戦いたいです！」

ジークさん達に続きヴィクターさんにミカヤさん、ミウラがそう叫ぶ。

「ユタさーん！また練習一緒にやりましょう！ゴーレムと影の応用操作とか詳しく教えて欲しいですし！」

「余裕ができたらは是非とも実家へご招待させていただきます！じーちゃん：春光拳の師範もきつと喜びますし、ユタさんにとっても楽しいですよー！」

引き続きコロナちゃんとりオちゃんも。

もう胸が苦しくてーだけれど不思議とどこか気持ちよくてー涙を流してしまうが、これだけ言ってくれたのに応えない方がどうかしている。

「……。スウー。勿論です！全員に、特にジークさんには絶対に負けないつもりです！今年こそ全員を蹴散らして都市本戦優勝してみせますんで、首を洗って待っててくださいねー！」

それと、みなさん。本当にごめんなさい！謝って済む問題じゃないけれど、本当にごめんなさい！」

ほんなら、行こか？」

「はいー」

そうして、私と母さん、リインさん、クロゼルグ、ルーさんでこの場を後にする。

↳ 帰路の途中↳

「そういえば、ヴィヴィオのこととかみんなに話したんですか？」

「うん、大人みんなには一応な。ヴィヴィオの生まれとか：高町家の子になった経緯とか。ま、なのはちゃんとヴィヴィオはどこに出しても恥ずかしくない親子やし、余計なお世話かと思つたんやけどな」

「それで言ったら八神司令もですよ。ユタと初めて会つたのは最近ですけども普通の親子にしか見えません」

「えー、そうかなあ」

あ、母さん照れてる。珍しいから写真を撮つてやった。

「ちよつ！ユタ！写真撮るな！」

「いつも色々とやられてる仕返し」

「それどうする気や？」

「いろんな人に送つてあげようかと」

そして、普段通りの八神家での会話をしてみた。

おどおどしていたと思う。

けど少しづつ、母さんや皆の言葉のおかげでちゃんと前を向けそうだった。

あ、ファビアが呆れた顔してきた。

これが日常的なんだ。そんな顔されても困るよ。

「あははー、やっぱり親子ですねえ」

「せやろー」

「過去は過去であって、現在^{いま}じゃない。先祖の記憶を黒い呪いにするか未来へのギフトに変えるかは……今生きている自分の選択。つてことですよね」

「そーやねえー」「私もそう思うですよー」

ルーさんの言葉に、母さんとリンさんが賛同した。

うん……本当にその通りだ。私は……危うく黒い呪いにするところだったんだ。

本当に……何をしてたんだらうね。

「……うえっ」

「どうしたの?」

「いや、シグナム姉さんからメールが来てまして。『話があるから出来る限り早く帰って来い』つて。……遺書書いておかなきゃ」

「せやなー」「ですねー」

「そこは慰めてくれたりとかじゃないの!?!?」

「多分ウチらが言っても何も変わらんやろし」

「シグナムさんはユタちゃんのこと大好きですから死ぬまでは怒らないですよ。……多分」

「最後の一言さえなければ良かったんだけど!?!?」

く翌日く

「……」

「……」

「な、なあ、大丈夫か?」

「心配いらへんよ。……多分」

家に帰ると予想通りシグナム姉さんに首根っこを掴まれて正座させられた。かくいうシグナム姉さんも真正面に正座をしていたが。
「ユタ」

「はい」

「無限書庫での経緯は主はやてを通して見させてもらっていたから大
体の事情はわかっている」

「はい」

「それでも、それでもだ。私はお前に一度謝らねばならない」
「え…？」

てつきり怒られるものだと思っていたけど発せられた言葉を疑わ
ざるを得なかった。

だって、謝るべきは私なのにシグナム姉さんが謝る？なんで？

「どういうこと？私の方こそ謝ろうと思ってたんだけど…」

「マリナの事だ」

「お姉ちゃんの…？」

「ああ。なんせ、マリナが死んだのは私の教えた技術が原因と言っ
ても過言じゃないからな」

シグナム姉さんから言われたことに思わず立ち上がってしまう。

それだけは許容できなかった。お姉ちゃんが死んだのは攫ったあ
いつのせいで、間違ってもシグナム姉さんのせいじゃないはず。

「違うよ！それは…」

「違わない。それだけは断言する」

だけど鋭い目つきで言い返され、思わず尻込みしてしまう。シグナ
ム姉さんに座れと小さく言われ、大人しく従うと再び口を開いた。

「私が身体操作の技術さえ教えていなければ形はどうあれマリナは生
きていたはずだった。確かに胸を貫かれたのも原因だったが身体操
作による身体への負担も影響していただろうからな」

それを更に否定しようとしたけどシグナム姉さんの目を―悲しげ
で後悔に満ちていた目を―見てしまい、何も言えなくなってしまう
た。

「マリナがユタへ抱いていた愛情を私は見誤っていた。お前が危険に
陥れば自分の体など顧みず限界を超えた身体操作を使うことなど予
想できていたはずなのに、だ。…あの時の後悔は未だに消えない
よ」

「……」

「もう少しお前達の安全を強固にしていれば、居場所を発信する類のものをつけていれば、情報提供者について詳しく調べていれば。…こんなたればを言っても意味はないのはわかっているんだがな。本来ならお前に恨まれて蔑まれてもおかしくないんだ私は。マリナもこんな家族で不甲斐ないと思っているかもしれないな」

自責の念からか力無く苦笑していた。

励ますべき？

いや違う。

今言うべきことは……

「そんなことはないよシグナム姉さん」

「なに…？」

「無限書庫でも言ったけど、私は、私たちは。」

八神ユタと八神・サミダレ・マリナお姉ちゃんは、ずっとシグナム姉さん達が大好きなの。特にお姉ちゃん、絶対にシグナム姉さんのと大好きだったよ」

「そう…らしいな」

あの頃の記憶は生きてきた中で一番鮮明に思い出せる。あの時のお姉ちゃんは…うらやましいくらいに…

「だって、家で2人きりの時のお姉ちゃん、本当に楽しそうにみんなのこと…特にシグナム姉さんのことは楽しそうに話してたの。本当のお姉ちゃんみたいだって言ってたから」

「…そこまで慕われていたのか」

「それに特訓をはじめたときも本当に嬉しそうで楽しそうだったの。『私もシグナムさん達と一緒にユタを守るようになるかも！』って。特訓も辛かったみたいだけどそれ以上にシグナム姉さん達と一緒にいられて嬉しそうだった」

「そうか…」

「だから…そんなに自分を責めないでシグナム姉さん。それに家族になつてからいまの今まで、一度たりとも恨んだりしたことないよ。私は、私たちはずっと感謝してゐるんだから」

「……ありがとう」

「え？」

「なんでもない。それよりも、だ。私の言いたいことは終わった。ユタはまだ何かあるか？」

「いや、無い…かな」

「そうか。ならいい」

シグナム姉さんが立ち上がるのを見て話は本当に終わったんだと思ひ私も立ち上がる。そのままシグナム姉さんは私の近くまで寄ってくる。

「ふんっ！」

「いだっ!?？」

シグナム姉さんはめちやくちや穏やかな顔つきで私の脳天にゲンコツを落とした。

めちやくちや痛い

「私たちを心配させた罰だ」

「つゝ今の流れ的にそういうの無いパターンでしょ…いったあ…死ぬぬ…」

「心配するな。毎回言ってるだろう?死ぬ限界はちゃんと見極めていると」

「だから肉体の方を見極めてって毎回言ってるよね!?？」

抗議するも涼しい顔をして流される。そういうのが無ければ完璧超人なのに…。

「何か思ってたか？」

「いえ何も」

「そうか」

その瞬間にまたゴンッと私の頭でいい音が鳴る。

「いったあ…」

「さつさと準備をして砂浜に來い」

「ええ…？今日特訓入れてたっけ…」

「高町の娘と試合をするんだらう？」

「あーうん。そうだけど…」

「特訓なしで戦うつもりか？」

「そんなつもりはないけど…シグナム姉さん達忙しくないの？」

「少し無理を言って休みをもらっている。で、どうするんだ？お前が嫌だというなら…」

「やる、もちろんやる」

食い気味で答え、すぐに部屋に着替えをとりに向かう。

シグナム姉さんと特訓できる機会を逃すわけにはいかないからね。

「な？大丈夫だったやろ？」

「そうだな。シグナムも安心してたしユタも全く変わっていないしな」

「無限書庫では過去の記憶と自分の記憶がごっちゃやごちゃやったんやろなあ」

「ユタ自身もずっと自分を責めてたのもわかったし、これからもユタのことは注意深く見てないとなー」

「そうやね。でも…もしかしたらもう大丈夫なんじゃないかな？」

「それはまたなんで？」

「うーん、母親としての勘、かな？」

「そうか、ならいいか。さーてと私も心配かけてきた分ユタをしばき回してくるよ」

「お手柔らかななあ」

32話 高町VS八神

「はあ…はあ…し、死ぬ…」

「喋れるということはまだ余裕があるな。それじゃあ3分休憩したら続きと行くこう」

「んじや次は私な」

「お、鬼…」

「鬼とは失礼だな。悪魔だよ」

「どつちもどつちだよ！」

シグナム姉さんとの久しぶりのマンツーマンの訓練はまさに苛烈を極めた。もはや戦場と言っても差し支えない。

新米兵の私とベテラン兵のシグナム姉さん。

だけど敵^{シグナム姉さん}兵は容赦がない。

まさに地獄。そこへ更に援^{ヴァイータさん}軍も駆けつけ、もはや孤立無縁に。

ああ、ここが私の死に場所らしい。

『シグナム様、ヴァイータ様。大変恐縮ですが少しだけ時間を貰えませんか』

「ん？どうした」

「ユタのことが心配か？」

『いえそれは全く』

『おい！クソ愛機！ちよつとはマスターの心配をして！』

『なのはさんから連絡が入りまして。マスターではなくお二人に』
「？」

『というわけでマスターはほんの暫く天国へいてください』

「わ、わか…た…」

『こんにちはシグナムさん、それにヴァイータも』

「なんだ？あたしはついでかよ」

『にやははく冗談だって。それでね2人とも』

「ユタとヴィヴィオのことか？」

なのはが言うよりも先に内容について触れると正解なのか優しく微笑んでいた。

『今日ヴィヴィオが帰ってきてね、特訓をつけて欲しいって言ったの。私の大好きな先輩たちに勝つ為に、って』

「ああ、明後日にユタとの試合を組んでいるんだろう？ 私たちも勝たせる為に特訓をつけるつもりだからそっちも遠慮なく鍛えてやれ」

『そこはいつも通りだからいいんだけどね。』

……ユタちゃんのことを話すヴィヴィオがいつも以上に悲しそうにしてたから、少し心配になっちゃって。きつと嘗ての自分にユタちゃんを重ねちゃってたんだと思う。それにシグナムさんたちも優しいから私たち以上にユタちゃんのこととで悩んでるのかもしれないって思っただけ。何か力になれたらなーなんて』

おおかた予想通りの言葉に思わずヴィータと共に笑ってしまう。それを見たなのはがプンスカと擬音が聞こえるかのように膨れっ面になっていたが。

「心配すんな。アイツはもう大丈夫だ。マリナのことをまだ引きずっちゃいるだろうけど、それでもアイツの中で折り合いはついてるよ。少なくとも明後日の試合には持ち込まないさ」

「ああ。もし何かあっても、ここには主はやてにザファイラやシャマルたちもいる。それに他のみんな…ヴィヴィオやミウラ、他の八神家道場の子達がいる。もちろん、なのは達もな」

『そっか……。なら大丈夫そうだね』

互いにそれ以上の言葉は不要だった。そして切り替えたのか、なのはは少し意地悪な笑みを浮かべていた。

『それはそうとして明後日は絶対ヴィヴィオが勝つからね！ その為にみっちり特訓するから！』

「ふっ…そう簡単に行くかな？」

「悪いが、ユタがヴィヴィオをボッコボコにしちゃうかもしれないねえぜ？ そんなときや泣くなよ？」

『泣かないよー！』

その後ほんの少しだけ談笑し、そのうち機動六課でマリナの墓参り

に行こうと約束をして通信を終えた。

「さ、もつとビシバシ鍛えるか。なのはの娘とはいえ負けてられねえからな！」

「そうだな」

く 試合当日 アリーナく

丸一日と少しを使い久しぶりにシグナム姉さんたちとみっちり練習をした。死ぬかと思っただけ。

そしてヴィヴィオちゃんからのメールでは魔法戦技の練習場としてもよく使うアリーナへ向かった。インターミドルと同じ環境で試合ができるように、とのことだった。

つまりは【影】も使っている、と言うことだろう。

「……あ」

『みなさんすでに集まっておられますね』

入り口が見えてくると母さんを始めシグナム姉さんやザファイラ、シャマル先生などの八神家のみんな、それと八神家道場の子達。

ジークさんやヴィクターさん、番長、ミカヤさんなどのインターミドル上位勢の方々。

コロナちゃん、リオちゃんにノーヴェさん。

なのはさんにフェイトさん、スバルさんにティアナさん、エリオにキヤロ、ルーテシアさんまでもいた。

そして、アインハルト。

「あはは…大所帯だ」

『無様に負けられませんねえ』

「負けるつもりなんて毛頭ないけどね」

『小さき獅子に足元、もしくは喉元を噛まれる可能性は十二分にあるかと思いませんか？』

「それもそうか。……よし、気合い入った」

入り口に早足で向かうとヴィヴィオちゃんだけいないことに気づいたので聞いてみると、既に中でアップをしているとのこと。

私も準備をする為に向かおうとしたとき、なのはさんから『今日のヴィヴィオは一味違うよ』と言われ、『私もですよ』と返し駆け足で更衣室へ。

スポーツウェアに着替え、腕には黄色のリストバンド―シグナムと刻まれているもの―を着け、髪をピンク色の髪留め―こちらと同じくシグナムと刻まれている物―でポニーテールにする。

母さん達によると今日の試合はセコンドも何もなく、本当に私たちが気の済むまで戦っていいとのこと。

「おお…思った以上に」

『本気、と言ったところででしょうか』

「ヴィヴィちゃんはそもそもどんな試合にも全力全開だと思うけどね」

『それもそうですね。マスターと違って』

「いや私も常に全力だけど？」

間違つても手を抜くなんて失礼なこととはしたことはないよ。

「や、ヴィヴィオちゃん」

「ユタさんこんにちは！体調は万全ですか？」

「勿論。…といたいけどシグナム姉さん達にしばかれすぎて全身筋肉痛」

「ええ…」

「嘘嘘。ちゃんと万全にしてきたよ。だから…」

1、2回深呼吸を挟み、自分でもキザだとわかるくらいには不敵に笑い口を開く。

「初めっから全力で、全身全霊で以て叩き斬るから、そのつもりでいてね」

「勿論です。受けて立ちます。ユタさんこそ見ててくださいね。ほん

の少しでも油断したなら一撃で意識を断ち切ってあげますから」

2人の聖王^{クローン}は互いに負ける気など微塵もなく、拳を合わせる。

先輩も、後輩も、勝利への意欲以外のモノを持ち込むことはせず、エンジン^{ヴィヴィオ}を全開にしていた。

「…でも、よかったです」

「ん？何が？」

「いえ、無限書庫のことでどうしてもユタさんを昔の自分に重ねちゃってて。あの時ユタさんが皆さんに謝ってたのを見ていても、どうしても不安が拭えなかつたんです」

「…ごめんね。けどもう大丈夫。私には母さん…八神はやてさんがいて、シグナム姉さんがいて、ヴィータさんやザフィーラ達もいる。それに、今もこうして向き合ってくれてる小さな先輩もいるからね。だから、もう大丈夫。これからも頼るから、よろしくね？」

「はいっ！」

『2人ともー。準備はいいかな？』

モニターが現れ、ルーさんが最後の確認をする。

「はい」

『それじゃあセットアップをしてちょうだい』

「セットアップ」

ユタとヴィヴィオが同時にバリアジャケットを装備する。

その光景をみていた観客は少しざわついていたが、それはリングに立っていた2人もだった。

「ユタさん、それは…」

「似合っていないかな？」

意地悪っぽくユタが尋ねるとヴィヴィオは慌てて首を横に振る。

「い、いえ！そんなことはないです！とてもカッコいいと思います！」
「ふふっ、ありがとう。それよりもヴィヴィオちゃんもその格好は…」

「え？似合ってますんかね？」

ヴィヴィオの反応が可愛らしかったのかフツとユタは笑う。

「んーん。全然そんなことないよ。とてもよく似合ってる」

「…ありがとうございます！」

「考えてることは同じなんて、姉妹みたいだね」

「実際姉妹みたいなものじゃないですか？私たち同じ人から生まれたんですし」

「それもそうだね。じゃあ私がお姉ちゃんかな？」

「私かもしれませんよ？」

「じゃあ今日は姉の座もかけて勝負だね」

「そうですね！」

皆がざわついた理由は、2人のセットアップ姿にあった。

ユタは、はやての姿を模した姿に

ヴィヴィオは、なのはの姿を模した姿に

互いにとって最愛の母親の姿を模していたからだ。

『それじゃあ行くよー？』

「うん」

「はいっ！」

『レディー　　ゴー！』

戦いの火蓋が切って落とされる。

まず飛び込んだのはヴィヴィオ。思い切り踏み込みユタへ肉薄し左拳でのジャブを入れる。

ユタは焦ることなく手の甲を叩くことで軌道を逸らす。ヴィヴィオは想定内なのかラツシユを入れる。だが結果は変わらず、弾かれ逸らされ、受け流される。

そしてユタはラッシュの切れ目を狙いヴィヴィオへ向かって拳を振りかざす。バックステップで避けられはするがそれが狙いで一気に後ろへ跳び距離を取る。

「プライド、行くよ」

『了解しました』

「クリス、警戒だよ！」

『(ビッ！)』

ユタは魔力を練り上げ【影】を創り出す。

「さあ、行くよヴィヴィオちゃん」

「私こそ行きますよユタさん」

ユタが練った影を勢いよく伸ばしヴィヴィオへ向かわせる。それに対してヴィヴィオはユタへ向かいながら迎撃することを選択する。

幾本もの影の触手を真正面から迎え撃つ事を選択したヴィヴィオは多少は立ち止まってしまっていたが、それでも全てを殴り、蹴り、破壊して前へ進む。

(ユタ、ヴィヴィオのことだ。影を使っても距離を取るんじゃないかと詰められると思っつけ)

(ユタの影は確かに異質だが、実のところは見た目だけだ。弱点は他の魔法主体の選手と変わらないからな)

(ヴィヴィオ。ユタに影を使われても臆するな。前に飛び込め。とは言っても予測はされてるだろうからな。そこからどうするかだ)

(ユタちゃんの影は確かに特殊だけどね、やってることは他の魔法中心の戦いかたをする人とあんまり変わらないの)

(近づかれる前提の戦法も、近づかれた時の戦法もあるにはある。だけどその辺はなのは奴が叩き込むだろうからな。だから近接戦に持ち込まれたら敢えて乗れ。その上で…)

(近づいた時にどうされたら嫌なのかは教えてあげれる。でもユタちゃんにはヴィー・タさんに、なによりシグナムさんもいる。だから、ただ近接戦に持ち込むだけじゃなくて…)

(ヴィ・ヴィオを、私たちを、観客全員の度肝を抜くくらいの事をしてやれ。お前なら余裕だろう?)

(ユタちゃんだけじゃなくて見てる友達と一緒に練習した私たちも驚くような事をしてあげちゃえ!)

互いに格闘戦の間合いに入ろうとした時

ガギイン!

甲高い金属がぶつかつたかのような音が鳴り響いた。

「……っ!」

片や母親の愛機に似せた魔力の塊で
片や憧れの師の剣を模つた影で

鏢迫り合いをしていた。

「……」

「はあーいつの間」

「たはっ!ユタらしいなおい!」

「…フェイトちゃん達の入れ知恵もあるでしょ?」

「さあー?どうかなー。でもあれは真正銘ヴィ・ヴィオの努力の成果だよ」

「でもでも!」

「それだけじゃないですよ!」

シグナムの剣を模つた影と母親の愛機を模した魔力の塊は何度も

何度もぶつかり合う。

互いに目指すものは違えど、お手本にすべきものがすぐそばに、それもずつとあつた為に取り入れるにはさほど苦勞していなかった。互いに付け焼き刃に違いはなかったが、ただそれ以上に別の感情が2人を支配する。

恐らくは2人にとつても最初で最後の戦法だろう。なんせ、最高で最強の憧れの存在ではあるけれど、自分の目指す道ではないと分かっていたから。

ガギイン！と弾き合い、共に後ろへ跳躍し距離を空ける。

「ふふつ、あははは！」

もう我慢ができないと言わんばかりに2人は同時に笑い出した。それを観客はポカーンとしながらも2人の気持ちを理解していた。

「こ、こんなに考えてる事同じつてあります？あつははは！」

「はー、ほんとうにそれね。あつはは……。にしてもヴィヴィオちゃん大丈夫？」

「ほ、ほえ？な、何がですか？」

「いや、それ魔力の塊でしょ？すぐガス欠なっちゃうんじゃない？」

「大丈夫ですよ！ご心配なく！それよりもユタさん、早く続きをやりましょう！今度は別のことで驚かせてみせますから！」

「おつ、それじゃあ更にど近距離戦になったら私の凄さを見せつけてあげよう。ヴィヴィオちゃんなんて足元にも及ばないって事をみんなに見せつけなきゃ」

「いいましたね！覚悟してくださいよ！」

33話 持ち味

互いに笑いがおさまった後、お互いに作っていたモノを消す。

そして示し合わせたかのように一歩後ろに跳ぶ。

「さ、続きやろうかヴィヴィオちゃん」

「はいー」

ヴィヴィオちゃんが構えるのを見て私は更に後ろに跳ぶ。それを合図とでも言うように私へ向かって走ってくる。

「やあっー」

「っ！！っ！！」

まっすぐ来るかと思ったけど、緩急をつけ不規則な動きで向かってくる。右、左、右、左かと思うとまた右。目で追い切れたと思った瞬間に今度は目の前から消える。

「はっや…」

ヴィヴィオちゃんとミウラが対戦した時より更に速く、鋭い動きになっていて、なおかつあまり見ない動きなせいで思わず対応が遅れた。そう思った一瞬後には目の前まで来ていた。

「まっず…」

「アクセルスマッシュユー！」

それに気づいた時はもう遅く、放たれた右腕はきれいに私の顎を下から撃ち抜いた。

「わあ…」

「よしっー」

その光景を見ていたなのはとフェイトは小さくガッツポーズをしていた。

「……」

「かぁー、ノーヴェの仕込みだな？」

「うん、だけど…ユタがただ撃ち抜かれるだけとは思えんなあ」

シグナムとヴィータはヴィヴィオの速さと正確さに感嘆し、はやては称賛しつつも自分の子がただ撃ち抜かれただけとは思っていない

かった。

「……………」

その理由はすぐに明らかになる。なぜならアツパーを決めたはずのヴィヴィオはその場に少しふらついていたので。

「え？え？ヴィヴィオが決めたのになんでふらついてるの？」

「ユタがカウンターを決めたからやね」

大人組を除く観客席のほとんどがヴィヴィオの様子に困惑していたが、ライバル達の中で1人だけ全部見えていた人がいた。

「どういうことだ？ジーク」

「ヴィヴィオちゃんがあツパーを決めに行った瞬間、ユタもカウンターを仕掛けに行ってた。でもあの体勢からカウンターを決めれるとは思ってなかったんやけど…」

「そこまでは私も見えてました。ですが…、その、一瞬ですがユタさんの腕が伸びたような…」

「「「「？」「」」」」

アインハルトの言葉に更に困惑してしまうが見えていたジークだけは先に答えに辿り着いていた。

「うん、伸びたって表現に間違い無いと思う。ユタの腕から一瞬だけやけど影が伸びて顎をかすらせてたから」

その事実全員が驚愕する。唯一驚いていなかったのは…

「ふふ……………」

ただ1人、ユタの師匠だけだった。

「やってやれ。ユタ。お前の技は、努力の結晶は、その程度じゃ無いだろう？」

「あゝー。クラクラする……………」

『どうします？脳震盪ですから治しましょうか？』

「いゝや、いら、ない。それよりも魔力、とつといて」

『承知しました』

『……!』

「大、丈夫だよ。心配しないで。それよりも、もっともっと、ギアを上げていくから、サポートお願いクリス」

『!』

2人のクローンはフラフラしながらもゆっくりと立ち上がる。顔を思い切り振り、意識を覚醒させる。

「い…よっし、それじゃあ続き行こう」

「はいっ!」

再開のゴングが鳴ると同時、ヴィヴィオはまたもや駆け出す。それを見たユタは足元に影を楕円状に展開する。それと同時に左目を陰で覆う。

「悪いけど…馬鹿正直にインファイトに付き合う気は無いよっ!」

ユタの足元から影が飛び出しヴィヴィオへ向かっていく。それをヴィヴィオは避けずにその場に止まる。

「アクセルスマッシュ!」

「……わーお」

ヴィヴィオは魔力を手に纏い、真正面から影を破壊することを選ぶ。

「確かに…いつかはやられるだろうとは思ったけど、こうもあっさりとは」

『どうします?戦法は変えずにいけますか?』

「うん、だけど硬化魔法は準備するかな。あの速さだと懐に入られるのも時間の問題だし」

『承知しました』

「よーし、成功!どんどん行こうクリス!」

『(ピツ)！』

「(とはいえ…あのユタさんが何も対策しないとは思えない。油断しないように…)」

「ま、いつかはそうなるわな」

「ああ。あれは単なる魔力の塊だから殴り壊すなど造作もない。ましてや素早さと鋭利に特化させていると言うことはそれだけ脆くなる」
「今までの選手は魔法主体じゃない限り真正面から壊そうなんてせずに避けてばっかりやからなあ」

「魔法主体の選手なら吸収放射や反射リフレクトの餌食だしな」

「だけど…殴り壊すなら反射や吸収に気を配る必要もない」

「ユタちゃんの魔法の厄介なところは影魔法に上乗せして吸収か反射のどっちかを付与してるところだからね。下手な魔法の撃ち合いだと逆に負けちゃうし」

「どっちかパツと見でわからないのも怖いよね。その辺はシグナムさん達が流石と言うべきなのか、それを実現させてるユタちゃんの技量が凄いのか…」

「よっー！」

「はあっー！」

しばらくの間2人の攻防は変わらなかった。

ユタが影を射出し、ヴィヴィオはアクセルスマッシュで打ち砕いていく。

時には避けながら着実に距離を縮めていく。

ユタは影を出しながら移動していき、ヴィヴィオも影を壊しながら追いかける。

「デイベインバスターー！」

「影壁シャドウウォール！」

ヴィヴィオが放った砲撃を影で受け止める。

しかしデイバインバスターは、正確にはユタではなく床と影の境目を狙われており、爆発で土煙が巻き上がる。

「……なるほどね」

タツタツタツ

そして土煙に紛れ縦横無尽に走り回る。

「だけどヴィヴィオちゃんも見えないはず……」

そこまで考えてユタは自分に疑問を持った。

「(ヴィヴィオちゃんは何の考えもなしにこんなことを？自分も見えなくなるくらい分かりそうなものなのに?)」

その疑問はすぐに解消される。

「アクセル……」

「っ！」

「スマッシュユ！」

そして本日二度目のアクセルスマッシュユがユタへ命中した。

「痛っ……！」

「はぁー、お見事ヴィヴィオちゃん。でもどう？流石に拳、折れたんじゃない?」

ヴィヴィオがユタの居場所を的確に当てられた理由はとても単純で、ユタが展開していた影の魔力を感知していたからだった。ユタもそれに気づき、あえて誘い込むように動いていた。

「読まれて……ましたか」

「というよりは、ヴィヴィオちゃんならそうくるかなって。私が影展開してたなら魔力探知なんて余裕だろうし

渾身の一撃を腕で防がれたヴィヴィオは右拳に骨折判定を受けていた。その理由は単純で、ユタの腕に硬化魔法が発動されており黒くなっていたからだだった。

とはいえ、元から体がそんなに頑丈でないユタも無論、無事ではなく……

「さあ、続きだよ。影の雨」

「……っ！」

ユタの背後に影が巨大な壁がせり上がるかのように広がっていく。その全てから影の触手が大量に顔を覗かせる。

「ゴォー！」

ユタの掛け声で数多の触手が――鋭利な刃先や殴打しやすく丸まったものなど様々な形状に変化し――ヴィヴィオへ降り注ぐ。

拳の骨が折れてしまったヴィヴィオは、今度は無理せず避けれるものはしっかりと避けていく。それを見たユタはわずかに口角を上げる。

まるでイタズラに成功したかのように。

「それじゃあプライド、秘策その2いこう」

『畏まりました』

影の雨の残弾をほぼ撃ち尽くしたのと同様、再度魔力を練り上げる。ユタの影は腕を伝い、形を作っていく。

「くっ……」

「さ、第2ラウンドだよ。ヴィヴィオちゃん」

「……はは、ユタさんの影って、本当に何でもありですね」

「それが私の持ち味だからね」

ユタの手には弓矢が握られており、それを見たヴィヴィオは冷や汗を垂らす。

「ヴィヴィオちゃんに同じ手は何度も通用しないのはよく分かっているからね。さ……ここからは引き出しの多さで勝負といこうか？」

「望むところですよ！」

「……」

「あれ、シグナムが？」

「い、いえ。見せたことはありませんが……ユタが小さい頃でした。……まさか、あの時の記憶から再現してみせた……？」

ユタの握っていた弓矢は、紛れもなくシグナムが使っていたモノ。数多くある形態のうち1つを、色彩こそ違うがそっくりそのままだった。

ユタが弓を引き、5本程度の影の矢が放たれる。

まっすぐ向かったかと思うと矢は――1本は左へ、一本は右へ、更には上へ、下へ、急停止など――あり得ない挙動をしてヴィヴィオへ襲いかかる。

まるで先ほどの意趣返しとでも言うように、ヴィヴィオを困惑させ一瞬の隙を生む。

その間にユタはヴィヴィオへ急接近する。

それに気づいたヴィヴィオは構えるが影の矢がそれを許さず、背後から直撃する。

「っ……やあああ！」

「ハアッ！」

ヴィヴィオの右ストレートをユタは手のひらで受け止め、その場で回転。その勢いでヴィヴィオの側頭部へ裏拳を決め――

「……へえ」

決めたかのように思えた拳は空振りに終わる。ユタが少し距離を取ると、前屈みになっていたヴィヴィオがいた。

「ストレートを打った勢いでそのまま前傾姿勢になって避けたのか。なるほどねえ」

『こんな避け方する選手は何気に初では？』

「それね。このカウンター決められた人ってほとんど初見の人たちにだし、ジークさんは受け止めてくるし。ハリーさんは根性で耐えるし」

カーーーーン！

『はいーい2人とも。インターバルだよー。5分間ね』

「はいーい」

「はいっ！」

『セコンドの人と作戦会議もできるけど、どうする？…』

「私はパス」

「お願いします！ノーヴェエで！」

ルーさんの合図でリングの外に出る。

用意されていた椅子に座り水などをゆっくり摂る。

「さーて、ノーヴェさんと話すってことは、バレるだろうね」

『でしようね。あまり展開は変わらなさそうですが』

「ヴィヴィオ、気づいてるか?」

「え?」

「リングの床、見てみな」

「床...?」

ノーヴェに言われるがまま、リングの床を凝視する。

特に変わったようなことなんて...

「床の色、始める前と変わってないか?」

「...言われて見れば、ちよつと黒い?」

「そうだ。しかもこうなったのはいつからだと思う?」

「...ごめん。わからない」

「正解は、影の雨を撃たれた時からだな。その時からユタは陰で致命打をとるんじゃないやなくて床一面に魔力を散布させた」

「あの時から...。でも、狙いは死角からの攻撃、なんだろうけどそんなバレやすい戦術、ユタさんが組むかな?」

「それはなんとも言えないな。だから...ユタだけじゃなくもつと周りにも気をつけて戦ってこい。その上で...ユタのやつをぶっ飛ばしてやれ。都市本線2位をな!」

「押忍!」

インターバルが終わり、互いにクラッシュユエミユレートを治し切る。

ライフという仕様は今回に限ってはなかったため、意識を刈り取るか、ダウン後のカウントを10までに立ち上がれないか、もしくは負けを宣言するしか無い。

「さあーで。魔力量も充分残ってる、仕込みも上々。後は…」

『根気、ですね』

「仰るとおり。魔力切れならないよう気をつけながら、魔力操作にも力を割いて、かつヴィヴィオちゃんに懐に入られないようにしなきゃならない。」

さあ、気張ろうか

『御武運を』

「ユタさんの影はもう、リング全体に溶け込んでいつどこから襲ってきてもおかしくない。目に見えてるものだけに注意しちやダメ。全部に気を配りつつ…出来るだけ早く決着をつけに行く」

「おう、行つてこい！」

「押忍！」